

新堂遺跡Ⅳ

—大型商業施設建設に伴う発掘調査報告書—

2020年3月

奈良県橿原市教育委員会

序

ここに新堂遺跡の発掘調査報告書を『橿原市埋蔵文化財調査報告 第16冊 新堂遺跡Ⅳ』として刊行します。本書は、奈良県橿原市新堂町に所在する新堂遺跡において、大型商業施設の建設計画を契機として平成27・28年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。1区・2区の二地点で調査を実施し、2区の調査時には奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所から格別のご指導・ご協力をいただきました。

橿原市の西部では京奈和自動車道の建設に伴う発掘調査によって、様々なめざましい発見が相次ぎました。新堂遺跡はその代表格で、渡来系要素を有する古墳時代の集落跡が発見されるなど、多くの新知見が得られており、橿原市で今もっとも注目を集めている遺跡の一つとなっています。近年刊行しました『新堂遺跡Ⅰ』『新堂遺跡Ⅱ』『新堂遺跡Ⅲ』も京奈和自動車道建設に伴う発掘調査報告書です。

本書で報告を行う調査では、河道から古墳時代中期前半の貴重な初期須恵器が大量に出土しました。その量は奈良県内で最多、生産遺跡以外からの出土としては全国的に見ても稀な量と言えます。さらに、初期須恵器と共に木製品や動物骨、多量の土師器なども出土しており、古墳時代研究における第一級の資料として様々な方面からの注目を既に集めています。

最後になりましたが、現地の発掘調査並びに本書の刊行にあたって御協力いただいた関係諸氏ならび諸機関に厚く御礼申し上げますと共に、本書が多くの方々に活用され、遺跡の重要性を周知する機縁となることを願います。

令和2年3月27日

橿原市教育委員会
教育長職務代理者 伊藤 歩

例 言

- 1 本書は、奈良県橿原市新堂町に所在する新堂（しんどう）遺跡の発掘調査報告書である。なお、調査地点は本発掘調査に先立って実施した試掘調査（平成25年度）によって新たに新堂遺跡の範囲に含まれるようになった場所である。
- 2 本書で報告を行う発掘調査は、イオンモール株式会社および株式会社大和流通経済研究所より大型店舗建設に伴って提出された遺跡有無確認踏査願・埋蔵文化財発掘届出書にもとづき、奈良県教育委員会の指導のもと橿原市教育委員会が実施した。2区（橿教委2016-2次）の調査については、橿原市教育委員会の依頼により奈良県教育委員会の指導・協力を得て、橿原市教育委員会と奈良県立橿原考古学研究所による合同調査として実施している。
- 3 発掘調査及び整理・報告作業に掛かる費用については、イオンモール株式会社および株式会社大和流通経済研究所が負担された。記して感謝申し上げます。
- 4 現地調査期間は、それぞれ以下のとおりである。
試掘調査：平成25年12月16日～平成26年2月28日
本調査1区：平成27年12月4日～平成28年6月30日
本調査2区：平成28年5月25日～平成29年2月27日
- 5 遺物整理・報告書作成期間は平成29（2017）年度～令和元（2019）年度である。
- 6 調査時の体制は、橿原市教育委員会事務局 文化財課長 竹田正則、課長補佐 濱口和弘、統括調整員 平岩欣太、係長 松井一兎・田原明世、主査 石坂泰士である。現地調査の担当は、試掘調査が松井、本調査1区が石坂、本調査2区が石坂・清水康二（奈良県立橿原考古学研究所）である。
また、遺物整理時の体制は文化財課長 竹田正則（平成29～令和元年度）、課長補佐 濱口和弘（平成28・29年度）・露口真広（平成30・令和元年度）、統括調整員 平岩欣太・田原明世、主査 石坂泰士である。整理作業は石坂が主に担当した。
- 7 発掘調査及び整理作業を実施するにあたって、地元各位をはじめ、独立行政法人奈良文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所より多大な御協力を得た。また、出土遺物のうち動物骨については東海大学・丸山真史氏、土器については京都橘大学・中久保辰夫氏および韓式土器研究会各位、木製品・木材については出土木器研究会各位に格別のご指導を賜った。この他にも多くの方々にご指導・御助言を頂いている。記して感謝申し上げます。
- 8 出土遺物のうち、動物骨は丸山真史氏（東海大学）、漆付製品・炭化米付着土器・布などの有機質遺物については奥山誠義氏・河崎衣美氏（奈良県立橿原考古学研究所）に、それぞれ分析・保存処理・本書での報告などに御協力頂いた。記して感謝申し上げます。
- 9 出土遺物をはじめ調査記録は、橿原市教育委員会が保管している。
- 10 本書所収の写真のうち、現場調査写真は調査担当者が撮影を行った。遺物写真は、有機質遺物を佐藤石文氏（保存処理対象遺物の処理前撮影）と石坂（その他の有機質遺物）が、その他遺物を橿原市地域文化財研究所がそれぞれ撮影を行った。

- 11 本書の編集は石坂が担当した。執筆は第三章第8節を丸山真史氏、第三章第9節を奥山誠義氏・河崎衣美氏、他を石坂が担当した。
- 12 出土木製品のうち一部は、一般社団法人文化財科学研究センターによる保存処理を施している。対象資料は本文中で触れる。また、同資料の樹種同定も同センターによる。
- 13 2区古墳時代河道(20989SD)出土のしがらみ遺構(杭列)構成材のうち一部は、調査現場にてサンプル採取を行った。うち150点を株式会社吉田生物研究所に樹種同定委託を行った。本文中および表1~9に示す樹種同定等の成果は同社による。

凡 例

- 1 本書で示す方位は座標北を使用した。座標値は世界測地系(平面直角座標第VI系)に基づく。
- 2 写真図版に掲載している遺物の縮尺率は任意である。
- 3 遺構・遺物の図面縮尺は各図に示している。
- 4 土層名における色調は『新版標準土色帖24版』(小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社発行)を使用した。
- 5 遺構断面図の標高値はメートル表記である。小数点以下の記述が無い場合、小数点下の値は0である。標高値は東京湾平均海面(T.P.)からの値である。
- 6 遺物実測図の番号は、基本的に本書全体の通し番号で示している。本文の図中および写真図版の遺物番号もこれと一致している。遺構写真の()内に記す番号もこれと対応する。なお、遺物番号1~38が1区出土、39以降が2区出土の遺物である。ただし、第三章第9節の科学分析対象資料については独立した資料番号(ト番号)を使用している。
- 7 土器の実測図については、時期を問わず須恵器(陶質土器の可能性のあるものを含む)は断面を黒塗り、その他の土器は断面を白抜きで、それぞれ表現している。

目 次

序	i
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
図表目次	v
第1章 調査の経過	
第1節 調査と整理・報告に係る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	13
第2節 歴史的環境	14
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法	18
第2節 1区 基本層序と遺構面	19
第3節 1区 遺構	30
第4節 1区 遺物	37
第5節 2区 基本層序と遺構面	40
第6節 2区 遺構	53
第7節 2区 遺物	98
第8節 2区 動物遺存体	221
第9節 2区 出土遺物の科学分析	226
第4章 総括	
第1節 調査成果のまとめ	229
第2節 出土遺物と遺跡の評価	232
第3節 新堂遺跡周辺の歴史	236
報告書抄録	238
図版	

図 表 目 次

図1	調査地位位置図	13
図2	調査地周辺遺跡地図 (S = 1/12,500)	15
図3	調査地周辺の地形と発掘調査地点 (S = 1/2,500)	16
図4	1区調査区壁面 土層断面図① (S = 1/50)	20
図5	1区調査区壁面 土層断面図② (S = 1/50)	21
図6	1区調査区壁面 土層断面図③ (S = 1/50)	22
図7	1区調査区壁面 土層断面図④ (S = 1/50)	23
図8	1区調査区壁面 土層断面図⑤ (S = 1/50)	24
図9	1区調査区壁面 土層断面図⑥ (S = 1/50)	25
図10	1区調査区壁面 土層断面図⑦ (S = 1/50)	26
図11	1区調査区壁面 土層断面図⑧ (S = 1/50)	27
図12	1区調査区壁面 土層断面図⑨ (S = 1/50)	28
図13	1区 上層遺構平面図 (S = 1/400)	31
図14	1区 下層遺構配置図 (S = 1/400)	32
図15	1区 10146SD 平面図 (S = 1/250)	33
図16	1区 下層遺構断面図① (S = 1/40)	34
図17	1区 下層遺構断面図② (S = 1/40)	35
図18	1区 出土土器 (S = 1/4)	38
図19	1区 出土土器 (S = 1/2)	39
図20	2区 調査区区割図 (S = 1/800)	41
図21	2区調査区壁面 土層断面図① (S = 1/50)	42
図22	2区調査区壁面 土層断面図② (S = 1/50)	43
図23	2区調査区壁面 土層断面図③ (S = 1/50)	44
図24	2区調査区壁面 土層断面図④ (S = 1/50)	45
図25	2区調査区壁面 土層断面図⑤ (S = 1/50)	46
図26	2区調査区壁面 土層断面図⑥ (S = 1/50)	47
図27	2区調査区壁面 土層断面図⑦ (S = 1/50)	48
図28	2区調査区壁面 土層断面図⑧ (S = 1/50)	49
図29	2区調査区壁面 土層断面図⑨ (S = 1/50)	50
図30	2区調査区壁面 土層断面図⑩ (S = 1/50)	51
図31	2区調査区壁面 土層断面図⑪ (S = 1/50)	52
図32	2区上層遺構配置図 (S = 1/600)	53
図33	2区上層遺構断面図 (S = 1/40)	54

図 34	2区中層遺構平面図 (S = 1/600)	56
図 35	2区調査区北東部 中層遺構平面図 (S = 1/200)	57
図 36	2区調査区東部 中層遺構平面図 (S = 1/200)	58
図 37	2区 中層遺構 井戸 平面・断面図 (S = 1/40)	59
図 38	2区 中層遺構 20202SK 平面・断面① (S = 1/50)	60
図 39	2区 中層遺構 20202SK 平面・断面図② (S = 1/50)	61
図 40	2区 中層遺構 20154・20218SK 断面図 (S = 1/40)	61
図 41	2区 中層遺構土坑 断面図 (S = 1/40)	62
図 42	2区 中層遺構溝 断面図① (S = 1/40)	64
図 43	2区 中層遺構溝 断面図② (S = 1/40)	65
図 44	2区 中層遺構ピット 断面図① (S = 1/40)	67
図 45	2区 中層遺構ピット 断面図② (S = 1/40)	68
図 46	2区 中層遺構ピット 断面図③ (S = 1/40)	69
図 47	2区 中層遺構ピット 断面図④ (S = 1/40)	70
図 48	2区 中層遺構河道 断面図 (S = 1/120)	71
図 49	2区 中層遺構河道 平面図 (S = 1/400)	72
図 50	2区 中層遺構河道 しがらみ遺構認識図 (S = 1/150)	73
図 51	2区 中層遺構河道 杭列①平面・立面図 (S = 1/40)	74
図 52	2区 中層遺構河道 杭列②立面図 (S = 1/40)	74
図 53	2区 中層遺構河道 杭列③平面・立面図 (S = 1/40)	75
図 54	2区 中層遺構河道 下層しがらみ平面図 (S = 1/150)	76
図 55	2区 中層遺構河道 杭列④平面図 (S = 1/50)	77
図 56	2区 中層遺構河道 杭列⑤平面図 (S = 1/50)	78
図 57	2区 中層遺構河道 杭列⑥平面図 (S = 1/50)	79
図 58	2区 中層遺構河道 杭列⑦・⑧北半平面図 (S = 1/50)	80
図 59	2区 中層遺構河道 杭列⑧南半・⑨平面図 (S = 1/50)	81
図 60	2区 中層遺構河道 杭列⑦下 土器出土状況図 (S = 1/20)	81
図 61	2区 中層遺構河道 杭列④立面図 (S = 1/40)	82
図 62	2区 中層遺構河道 杭列⑤・⑥・⑦立面図 (S = 1/40)	83
図 63	2区 中層遺構河道 杭列⑧・⑨立面図 (S = 1/40)	84
図 64	2区 下層遺構 平面図 (S = 1/600)	96
図 65	2区 下層遺構 平面・断面図 (S = 1/40)	96
図 66	2区 下層トレンチ 5区土層断面図 (S = 1/100)	97
図 67	2区 上層遺構出土土器 (S = 1/4)	99
図 68	2区 中層遺構 土坑・井戸・ピット出土土器 (S = 1/4)	100

图 69	2区	中層遺構	20234SE 出土屨材 (S = 1/8) ······	101
图 70	2区	中層遺構	溝出土遺物 (S = 1/4 · 1/2) ······	102
图 71	2区	中層遺構	河道 I 層出土遺物① (S = 1/4) ······	104
图 72	2区	中層遺構	河道 I 層出土遺物② (S = 1/4) ······	105
图 73	2区	中層遺構	河道 I 層出土遺物③ (S = 1/4) ······	107
图 74	2区	中層遺構	河道 I 層出土遺物④ (S = 1/4) ······	109
图 75	2区	中層遺構	河道 I 層出土遺物⑤ (S = 1/4) ······	110
图 76	2区	中層遺構	河道 II · III 層出土遺物① (S = 1/4) ······	113
图 77	2区	中層遺構	河道 II · III 層出土遺物② (S = 1/4) ······	114
图 78	2区	中層遺構	河道 II · III 層出土遺物③ (S = 1/4) ······	117
图 79	2区	中層遺構	河道 II · III 層出土遺物④ (S = 1/4) ······	118
图 80	2区	中層遺構	河道 II · III 層出土遺物⑤ (S = 1/4) ······	119
图 81	2区	中層遺構	河道 II · III 層出土遺物⑥ (S = 1/4) ······	120
图 82	2区	中層遺構	河道 II · III 層出土遺物⑦ (S = 1/4) ······	123
图 83	2区	中層遺構	河道 II · III 層出土遺物⑧ (S = 1/4) ······	124
图 84	2区	中層遺構	河道 II · III 層出土遺物⑨ (S = 1/4) ······	125
图 85	2区	中層遺構	河道 II · III 層出土遺物⑩ (S = 1/4) ······	126
图 86	2区	中層遺構	河道 II · III 層出土遺物⑪ (S = 1/4 · 1/2) ······	128
图 87	2区	中層遺構	河道上層杭列 I 出土土器 (S = 1/4) ······	129
图 88	2区	中層遺構	河道 IV 層出土遺物① (S = 1/4) ······	130
图 89	2区	中層遺構	河道 IV 層出土遺物② (S = 1/4) ······	133
图 90	2区	中層遺構	河道 IV 層出土遺物③ (S = 1/4) ······	134
图 91	2区	中層遺構	河道 IV 層出土遺物④ (S = 1/4) ······	137
图 92	2区	中層遺構	河道 IV 層出土遺物⑤ (S = 1/4) ······	138
图 93	2区	中層遺構	河道 IV 層出土遺物⑥ (S = 1/4) ······	139
图 94	2区	中層遺構	河道 IV 層出土遺物⑦ (S = 1/4) ······	140
图 95	2区	中層遺構	河道 IV 層出土遺物⑧ (S = 1/4) ······	143
图 96	2区	中層遺構	河道 IV 層出土遺物⑨ (S = 1/4) ······	144
图 97	2区	中層遺構	河道 IV 層出土遺物⑩ (S = 1/4) ······	145
图 98	2区	中層遺構	河道 IV 層出土遺物⑪ (S = 1/4) ······	146
图 99	2区	中層遺構	河道 V 層出土遺物① (S = 1/4) ······	149
图 100	2区	中層遺構	河道 V 層出土遺物② (S = 1/4) ······	150
图 101	2区	中層遺構	河道 V 層出土遺物③ (S = 1/4) ······	152
图 102	2区	中層遺構	河道 V 層出土遺物④ (S = 1/4) ······	153
图 103	2区	中層遺構	河道 V 層出土遺物⑤ (S = 1/4) ······	154

図 104	2区	中層遺構	河道V層出土遺物⑥ (S = 1/4)	156
図 105	2区	中層遺構	河道V層出土遺物⑦ (S = 1/4)	157
図 106	2区	中層遺構	河道V層出土遺物⑧ (S = 1/4)	159
図 107	2区	中層遺構	河道V層出土遺物⑨ (S = 1/4)	160
図 108	2区	中層遺構	河道V層出土遺物⑩ (S = 1/4)	161
図 109	2区	中層遺構	河道V層出土遺物⑪ (S = 1/4)	162
図 110	2区	中層遺構	河道V層出土遺物⑫ (S = 1/4)	163
図 111	2区	中層遺構	河道V層出土遺物⑬ (S = 1/2)	164
図 112	2区	中層遺構	河道下層杭列 4 ~ 9 出土遺物① (S = 1/4)	167
図 113	2区	中層遺構	河道下層杭列 4 ~ 9 出土遺物② (S = 1/4)	168
図 114	2区	中層遺構	河道下層杭列 4 ~ 9 出土遺物③ (S = 1/4)	171
図 115	2区	中層遺構	河道下層杭列 4 ~ 9 出土遺物④ (S = 1/4)	172
図 116	2区	中層遺構	河道下層杭列 4 ~ 9 出土遺物⑤ (S = 1/4)	173
図 117	2区	中層遺構	河道下層杭列 4 ~ 9 出土遺物⑥ (S = 1/4)	174
図 118	2区	中層遺構	河道下層杭列 4 ~ 9 出土遺物⑦ (S = 1/4)	177
図 119	2区	中層遺構	河道下層杭列 4 ~ 9 出土遺物⑧ (S = 1/4)	178
図 120	2区	中層遺構	河道下層杭列 4 ~ 9 出土遺物⑨ (S = 1/4)	179
図 121	2区	中層遺構	河道下層杭列 4 ~ 9 出土遺物⑩ (S = 1/4 · 1/2)	180
図 122	2区	中層遺構	河道下層杭列 7 下出土遺物 (S = 1/4)	181
図 123	2区	中層遺構	河道一括 出土遺物① (S = 1/4)	184
図 124	2区	中層遺構	河道一括 出土遺物② (S = 1/4)	185
図 125	2区	中層遺構	河道一括 出土遺物③ (S = 1/4)	186
図 126	2区	中層遺構	河道一括 出土遺物④ (S = 1/4)	187
図 127	2区	中層遺構	河道一括 出土遺物⑤ (S = 1/4)	188
図 128	2区	中層遺構	河道一括 出土遺物⑥ (S = 1/2)	188
図 129	2区	中層遺構	河道出土 骨製品 (S = 1/2)	189
図 130	2区	中層遺構	河道出土 鞆羽口 (S = 1/4)	189
図 131	2区	中層遺構	河道 I ~ III層 · 河道一括出土 鉄滓 (S = 1/2)	190
図 132	2区	中層遺構	河道IV · V層出土 鉄滓 · 鞆羽口 (S = 1/2)	191
図 133	2区	中層遺構	河道出土 石製祭祀具 (S = 1/2)	192
図 134	2区	中層遺構	河道出土 砥石① (S = 1/2)	193
図 135	2区	中層遺構	河道出土 砥石② (S = 1/4)	194
図 136	2区	中層遺構	河道出土 石器 · 石製品 (S = 1/4)	195
図 137	2区	中層遺構	河道出土 石器 (S = 1/2)	196
図 138	2区	中層遺構	河道出土 木製品① (S = 1/4 · 1/5)	198

图 139	2区	中層遺構	河道出土 木製品② (S = 1/8 · 1/4) · · · · ·	· 200
图 140	2区	中層遺構	河道出土 木製品③ (S = 1/4) · · · · ·	· 201
图 141	2区	中層遺構	河道出土 木製品④ (S = 1/4) · · · · ·	· 202
图 142	2区	中層遺構	河道出土 木製品⑤ (S = 1/5) · · · · ·	· 205
图 143	2区	中層遺構	河道出土 木製品⑥ (S = 1/4 · 1/8) · · · · ·	· 206
图 144	2区	中層遺構	河道出土 木製品⑦ (S = 1/2 · 1/4) · · · · ·	· 208
图 145	2区	中層遺構	河道出土 木製品⑧ (S = 1/4) · · · · ·	· 209
图 146	2区	中層遺構	河道出土 木製品⑨ (S = 1/5) · · · · ·	· 210
图 147	2区	中層遺構	河道出土 木製品⑩ (S = 1/5) · · · · ·	· 212
图 148	2区	中層遺構	河道出土 木製品⑪ (S = 1/5) · · · · ·	· 213
图 149	2区	中層遺構	河道出土 木製品⑫ (S = 1/4) · · · · ·	· 214
图 150	2区	中層遺構	河道出土 木製品⑬ (S = 1/4) · · · · ·	· 216
图 151	2区	中層遺構	河道出土 木製品⑭ (S = 1/4 · 1/8) · · · · ·	· 217
图 152	2区	中層遺構	河道出土 木製品⑮ (S = 1/20) · · · · ·	· 218
图 153	2区	下層遺構	· 下層包含層出土遺物 (S = 1/4 · 1/2) · · · · ·	· 220
图 154	2区	重機掘削	· 排水溝掘削時 出土遺物 (S = 1/4 · 1/2) · · · · ·	· 220

表 1	中層遺構	· 河道出土木材一覽① · · · · ·	· 87
表 2	中層遺構	· 河道出土木材一覽② · · · · ·	· 88
表 3	中層遺構	· 河道出土木材一覽③ · · · · ·	· 89
表 4	中層遺構	· 河道出土木材一覽④ · · · · ·	· 90
表 5	中層遺構	· 河道出土木材一覽⑤ · · · · ·	· 91
表 6	中層遺構	· 河道出土木材一覽⑥ · · · · ·	· 92
表 7	中層遺構	· 河道出土木材一覽⑦ · · · · ·	· 93
表 8	中層遺構	· 河道出土木材一覽⑧ · · · · ·	· 94
表 9	中層遺構	· 河道出土木材一覽⑨ · · · · ·	· 95
表 10	20234SE	· 河道 出土木製品一覽 · · · · ·	· 197
表 11	動物遺存体	一覽① · · · · ·	· 224
表 12	動物遺存体	一覽② · · · · ·	· 225
表 13	科学分析	調査資料と調査内容 · · · · ·	· 226

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査と整理・報告に係る経緯

本書は、大型店舗の建設に伴って実施した新堂遺跡の発掘調査報告書である。

本書で報告を行う一連の調査は、平成 25 年 9 月 17 日付でイオンモール株式会社より提出された遺跡有無確認踏査願（昭和 52 年 3 月 10 日付 教文第 688 号 奈良県教育長通知に基づく手続）を発端としている。大型店舗棟を含む敷地面積約 9 万 m²超の大規模開発計画であり、大枠がその届出によって提示された。この時点では計画敷地の大半が遺跡外であり、敷地南東端が新堂遺跡に、敷地北東端が曲川遺跡に、それぞれわずかに含まれるのみであった。届出に基づいて現地の踏査を実施したが、現地は大部分が耕作活動が続いている水田地であり、遺跡有無の判断は困難な状況であった。そのため、事業者と協議の上で試掘確認調査を実施することとなった。

試掘確認調査は橿原市教育委員会が橿教委 2013-5 次調査として実施した。調査期間は平成 25 年 12 月 16 日～平成 26 年 2 月 28 日、調査面積は 1488 m²である。試掘調査区は敷地全体に散らばる形で合計 8ヶ所に設定している（調査区の位置は図 3）。この配置は試掘調査の結果に応じて開発計画の細部を決定するためである。試掘調査の成果については本書では割愛するが、層序や検出遺構等の詳細については橿原市教育委員会 編 2015『平成 25 年度 橿原市文化財調査年報』で報告しているので同書を参照されたい。試掘調査成果の概略を述べると、各調査地点で弥生時代から中世にかけての遺構・遺物の存在が確認されている。また、各時代の流路や氾濫層が広がる地点が多く、試掘 2～4 区では古墳時代中期後半に埋没したと考えられる流路を確認し、特に試掘 3 区ではその上面付近に多く遺構・遺物が存在することを確認している。遺構・遺物が比較的多く存在すると想定された地点は試掘 3・8・9 区周辺である。

試掘調査の成果を受けて、平成 26 年度に申請地一帯は南東に位置する新堂遺跡を範囲拡大する形で遺跡異動が行われ、周知の埋蔵文化財包蔵地として扱われることとなった。図 2 に示す新堂遺跡の範囲は、その異動後の内容である。

これと並行して事業主と橿原市教育委員会との間で事業についての協議が進められた。この段階から正式に株式会社大和流通経済研究所 代表取締役 田村耕一氏がイオンモール株式会社から事業に掛かる調整を委任されており、以後の協議・調整については全て株式会社大和流通経済研究所が窓口となっている。協議を重ねた結果、大型店舗棟の建設予定地点のうち遺構が多く存在すると予測される 2 地点（1 区・2 区）において本発掘調査および整理・報告を行うこととなった。いずれの地点も記録保存調査となる。平成 27 年 11 月 5 日付で株式会社大和流通経済研究所より埋蔵文化財発掘届出書が提出された。届出内容は敷地面積約 10 万 m²、建物面積 42459 m²である。

大型店舗棟の南西部に位置する調査区の名称を 1 区、同東部に位置する調査区を 2 区とし、1 区→2 区の順に発掘調査を実施することとなった。調査面積は 1 区が 3812 m²、2 区が 6971 m²、合計面積 10783 m²である（調査区の詳細位置は後述）。1 区の調査は平成 27 年 12 月 4 日に開始し、平成 28 年 6 月 30 日に終了した。1 区の調査期間中において、周辺部を含む一連の事業計画の都合上、より早期に発掘調査現地作業を完了させたいとの要望が事業主から出された。これに対して橿原市教

育委員会の現行の体制では対応が困難であるため、榊原市教育委員会から奈良県教育委員会・奈良県立榊原考古学研究所に調査実施に関する協力の協議・依頼を行うこととなった。平成28年4月25日付で榊原市教育委員会から奈良県教育委員会へ発掘調査（2区）についての指導・協力の依頼を提出、平成28年5月13日付で同調査に係る協定書が両者間で締結された。協定内容は、2区の調査指導のため奈良県立榊原考古学研究所職員1名（清水康二氏）の派遣、同調査に関する事業主との契約・諸手続については榊原市教育委員会が行うことなどである。調査記録と出土遺物の帰属・調査後における整理作業の分担・報告書作成等については両者の協議で後に定めるとしており、2区調査後半段階においていずれも榊原市教育委員会を担当することが決定されている。この体制の下、1区調査終盤と並行する形で平成28年5月25日に2区調査を開始し、平成29年2月27日に同調査を終えた。

調査終盤にあたる平成29年2月15日に発掘調査成果について報道発表を行った。併せて平成29年2月15日～6月30日に歴史に憩う榊原市博物館1階ロビーにおいて発掘調査成果の速報展示を開催した。また、平成29年2月26日・3月4日に同博物館で一般向けに成果報告・出土遺物見学会も実施した。

調査終了の翌年度である平成29年度から令和元年度までの3ヶ年を掛けて、整理作業および報告書刊行作業を榊原市教育委員会で行った。出土遺物量が非常に多く、特に2区の河道出土土器だけでも遺物コンテナ約400箱分を数え、それらの整理に多くの労力を要した。整理・報告における出土遺物や調査記録等の取扱いについてはⅢ章以降の本文中でそれぞれ述べる。整理作業および報告書刊行に掛かる費用は事業主が負担している。

榊原市教育委員会では、調査年度を西暦で表し、その年度内に行われた発掘調査名称を年度一調査次数の形で示している。本書で報告を行う2件の発掘調査に対しては、1区は榊教委2015-4・2016-1次調査、2区は榊教委2016-2次調査という番号を付与している。1区は年度を跨いでの調査であるため両年度の番号を付与しているが同一の調査である。調査記録や出土遺物には、この番号を記して整理・保管している。

第2節 発掘作業の経過

本発掘調査の期間は、1区が平成27年12月4日から平成28年6月30日まで、2区が平成28年5月25日から平成29年2月27日までである。調査の日々の記録は、以下の調査日誌抄録に掲げている。調査日誌は両調査区で個別に作成しており、期間は一部重複する。調査日誌は基本的に石坂による。

○ 1区 調査日誌抄録

平成27（2015）年12月4日（金）

1区調査開始。調査区内および周辺の表土（耕作土）を厚さ約10cm分すき取り。調査区肩部分については、土層断面確認のため表土を畔状に残す。

12月7日（月）

表土除去作業。調査区西側は表土直下から湧水量が多い。

12月8日（火）

表土除去作業。周辺排水路の構築。

12月9日（水）

1区北西隅から西辺沿いを重機で遺構面まで掘削。現況水田面-0.9mの淡灰色粘土層上面を検出面とする。試掘8区のⅣ層（遺構ベース）がこれに対応か。榊原市平岩統括・松井係長とともに遺構面の確認。

12月10日(木)

調査区北辺沿い、重機掘削・遺構面検出作業。水田面-1.0～1.2mの暗褐色粘質土上で検出。試掘8区IV層と対応する層であると考えられる。上面高は北東が低く南、西に向かって高くなる。検出遺構は中世遺物を含む素掘耕作溝。

12月11日(金)

雨天により掘削作業無し。現場保守作業。

12月14日(月)

調査区北・西・東辺沿い、重機掘削。調査区壁面沿いに排水溝を人力掘削。湧水量は非常に多い。調査区東側では中世土師器が出土する。

12月15日(火)

重機掘削。15時頃、強い降雨のため作業中止。

12月16日(水)

重機掘削。排水溝掘削。

12月17日(木)

重機掘削。調査区南東部は遺構ベース層が砂層に変化する。

12月18日(金)

重機掘削。調査区西側で足跡を多く検出。埋土は灰色細砂が主。

12月21日(月)

雨天のため、現場作業無し。

12月22日(火)

重機掘削。測量基準点設置作業。

12月24日(木)

重機掘削。

12月25日(金)

重機掘削。年内の作業終了のため、調査区養生を行う。

平成28(2016)年1月5日(火)

重機掘削。調査区南東はベースが砂層であり排水溝形状の保持が困難であるため、排水溝壁面をコンパネで保護。

1月6日(水)

重機掘削。調査区中央付近で試掘8区の範囲を検出。同区の断割部分を排水路として利用する。

1月7日(木)

重機掘削。

1月8日(金)

重機掘削。昼過ぎ、雨のため一時作業中断。調査区西半に南北方向の浅く広い溝が存在。

1月12日(火)

重機掘削、遺構面精査。調査区南西部は検出面付近で弥生～古代の土器片を含む場所が存在する。遺構の存在が想定される。

1月13日(水)

重機掘削。遺構面検出作業。

1月14日(木)

重機掘削。遺構面検出作業。

1月15日(金)

重機掘削。遺構面検出作業。

1月18日(月)

雨天のため作業無し。

1月19日(火)

重機掘削。遺構面検出作業。

1月20日(水)

遺構面検出作業、ほぼ終了。調査区北～西側から遺構面検出写真撮影に向けての清掃開始。

1月21日(木)

排水溝掘削。検出写真撮影に向けての清掃作業。

1月22日(金)

上層遺構面検出写真撮影。上層遺構は、耕作溝と考えられる素掘溝群。調査区全体で東西および南北方向に掘削されている。重機による排土山の整形作業。

1月25日(月)

調査区西側から素掘耕作溝の掘り下げ開始。等間隔で規則的に並ぶやや大型の東西溝がもっとも新しい。耕作溝の残存高は約0.1～0.25m。測量メッシュ杭打設。平面図作成開始。

1月26日(火)

調査区西側、耕作溝の掘り下げ。

1月27日(水)

耕作溝の掘り下げ。埋土中にはサヌカイト剥片、石礫も少量ながら含まれる。

1月28日(木)

耕作溝の掘り下げ。調査区西側突出部について終了。西側では耕作溝構築時にあたると考えられる出土遺物は少ない。

1月29日(金)

雨天のため作業無し。

2月1日(月)

調査区北西部、耕作溝の掘り下げ。耕作溝下に砂層溝(流路の氾濫?)が存在する事を確認。

2月2日(火)

調査区北西部、耕作溝の掘り下げ。東西溝から羽釜の大型片が輪形をほぼ保った状態で出土。記録後、取り上げ。

2月3日(水)

調査区南西部、耕作溝掘り下げ。

2月4日(木)

調査区南西部、耕作溝掘り下げ。南北耕作溝から瓦器片出土。

2月5日(金)

調査区南西部、耕作溝掘り下げ。

2月8日(月)

調査区南西部、耕作溝掘り下げ。調査区排水溝の再整備。

2月9日(火)

午前から昼過ぎにかけて一時的に強い風雨。断続的に作業を進める。耕作溝掘り下げ。

2月10日(水)

耕作溝掘り下げ、調査区西半終了。調査区東部は平面への湧水、滞水が多く作業に支障をきたす

ため、調査区内に排水溝を追加で掘削。

2月12日(金)
調査区北東部、排水溝の掘削。耕作溝の掘り下げ。土・日に強い降雨が予想されるため、雨対策作業。

2月15日(月)
調査区南西部、耕作溝の掘り下げ。昼頃から、降雨のため作業中止。

2月16日(火)
調査区南東部、耕作溝の掘り下げ。状況は南西部とほぼ同様。

2月17日(水)
調査区南東部、耕作溝掘り下げ。東西方向の耕作溝からほぼ完形の瓦器碗1点出土。

2月18日(木)
調査区東部、耕作溝の掘り下げ。

2月19日(金)
調査区東部、耕作溝の掘り下げ。

2月22日(月)
調査区南東部、耕作溝の掘り下げ。耕作溝より新しい遺構である10088SKの検出写真撮影。1辺1.5～2.0mの方形土坑…井戸か。時期的には現段階で調査を進めるべき遺構だが調査区保持のため、一段下げに留めて本格的調査は後日とする。調査区南東隅の砂層の広がり(河道か)には少量ながら土師器が含まれる。

2月23日(火)
調査区南東部、耕作溝の掘り下げ。並行して調査区南半から平面清掃を開始。

2月24日(水)
調査区南半、写真撮影に向けて清掃。

2月25日(木)
調査区南半、上層遺構耕作溝(第1面)の完掘写真撮影。続いて耕作層を約5cm除去した第2面の検出・掘削に入る。第2面は南半の一部に存在する。

2月26日(金)
調査区南半、耕作層すき取り。

2月29日(月)
調査区南半、耕作層すき取り。

3月1日(火)
調査区南半、耕作層すき取り。第2面耕作溝の掘り下げ。

3月2日(水)
調査区南側、第2面検出、耕作溝掘り下げ。

3月3日(木)
調査区南部、耕作溝掘り下げ。

3月4日(金)
調査区南部、耕作溝掘り下げ終了。上層遺構完掘写真撮影に向けての清掃準備。

3月7日(月)
上層遺構完掘写真撮影に向けての清掃。

3月8日(火)
上層遺構完掘写真撮影に向けての清掃。流路、溝、

土坑などの下層遺構の存在を確認。

3月9日(水)
午前、高所作業車で上層遺構完掘・下層遺構検出の全景写真撮影。降雨のため雨処理をして撤収。

3月10日(木)
上層遺構完掘・下層遺構検出写真撮影。昼過ぎ撮影終了。午後、下層遺構掘削の準備作業。

3月11日(金)
下層遺構の掘り下げ開始。調査区西半の南北溝(10145SD。流路か)北側から調査。全体としては深さ5～15cm程度で広がるが、中央部のみ中約1mの溝状にさらに落ちくぼむ(10146SDとする)。10145SD南半上面にて、土器小片がたまって出土する地点あり。他地点で現在のところ遺物無し。

3月14日(月)
雨天のため作業無し。

3月15日(火)
10145SD上層の掘り下げ。10146SDは蛇行しつつ南に続く。

3月16日(水)
10145SD南半上層の掘り下げと周辺の遺構検出作業。調査区南半で巾1m強の溝3条を検出。調査区中央やや南で重複関係を有することを確認。北に位置する10149SDが一番新しい。

3月17日(木)
10145・10219・10220SD周辺の遺構検出作業。写真撮影に向けての清掃。

3月18日(金)
調査区西半の下層遺構溝の詳細検出写真撮影。

3月22日(火)
調査区西部、遺構検出作業。10145SD記録作業。

3月23日(水)
調査区西側、遺構検出作業。西辺沿いで足跡を複数検出。灰白細砂が埋土。10145・10221・10219SDの断面記録作業。深さ約0.3～0.5mの溝で人工の溝と考えられる。埋土は砂層が主であり、洪水等によって一気に埋まった可能性がある。

3月24日(木)
調査区西側、足跡群の検出写真撮影。10145SD北半、掘り下げ。底面の一部に足跡が残る。人工的に掘削された溝と分かる。下層溝群の記録作業。

3月25日(金)
調査区南西部、下層溝群の掘り下げ。10145・10219・10220SDともに出土遺物がほぼ無く、採取の困難なほどの土器細片(弥生か)がわずかに存在するのみである。

3月28日(月)
10219SD・10220SD・10145SDの掘り下げ。10220SDから弥生土器の小片出土。下層溝の完掘写真撮影に向けての清掃。

3月29日(火)
調査区西側、遺構完掘写真撮影。調査区北東部、遺構検出作業。

3月30日(水)

調査区北東部、遺構検出作業。足跡多数。人間の足跡が主である。動物のものを含む可能性もあるが確実ではない。

3月31日(木)

調査区北東部、遺構検出作業。足跡埋土の砂層中に土器片(弥生土土器か)がわずかに含まれることを確認。

4月1日(金)

雨天のため、現場作業無し。

4月4日(月)

雨天のため、現場作業無し。

4月5日(火)

調査区東部、遺構検出作業。調査区南東部の10154SD上面には古墳時代と考えられる土器や埴輪1点が含まれることを確認。古墳時代に埋没した河道か。

4月6日(水)

調査区東部、遺構検出作業。下層溝群の東端は調査区中央付近でぼんやりと消える。

4月7日(木)

雨天のため、現場作業無し。午後、非常に強い風。

4月8日(金)

調査区南東部、遺構検出作業。調査区南東隅にてビット3基(10223～100225SP)検出。10154SDより新しい遺構である。10154SD南西隅の上面にて動物歯(馬?)出土。

4月11日(月)

調査区東半、下層遺構検出写真撮影に向けての清掃作業。

4月12日(火)

調査区東半、下層遺構検出写真撮影。終了後、掘り下げ準備作業。

4月13日(水)

下層遺構ビット断面記録。10234SPから古墳時代の土器が出土。10220・10149SDの北東端付近が平面で不明瞭なため、遺構面をすき取って確認作業を進める。10154SD、掘り下げ。肩部から土器片が出土する。15時過ぎ、降雨のため現場作業終了。

4月14日(木)

昨夕～明け方、強い雨。午前、雨の事後処理作業。10149・10150・10220SD東端部の再検出作業。

4月15日(金)

10219・10220・10154SDの検出写真撮影。10154SDの上面、北端付近で土坑2基を新たに検出。10226・10227SKとする。

4月18日(月)

調査区南東部の下層遺構掘り下げ。

10226SKは、ベースである10154SD埋土からの湧水が多く通常の半載作業が困難であるため、10154SDの掘り下げと並行して記録を行う。11～14時、降雨のため作業一時中断。

4月19日(火)

10154SD、10226・10227SKの掘り下げ開始。10226・10227SKは、埋土の状況などから井戸か。10220SDの北東端付近は、ベース層が氾濫層であり、遺構埋土も同様である。度重なる洪水に対する水抜き溝といった可能性も考えられる。

4月20日(水)

下層遺構の掘り下げ。10088SEは深さ0.7m程度の浅い井戸と判明。平面の規模に比して非常に浅いが、湧水量は非常に多い。調査区西側の張り出し部分、南壁の土層写真撮影。

4月21日(木)

10154SD、掘り下げ。昼前から雨天。風雨対策を行い、昼で現場作業終了。

4月22日(金)

10154SD、掘り下げ。ごく少量ながら縄文時代～古墳時代の遺物が出土する。古墳時代の土器が最も新しい遺物である。

4月25日(月)

10154SD、掘り下げ。調査区南東部は遺構ベース層よりさらに下層が灰白細砂層であり、河道である10154SD埋土との差を断面確認しつつ、調査を進める。調査区南壁、土層断面写真撮影。

4月26日(火)

10219・10220SD、掘り下げ。調査区南壁断面記録作業。空撮に向けて、調査区周辺の整備を開始。

4月27日(水)

10220・10219SD、10088SE完掘。空撮に向けての環境整備。

4月28日(木)

雨天のため、作業無し。5/2(月)・5/6(金)も作業無し。5/9(月)より、空撮に向けて作業再開とする。

5月9日(月)

調査区南壁東端、土層断面記録作業。空撮に向けての環境整備。午後から強い雨。

5月11日(水)

数日続いた強雨の事後処理。5月13日(金)に予定していた空撮の実施が困難となったため、5月末頃に撮影延期を決める。※5月25日頃まで、伊勢志摩サミットの影響によりヘリの確保が困難であるため。

5月12日(木)

調査区壁面・排水溝整備。

5月13日(金)

調査区土層断面記録に向けての整形作業。

5月16日(月)

調査区西壁、断面記録作業。

5月17日(火)

昨夜遅く～早朝、強い雨。雨天後の排水処理等の作業。調査区北西部の壁面整形、記録作業。

5月18日(水)

調査区西壁、断面記録作業。

5月19日(木)

調査区北壁、断面記録作業。

5月20日(金)

調査区北壁、断面記録作業。

5月23日(月)

調査区北壁断面、平面図記録作業。図面記録作業、ほぼ終了。空撮に向けての作業を6月3日から再開予定とする。5月25日から2区の調査開始となる。1区の残る作業は2区と並行して行うこととなる。

6月3日(金)

空撮に向けて作業再開。写真撮影のための清掃作業。

6月6日(月)

空撮に向けての清掃作業。4日夕～5日朝、雨天であったため、その後の処理も含む。

6月7日(火)

朝～10時半、高所作業車にて完撮写真撮影。11時、空撮実施。10時過ぎから若干の降雨、撮影はそのまま進める。撮影終了後、雨対策をして作業終了。

6月8日(水)

調査区南壁沿いに残っていた10151・10228SEの調査。いずれも素掘りの井戸。10228Eからは土師器の小片が出土。掘削・記録作業は全て終了。

6月9日(木)

重機埋め戻し。周辺整備作業。以降、6月30日まで、2区の調査と並行して埋め戻しが続く。

○ 2区 調査日誌抄録

平成28(2016)年5月25日(水)

重機掘削開始。調査区北辺から掘削。調査区より南に排土置き場を設定。調査区各辺沿いに排水溝を掘削。現代水田耕作面-0.6～0.8mで遺構面を抽出。現代耕土、床土、旧耕作層(中近世か)下の褐灰土・灰色砂層が遺構ベース層となる。灰色砂からは古墳時代土器が出土する。試掘3区の河道と対応か。

5月26日(木)

重機掘削。調査区北西および東辺中央付近で、河道と考えられる砂層の広がりを抽出。北西ではTK23～47頃の須恵器環が出土。調査区の南東付近は良好なベース層である褐色土上面が遺構面となる。

5月27日(金)

重機掘削、排水溝掘削作業。

5月30日(月)

重機掘削、排水溝掘削。調査区南東隅、現在の遺構面-20cmの深度にて縄文土器出土。下層遺構が存在する可能性あり。

5月31日(火)

重機掘削。調査区北側から遺構検出作業。耕作溝の他、河道、溝、ピットなどが存在。

6月1日(水)

重機掘削。調査区北辺・西辺の遺構検出作業。調査区北側には耕作溝より古い時期の土坑や溝あり。土坑は土師器を含む。

6月2日(木)

重機掘削。調査区北側の遺構検出作業。調査区北側、河道の北岸付近に土師器片を含む土坑・ピットなどの遺構が分布する。

6月3日(金)

重機掘削。試掘調査3区の西端部を再検出。試掘3区の掘削面は、現在の検出面とほぼ同一。試掘区北辺沿いの排水溝掘削部分のみ低くなる。

6月6日(月)

調査区中央部、重機掘削。調査区南辺、排水溝掘削。

6月7日(火)

重機掘削。調査区西半、排水溝掘削。昼前から降雨のため作業終了。

6月8日(水)

調査区西半、重機掘削。排水溝掘削時、調査区中央付近の砂層(河道)から、古墳時代中期後半の須恵器が複数出土。

6月9日(木)

雨天のため、作業無し。

6月10日(金)

調査区中央部、重機掘削。北側河道上面で溝状遺構を検出。試掘時に検出していた溝か。河道上の遺構であるが、流路の最終堆積の可能性もあり。

6月13日(月)

調査区中央部、重機掘削作業。遺構面精査。

6月14日(火)

調査区北側(2-1区)、上層遺構(主として中世以降の耕作溝)検出状況写真撮影に向けての清掃作業。上層遺構については、調査区全体を分割して順次記録を行う。

6月15日(水)

午前、2-1区上層遺構検出写真撮影。上層遺構は南北方向の耕作溝群。時期は中世以降と考えられるものの、確認できる遺物は下層由来の古墳時代のものばかりで詳細時期は不明。東西方向の耕作溝は小規模なものが数条あるのみ。耕作溝下には、古墳時代中期と思しき流路・土坑などが存在する。午後、調査区東側の重機掘削。

6月16日(木)

雨天のため、現場作業無し。

6月17日(金)

重機掘削。調査区排水溝掘削。現時点で重機掘削は8割終了。

6月20日(月)

2-5区、重機掘削。遺構面検出作業。

6月21日(火)

雨天により現場作業無し。昨夜遅くから朝まで非常に強い雨。

6月22日(水)

2-5区、重機掘削。遺構面検出作業。昼前から降雨。午前で作業終了。

6月23日(木)

昨夜～朝、強い雨が続く。2-5区、重機掘削。遺構面検出作業。

6月24日(金)

2-5区、重機掘削。遺構面検出作業。調査区内の重機掘削は、ほぼ終了。昼前から降雨、午前で作業を終了。調査区南側に方形土坑あり。埋土は耕作溝に似る。

6月27日(月)

2-2区、上層遺構検出写真に向けての遺構面検出・清掃作業。2-5区、排水溝掘削。

6月28日(火)

2-5区排水溝掘削、壁面整形。

6月29日(水)

2-2区、遺構面検出。降雨のため、昼で作業終了。

6月30日(木)

2-2区、上層遺構検出写真に向けての清掃作業。

7月1日(金)

2-2区、上層遺構検出写真撮影。

7月4日(月)

2-4区、上層遺構検出写真に向けての清掃作業。調査区西部の砂層上、湧水が多いため小規模な排水溝を掘削。

7月5日(火)

2-4区、上層遺構検出写真撮影。

7月6日(水)

2-3区、遺構検出写真撮影に向けての清掃作業。調査区内、メッシュ杭打設作業。

7月7日(木)

2-3区、上層遺構検出写真撮影。河道南岸にも小溝・ピットあり。

7月8日(金)

2-1区、耕作溝群の掘り下げ。耕作溝の深さは約5～20cm。出土遺物は下層の古墳時代遺構に由来すると考えられる土器ばかりで、耕作溝自体の時期は不明。周辺の調査成果等をふまえると中世以降の耕作溝である可能性が高いが対応遺物は無い。

7月11日(月)

2-5区、上層遺構検出写真に向けての清掃作業。

7月12日(火)

検出写真に向けて清掃を進めるが9～10時半、強い雨。以降も断続的に雨が降る。撮影は後日仕切り直しとし、昼までで作業終了とする。

7月13日(水)

雨天のため、現場作業無し。排水対策を実施。

7月14日(木)

2-5区、降雨後処理と残る範囲の清掃を行い上層

遺構検出写真撮影。耕作溝の他に土坑3基あり。

7月15日(金)

2-1区中央、耕作溝群の掘り下げ。耕作溝下に小規模なピットが点在することを確認。

7月19日(火)

2-1区東半、耕作溝掘り下げ。耕作溝下で新たにピットや溝を複数検出。2-1区東半は他の区画よりも下層に遺構が多い。

7月20日(水)

2-1区、耕作溝掘り下げ終了。

7月21日(木)

2-3区、耕作溝掘り下げ。

7月22日(金)

2-3区、耕作溝掘り下げ終了。2-5区耕作溝掘り下げ開始。

7月25日(月)

2-5区、耕作溝掘り下げ。耕作溝からの出土遺物は他地区より少ない。これは同地区に下層の古墳時代遺構が少ないことに起因する。

7月26日(火)

雨天のため、作業無し。

7月27日(水)

2-5区、耕作溝掘り下げ。約5割終了。

7月28日(木)

2-5区、耕作溝掘り下げ。調査区南東部の上・中層遺構のベース層(褐色砂質土)から、石籤(縄文時代)出土。4時前から強い雨、作業終了。

7月29日(金)

2-5区、耕作溝掘り下げ、8割終了。

8月1日(月)

2-5区、耕作溝掘り下げ終了。引き続き2-2区の同作業を行う準備。

8月2日(火)

2-2区、耕作溝掘り下げ。南北耕作溝のうち、他より深く(約0.25m)断面形がL字状になる他と異なる溝2条あり。埋土は他と目立った差異無し。

8月3日(水)

2-2区、耕作溝掘り下げ約7割終了。2-2区西半は、中～近世の耕作層が複数時期に分かれ、間に洪水を挟む。これは調査区壁面でのみ確認できる。

8月4日(木)

2-2区、耕作溝掘り下げ終了。引き続き2-4区の同作業を行う。

8月5日(金)

2-4区、耕作溝掘り下げ、約5割終了。耕作溝からの出土遺物のうち、中世に属すると考えられる土器は調査区南側に多い。ただし絶対量は少ない。現在の遺構ベース層下に存在する遺構(下層遺構)の状況について検討作業。

8月8日(月)

2-4区、耕作溝掘り下げ。

8月9日(火)

2-4区、耕作溝掘り下げ、昼過ぎで終了。写真撮

影に向けての周辺整備。

8月10日(水)

写真撮影に向けての周辺整備。調査区内排水溝の土上げ作業等を行う。8月11(祝)～15(月)は盆休み。

8月16日(火)

上層遺構発掘・中層遺構検出写真撮影に向けての清掃作業。調査区西半からスタート。

8月17日(水)

10時前後まで降雨。当初は明日18日に写真撮影を計画していたが、19日に変更を決定。清掃作業を進める。

8月18日(木)

写真撮影に向けての清掃作業および周辺整備。

8月19日(金)

上層遺構(耕作溝群)発掘・中層遺構(上層と同一面かつ古い)検出状況の写真撮影。高所作業車を使用しての全景撮影。昼で終了。午後、養生作業と中層遺構の掘削準備。

8月22日(月)

20989SD(大型の河道)北西部に川の流れと直交する先行トレンチを設定し掘り下げ開始。同トレンチ内を南西からⅠ～Ⅳ区に分割して遺物取り上げ。Ⅰ区は、河の南西外への微砂が薄く広がる範囲にあたる。2・2区南西端に、下層試掘1区を設定し掘り下げ開始。掘り下げているベース層中から少量の縄文土器の出土あり。20989SD上、東に位置する20270SDを掘り下げ。試掘時に古墳周濠である可能性が指摘された溝であるが、実際は河道の最終堆積段階にあたる溝状のたまりであると考えられる。午後2時半、非常に強い雨。作業終了。

8月23日(火)

20270SD東端部、掘り下げと記録作業。下層1区掘り下げ。

8月24日(水)

20989SD先行トレンチ、検出面-0.5mまで掘り下げ。南西側は砂層、北東側はシルト層、前者が新しい堆積。両岸はいずれも傾斜がきつい。下層試掘1区、掘り下げはほぼ終了。土器・サヌカイト片の出土あり。

8月25日(木)

20989SDと下層試掘1区の写真撮影。20989SD先行トレンチでは検出面-0.5mまで掘削段階で写真を撮影し、底面の確認を目指して掘り下げを進める。出土遺物は古墳時代中期後半の遺物が主だが、同前半の土器も見られる。韓式系土器もあり。縄文下層試掘1区、上・中層遺構面-20cmの黄褐色土上面で22001SKを検出。土器・サヌカイト各1点が出土。下層遺構については22000番台の遺構番号を使用していく。

8月26日(金)

縄文下層試掘1区、22001SK発掘・記録作成。試掘区西半は縄文時代の河道であると断面で確認

される。最上層には土器・石器をわずかに含む。20989SD先行トレンチ、掘り下げ。週明け、台風接近の可能性があるため、対策を行う。

8月29日(月)

台風10号接近の影響で悪天候。朝、ポンプ・ベルコン等養生作業。調査作業無し。昼前から強い雨が続く。

8月30日(火)

10時頃まで、雨水処理作業。20989SD先行トレンチ掘り下げ。検出面-1.4mまで終了。下層には、弥生土器や古墳前期土器も含まれる。古墳中期前半が主か。遺物はシルト層より砂層に多い。調査区南東隅に下層試掘2区を設定。上・中層遺構ベース層である褐色粘質土を除去。約6割終了。

8月31日(水)

20989SD先行トレンチ掘り下げ継続。下層試掘2区、検出写真撮影。検出遺構は、ビット1、土坑1。22004SKは風倒木痕か。

9月1日(木)

20989SD先行トレンチ、深さ2m弱でひとまず掘り下げを止める。さらに下層まで砂層が続く。ほぼ完全の土師器・甎などの出土あり。縄文下層2区の検討。同区内に複数の風倒木痕あり(一見すると土坑)。新たに試掘3区を設定、掘り下げ準備。

9月2日(金)

縄文下層試掘3区、北側から掘り下げ開始。20989SD先行トレンチより東側を面的に掘り下げのための準備。日曜日頃に台風接近が予想されるため対策を行う。

9月5日(月)

下層試掘3区、掘り下げ。20989SD東部で部分掘り下げ。20989SD上の20417SXから滑石製勾玉出土。

9月6日(火)

20989SD最上層(1層)の面的掘り下げ。この後、砂層とシルト層の範囲を平面確認予定。砂層は遺物が多く、シルト層は少ない。なお、先行トレンチではシルト層下からも別の砂層が検出されており、そこからも遺物が多く出土している。縄文下層試掘3区、土坑2基検出。

9月7日(水)

20989SD掘り下げ。縄文下層試掘3区、北半2ヶ所の土坑は風倒木痕と判明。断面確認を行うため断削を行う。

9月8日(木)

20989SD上層掘り下げ。下層試掘4区、黄褐色土上面まで掘り下げ。約6割終了。

9月9日(金)

20989SD南半の面的掘り下げ、ほぼ終了。砂層・シルト層の広がり把握。下層試掘4区、検出写真撮影。ビット1基のほか、風倒木痕2。その他、調査区南壁・犬走り部分に土坑1基(22013SK)、縄文土器片1点出土。

9月12日(月)

2-1区、遺構掘り下げ開始。20154SKは深さ約15cmの浅く広い土坑。土師器出土。20202SKを囲う形でビット8基が存在。関連する遺構である可能性あり。20989SD東端部の掘り下げ。

9月13日(火)

強雨のため、調査無し。排水処理、現場保持のため少人数で保守作業。

9月14日(水)

20989SD東端部の掘り下げ。昼過ぎから降雨。昼で作業終了。少人数で機材搬入作業を行う。

9月15日(木)

20989SD上層、東側の掘り下げ。2-1区、SK・SPの掘り下げ。

9月16日(金)

20989SD東側の掘り下げ。台風接近中のため養生作業。

9月20日(火)

日中、台風16号が通過、強い雨が降り続く。通常作業は無し。台風対応のため少人数で保守作業。降雨量が非常に多いため排水が追い付かず、調査区内にかなりの水が溜まる事に。

9月21日(水)

10時頃まで台風通過後の排水作業。10時から20989SD東部の掘り下げ。検出面-1m前後にある灰色粗砂層は出土遺物が多い。古墳時代前～中期の土器(TK73頃の須恵器を含む)、弥生土器、桃核、砥石、紡錘車など。

9月23日(金)

20989SD、掘り下げ。初期須恵器の出土あり。

9月26日(月)

20989SD、掘り下げ。検出面-1.2～1.5m付近の砂層、続けて遺物の出土多し。須恵器TK73頃の環・高坏・筒型器台などが一定量ある。

9月27日(火)

20989SD東部の掘り下げ。2-1区SP群の掘り下げ。20202SKは簡易作業場のような遺構か。底面に厚さ3cm程度の貼床と思しき粘質土層あり。平面で検出できたのは遺構南西側のみだが、ほぼ全面に存在することが断面確認できる。貼床下にビット3基あり。出土遺物から古墳中期の遺構か。

9月28日(水)

雨天のため作業無し。保守作業のみ。

9月29日(木)

雨天のため作業無し。保守作業のみ。

9月30日(金)

20989SD、掘り下げ。検出面-1.5m付近、灰色粗砂から鳥形木製品が出土。胴体はほぼ残存。2-1区、SP群の調査。

10月3日(月)

雨天のため作業無し。保守点検のみ。

10月4日(火)

20989SD、掘り下げ。検出面-2m付近から下

の明灰白色砂層からは遺物が出土せず。現在掘削中の河道よりも古い時代の河道埋土の可能性あり。今後、検討を進める。2-1区、SP・SK・SXの調査。

10月5日(水)

20989SD中央部の掘り下げに向けてベルトコンベア組み替え。

10月6日(木)

20989SD中央部、検出上面からの掘り下げ開始。火焔透かしの須恵器・小型器台1点出土。20989SD東部にて底面の無遺物と思しき砂層を重機にて断削確認。さらに1.5m以上、無遺物砂層が続く(遺構面-3.5m以上)。湧水は非常に多い。縄文時代以前の古い自然河道か。同河道の肩部は20989SDとは異なる。2-1区東部、古墳時代SK・SP・SD群の調査。

10月7日(金)

20989SD中央部、上層の掘り下げ。2-1区東部、SK・SP・SD群の調査。

10月11日(火)

20989SD先行トレンチの清掃。

10月12日(水)

20989SD先行トレンチの北壁、断面の写真・図面記録作成。20989SDを大きくI～V層に分けて認識。これまでの層序認識に問題ないことも確認。

10月13日(木)

2-1区東端部、SD群掘り下げ。古墳時代中期の須恵器・土師器片を含む溝あり。20166SE・20169SEの調査。どちらも須恵器を含む。20166SE出土須恵器・高坏はTK73頃か。20989SD先行トレンチより北側の掘り下げ。東側に広がるIV層シルト層は遺物が少なく厚さ50～120cmがあるため、重機による掘り下げを始める。

10月14日(金)

20989SD北側、IV層の重機掘り下げ。北東部で比較的大きめの木材出土。20989SD中央部、掘り下げ。2-1区東端部、SD群の調査。

10月17日(月)

雨天のため、調査無し。排水処理作業のみ少人数で行う。

10月18日(火)

2-1区東端、SD群調査。20169SD北側底面に存在する杭列は深さ30cm以上打ち込まれている。

20989SD中央部掘り下げ、東側のシルト層は重機にて除去。

10月19日(水)

2-1・3区東部、遺構調査。20234SE、井戸枠が出土。出土遺物から古墳時代か。検出面-0.8mまで調査。それ以下の調査は大規模な断ち割りが必要となるため、後日行うこととする。20989SD中央部2層掘り下げ。同南岸に接する21034SXの掘り下げと記録。深さ1m強。川岸に掘られた作業場や洗い場のような遺構か? 淀みのような堆積。遺物は20989SDと同様の土器が少量あるのみ。

10月20日(木)

2-3区、SP・SD群の調査。SDはいずれもSP(古墳中期か)より古い遺構であるが、出土遺物が無く詳細時期不明。20989SD中央部、2~4層掘り下げ。4層中から木製刀装具(直弧文あり)と考えられる木製品が出土。

10月21日(金)

2-3区SD・SP群の調査。20989SD中央部、2~4層の掘り下げ。

10月24日(月)

2-5区、遺構調査。土坑3基、いずれも深さ30cm前後、遺物は土器の細片のみ。人為的に埋められた埋土で時期は中世と考えられる(上層遺構に属す)。2-1-3区、20989SD、3~5層の掘り下げ。5層は遺物が非常に多い。火焔透かしの器台片、砥石などあり。20989SD北西部には木材がままとまて存在。何らかの構造物が存在する可能性あり。

10月25日(火)

2-5区、土坑調査終了。20989SD中央~北部、掘り下げ。同北端部、遺構上面-0.6m付近に杭および板材列が出土。護岸施設か。

10月26日(水)

2-4区、土坑の調査。2-5区の土坑と同様の遺構だが、深さ約1.5mを測る。20989SD北側の調査。北西端の木杭列の精査・記録作業。4層中から絞った状態の布2点が出土。

10月27日(木)

2-2区、土坑・溝の調査。20989SD、2-1区の掘り下げ。北端部シルト層(4層上層)から、馬の肩甲骨(右)片が出土。また、同砂層からは馬の歯も出土。馬骨については東海大・丸山氏の現地確認による。

10月28日(金)

雨天のため、調査無し。保守作業のみ。

10月31日(月)

20989SD掘り下げ、北西隅の杭列1の記録作業。2-1区北半に木材が広がって出土する。倒壊したか(らみ道構か。2-4区南西部に下層(縄文河道か)調査のための断割区を設定、重機掘削を行う。下層トレンチ5区とする。

11月1日(火)

下層5区、重機断制作業。2-1区、20989SD掘り下げ。杭列1、記録作業。杭頭から約0.6mの深さで杭先端となる。4層掘り下げ、杭列の検出作業。しがらみが倒壊した状況か。

11月2日(水)

下層5区、重機断制作業。2-1区、20989SD掘り下げ。北側の杭列4・5の検出写真撮影。杭列5の上端に引っ掛かる形で木製椅子(腰掛)が出土。4層砂層から長さ約25cmの刃形木製品が出土。

11月4日(金)

下層5区、重機断制作業終了。20989SD、掘り下げ。北側の人力掘削と並行して南側シルト層の

重機掘削に着手。

11月7日(月)

20989SD、掘り下げ。南東岸付近を重機掘削。中央部3・4層を人力で掘り下げ。鉄滓・馬歯・編物などが出土。威安系と考えられる小型壺出土。

11月8日(火)

20989SD中央~南側の掘り下げ。10時頃から強い雨、作業終了。

11月9日(水)

20989SD、掘り下げ。中央部東寄りて底面と思しき砂層を一部検出。杭列7・8の検出写真撮影。杭列4~6と同様、制水のしがらみが倒壊した状況か。

11月10日(木)

20989SD、掘り下げ。北半の両岸沿いで河の底面を検出しつつある。ベース層が、より古い時代(遺物を含まない)の自然河道と思われる砂層であることが多く、20989SD埋土砂層との判別には注意を要する。

11月11日(金)

20989SD、掘り下げ。杭列6、写真撮影。作業用スロープとして残っていた東端部の2・3層、掘り下げ。樺考研・菅谷所長現地確認。現在までの成果や今後の方針について確認・検討。

11月14日(月)

20989SD東側、掘り下げ。南東部は底面高がやや高い。10~12時頃、降雨のため作業中断。

11月15日(火)

20989SD、掘り下げ。杭列3の断割断面記録。杭列3は4層シルト層をベースとする。20989SD東端の調査区壁面沿いを断割、断面確認。

11月16日(水)

20989SD、掘り下げ。杭列4の上部(しがらみに引っ掛かる形)から動物骨(脚か)出土。

11月17日(木)

20989SD、掘り下げ。南西部4層から大型動物の大腿骨2点出土。河道東端断面の記録作業。河道南側で底面および下層の状況確認のため、断割作業。下層の灰白砂(20989SDのベース層)から縄文土器片がごく少量出土。縄文時代河道と考えられる。

11月18日(金)

20989SD、掘り下げ。河道底面付近、5層中から馬歯が出土する。11時から樺原考古学研究所現地検討会、来訪約15名。

11月21日(月)

20989SD中央~南側、掘り下げ。南端付近は他より深く掘り下がる地点がある。一時の河道が南を大回りする形で流れていたことが窺える。

11月22日(火)

20989SD、掘り下げ。馬歯を中心とする動物骨は、5層中からも一定量出土しており、初期須恵器段階に相当する時期に属すと考えられる。

11月24日(木)
20989SD、掘り下げ。河道南端の屈曲点付近は、流れの攻撃面であり、やや深くなる。

11月25日(金)
20989SD、掘り下げ。河道底面が近付くにつれて全体からの湧水量が増える。遺構保護のため、河道内に深めの排水溝を設ける。

11月28日(月)
現場用電気ケーブルの盗難被害が発覚。盗難日時は26～27日のうちか。奈良県警に連絡、午前、現場検証。電柱からの本線部分も被害にあっており、現場関連の全ての電気がストップ。27日(日)の雨のため、河道下半部などが水没。発電機でポンプを動かす、排水作業を行う。調査記録や出土遺物には盗難被害無し。

11月29日(火)
現場用電気の再設置作業。20989SD北側、杭列4～6付近の掘り下げ。盗難被害による水没で杭列や河道壁～底面に若干のくずれあり。20989SDより南側に位置するSDの検出作業。

11月30日(水)
河道より南側の遺構調査。2-2区、河道南西岸側のオーバーフロー層のすき取り。20893SDは、これより古い遺構だが遺物がなく時期不明。20419SD北半、掘り下げ。深さ約60cm、土師器の小片が出土。古墳時代前期～中期の溝か。

12月1日(木)
20914SD、完掘。2-2区、20989SD西側のオーバーフロー部分、掘り下げ。

12月2日(金)
20989SD西側の調査。20985SDからは古墳時代中期後半の須恵器が出土。

12月5日(月)
20989SD、掘り下げ。調査区壁面の断面記録作業。

12月6日(火)
20989SD、掘り下げ。調査区壁面記録作業。下層5区、北西壁面記録作業。下層5区全体が縄文時代の河道埋土か。縄文土器片出土、1点のみ。

12月7日(水)
20989SD、掘り下げ。調査区壁面記録作業。

12月8日(木)
20989SD、掘り下げ。調査区壁面記録作業。

12月9日(金)
20989SDしがらみ周辺、掘り下げ。調査区壁面記録作業。

12月12日(月)
調査区壁面記録作業。

12月13日(火)
雨天のため、現場作業無し。現場保守作業のみ実施。

12月14日(水)
20989SD北半、杭列一帯の写真撮影に向けての

清掃作業。昼すぎ、少雨あり。写真に大きな影響無しと判断し作業継続。

12月15日(木)
20989SD北半、杭列4～9の写真撮影。

12月16日(金)
ベルコン移動等、調査区周辺整理作業。午前、榎原考古学研究所にて研究所・榎原市合同での新堂遺跡発掘成果検討会を実施。石坂からの成果報告、遺物実見等。

12月19日(月)
20989SD、杭列を北西から順に記録・解体作業を開始。しがらみ構成材は、杭や板材などを中心に持ち帰り、自然木等一部はサンプル採集を行う。調査区南東隅(下層2区)、人力での断削作業。

12月20日(火)
20989SDしがらみ解体。杵と思しき木製品1点出土。下層2区、断削、記録作業。全体が縄文時代以前の河川堆積層か。出土遺物無し。

12月21日(水)
20989SDしがらみ解体・記録作業。杭列5内からナスビ鎌出土。20989SD出土の有機質遺物について、榎考研・奥山氏、榎原市・田原係長による現地確認、仮保存処理実施。翌22日は雨天が予想されるため、本日で年内作業を終了とする。年末・年始の現場養生作業。

平成29(2017)年1月4日(水)
年末・年始の休業期間中、問題無し。空撮に向けての周辺整備・清掃を開始。

1月5日(木)
空撮に向けての清掃作業。並行してしがらみ記録・解体作業。

1月6日(金)
空撮に向けての清掃作業。しがらみ記録・解体作業。

1月10日(火)
空撮に向けての清掃作業。しがらみ記録・解体作業。

1月11日(水)
空撮に向けての清掃作業。しがらみ記録・解体作業。

1月12日(木)
空撮に向けての清掃。やぐら・高所作業車による全景写真撮影。杭列および一部遺構の調査を残した状態での完掘写真撮影。

1月13日(金)
ヘリコプターによる空中写真撮影・測量。12～13時に撮影。無事に終了。

1月16日(月)
しがらみ記録・解体作業。南側から重機による埋め戻し開始。

1月17日(火)
しがらみ記録・解体作業。10～12時、報道関係の前撮り・現場撮影。本発表は2/15予定。重機理

め戻し。

1月18日(水)

しがらみ記録・解体作業。杭列内から槽やナスビ燻(炭化)が出土。重機埋め戻し。

1月19日(木)

しがらみ記録・解体作業。重機埋め戻し。

1月20日(金)

しがらみ記録・解体作業。杭列4・5終了。続けて杭列8・9に移る。重機埋め戻し。

1月23日(月)

しがらみ記録・解体作業。20234SE 南半、断削作業。井戸下半には井戸枠が残る。枠は組合せ式の板材。古墳時代中期の土器が出土。重機埋め戻し。

1月24日(火)

しがらみ記録・解体。20234SE 井戸枠検出。重機埋め戻し。

1月25日(水)

20234SE 井戸枠検出作業。枠内底面付近で土師器裏の下半部が出土。しがらみ解体・記録作業。重機埋め戻し。

1月26日(木)

しがらみ記録・解体作業。20234SE 井戸枠記録・解体作業。井戸枠は基本的に持ち帰り保管。重機埋め戻し。

1月27日(金)

しがらみ記録・解体作業。20234SE 完掘。重機埋め戻し。

1月30日(月)

雨天のため、現場作業無し。保守作業のみ。

1月31日(火)

しがらみ記録・解体作業。重機埋め戻し。

2月1日(水)

しがらみ記録・解体作業。重機埋め戻し。午後1～3時、降雨のため作業中断。

2月2日(木)

しがらみ記録・解体作業。重機埋め戻し。

2月3日(金)

しがらみ記録・解体作業。重機埋め戻し。

2月6日(月)

20989SD、杭列6・7下に堆積している粘質砂層にも土器が含まれており、掘り下げを進める。初期須恵器を含む。土器がまとめて出土する地点あり。2時すぎから降雨、作業終了。

2月7日(火)

20989SD 杭列6・7より下の砂層掘り下げ。奥山氏・田原係長により20989SD出土有機質遺物の保存処理・取り上げ作業。

2月8日(水)

20989SD、最下層掘り下げ。しがらみ構成材について、サンプルもしくは全体持ち帰りの選別作業。サンプリング木材については現場にて簡易の実測・写真撮影を行う。重機埋め戻し。

2月9日(木)

降雪のため、現場作業無し。保守作業のみ。

2月13日(月)

20989SD、最下層掘り下げ。底面から大型の土師器壺・甕が複数出土。記録作業。しがらみ構成材の記録・選別作業。重機埋め戻し。

2月14日(火)

20989SD、最下層遺物記録。20989SD、完掘。しがらみ構成材、記録作業。断続的に雨が降り、都度作業中断。

2月15日(水)

しがらみ構成材、記録作業。重機埋め戻し。歴史に想う橿原市博物館にて10時から、榎考研・橿原市合同での報道発表。新聞・テレビ十数社。

2月16日(木)

しがらみ構成材、記録作業。重機埋め戻し。

2月17日(金)

しがらみ構成材、記録作業。重機埋め戻し。

2月20日(月)

しがらみ構成材、記録作業。重機埋め戻し。朝から非常に強い風が続く。天候悪化のため、昼で作業終了。

2月21日(火)

しがらみ構成材、記録作業。重機埋め戻し。

2月22日(水)

しがらみ構成材、記録作業。重機埋め戻し。

2月23日(木)

天候不良のため、現場作業無し。保守作業のみ。

2月24日(金)

しがらみ構成材、記録作業終了。重機埋め戻し。

2月27日(月)

しがらみ構成材の運搬。残る作業は埋め戻しのみとなる。以降、3月中旬にかけて重機埋め戻し。現場作業終了となる。事業主側現場引き渡し、調査終了。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

橿原市は奈良盆地の南部に位置し、北は磯城郡田原本町・北葛城郡広陵町、東は桜井市、南は高市郡明日香村・同高取町、南西は御所市、西は大和高田市に接している。新堂遺跡の所在する橿原市新堂町は、橿原市域の西辺沿い中央付近に位置する。今回の調査地付近では1区から西に約50mの地点を北流する住吉川が橿原市と大和高田市の境界線となっている。

橿原市の南～南東部には龍門山地から派生する丘陵地が広がっており、北に向かって緩やかに下降する斜面地形を経て、北に肥沃な沖積地が広がっている。調査地はその沖積地に位置している。調査地から南東に約2kmの地点には名勝大和三山のひとつ、畝傍山が所在する。

調査地周辺の標高は、盆地の中部に向かって、おおむね南から北に向かってなだらかに低くなる。調査地周辺における現在の水田面の上面標高は約61～62mである。調査地から西に約500mの距離には葛城川が、東に約1km強の距離には曾我川が、いずれも北流している。先述した住吉川は葛城川の一支流である。曾我川は龍門山地西部に、葛城川は金剛山地に源流をもつ。調査地一帯は現在、奈良盆地の主要河川に数えられるこの両河川の中間に広がる微高地状の水田となっている。しかし、これら大小の河川の位置は時代と共に大きく変化していることが調査地近辺の地割の乱れに見られる旧河道の痕跡や発掘調査によって明らかとなっている。また、新堂町の北に隣接する曲川町という町名も、そのような地理的・歴史的背景に由来するものと知られている。次節で述べる各時代で確認されている遺構群も河道との関係性の中で築かれているものが多く見られる。

調査地は中世から存続していると考えられる新堂集落(新堂環濠)の周囲に広がる耕作地帯である。

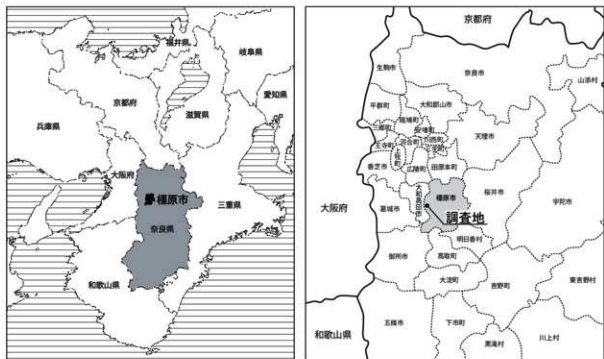


図1 調査地位置図

この一帯は近年、京奈和自動車道や大型の商業施設・工場の建設などの造成・開発工事が急速に進められており、かつての景観は今まさに大きく変化しつつある。

第2節 歴史的環境

橿原市の西部から南西部にかけての一帯はかつて、遺跡の存在があまり確認されていない地域であった。近年、京奈和自動車道建設に伴う一連の発掘調査により、路線沿いに新たな遺跡が多数発見されており、さらに周辺への遺跡の広がりが想定される調査成果も挙げられている。得られた成果は主に縄文時代以降の各時代にわたり、奈良盆地南西の低地部における遺跡の様相が大幅に更新された。調査地周辺は近年の開発行為によって遺跡地図が次々と書き換えられつつある地域と言える。

新堂遺跡の周囲に目を向けると、北に曲川遺跡、南に東坊城遺跡が所在する(図2)。これらの遺跡は、曾我川と葛城川に挟まれた平地に立地し、南北約2.0km・東西約0.8kmの範囲で南北に長く連なる。特に今回の調査地は新堂遺跡と曲川遺跡の接する地点に位置し、両者の関係性も注目される。以下に、これらの遺跡の調査成果を軸に調査地近辺における各時代の様相に触れる。

調査地周辺において遺構・遺物の存在が明確になり始めるのは、縄文時代後期以降のことである。曲川遺跡では晩期中葉から末葉にかけての土器棺墓が約80基検出されている。これは西日本有数の規模である。他、貯蔵穴や住居跡などの遺構も確認されている。新堂遺跡では遺構の数こそ限られるものの土器棺墓や貯蔵穴、流路に伴う水場遺構などがあり、後期から晩期にかけての遺物も出土している。一方、東坊城遺跡では縄文時代後期後半から晩期の遺物が出土する河川や晩期の土坑の存在が確認されている。遺物については後期前半に遡る土器も含まれる。京奈和自動車道沿線でさらに南に目を向けると、川西根成柿遺跡や観音寺本馬遺跡では後期以降の遺構が確認されている。観音寺本馬遺跡では人工的に管理されたと想定される晩期のクリ林も検出されている。また、この周辺の遺跡からは前期および中期の遺物も出土している。

弥生時代には曾我川流域や葛城川流域において多くの遺跡の存在が知られている。京奈和自動車道沿線でも前期の大規模水田や環濠集落、中期の方形周溝墓群などが確認されている。その中においては、新堂遺跡の一帯は比較的弥生時代の遺構・遺物が疎な地域であると言える。ただし竪穴建物や土坑などの弥生時代の遺構は少量ながら存在するため、完全な空白であるというわけではない。また、曲川遺跡の北部や土橋遺跡においては中期や終末期の周溝墓群も確認されている。

弥生時代末頃から古墳時代初頭になると、新堂遺跡および曲川遺跡の周辺では遺構・遺物といった活動痕跡が増加し始める。新堂遺跡では、この時期の水田や竪穴建物、土坑、溝などが確認されており、遺構からの出土遺物量も多くなる。河川及びそれに繋がる溝(水路)に設置された井堰も存在し、積極的な土地開発に乗り出していることが窺える。遺構は古墳時代前期を通じて見られる。

曲川遺跡では前期後半から中期後半にかけての時期に曲川古墳群が形成される(2001年度、橿原市教育委員会調査。イオンモール橿原本体工事に伴う調査)。曲川古墳群は墳丘が削平されたいわゆる埋没古墳で、一辺10～18mの方墳が合計18基検出されている。造墓活動の盛期は中期前半～中頃にあると考えられる。曲川古墳群は今回の調査地・2区から北東約500mの位置と非常に近接しており、かつ出土遺構・遺物の時期も重なることから、両者には密接な関係が想定される。



図2 調査地周辺遺跡地図 (S = 1/12,500。遺跡範囲は2019年度当初の内容)



図3 調査地周辺の地形と発掘調査地点 (S = 1/2,500)

古墳時代中期は、この地域における活動が非常に活発になる時期である。東坊城遺跡では1991年度に実施した店舗建設に伴う発掘調査において中期の大溝から土師器、初期須恵器、韓式系土器に加え、鉄滓・鞆の羽口・砥石といった生産関連遺物や鋳造鉄斧が出土し、この地域が注目される嚆矢となった。その後の開発に伴う一連の調査によって新堂遺跡と曲川遺跡からも陶質土器・韓式系土器を含む多量の土器や金属器生産関連遺物、祭祀具などが多数出土し、渡来系遺物を多く含む中期（一部は数を減じながら後期まで続く）の集落遺跡が、この一帯に展開していることが明らかとなっている。中期の遺構は土坑や河川が主であり、居住域を示すような明確な建物跡の存在は確認されていない。その一方で遺構からの遺物出土量は非常に多く、近隣に集落の居住域が存在する可能性は高いと考えられる。橿原市中央部の四条遺跡周辺や、飛鳥地域の遺跡などととも、古墳時代の奈良盆地南部の集落における外来要素の受容過程を知ることで重要な地域と言える。近年の新堂遺跡の調査成果を見ると、遺跡南東部での調査において（橿教委2002-2次調査『新堂遺跡』、橿教委2005-4次調査『新堂遺跡Ⅱ』にて報告済）古墳時代の河道および河岸沿いの土坑などから中期後半～後期前半を中心とする多量の遺物が出土している。

曾我川の下流域に目を向けると古墳時代中期後半から後期前半にかけての大規模な玉作り遺跡である曾我遺跡の存在が注目される。曾我川の上流、調査地から南南東に約2kmの距離に位置する新沢千塚古墳群も、この時期に造墓活動の最盛期を迎える。より広域な視点に立っても遺跡の形成が非常に活発な時期と言える。

古墳時代後期後半頃から古代にかけての時期には、新堂遺跡周辺では遺構の存在が希薄になる。その後、再び遺構が多く確認されるようになるのは平安時代末、12世紀頃である。

新堂遺跡および曲川遺跡では京奈和自動車道建設による複数の発掘調査で12～13世紀にかけての遺構の存在が確認されている。遺構から出土する遺物の量も多い時期である。新堂遺跡では南東部に遺構・遺物が多く、区画溝を伴う屋敷地や井戸、土坑といった遺構の存在や耕作地としての利用状況が明らかにされている。出土遺物としては多量の瓦器や土師器の他、輸入磁器の存在などが知られている。新堂遺跡の南端では13世紀頃に埋没したと考えられる河道（橿教委2006-2次調査『新堂遺跡Ⅲ』）の存在が確認されている。検出地点周辺での川幅は最大で約60mに及び、屋敷地や耕作地としての利用も、この河道との関係の中での変遷が窺える。この河道跡は発掘調査で確認されているほか、条里地割の乱れ、また堤防状の高台として現地形でも広範囲で確認することができる。また、新堂遺跡北東部においても河道沿いで12世紀代と考えられる建物群や井戸、土坑などの遺構の存在が確認されている。中には井戸出土の鬼面墨書土器といった特徴的な遺物も見られる（橿教委2010-3次調査）。

このような平安時代末から鎌倉時代前半にかけての遺構は曲川遺跡と東坊城遺跡にも散見されるものの、量は新堂遺跡が最も多い。これ以降の時期は、曲川遺跡において室町時代の建物跡がわずかに検出されている程度で、他は耕作地としての利用が主となっていったようである。

『大和国条里復原図』によると1区は葛下郡二十六条一里・字上八ノ坪にあたる。同じく2区は葛下郡路西二十六条一里・字上野および葛下郡路西二十六条二里・字五反田に跨る位置にあたり、その境界が調査区中央付近を南北に縦断する。

第三章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査区の位置と形状

調査地は調査開始時点まで長らく水田として利用されてきた土地である。1区は東西方向に長い水田4枚分、2区は南北方向に長い水田5枚分にまたがる形である。

調査区の位置は1区が計画建物の西部、2区が計画建物の中央～北東部にあたる地点に設定しており、両調査区の形状はその建物基礎配置に合した形である。2区は1区の北東側に位置し、両調査区の間には約50mの距離がある。

調査の手順

調査地一帯の現況水田地は全体に非常に水はけが悪いため、作業環境を整えるために調査前に調査区の周囲も含む形で重機によって耕土表面を厚さ10cm程度すき取っている。調査写真に映るフェンスで囲った区域がその範囲にあたる。ただし調査区の四国外縁については带状に現況表土面をそのまま残し、調査区壁面土層断面に反映させる形を探っている。

上層遺構面直上まで重機（バックホウ）による掘削を行い、以降の掘削・記録作業は基本的に人力で行っている。2区については河道埋土の掘削の一部で重機を使用している。詳細は第6節で述べる。これら調査で除去した排土については両調査区の南側を、その置場として利用している。いずれも同一の事業地内である。

調査区内には近現代の農業用暗渠をはじめとする遺構面に達する攪乱が部分的ながら存在しており、判別できる範囲において当初の重機掘削と並行して除去を行っている。調査地は現況水田面と同様、遺構面付近においても湧水量が多く、遺構面保護のため調査区壁面沿いおよび調査区を東西・南北に区切る位置に人力で排水溝を掘削している。1区は特に湧水量が多く、調査の過程で排水溝の追加掘削も行っている。

遺構名

それぞれの遺構名は遺構番号（5桁からなる数字）＋遺構記号（その種別を示す通有の2字のアルファベット）の形で記録・報告している。1区の遺構は頭に1、2区の遺構は2を付けており、それぞれ10001・20001から順に番号を付与している。遺構番号は遺構種を問わず共通しており、今回の調査において番号の重複は無い形を探っている。調査作業の都合上、遺構番号は主として各遺構を認識した順に付与しており、遺構の時期との明確な対応関係は一部を除いて無い。ただし2区の下層遺構については明確に検出面が他と異なっており判別が可能のため、22001以降の番号を分けて付与している。2区の上・中層遺構の番号については21100までに収まっている。

遺構名は基本的に調査時のものをそのまま使用して報告を行っているが、遺構に対する認識の変更や番号の重複などの理由で本報告段階で一部、変更や追加を行った遺構が存在する。それらの遺構については、各遺構の項でその旨を明記している。

写真撮影

調査写真の撮影は各遺構面の検出・完掘状況の他、調査区及び遺構の土層断面や遺物の出土状況など、調査の過程で記録が必要な段階で行っている。

近年の写真に掛かる情勢の変化を受け、橿原市教育委員会でも発掘調査現場で撮影する写真について従来のフィルムを使用する方式から、デジタルカメラを使用する方式に転換を行う運びとなった。その切り替え時期がちょうどこの調査期間中にあたっており、2区の調査途中でデジタル撮影・記録保存に切り替わっている。具体的には2区上層遺構の掘削段階以降の作業についてである。

撮影の際に使用したフィルムは、主に4×5インチサイズの白黒フィルムとカラーポジフィルムである。また、バックアップ用に35mmサイズの同フィルムを使用している。デジタルカメラはNikon D810とPENTAX 645Zを併用している。

航空写真撮影および同測量は株式会社アコードが実施している。

続いて第2～4節で1区、第5～9節で2区の調査成果についてまとめる。各調査区・遺構・遺物についての取り扱い方針や具体的な調査方法はそれぞれの項目で触れる。

第2節 1区 基本層序と遺構面

1区の基本層序は以下のとおりである。層序の大枠は調査区全体で概ね共通するが、調査区南東部については古墳時代以前の河道(10154NR)の存在によってV層以下が消失してV層埋土が厚く堆積している。各層の上面は概して平坦だが、上面高は周辺の地形と同様に南から北、および東から西に向かって低くなる傾向にある。

Ⅱ・Ⅲ層は中世以降の耕作層として一括しているが、その土層中には周辺河川の氾濫に起因するものと推測される微砂層が多く含まれている。また、素掘り耕作溝の埋土を含む耕作土中にも微砂～砂が一定量含まれる。中世から近世にかけての時期には河川の氾濫を受けた後に再耕地化を行うということが幾度も繰り返していたと考えられる状況である。Ⅳ層はその最も古い段階の痕跡であると考えられる。これらの氾濫痕跡は空間的には調査区全体に散乱する形で残っている。

1区 基本層序 (図4～12)

- Ⅰ層：水田耕作土（現代。上面高は標高約61.8～62.1m）
- Ⅱ層：灰オリーブ色粘質土・にぶい黄褐色砂質土（近世以降の耕作層。Ⅱ層中および底面に氾濫層と考えられる微砂～細砂層を含む。上面高は約61.2～61.9m。厚さ約0.2～0.5m）
- Ⅲ層：灰～灰褐色粘質土・にぶい黄灰色砂質土～細砂（中世の耕作層。Ⅱ層同様の微砂を含む。上面高は約61.2～61.6m。厚さ約0.2～0.5m）
- Ⅳ層：黄灰色細砂・灰白色砂（上面が遺構面。古墳時代～中世の氾濫層。分布には粗密があり、存在しない地点もある。上面高は約60.7～61.1m。厚さ最大約0.2m）
- Ⅴ層：黒褐色粘質土・褐色砂質土（上面が遺構面。縄文時代後期中葉～弥生時代後期後半の遺物包含層。上面高は約60.6～61.0m。厚さ最大約0.15m）
- Ⅵ層：灰黄褐色粘質土・灰褐色粘土・暗オリーブ褐色砂（地山。遺物を含まない。上面の標高約60.5～60.9m）

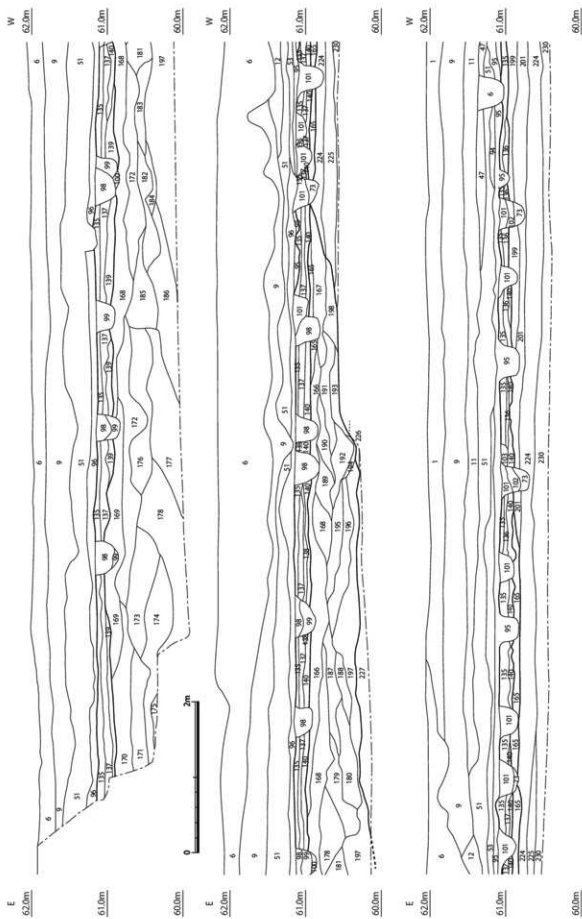
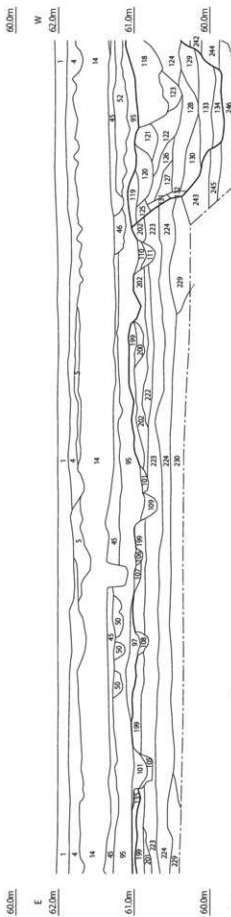
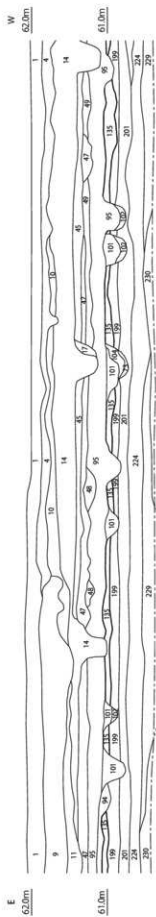


图4 1区调查区壁面土層断面图① (S = 1/50)



1. 2.5V4/3 オリブ褐色砂質土 (腐葉をわずかに含む)
 2. 2.5V4/2 赤サリオリブ色粘質土 (腐葉をわずかに含む)
 3. 5V4/2 赤サリオリブ色粘質土 (腐土)
 4. 5V4/2 赤サリオリブ色粘質土 (腐土)
 5. 10YR6/4 赤褐色粘土
 6. 10YR7/2 赤褐色粘土
 7. 10YR8/3 赤褐色粘土
 8. 10YR8/3 赤褐色粘土
 9. 10YR8/4 赤褐色粘土
 10. 10YR8/4 赤褐色粘土
 11. 10YR8/3 赤褐色粘土
 12. 10YR8/3 赤褐色粘土
 13. 10YR8/3 赤褐色粘土
 14. 2.5Y5/3 赤褐色粘質砂土 (腐葉を少量含む)
 15. 2.5Y4/2 赤褐色粘質砂土 (腐葉を少量含む)
 16. 2.5Y4/2 赤褐色粘質砂土 (腐葉を少量含む)
 17. 10YR6/4 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 18. 2.5Y7/3 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 19. 10YR5/3 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 20. 10YR5/4 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 21. 10YR4/4 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 22. 10YR5/2 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 23. 10YR5/2 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 24. 10YR5/4 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 25. 10YR6/3 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 26. 10YR6/3 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 27. 10YR5/3 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 28. 10YR4/3 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 29. 10YR4/2 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 30. 10YR5/3 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 31. 10YR5/3 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 32. 2.5Y4/4 オリブ褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 33. 2.5Y4/2 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 34. 10YR4/2 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)
 35. 10YR5/3 赤褐色粘土 (腐葉を多く含む)



図5 1区調査区壁面土層断面図② (S = 1/50)

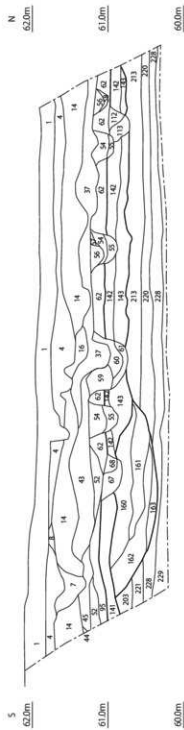


図6 1区調査区崖面 土層断面図③ (S = 1/50)



- I層 : 1 ~ 6 層
- II層 : 7 ~ 36 層
- III層 : 37 ~ 117 層
- IV層 : 135 ~ 148・151 ~ 154・164 層
- V層 : 199 ~ 205 層
- VI層 : 206 ~ 246 層
- 102.285E : 118 ~ 134 層
- 101.473X : 149・150 層
- 101.463D : 155 ~ 163 層
- 101.54NR : 165 ~ 198 層

- 71. 5Y3/2 赤リーア層色細砂混じり土
- 72. 5Y3/2 赤リーア層色粘土をまじらした土
- 73. 10Y5/1 赤褐色粘質土
- 74. 2.5Y4/2 赤褐色粘質土
- 75. 2.5Y4/1 赤褐色粘質土
- 76. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 77. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 78. 2.5Y3/2 赤褐色粘質土
- 79. 10Y5/2 赤褐色粘質土
- 80. 2.5Y4/2 赤褐色粘質土
- 81. 2.5Y4/2 赤褐色粘質土 (細砂をわずかに含む)
- 82. 10Y5/3 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 83. 10Y5/6 赤褐色粘質土 (細砂をわずかに含む)
- 84. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 85. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 86. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂をわずかに含む)
- 87. 10Y5/3 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 88. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 89. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 90. 10Y5/3 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 91. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 92. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 93. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 94. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (少量の細砂を含む)
- 95. 2.5Y4/2 赤褐色粘質土 (少量の細砂を含む)
- 96. 10Y5/3 赤褐色粘質土 (少量の細砂を含む)
- 97. 10Y5/3 赤褐色粘質土
- 98. 2.5Y4/3 赤褐色粘質土
- 99. 2.5Y5/2 赤褐色粘質土
- 100. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (少量の細砂を含む)
- 101. 2.5Y4/1 赤褐色粘質土 (少量の細砂を含む)
- 102. 2.5Y4/2 赤褐色粘質土 (少量の細砂を含む)
- 103. 10Y5/3 赤褐色粘質土 (少量の細砂を含む)
- 104. 10Y5/2 赤褐色粘質土
- 105. 10Y5/1 赤褐色粘質土

- 2.5Y4/3 赤リーア層粘質土 (細砂をわずかに含む)
- 3. 2.5Y4/3 赤リーア層粘質土 (細砂をわずかに含む)
- 38. 2.5Y4/3 赤リーア層粘質土 (細砂をわずかに含む)
- 39. 10Y5/3 赤リーア層粘質土 (細砂をわずかに含む)
- 40. 10Y5/6 赤褐色粘質土 (細砂をわずかに含む)
- 41. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 42. 10Y5/6 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 43. 2.5Y4/2 赤褐色粘質土
- 44. 10Y5/4 赤褐色粘質土
- 45. 2.5Y4/1 赤褐色粘質土
- 46. 2.5Y4/2 赤褐色粘質土
- 47. 10Y5/2 赤褐色粘質土
- 48. 10Y5/2 赤褐色粘質土
- 49. 10Y5/2 赤褐色粘質土
- 50. 10Y5/8 赤褐色粘質土
- 51. 10Y5/2 赤褐色粘質土
- 52. 10Y4/1 赤褐色粘質土
- 53. 10Y5/2 赤褐色粘質土
- 54. 10Y5/1 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 55. 10Y5/1 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 56. 2.5Y4/4 赤リーア層粘質土
- 57. 2.5Y4/4 赤リーア層粘質土
- 58. 2.5Y4/4 赤リーア層粘質土 (細砂を含む)
- 59. 10Y5/1 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 60. 10Y5/1 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 61. 10Y5/1 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 62. 2.5Y4/2 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 63. 10Y5/3 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 64. 2.5Y4/1 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 65. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 66. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 67. 10Y5/1 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 68. 10Y4/1 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)
- 69. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を含む)
- 70. 10Y5/2 赤褐色粘質土 (細砂を少量含む)

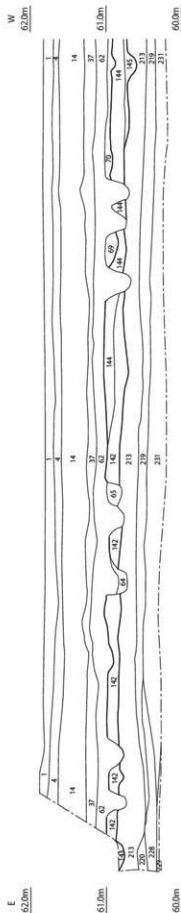
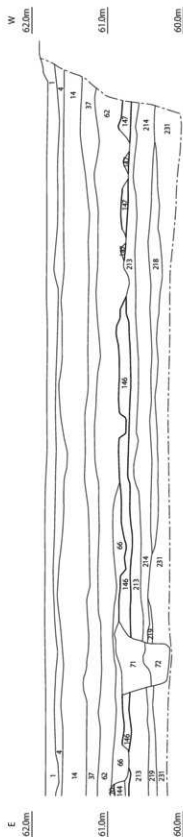


図7 1区調査区壁面土層断面図④ (S = 1/50)



- | | | | | | |
|--------------|--------------------|---------------|----------------------|--------------|--------------------|
| 106. 10785/6 | 黄褐色砂質土 (少量の繊維を含む) | 121. 2.53/2 | 赤リウ輝色粘質土 (細砂を含む) | 136. 10784/3 | 粘土質褐色粘質土 |
| 108. 10785/2 | 灰褐色粘質土 | 123. 1073/1 | 赤リウ輝色粘土 (細砂を含む) | 138. 10784/2 | 灰褐色粘質土 (細砂をわずかに含む) |
| 109. 10782/1 | 灰褐色土 | 124. 2.5072/1 | 赤リウ輝色粘土 (細砂を含む) | 139. 10783/4 | 黄褐色粘質土 |
| 110. 574/1 | 灰褐色土 | 125. 573/1 | 赤リウ輝色粘土 (細砂を少量含む) | 140. 10783/3 | 黄褐色粘質土 |
| 111. 2.53/2 | 黄褐色粘質土 (少量の繊維を含む) | 127. 7.5072/1 | 黄褐色粘土 (細砂を含む) | 142. 10783/2 | 黄褐色砂 (繊維土層をわずかに含む) |
| 113. 2.53/3 | 黄褐色粘質土 (細砂を含む) | 128. 7.5073/1 | 黄褐色粘土 (細砂を含む) | 143. 2.53/2 | 黒褐色粘質土 (骨をわずかに含む) |
| 114. 2.53/3 | 黄褐色粘質土 (細砂を含む) | 129. 2.5073/1 | 赤リウ輝色シルト質土 (細砂を少量含む) | 144. 10784/2 | 灰褐色粘質土 (骨をわずかに含む) |
| 115. 10784/3 | 黄褐色粘質土 (繊維をわずかに含む) | 130. 2.5073/1 | 赤リウ輝色粘土 (細砂を少量含む) | 145. 10783/2 | 黄褐色粘質土 (細砂をシルト |
| 116. 10784/4 | 黄褐色粘質土 (繊維をわずかに含む) | 131. 2.5073/1 | 赤リウ輝色粘土 (細砂を少量含む) | 146. 10783/2 | 黄褐色粘質土 (細砂をシルト |
| 117. 2.53/2 | 黄褐色粘質土 (細砂を少量含む) | 132. 5672/1 | 赤リウ輝色粘土 (少量の繊維を含む) | 147. 2.53/2 | 黒褐色粘質土 (細砂を含む) |
| 118. 10785/2 | 黄褐色粘質土 (細砂を少量含む) | 133. 7.5073/1 | 黄褐色シルト質土 | 148. 2.53/2 | 黒褐色粘質土 (細砂を含む) |
| 119. 573/1 | 赤リウ輝色粘質土 (細砂を含む) | 134. 10784/2 | 黄褐色粘質土 | 149. 10784/2 | 黄褐色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 120. 573/1 | 赤リウ輝色粘質土 (細砂を含む) | 135. 10784/2 | 灰褐色粘質土 | 150. 10784/2 | 灰褐色粘質土 (砂を多く含む) |

1層 : 1 ~ 6層、II層 : 7 ~ 36層、III層 : 37 ~ 117層、IV層 : 135 ~ 148・151 ~ 154・164層、V層 : 159 ~ 205層、VI層 : 206 ~ 246層
 10228E : 118 ~ 134層、10147SX : 149・150層、10146SD : 155 ~ 163層、10154NR : 165 ~ 198層



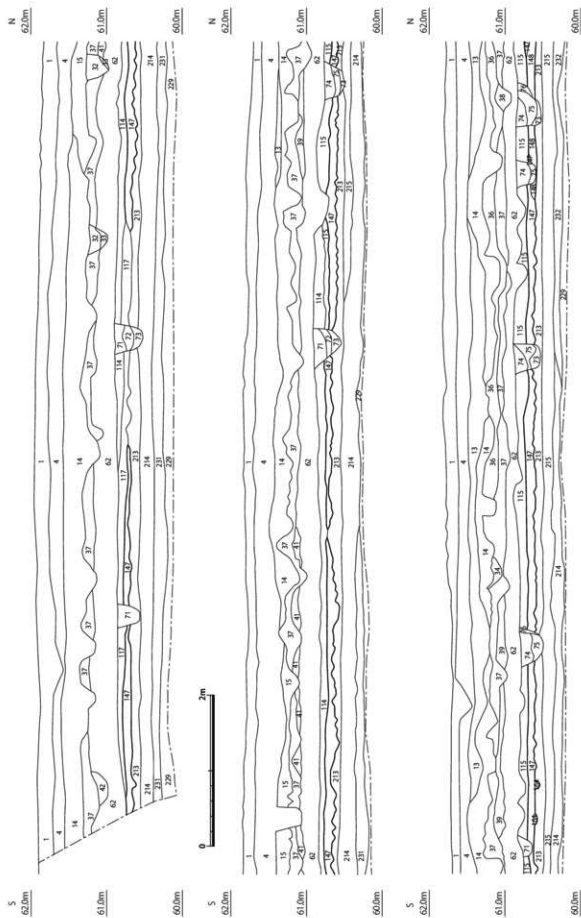


图 8 1区调查区壁面土層断面图⑤ (S = 1/50)



図9 1区調査区壁面土層断面図⑥ (S = 1/50)

I層: 1~6層、II層: 7~36層、III層: 37~117層、IV層: 135~148・151~154・164層
 V層: 199~205層、VI層: 206~246層
 102285E: 119~134層、101475X: 149・150層、101465D: 155~163層、101548R: 165~190層

- 151. 101984/3 粘土・褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 152. 101984/4 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 153. 101984/5 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 154. 101984/1 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 155. 2.513/3 粘土・シルト質土 (組砂を多量に含む)
- 156. 2.513/3 粘土・シルト質土 (組砂を多量に含む)
- 157. 2.513/3 粘土・シルト質土 (組砂を多量に含む)
- 158. 101983/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 159. 101983/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 160. 513/1 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 161. 513/2 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 162. 513/2 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 163. 513/1 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 164. 101983/3 粘土・褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 165. 101984/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 166. 101984/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 167. 101983/4 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 168. 101983/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 169. 101983/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 170. 2.514/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 171. 2.513/3 粘土・シルト質土 (組砂を多量に含む)
- 172. 2.513/3 粘土・シルト質土 (組砂を多量に含む)
- 173. 2.513/3 粘土・シルト質土 (組砂を多量に含む)
- 174. 2.515/3 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 175. 2.515/4 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 176. 2.517/1 粘土質土 (組砂を多量に含む)
- 177. 2.517/1 粘土質土 (組砂を多量に含む)
- 178. 101984/1 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 179. 101984/1 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 180. 2.515/1 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)

- 181. 2.517/1 灰白色砂 (組砂を含む)
- 182. 101980/1 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 183. 2.517/1 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 184. 2.514/3 粘土・シルト質土 (組砂を含む)
- 185. 7.515/1 灰白色砂 (組砂を含む)
- 186. 2.518/1 灰白色砂 (組砂を含む)
- 187. 2.518/1 灰白色砂 (組砂を含む)
- 188. 2.514/1 粘土・シルト質土 (組砂を含む)
- 189. 2.513/3 粘土・シルト質土 (組砂を含む)
- 190. 2.514/4 オリーブ褐色砂質土 (組砂を含む)
- 191. 2.513/3 粘土・シルト質土 (組砂を含む)
- 192. 2.513/3 粘土・シルト質土 (組砂を含む)
- 193. 101984/3 粘土・褐色砂質土 (組砂を含む)
- 194. 2.513/1 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 195. 2.513/1 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 196. 2.514/2 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 197. 2.515/2 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 198. 101983/3 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 199. 101983/3 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 200. 101983/3 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 201. 101983/2 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 202. 513/1 オリーブ褐色砂質土 (組砂を含む)
- 203. 513/1 オリーブ褐色砂質土 (組砂を含む)
- 204. 7.513/1 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 205. 101984/4 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 206. 101983/3 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 207. 101983/3 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 208. 2.513/3 粘土・シルト質土 (組砂を含む)
- 209. 101983/4 褐色砂質土 (組砂を含む)
- 210. 101983/4 褐色砂質土 (組砂を含む)

- 211. 101983/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 212. 101983/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 213. 101983/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 214. 101984/2 灰白色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 215. 101983/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 216. 101983/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 217. 101983/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 218. 2.513/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 219. 2.513/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 220. 101984/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 221. 101984/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 222. 101984/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 223. 101984/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 224. 513/2 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 225. 101983/3 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 226. 2.513/3 粘土・シルト質土 (組砂を多量に含む)
- 227. 2.513/3 粘土・シルト質土 (組砂を多量に含む)
- 228. 2.514/1 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 229. 2.513/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 230. 513/1 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 231. 513/1 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 232. 101982/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 233. 7.513/4 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 234. 101983/1 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 235. 101983/1 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 236. 2.514/2 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 237. 101983/3 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 238. 513/1 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 239. 513/2 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 240. 513/2 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 241. 512/1 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 242. 7.513/1 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 243. 101983/1 褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 244. 513/2 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 245. 513/2 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)
- 246. 101981/1 オリーブ褐色砂質土 (組砂を多量に含む)

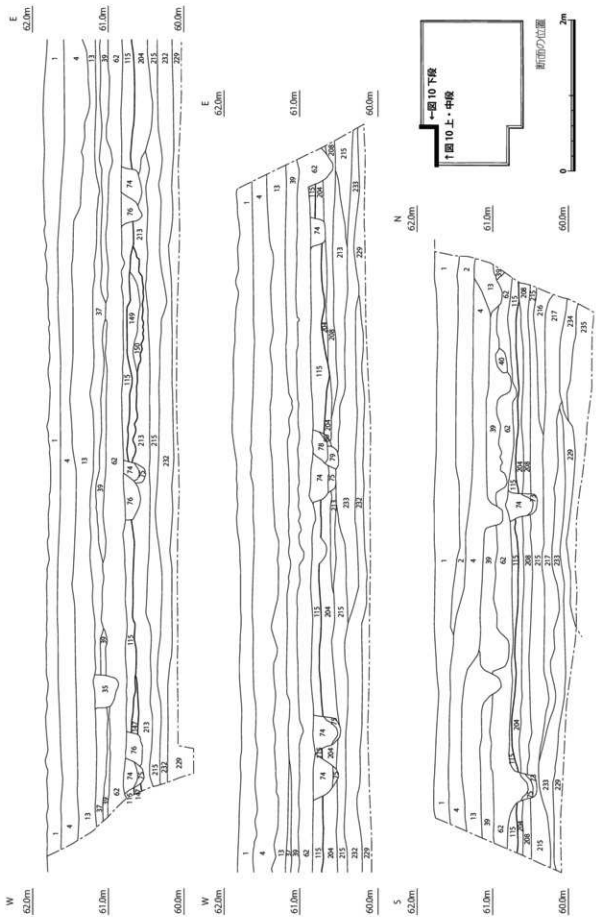


图 10 1区調査区断面 土層断面図⑦ (S = 1/50)

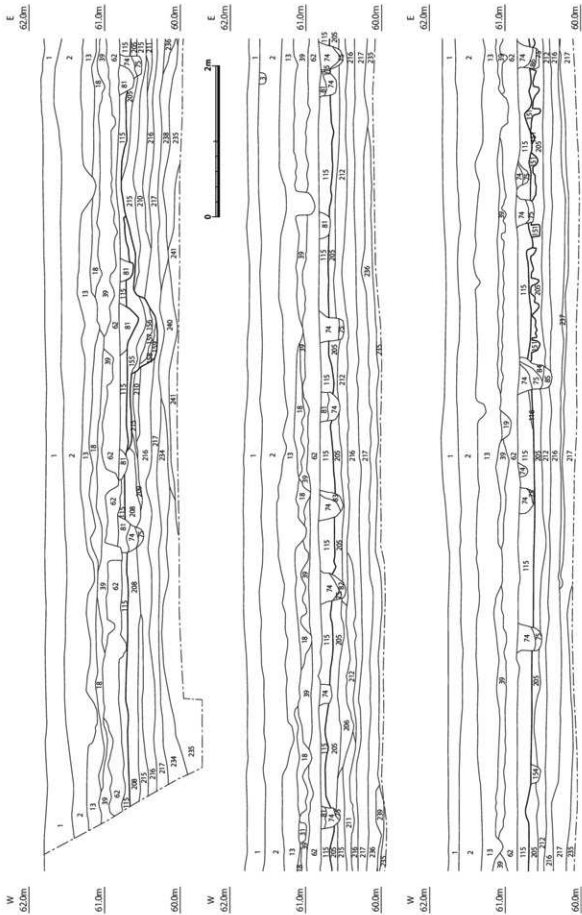
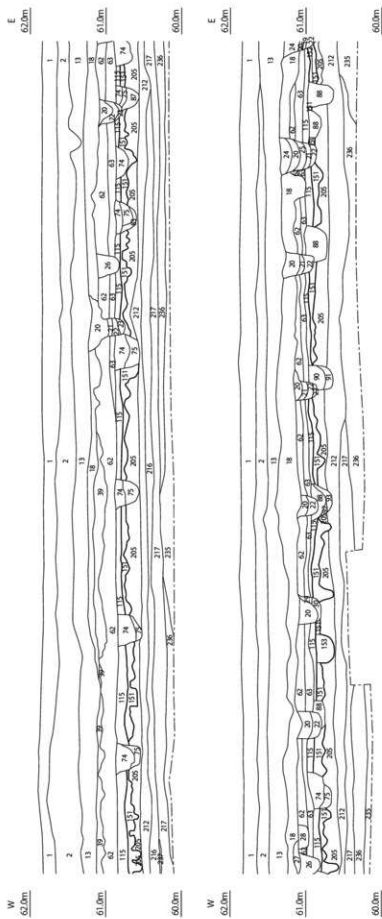


图 11 1区調査区断面 土層断面図⑧ (S = 1/50)



I層：1～6層、II層：7～36層、III層：37～117層、IV層：135～148・151～154・164層
 V層：199～205層、VI層：206～246層
 10228SE：118～134層、10475X：149・150層、10146SD：155～163層、10154NR：165～198層

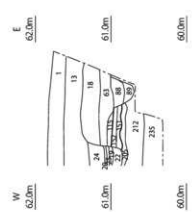
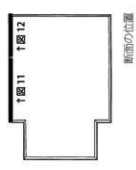


図 12 1区調査区壁面 土層断面図⑨ (S = 1/50)

I層(図4~12の1~6層)は上面が現代の水田面である。上面高は標高約61.8~62.1mであり、南から北に向かって低くなる。厚さは約0.2~0.3mであるが部分的に深く掘り込まれる。

II層(図4~12の7~36層)は近世以降の耕作層であると考えられる。出土遺物として江戸時代以降の陶磁器片を含むが量はきわめて少ない。全体に砂質が強い傾向にあり、部分的には微砂層も見られる。II層中および底面にも素掘り耕作溝が存在する。

III層(図4~12の37~117層)は中世の耕作層である。III層底面に位置する耕作溝から12世紀後半の瓦器碗が出土しており、それ以降の堆積であると考えられる。III層中からは下層に由来する遺物の他に、瓦器・土師器等の中世の遺物が出土しているが数量は少ない。いわゆる素掘り耕作溝の埋土もここに含んでいる。

先述のとおりII・III層は中世から近世にかけての耕作層であるが、その間に幾度も近隣河川の氾濫を受けた痕跡が認められる。耕作層間に残る薄い微砂層や各段階の耕作溝底面に流入している微砂~シルト層がそれにあたる。氾濫の度に再耕地化の努力を重ねてきたようであり、その都度少しずつ農地面が上昇していった経過を見て取ることができる。

IV層(図4~12の135~154層)は河川の氾濫に伴って堆積したと考えられる細砂~砂層からなる。II・III層中に見られる各氾濫痕跡よりも砂粒が大きく検出範囲も面的に広い。出土遺物にはごく少量の土師器片がある。堆積の詳細時期は不明であるが、上下の遺構・遺物との関係から古墳時代から中世までのいずれかの時期であると考えられる。堆積するIV層の厚さは最大で約0.2mを測るが大部分の範囲においては0.05m未満である。

このIV層上面が上層遺構(中世以降)の検出面である。IV層は分布範囲が限られ、その範囲外においてはV層上面において遺構を検出している。また下層遺構(古墳時代以前)の多くはIV層が存在しない範囲に位置していたため、IV層との時期的前後関係が不明確なものが含まれるが、多くはIV層よりも古い時期の遺構であると推測される。

V層(図4~12の199~205層)は褐色系粘質土を主体とする比較的安定した地盤である。上面が下層遺構面で、IV層が存在しない地点における上層遺構の検出面でもある。上面の標高は60.6~61.0mで、南東から北西に向かって緩やかに低くなる。V層中には縄文時代後期中葉から弥生時代後期後半にかけての土器片や石器片が少量ながら含まれる。

VI層(図4~12の206~246層)は遺物を含まない、いわゆる地山である。粘質土~粘土が主であるが地点によっては粗砂を多く含む。

遺構の調査はまずIV・V層上面で上層遺構の検出・掘削を行っている。続いてIV層を除去し全体でV層上面を検出し下層遺構の調査を進めている。V層中に縄文時代の土器・石器の細片が含まれることから、より下層にも遺構が存在する可能性を考え、これら遺物が出土した地点を中心にVI層上面まで人力掘削を行い遺構の検出作業を行っている。結果として遺構は存在しなかった。

第3節 1区 遺構

1区の遺構は大きく2段階の時期に分けて認識され、便宜上、上層遺構・下層遺構としてまとめられる。上層遺構は12世紀後半以降の耕作活動に伴う耕作溝を中心とする遺構群である。下層遺構は上層遺構の耕作溝群より古い遺構を一括したものである。

上層遺構 (図13)

上層遺構は主として中世の間に展開された耕作活動に伴って構築された遺構群で、いわゆる素掘り耕作溝群が主である。上層遺構の中でも最も古い段階の耕作溝中から12世紀後半※の瓦器が出土しており、これ以降に形成された遺構群であると考えられる。

耕作溝は東西方向および南北方向のものがある。いずれも基本的に方位に沿う形で掘削されている。図13ではⅣ・Ⅴ層上面において検出された溝を図示しており、多くはⅢ層底面に位置する溝であるが一部はⅢ層中から掘り込まれた溝も含まれている。前節で述べたように中世以降の調査地は耕作地としての利用が基本となっており、その間に近隣河川の氾濫を幾度も受け、その都度再耕地化を行うというサイクルを繰り返している。図13の耕作溝群は、それらの古い段階の累積した姿である。時期を経るごとに耕作面高は上昇しており、結果として検出面に残らなかった耕作溝も存在する。その一部は調査区壁面土層断面で確認できる。

上層遺構として調査を行った耕作溝の中では、東西方向の比較的大型の耕作溝群が最も新しい。これらの溝は調査区全域において約3.0～3.6m間隔で並ぶ。いずれも幅約0.25～0.3m・深さ約0.2～0.25mを測る他より大型の耕作溝である。埋土も共通する。溝の配置や掘削状況等から、これらは一連の大規模な耕作活動によって形成されたものと考えられる。近隣の有力者の指導の下で行われた活動である可能性も指摘できる。これより古い南北方向溝群の中にも同様の間隔で並ぶ一帯が見られる。全体にやや規模は小さいものの、これらも同様の耕作活動の痕跡である可能性がある。

調査区東～南部には上記溝群よりも古い耕作溝が存在する。規模は幅約0.2m・深さ約0.15m程度のもが多い。

耕作溝群の他にごく少数のピットが散在するが、いずれも時期は不明であり近世以降のピットを含む可能性もある。

上層からの出土遺物は数が限られる。12世紀以降の土師器と瓦器が出土しており、その他は下層遺構に由来すると考えられる遺物である。基本的に細片での出土であるが少数ながら完形に近いものもある。出土遺物の量は全体に少ないが相対的に調査区南側からの出土が多い傾向にある。耕作溝の分布状況と合わせて、土地利用の在り方の違いがここに表れている可能性がある。

下層遺構 (図14～17)

下層遺構は上層遺構よりも古い時期の遺構であり、Ⅴ層上面に構築されている。遺構としては井戸、土坑、ピット、溝、足跡群、河道がある(図14)。時期の判別できる遺構は古墳時代を中心とする期間にまとまるが、詳細時期が不明な遺構も多く、その前後の時代を含む可能性のある遺構も存在する。遺構の分布は調査区南部に多い傾向にある。他の遺構が疎である調査区西部および北東部にも足跡群

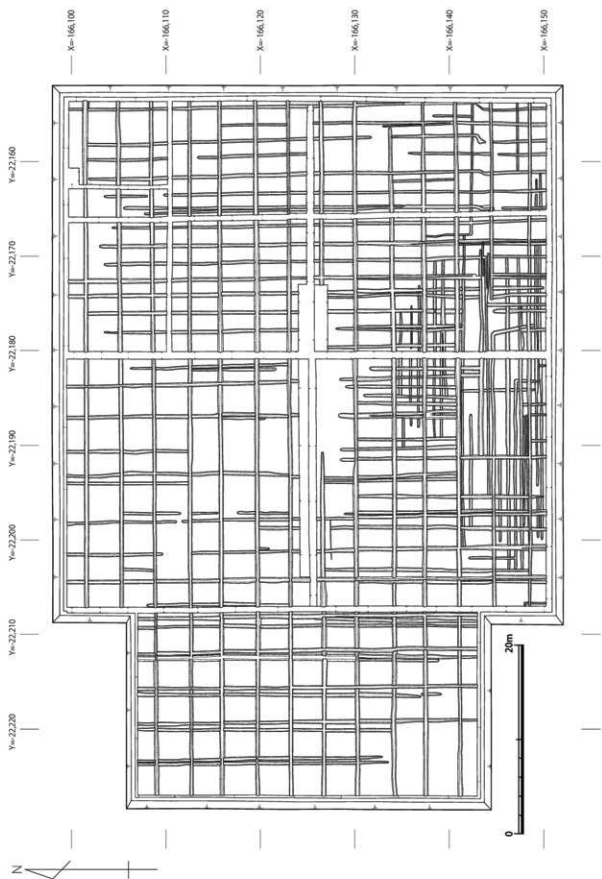


图 13 1区 上层结构平面图 (S = 1/400)

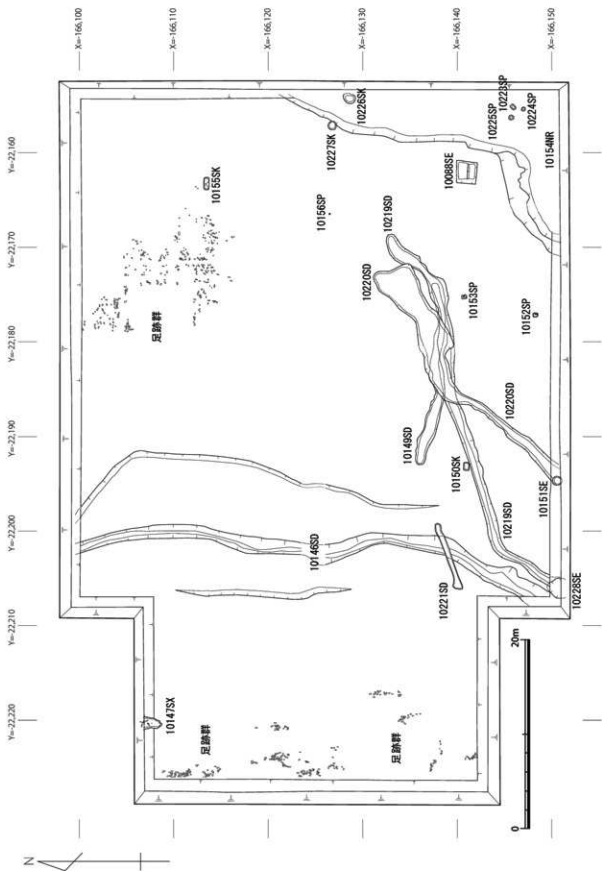


图 14 1区 下层构造配置图 (S = 1/400)

が点在する。ただしこれは遺構ベース層であるV層の土質の違いによる遺存状況の差である可能性も考えられる。

井戸は3基ある。10088SEは調査区南東部に位置し、平面形は東西2.1m×南北2.0mの方形である。深さは約0.5mと平面規模に比して浅いが底面付近の微砂層から大量の湧水がある。断面形はU字状である。土師器の小片が出土している。10151SEと10228SEは調査区南辺西半に位置する。10151SEは直径約1.0m、深さ約0.8mを測る平面円形の素掘りの井戸である。10220SDより新しい遺構であるが、出土遺物が無く詳細時期は不明である。10228SEは平面形が直径約2.2m以上の不整形円で、深さは約1.2m以上を測る（土層断面は調査区壁面。図5）。遺構の南半が調査区外に位置しており、さらに深くなる可能性がある。最終的に人為的に埋め戻されている。調査範囲内で井戸枠は出土していない。10219SDよりも新しい遺構で、土師器が出土しているが詳細時期は不明である。

土坑・ピットは調査区南～東部に存在する。10150SKおよび10155SKは平面形が長方形、深さ約0.25mの土坑である。土師器の細片が出土している。どちらも埋土が耕作溝と同様のものであることから、時期は中世前半である可能性がある。調査区東辺沿いには土坑2基（10226・10227SK）、ピット3基（10223～10225SP）がある。これらの遺構は10154NRより新しい遺構であり、同河道が埋没した古墳時代以降の遺構である。10226SKは平面形が直径約1.1mの不整形円で、深さ約0.25mを測る。遺物は出土していない。10227SKは平面形が直径約0.8mの円形で、深さ約0.6mを測る。下層から木片が出土している。廃棄土坑である可能性が考えられる。10223SPと10224SPには柱痕が認められる。10223SPからは、ほぼ完形に復元される土師器の小形丸底壺が破片状態で出土している。時期は古墳時代中期以降であると考えられる。他のピット

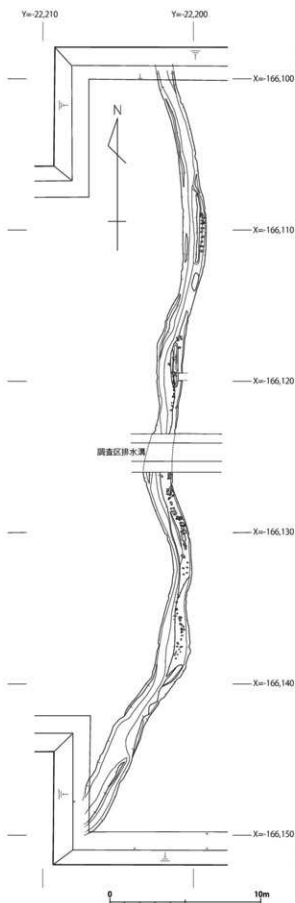


図15 1区 10146SD平面図（S=1/250）

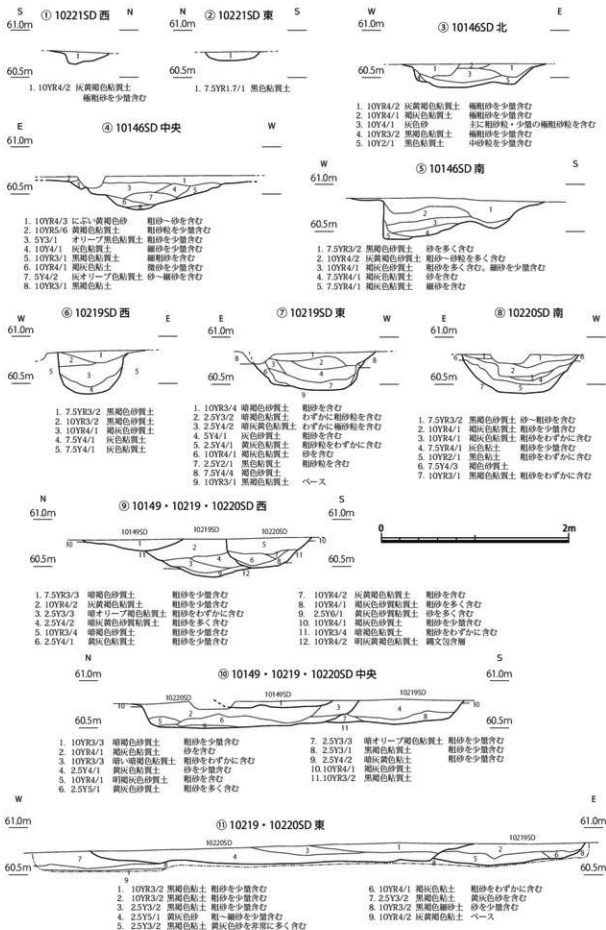


図 16 1区 下層遺構断面図① (S = 1/40)

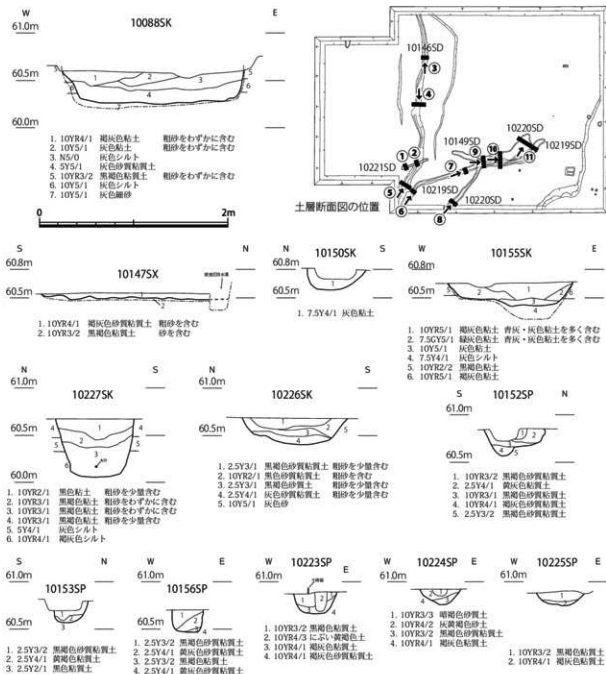


図 17 1区 下層遺構断面図② (S = 1/40)

トについては単体で散在しており、建物等の構造物に復元できるものは無い。

10146SDは調査区西半に位置し、蛇行しながら調査区内を縦断する(図15)。概ね南北方向に伸び、南端は西側へと向きを変えている可能性がある。幅約1.2~2.0m、深さ0.3~0.6mを測る。溝の底面高は南端で60.4m、北端で60.35mと南から北へと低くなっている。ただし周辺地形の傾斜よりも緩やかなものであり、相対的に溝は北ほど浅くなっていく。溝の断面形は逆台形状が基本であるが、溝の東側斜面中ほどに段が残る部分も多い。この段の上や溝底面には一部に鋤跡が残されており、掘削が行われたことが窺える。自然流路を土台に手を加えた溝が完全に人工的に掘削された溝かは不明である。埋土はほぼ全体が砂層であり比較的短時間のうちに埋没したようである。出土遺物は少なく、弥生時代後期後半の土器片が出土している。これらは遺構ベース層(V層)に由来す

る可能性があり、溝の掘削・埋没時期はこれより後の時期となる。10146SDの中央から北半一带には埋土の最上層が周辺に溢れ出すような形で細砂層が広がっており、これを除去した範囲がごく浅い溝状になっている。これを10145SDとして取り扱っている。深さは最大でも0.03 m程度である。10145・10146SDについてはIV層よりも古い遺構であることが確認できる。10221SDは10146SDよりも新しい溝で、西南西―東北東方向に伸びる。幅約0.4～0.6 m、深さ約0.1 mを測る。遺物は出土していない。

10149・10219・10220 SDは調査区南部に位置する溝である。それぞれ重複関係があり、10219SD→10220SD→10149SDの順に構築されたことが確認できる。10219SDと10220SDはどちらも深さ最大約0.5 mを測り、東端付近は浅くなり溝の肩部も不明瞭になって消える。底面が比較的幅広の溝である点も共通する。10219SDは検出長約50 mを測り、西部は10221SDと並走するような方向に伸びる。土師器の細片がごく少量出土している。10220SDは検出長約30 mを測り、東半部は浅く広く展開する。10220SDの最上層からは古墳時代中期後半の須恵器片が出土している。他は土師器の細片が少量あるのみである。10149SDは深さ約0.1 mの浅い溝である。遺物は出土していない。

調査区全体で足跡群を検出している。特に集中する地点は調査区西辺沿いと調査区北東部である。調査区北半の足跡群についてはIV層下に存在することを確認している。これら足跡には灰白色系の細砂が詰まる。稀に土師質土器の細片が混ざるが、器種や時期が明瞭なものはない。人間の足跡であると判断されるものが主である。一部に他の動物の足跡である可能性が考えられる小型のくぼみも見られるが特定は難しい。調査区北西隅に位置する10147SXは深さ約0.1 mの不整形な落ち込みで、底面に足跡が残る。土師器の細片が出土している。

なお、上層遺構の調査段階から足跡群の存在を認識しており、基本層序IV層下において水田畔といった他の農耕関連の遺構が存在する可能性を念頭に置いてIV層の除去を行っているが、検出した遺構は足跡群のみであった。

10154NRは自然河道であると考えられ、その左岸（西岸）を確認している。調査区南東部の形状に沿うような形で屈曲する。深さは1.5 m以上を測る。上層からは少量ながら土師器と須恵器が出土しており、調査区の範囲内においては古墳時代中期に埋没したと考えられる。ただし、この時期の遺物はごく細片のみである。河道上面付近からは馬歯も1点出土している。この他に縄文土器、弥生土器、石器の破片も出土している。これら古い遺物については表面の磨滅の度合いが強く、長く流水に晒された状況が窺える。

第4節 1区 遺物

1区の調査で出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・石器・動物骨がある。出土遺物の量は遺物コンテナ15箱分である。

縄文時代後期以降の各時期の遺物がある。一定量の遺物が存在する時期としては、縄文時代後期～晩期、弥生時代後期末、古墳時代中期～後期、古代、平安時代末～鎌倉時代が挙げられる。上層遺構は平安時代末～鎌倉時代以降、下層遺構はそれ以前の時期に対応する。各遺構ともに下層に由来する古い時期の遺物を含む場合も多い。

今回報告を行う遺物(図18・19)は、概ね全体像の分かる遺物および出土遺構・層序の時期や性格をよく表わすと考えられる遺物である。1区については、図示外の出土遺物は全体像や詳細時期が判別の難しい細片が大部分を占める。

以下に出土層位・遺構ごとに出土遺物について述べる。

1～12・14～16・18・20～23・26・28・33は上層遺構の耕作溝および中世の耕作層(基本層序Ⅲ層)から出土した土器である。耕作溝・耕作層からは12世紀以降の土師器・瓦器の他、縄文時代～古代の土器、石器の細片などが出土している。

1～10は土師器皿である。1～4は手づくね成形の皿である。復元口径8.5～9.9cm、器高1.0～2.1cmを測る。いずれもナデ調整で仕上げ、底部外面に指頭痕が残る。3・4は耕作溝中からほぼ完形状態で出土しており、どちらも厚手の作りである。4は全体に歪みが大きく、口径は場所によって9.4～10.7cmと差がある。5・6はロクロ成形の皿である。底部に右回転の糸切痕が残るが、その上に若干のナデ調整を施す。7は底部が内外面ともに平坦に整えられており、古代の遺物であると考えられる。8～10は手づくね成形の皿である。いずれも内外面にナデ調整を施す。8・9は耕作溝からほぼ全体が残る形で出土している。

11は土師器羽釜である。罎より上部は全体が遺存する一方、罎以下は部分的に残るのみである。羽釜の上部のみを輪状の形で再利用していた可能性が考えられる。口径23.1cmを測る。罎は水平に広がる。12は土師器高坏である。脚部外面には細かなヘラナデ調整を施す。

14・15は瓦器埴である。14は大和型の瓦器埴である。ほぼ完形で耕作溝中に据え置かれるような形で出土している。表面は全体に劣化が激しく部分的に剝離も見られる。口径14.7cm、器高5.8cmを測る。15は瓦器埴の底部である。断面台形の高台が付く。焼成がやや悪く、部分的に薄橙色を呈する。

16は古代の須恵器坏である。復元口径16.2cmを測る。

18・20～23は須恵器蓋である。18・20・22・23は古墳時代中期後半～後期の坏ないし高坏の蓋である。22は肩部に二本線のヘラ記号がある。21は短頸壺の蓋、あるいは坏である可能性もある。外面にU字状のヘラ記号が存在するが全体像は不明である。

26・28は弥生土器甕である。26は体部下半である。外面に右肩上げりのタタキを密に施し、内面はナデ調整で滑らかに仕上げる。28は底部の破片で、底部中央はわずかに凹む。近隣からは接合しないが同一個体と考えられる体部の小片も出土している。33は弥生土器器台である。表面が磨滅しており細かな調整は不明である。円形スカシを四方向に穿つ。

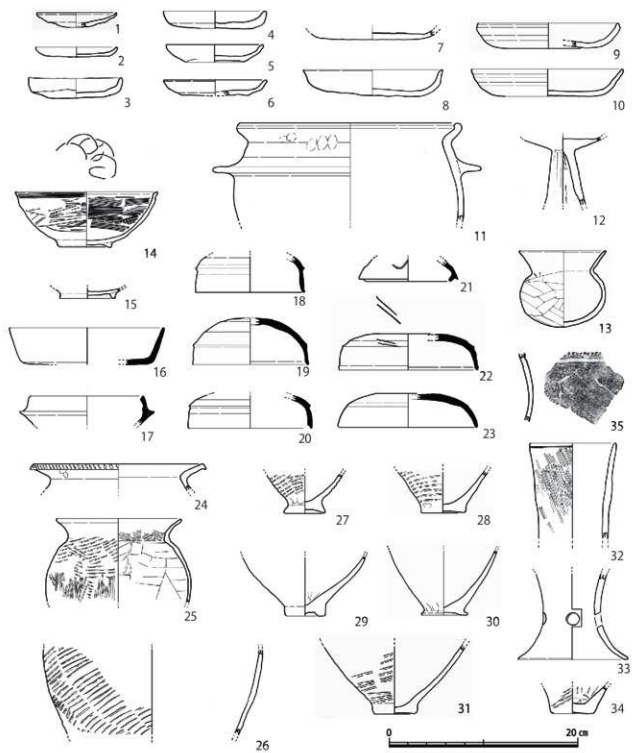


图18 1区 出土土器 (S=1/4)

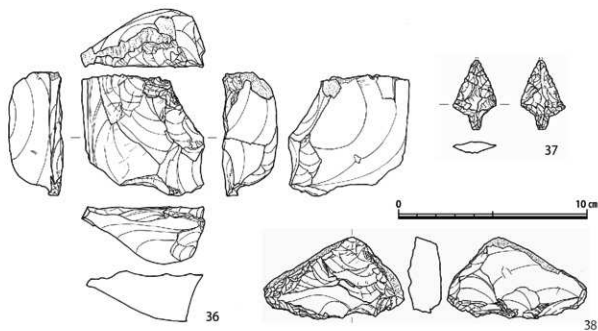


図19 1区 出土石器 (S=1/2)

17・19は10220SDの最上層から出土した須恵器である。17は坏身である。復元口径11.7cmを測る。19は坏蓋である。復元口径12.2cm、器高4.8cmを測る。外面には全体に自然釉が付着する。

13は10223SPから出土した土師器壺である。破片状態での出土であるがほぼ全体が遺存している。体部外面は全体に細かなケズリを施す。

24・31は10145SDから出土した弥生土器である。後述する遺構ベース層から出土する弥生土器と同時期の遺物であり、下層に由来する遺物であると考えられる。24は甕の口縁部である。端部には刻み目を施す。外面の一部に煤が付着する。31は甕の下半部である。底部は全体がごくわずかに凹む。全体の調整は26と同様である。37も10145SDから出土したサヌカイトの石鏝である。先端をわずかに欠く。長さ3.6cm・幅2.3cm・厚さ0.6cm・重量3.6gを測る。

32・35は10154NRからの出土遺物である。32は弥生土器長頸壺である。口径9.1cmを測る。35は縄文土器鉢である。外面に条痕と凹線が存在する。

25・29・30は河川の氾濫層であると考えられる基本層序IV層から出土した弥生土器である。弥生時代後期後半に位置付けられる。25は甕の上半部である。復元口径13.1cmを測る。口縁は外反する。表面は全体に磨滅しているが、タキやケズリ痕は確認できる。29・30は甕の下半部である。29は底部中央が凹む。体部外面はやや粗いケズリを施す。30は底部を外側につまみ出して作り出す。調整は表面の磨滅により不明である。

27・34・36・38は遺構ベース層である基本層序V層からの出土遺物である。27・34は弥生土器である。27は甕の底部である。底部はハの字状に開く。体部外面には右肩上がりのタキを細かく施す。34は底部中央がごくわずかに凹む。内面には指頭圧痕が残る。36はサヌカイトの石核である。重量108.2gを測る。一辺に原石部分を残す。38はサヌカイトの石器である。削器の未製品である可能性がある。重量59.9gを測る。

第5節 2区 基本層序と遺構面

2区の基本層序は以下のとおりである。耕作層であるⅠ・Ⅱ層については調査区全体でほぼ一様である。Ⅲ・Ⅳ層の状況は地点によって差異があり、Ⅲ層が存在しない範囲も広く見られる。Ⅰ・Ⅱ層の上面高は調査区全体で概ね同一である。一方、遺構面となるⅢ・Ⅳ層の上面は平坦であるが全体に南から北に向かって次第に低くなる。東・西ではやや東が低い傾向にある。上・中層遺構面の標高は調査区北東部で約60.2m、南東部で約60.6m、南西部で60.7m、北西部で60.3mである。

基本層序（図21～31） ※層番号は1区の基本層序とは対応しない。

Ⅰ層：水田耕作土（近現代。上面の標高は標高約61.2～61.4m）

Ⅱ層：橙灰褐色砂質土・暗黄灰色粘質土～砂質土（中世以降の耕作層。上層遺構の耕作溝埋土を含む。上面の標高は60.8～61.1m。一部に氾濫層を含む）

Ⅲ層：褐色粘質土・褐灰色砂質土・橙灰褐色砂土（上面が上・中層遺構面。縄文時代後期～弥生時代遺物包含層。上面の標高は60.2～60.7m）

Ⅳ層：にぶい黄灰褐色土・青灰色シルト～粘土・暗褐色粘質土・灰色微砂～砂（にぶい黄灰褐色土上面が下層遺構面。縄文時代以前の河川堆積層を含む。上面の標高は60.0～60.5m）

Ⅰ層（図21～31の1～9層）は上面が現代の水田面である。上面高は標高約61.2～61.4mで、やや南側が高い。1区と比較すると全体に約0.6～0.7m低い。Ⅰ層中から掘り込まれる農業用暗渠が多数存在しており、一部は遺構面に達する深さがある。

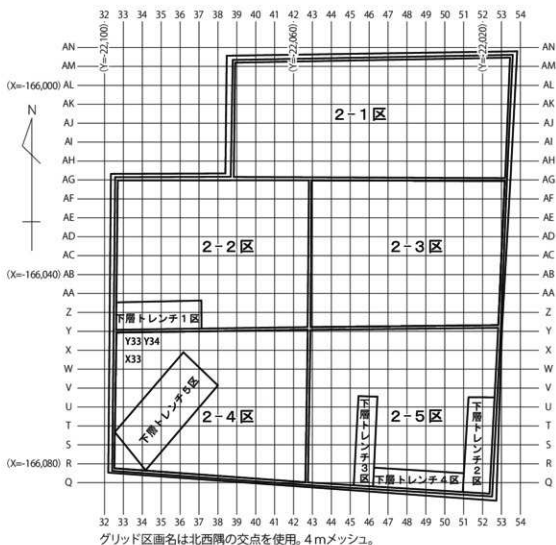
Ⅱ層（図21～31の10～67層）は中世から近世にかけての耕作層である。上層遺構の素掘り耕作溝の埋土もここに含まれる。Ⅱ層、主にその下半からは中世の瓦器や土師器が一定量出土している。上層からはごく少量ながら近世以降の陶磁器片も出土している。ただし全体の遺物量としてはこれら中近世のものより、下層に由来する古墳時代遺物のほうが多い。1区の中近世耕作層ほどではないが全体として砂質が強い傾向にあり、部分的に薄い微砂層の堆積も見られる。2区一帯でも河川の氾濫を受けた後の再耕地化を幾度か繰り返したことが窺える。

Ⅲ層（図21～31の123～154層）は縄文時代後期～弥生時代の遺物包含層である。上面が上層遺構および中層遺構の遺構面である。褐色粘質土や褐灰色砂質土などから成る全体に比較的安定した地盤である。厚さは最大約0.35mで、分布には地点によって差異がある。調査区南西部などⅢ層が存在しない場所も見られ、そのような範囲においてはⅣ層上面が遺構面となる。縄文時代の遺物と、量はごくわずかながら弥生時代の遺物が出土する。出土量は全体として少ないが、調査区南部にやや多い傾向にある。

Ⅳ層（図21～31の155～224層）は縄文時代以前の堆積層である。下層遺構面以下をⅣ層として一括しており、その形成過程や時期には多様なものを含むと考えられる。調査区南東部や西部に存在するにぶい黄灰褐色土は比較的安定した地盤であり、この上面が下層遺構面となる。ただし分布範囲は限定的であり、多くの地点においては河川堆積と考えられる砂層やシルト層が厚く堆積している。これらの中には縄文時代の河道が含まれており、縄文土器や石器の細片が出土する。ただし量はごく少量で、Ⅲ層中からの出土よりもさらに少ない。

遺構面は上層遺構（中世）と中層遺構（古墳時代）がⅢ層上面、下層遺構（縄文時代）がⅣ層上面である。上層遺構および中層遺構の調査の過程において遺構ベース層であるⅢ層中に縄文時代の遺物が含まれることを認識し、また調査区壁面沿いの排水溝断面においても遺構と思しき土層（結果として多くは風倒木痕であった）が確認されたことから、下層遺構の確認作業を行うこととなった。ただし中層遺構、特に河道の調査に非常に多くの時間と労力を要することから、まず中層遺構の調査と並行して下層トレンチで調査を行い調査全体の方向性を決めることとなった。下層トレンチの位置は図20のとおりである。下層トレンチ1～4区は下層に良好な地盤面が存在し、Ⅲ層中の遺物出土状況と合わせて遺構が存在する可能性が高い地点に設定している。同5区については下層河道の調査を主眼としたトレンチである。結果としては下層の遺構・遺物は数が限られ、遺構の性格も不明瞭なものが多いことから、中層遺構の調査に重きを置く方針が定められた。

2区は遺構・遺物とも量が多いため作業および記録の都合上、図20のとおり調査区内を5つに区画分け（2-1区～2-5区）している。これと併用する形で測量杭を基準とする4mメッシュのグリッドを設定している。中層遺構の河道（20989SD）のように範囲の広い遺構では遺物の取り上げ位置の記録などにもこれを用いている。本報告においても適宜、これらの小区画表現を使用する。



グリッド区画名は北西隅の交点を使用。4mメッシュ。

図20 2区 調査区区割図 (S=1/800)

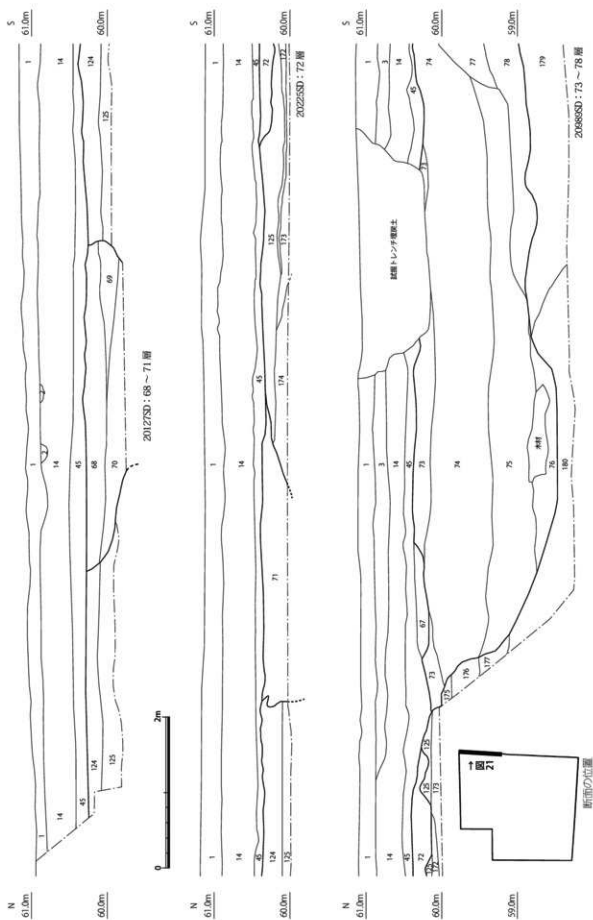


図 21 2区調査区断面 土層断面図① (S = 1/50)

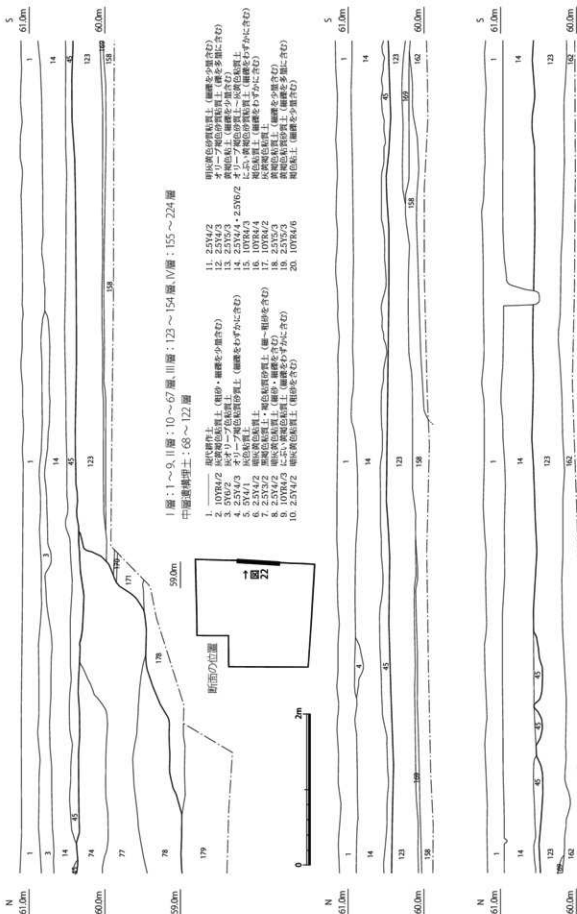


図 22 2区調査区壁面 土層断面図② (S = 1/50)

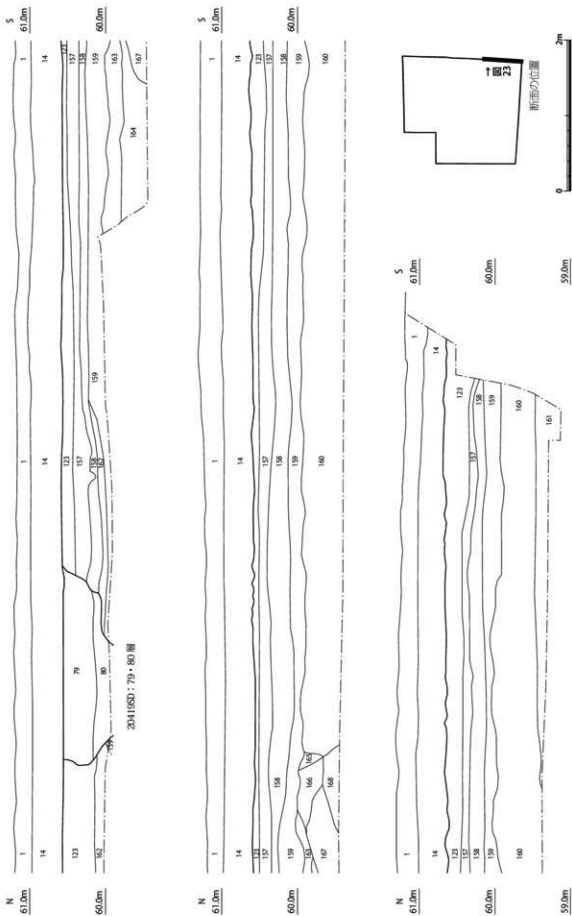


图 23 2区調査区壁面 土層断面図③ (S = 1/50)

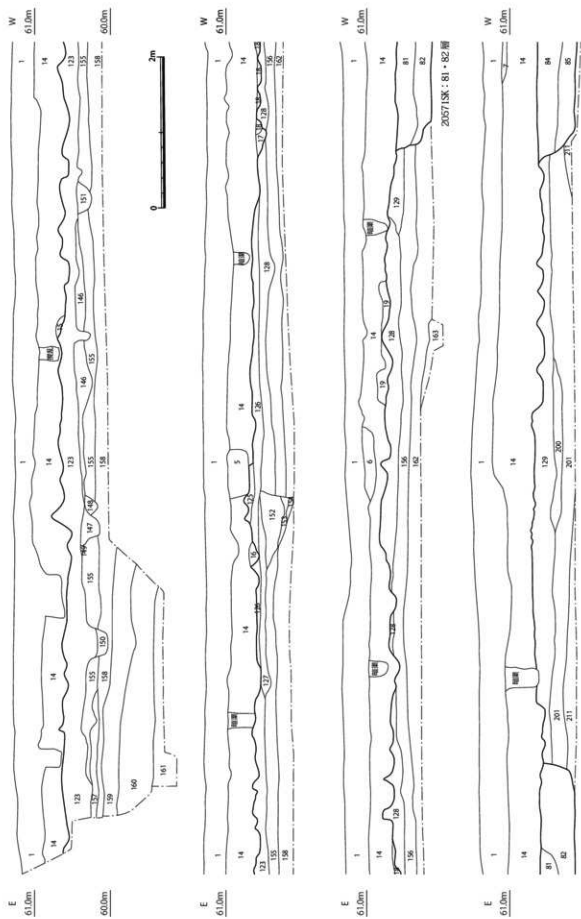


图 24 2区調査区断面 土層断面図④ (S = 1/50)

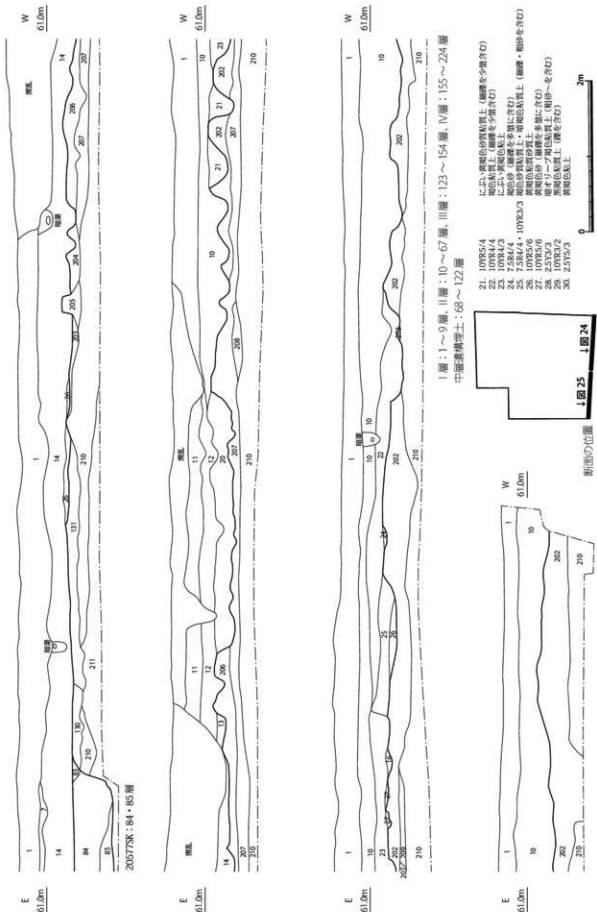


図 25 2区調査区断面 土層断面図⑤ (S = 1/50)

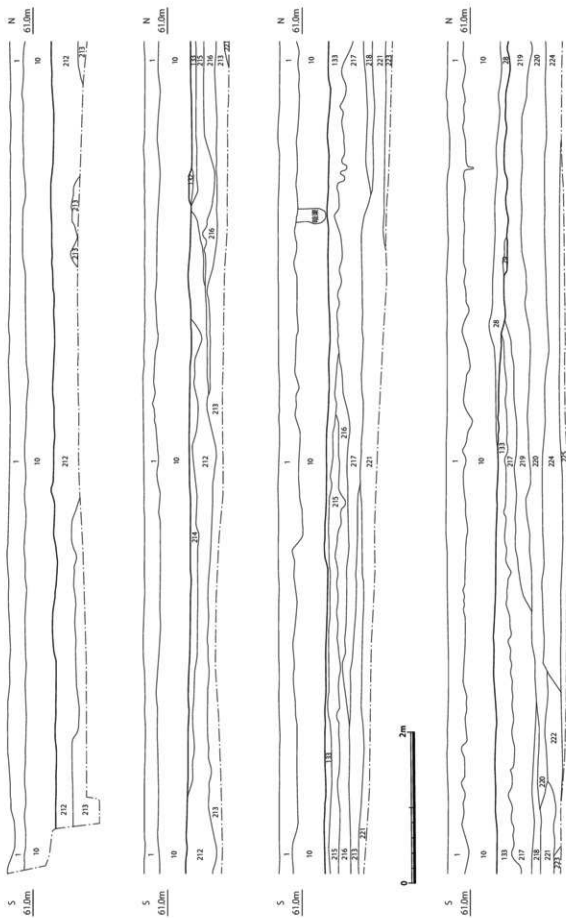
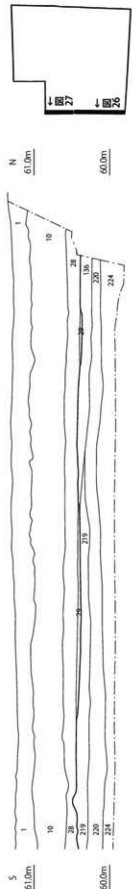
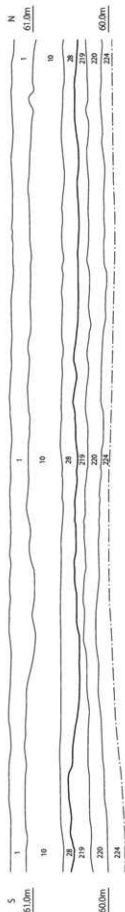


图 26 2区調査区断面 土層断面図⑥ (S = 1/50)



断面の位置

- | | | | |
|-------------|-----------------------|--------------|-----------------------|
| 31. 2.533/3 | 堆オリーブ褐色粘質土 (細砂・礫を含む) | 81. 2.535/2 | 暗灰黄色粘土 (細砂・粗砂を少量含む) |
| 32. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂・粗砂をわずかに含む) | 82. 1.078/2 | 同上、黄褐色粘土 (細砂・粗砂を少量含む) |
| 33. 5.572/4 | 灰オリーブ色粘質土 (細砂を少量含む) | 83. 1.078/1 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 34. 5.572/4 | 灰オリーブ色粘質土 (細砂を少量含む) | 84. 1.078/1 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 35. 2.534/4 | オリーブ褐色粘質土 (細砂を少量含む) | 85. 2.533/1 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 36. 2.534/4 | オリーブ褐色粘質土 (細砂を少量含む) | 86. 1.078/2 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 37. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 87. 1.078/2 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 38. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 88. 5.571/2 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 39. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 89. 2.578/2 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 40. 2.535/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 90. 2.578/1 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 41. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 91. 5.572/2 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 42. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 92. 5.572/2 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 43. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 93. 2.533/3 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 44. 1.078/5 | 黄〜灰褐色粘質土 (細砂を少量含む) | 94. 2.574/1 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 45. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 95. 1.078/1 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 46. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 96. 1.078/1 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 47. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 97. 2.575/2 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 48. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 98. 2.533/3 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 49. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 99. 2.533/3 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 50. 2.535/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 100. 2.533/3 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 51. 1.078/2 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 101. 2.574/2 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 52. 1.078/2 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 102. 5.78/2 | 灰白色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 53. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) | 103. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 54. 2.534/4 | オリーブ褐色粘質土 (細砂を少量含む) | 104. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) |
| 55. 2.534/4 | オリーブ褐色粘質土 (細砂を少量含む) | 105. 1.078/3 | 暗灰色粘質土 (細砂を少量含む) |

図 27 2区調査区壁面土層断面図⑦ (S = 1/50)

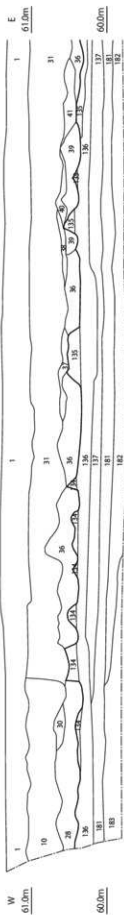
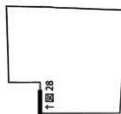
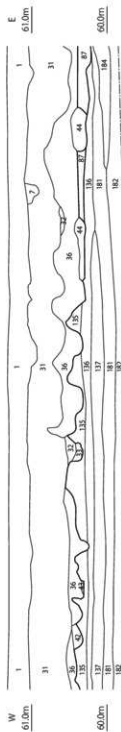


図28 2区調査区断面 土層断面図⑧ (S = 1/50)

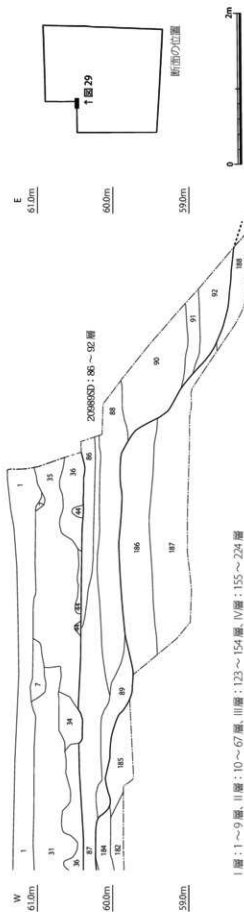


断面の位置



I層：1～9層、II層：10～67層、III層：123～154層、IV層：155～224層、中層構造準士：68～122層

- | | | | |
|------------------------------------|-------------------|--------------------|------------------------------------|
| 106. 7.5YR5/1 黄褐色粘土 (軽～細砂を含む) | 121. 10YR4/4 | 黄褐色粘土 (粗砂・礫を含む) | 136. 10YR2/3 黄褐色粘質土 |
| 107. 2.5Y7/2 黄褐色土 (礫をわずかに含む) | 122. 2.5Y3/2 | 黄褐色粘土 | 137. 10YR3/2 黄褐色粘質土 |
| 108. 5Y2/1 黄褐色土 (礫を含む) | 123. 10YR3/2 | 黄褐色粘質土 (細砂をわずかに含む) | 138. 10YR5/0 黄褐色粘質土 |
| 109. 5Y2/1 黄褐色土 (礫を含む) | 124. 10YR5/2 | 黄褐色粘質土 (細砂をわずかに含む) | 139. 10YR5/0 黄褐色粘質土 |
| 110. 10YR3/3 黄褐色粘質土 (軽礫を含む) | 125. 10YR4/4, 4/2 | 灰黄褐色～灰色粘質土 | 140. 7.5YR3/1 黄褐色粘質土 |
| 111. 10YR3/2 黄褐色粘質土 (細砂を含む) | 126. 10YR3/2 | 黄褐色粘質土 (細砂を含む) | 141. 10YR3/4 黄褐色粘質土 |
| 112. 10YR3/2 黄褐色粘質土 (軽礫を含む) | 127. 10YR3/2 | 黄褐色粘質土 (細砂を含む) | 142. 10YR3/4 黄褐色粘質土 |
| 113. 10YR2/3 黄褐色粘質土 (軽砂・軽礫を含む) | 128. 10YR4/3 | 黄褐色粘質土 (細砂をわずかに含む) | 143. 10YR3/4 黄褐色粘質土 (細砂をわずかに含む) |
| 114. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (粗砂・軽礫を多量に含む) | 129. 7.5YR3/2 | 黄褐色粘土 | 144. 7.5YR3/2 黄褐色粘質土 |
| 115. 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (軽礫を多量に含む) | 130. 10YR4/6 | 黄褐色粘質土 (礫を含む) | 145. 10YR4/4 黄褐色粘質土 |
| 117. 5Y3/3 オリーブ褐色土 (粗砂を含む) | 131. 10YR4/6 | 黄褐色粘質土 (軽砂を含む) | 146. 10YR4/6 黄褐色粘質土 (細砂をわずかに含む) |
| 118. 5Y3/1 オリーブ褐色土 (粗砂を含む) | 132. 10YR4/6 | 黄褐色粘質土 (軽砂を含む) | 147. 10YR4/6 黄褐色粘質土 (細砂をわずかに含む) |
| 119. 5Y3/1 オリーブ褐色粘質土 (軽砂を含む) | 133. 10YR3/4 | 黄褐色粘質土 (細砂を含む) | 148. 2.5Y5/3 灰黄色粘質土 (細砂をわずかに含む) |
| 120. 10YR3/1 黄褐色粘土 (細砂を少量含む) | 134. 2.5Y4/2 | 黄褐色粘質土 (細砂を少量含む) | 149. 10YR5/4 土壌、黄褐色粘質土 (細砂をわずかに含む) |
| | 135. 10YR3/3 | 黄褐色粘質土 | 150. 5Y4/4 黄オリーブ色粘土 |



1層：1～9層、II層：10～67層、III層：123～154層、IV層：155～224層
 中層埋理土：68～122層

- | | | | |
|-------------------------------------|-----------------------------------|-------------------------------------|------------------------------------|
| 151. 103R4/3
赤色粘土 | 176. 5P84/1
暗褐色色粘土 | 201. 7.5YR4/4
赤色粘土 | 212. 10YR5/6
黄褐色色砂質粉質土 |
| 152. 10YR4/2
赤色粘土 | 177. 8S10/1
灰白色シルト | 202. 7.5Y4/1
赤色粘土 | 213. 2.5Y2/2
黄褐色土 |
| 153. 10YR2/2
赤色粘土 | 178. 8S10/1
灰白色シルト | 203. 7.5Y4/1
赤色粘土 | 214. 10YR5/3
黄褐色色砂質粉質土 |
| 154. 2.5Y4/1
赤褐色色砂質粘土 | 179. 5YR3/1
黄褐色粘土(有機物を多く含む) | 204. 10YR5/6
黄褐色色砂質粉質土(細粒を少量含む) | 215. 10YR5/3
黄褐色色砂質粉質土(細粒を少量含む) |
| 155. 10YR4/3
赤褐色色砂質土 | 180. 2.5Y5/1
黄褐色粘土(有機物を多く含む) | 205. 2.5Y4/2
赤褐色色砂質粉質土(細粒を少量含む) | 216. 10YR5/3
黄褐色色砂質粉質土(細粒を少量含む) |
| 156. 10YR4/3
赤褐色色砂質土 | 181. 2.5Y5/1
黄褐色粘土(有機物を多く含む) | 206. 10YR5/6
黄褐色色砂質粉質土(細粒を少量含む) | 217. 2.5Y2/2
黄褐色土 |
| 157. 10YR5/6
赤褐色色砂質粘土(細粒をわずかに含む) | 182. 5Y3/2
オリーブ褐色土 | 207. 10YR5/6
黄褐色色砂質粉質土 | 218. 10YR2/2
黄褐色土 |
| 158. 5Y4/4
オリーブ褐色土 | 183. 5Y3/2
オリーブ褐色土 | 208. 10YR6/4
オリーブ褐色粘土(細粒をわずかに含む) | 219. 10YR2/2
黄褐色土 |
| 159. 2.5Y4/1
黄褐色土 | 184. 10YR6/4
褐色粘土 | 209. 2.5Y4/4
オリーブ褐色粘土(細粒を少量含む) | 220. 10YR5/2
黄褐色色砂質土(堆積・礫を含む) |
| 160. 2.5Y4/1
黄褐色土 | 185. 10YR6/4
褐色粘土 | 210. 2.5Y2/2
黄褐色土 | 221. N3/1
黒色粘土(細粒を少量含む) |
| 161. 5Y4/1
黄褐色土 | 186. 5P83/1
黄褐色色砂質粉質土 | 211. 2.5Y2/2
黄褐色土 | 222. 2.5Y2/1
黄褐色土 |
| 162. 2.5Y4/3
黄褐色土 | 187. 5S5/1
青灰色シルト | 212. 10YR5/6
黄褐色色砂質粉質土 | 223. 2.5Y2/1
黄褐色土 |
| 163. 10YR4/3
赤褐色色砂質粘土 | 188. 8S10/1
灰白色シルト | 213. 2.5Y2/2
黄褐色土 | 224. 5Y4/2
灰オリーブ褐色土 |
| 164. 10YR4/3
赤褐色色砂質粘土 | 189. 2.5Y2/2
黄褐色土 | 214. 10YR5/3
黄褐色色砂質粉質土 | |
| 165. 7.5Y4/4
赤褐色色砂質粘土 | 190. 2.5Y2/2
黄褐色土 | 215. 10YR5/3
黄褐色色砂質粉質土(細粒を少量含む) | |
| 166. 10Y4/2
赤褐色色砂質粘土 | 191. 2.5Y3/2
黄褐色土 | 216. 10YR5/3
黄褐色色砂質粉質土(細粒を少量含む) | |
| 167. 10Y4/2
赤褐色色砂質粘土 | 192. 10YR4/3
赤褐色色砂質粘土 | 217. 2.5Y2/2
黄褐色土 | |
| 168. 2.5Y3/3
黄褐色土 | 193. 10YR4/3
赤褐色色砂質粘土 | 218. 10YR2/2
黄褐色土 | |
| 169. 2.5Y3/3
黄褐色土 | 194. 10YR4/4
赤褐色色砂質土 | 219. 10YR2/2
黄褐色土 | |
| 170. 10R6/2/1
赤褐色色砂質土 | 195. 10YR2/2
黄褐色色砂質土 | 220. 10YR5/2
黄褐色色砂質土(堆積・礫を含む) | |
| 171. 5P84/1
暗褐色色粘土 | 196. 10Y2/1
黄褐色土 | 221. N3/1
黒色粘土(細粒を少量含む) | |
| 172. 10YR2/2
黄褐色土 | 197. 5Y3/2
オリーブ褐色土(堆積・礫を含む) | 222. 2.5Y2/1
黄褐色土 | |
| 173. 10YR2/2
黄褐色土 | 198. 7.5Y2/1
黄褐色土 | 223. 2.5Y2/1
黄褐色土 | |
| 174. 10YR2/2
黄褐色土 | 199. 5Y3/2
オリーブ褐色土(堆積をわずかに含む) | 224. 5Y4/2
灰オリーブ褐色土 | |
| 175. 7.5YR6/3
赤褐色色砂質土 | 200. 10YR4/2
黄褐色色粘土(細粒をわずかに含む) | | |

図29 2区調査区壁面土層断面図⑨(S=1/50)

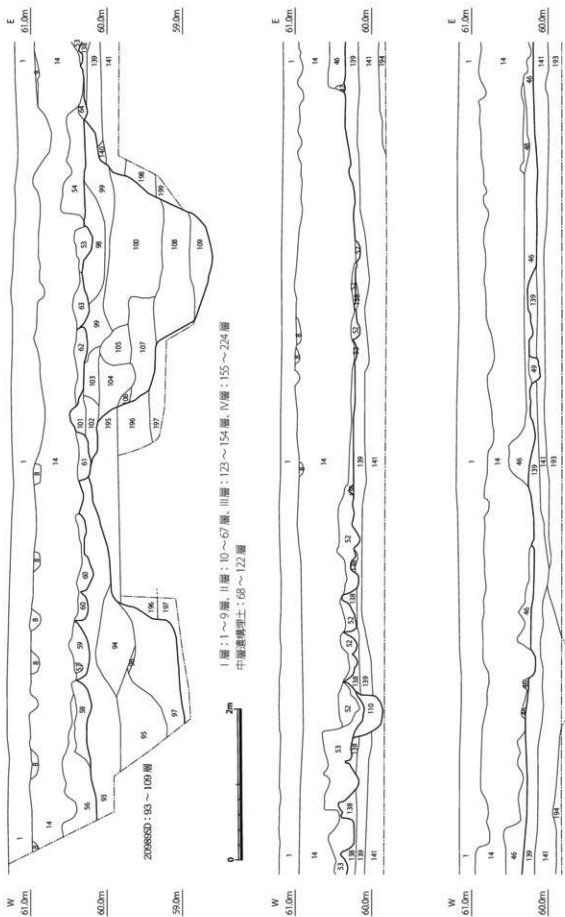


图 30 2区調査区断面 土層断面図巻 (S = 1/50)

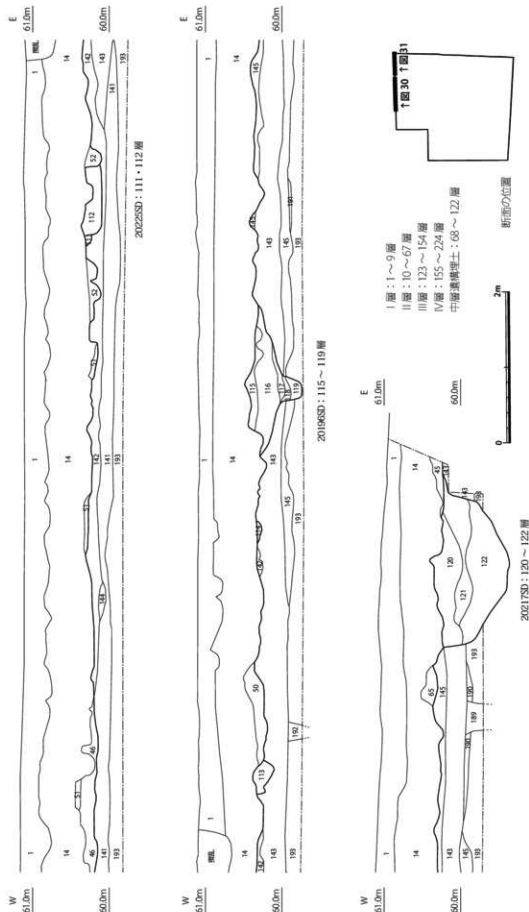


図31 2区調査区断面 土層断面図① (S = 1/50)

第6節 2区 遺構

2区の遺構は上層遺構・中層遺構・下層遺構の三段階に大きく分けられる。遺構の時期は、上層遺構は中世以降、中層遺構は古墳時代、下層遺構は縄文時代後期～晩期が、それぞれ中心となる。遺構面は上層遺構と中層遺構がⅢ層上面である。縄文時代後期～弥生時代の遺物包含層であるⅣ層を除去したⅣ層上面が下層遺構の遺構面である。

上層遺構は中世以降の耕作溝や土坑などの遺構群である。中層遺構は古墳時代、特に中期を中心とする時期の遺構で、大型の河道とその周辺に展開する土坑・溝・ピット群などから成り、今回の調査

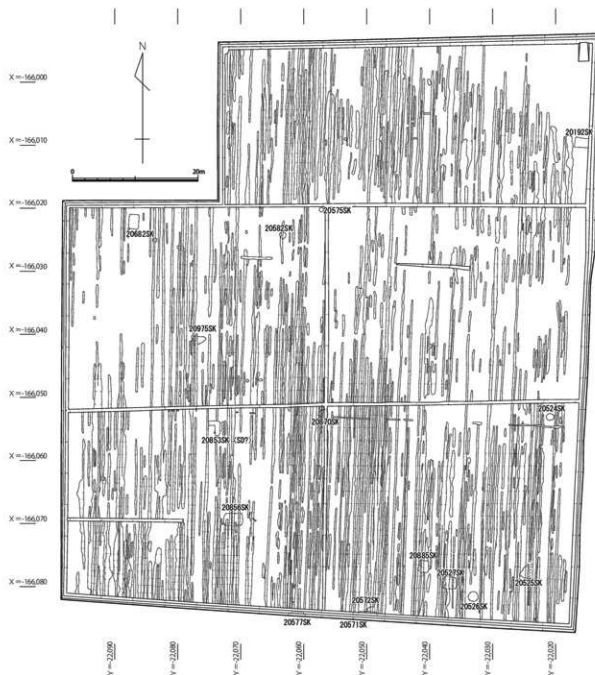


図 32 2区上層遺構配置図 (S = 1/600)

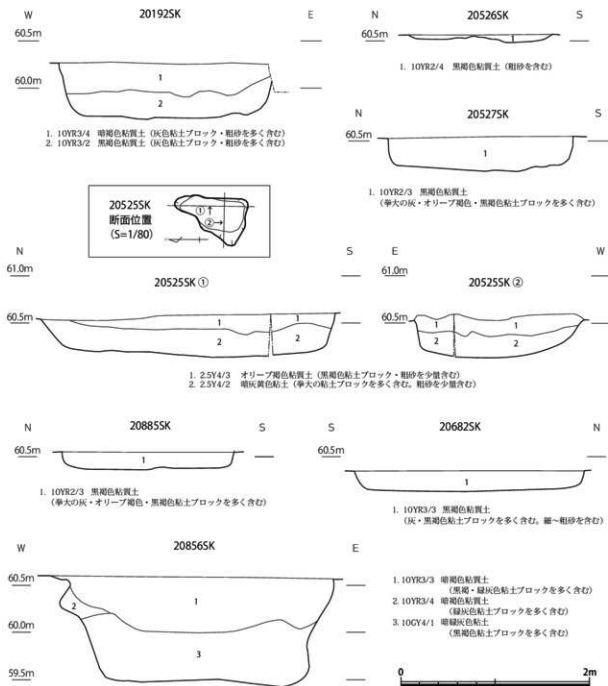


図 33 2区上層遺構断面図 (S=1/40)

成果の中心となる遺構群である。出土遺物の量が非常に多く2区の大部分を占める。下層遺構は縄文時代の土坑・ピットである。

上層遺構 (図 32・33)

上層遺構には耕作溝群と土坑、ピットがある。各遺構埋土とⅡ層中からの出土遺物から、多くは中世の遺構であると考えられるが詳細時期不明の遺構も含まれ、一部は近世まで下る可能性もある。

耕作溝群はいわゆる素掘り耕作溝である。調査区全域に存在する。大部分は南北方向で、東西方向の溝は小規模なものがごく少数存在するのみである。溝の向きはほぼ方位に沿い、ごくわずかに北で東に振れる。南北溝の中には断面形が台形で他の溝よりもやや深いものが数条存在している。これら

は区画溝である可能性もある。溝幅や埋土は他の耕作溝と大きな差異は無い。耕作溝からの出土遺物としては、下層に由来する古墳時代以前の遺物の他に中世の瓦器や土師器がある。量的には前者が多数を占め、中世の遺物は少なく細片が多い。時期が分かる遺物は13世紀代の土器が主である。

土坑はいずれも重複関係から耕作溝よりも古い遺構と判断できるものである。調査区全体に散らばるが南東部に多い。このうち8基(20192・20525・20527・20572・20577・20682・20856・20885SK)は粘土取りの目的で掘削された土坑であると考えられる。掘削後短期間で人為的に埋め戻されたようである。平面形は7基が一辺約1~2m大の方形、1基(20525SK)が長辺約2mの不整形である。深さは約0.5~1.8mと差がある。図33の断面図には表われない形で土坑の壁面の一部を大きく抉り込む形で掘削されているものもある。遺物はほとんど出土していないが、瓦器と土師器の細片がわずかにある。20256SKを始めとする他の土坑は、いずれも深さ0.05m未満の小土坑で遺物は出土していない。埋土は耕作溝と同様である。

これらの他に耕作溝と同時期、あるいは新しい時期のピットが少数ある。

中層遺構(図34~63)

中層遺構は古墳時代中期を中心とする時期の遺構群で、特に中期前半の遺構・遺物が多い点の特徴的である。遺構・遺物ともに2区の調査の中心となる一群である。遺構は調査区中央~北部を中心に分布する。調査区東部から北西にかけて大規模な河道(20989SD。以下、報告文章中では基本的に河道と表わす)が横断しており、その両岸に遺構が展開する。とくに河道の北~東岸にあたる調査区北東部(2-1区東半。図35)には大小の遺構が多数存在する。遺構は河道、井戸、土坑、溝、ピットがある。河道は報告内容が多く、最後に記すこととする。

井戸は3基存在する(図37)。いずれも河道の北東に位置する。

20234SEは河道の北岸に接する位置に構築された井戸である。調査区北東部の土坑・ピット群からはやや離れた地点にあたる。掘方は直径約1.8~2.1mの円形で、深さ1.7mを測る。井戸下半から板材と丸材を組み合わせた井戸枠が出土している(図版23~25)。井戸枠は平面方形に組まれている。幅約0.15~0.4m・高さ約0.6~0.8mを測る板材を四方の側板として複数立て並べ、それらを板材や丸材を用いて内外から支える構造である。20234SEの調査は井戸枠上端を検出し、河道の調査後に河道(南)側の断削調査によって井戸枠外面、続いて内部の調査を行っている。井戸枠材は記録後、基本的に持ち帰って保管している。うち1点の縦板(図69~61。2点の縦板が一組となる)の実測図を掲載している。これは建物の屏からの転用材であると考えられる。他の枠材についても他所からの転用である可能性は高いと考えられる。井戸枠は東辺がやや外側に倒れた状態で出土しているが、利用時の状態を概ね保っていたと推測される。各枠材の上端は他の部位よりもささくれ立った状態で出土している。井戸の利用を終えた後は枠全体が隠れる程度まで埋めて放棄されたようである。その後、河道の氾濫層等が流入している。20234SEからは土師器、須恵器が出土しており、時期は中期前半であると考えられる。59は井戸枠内の底面付近から出土した土師器甕である。

20166SEは調査区北東部の土坑・ピット群の中心付近に位置する。平面形は直径約1.6mの円形で、深さ約1.3mを測る素掘りの井戸である。井戸の下半からは調査時も一定量の湧水があり、利用時に生じたと考えられる壁面の崩落も複数見られる。井戸の大半が流入土によって埋没した後、人為的に埋められたようである。中期前半の土師器、須恵器が出土している。上層の埋め土から出土した須恵

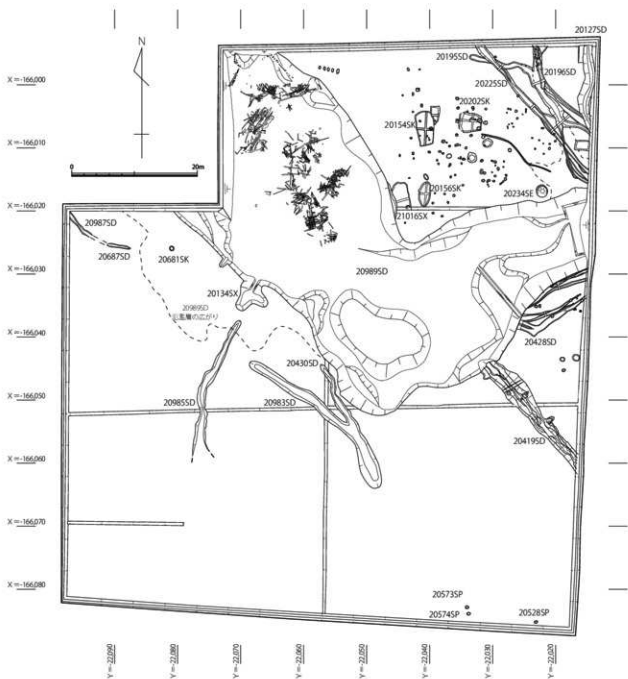


図 34 2区中層遺構平面図 (S = 1/600)

器は今回出土している初期須恵器の中では相対的に新しい部類に入り、20166SEの廃絶時期も周辺の遺構の中でやや新しい時期にあたと推測される。

20169SEは20166SEの北東約2mの地点に位置する素掘りの井戸である。平面形が直径約1.5mの円形で、深さ約1.2mを測る。自然堆積による下部が埋没した後に人為的に埋められたと考えられ、その埋め土の最下部から須恵器・壺の下半が出土している。その他に土師器の細片がある。時期は中期前半である。

土坑は調査区北半に散在している。以下に主要なものから順に述べることにする。また、土坑と関連の深いビットについても併せて触れる。

20202SKは調査区北東部遺構群の中心部に位置する大型土坑である(図34・38・39)。平面形

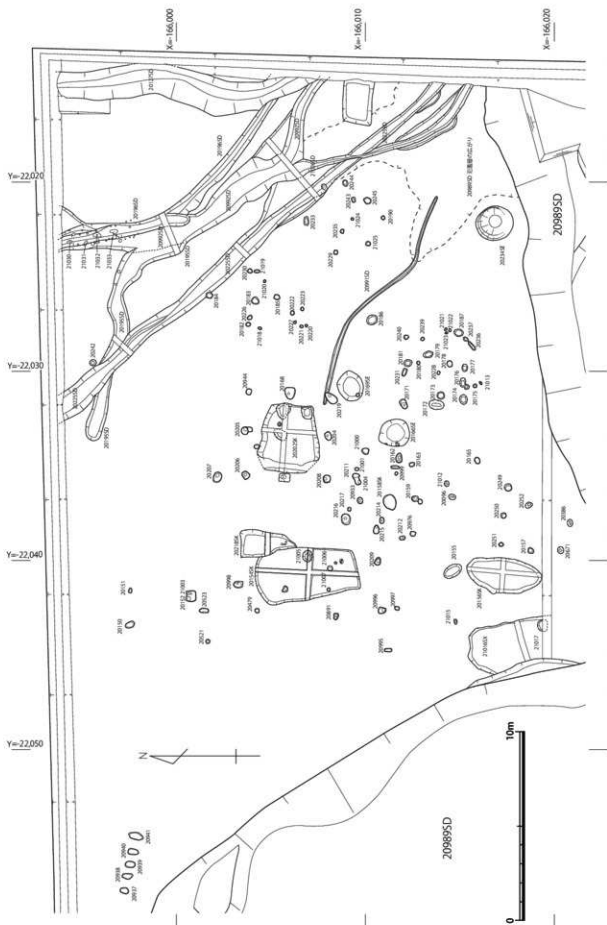


图 35 2区调查区北东部 中房遗構平面图 (S = 1/200)

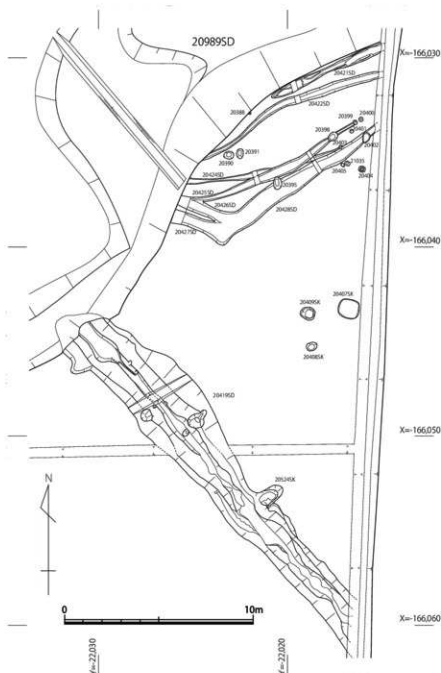
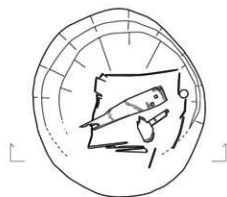


図 36 2区調査区東部 中層遺構平面図 (S = 1/200)

からの出土遺物は土師器があり、時期は中期前半である。20202SKの特徴として、土坑の周りを囲うような形で8基のピットが方形に並ぶ点が挙げられる。これら8基はいずれも断面の状況から柱穴と考えられるピットであり、東西2間(4.4m)×南北2間(4.2m)の建物に復元される。各ピットの規模は0.3~0.5mである。この建物と20202SKの中心位置は概ね一致しており、両者は一体の遺構である可能性が指摘できる。何らかの作業場のような場所であった可能性などが考えられる。なお、調査区北東部にはピットが一定量存在するが、建物に類する構造物であることが確実な場所はここのみである。

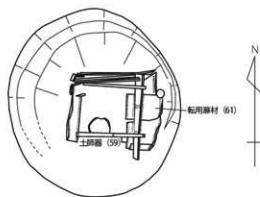
20154SKは20202SKの西約4mの地点に位置する長方形土坑である(図40)。南北5.5m・東西2.4~3.2mを測り、北西部がやや丸く膨れる平面形である。深さは最大約0.2m弱で、断面形は全体に浅いすり鉢状を呈する。20154SK内には土坑1基とピット3基が存在する。21005SKは直径

は一辺約3.3~3.7mの不整形である。深さは土坑内土坑部分を除くと最大0.15m程度と浅く、本来はもう少し大型の方形であった可能性が考えられる。土坑内の底面には、中央付近に一ヶ所(20993SK)、東辺沿い二ヶ所(20994・21008SK)に直径約0.5~0.7m大の土坑が構築されている。20993SKは深さ0.1mと浅く、埋土に粘土と砂を含む。20994SKは深さ約0.5mと最も深い。21008SKは深さ0.2mを測り、埋土の状況は20993SKと共通する。20202SKの底面には貼床の可能性があり、まじりの良い砂混じり粘土~粘質土が薄く敷かれている。この土層は上記の三土坑の上に貼られている。遺構の北東部、貼床面上からは土師器・甕の上半部が据え置かれたような状態で出土している(56)。20202SK



井戸枠上端部 検出段階平面図

20234SE

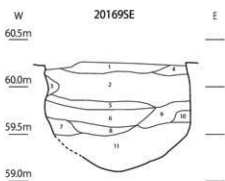
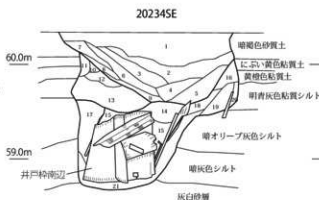


井戸枠内埋土完掘平面図 (特南辺除去)

1. 5Y4/2 灰オリーブ色砂質土
2. 7.5Y4/2 灰オリーブ色砂質土
3. 7.5Y3/2 オリーブ黒色砂質土
4. 10Y3/1 オリーブ黒色砂質土
5. 10Y2/1 黒色砂質土
6. 5Y3/1 オリーブ黒色粘土 (粗砂をわずかに含む)
7. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (粗砂をわずかに含む)
8. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 (粗砂、細礫を多量に含む)
9. 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土 (粗砂、細礫をわずかに含む)
10. 5Y3/1 オリーブ黒色粘土
11. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土 (粗砂をわずかに含む)
12. 5Y3/1 オリーブ褐色粘土 (砂をわずかに含む)
13. 5GY3/1 暗オリーブ褐色粘土 (砂をわずかに含む)
14. 5BG4/1 暗青灰色シルト質粘土
15. 5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト (粗砂を含む)
16. 10Y3/1 オリーブ黒色粘土 (粗砂を少量含む、木片を少量含む)
17. 5GY3/1 暗オリーブ灰色粘土
18. 10Y3/1 オリーブ黒色粘土 (木片を少量含む)
19. 5GY3/1 暗オリーブ灰色粘土 (粗砂をわずかに含む)
20. 10Y2/1 黒色粘土
21. 5BG4/1 暗青灰色シルト質粘土

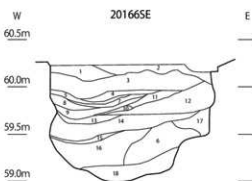
- 1～9層：井戸閉鎖後の流入土
 10～15層：井戸放棄時の埋土
 16～21層：井戸構築時の掘方埋土

W 0 2m E
 61.0m



1. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (粗砂・炭をわずかに含む)
2. 10YR3/2 黒褐色粘質土 (粗砂・炭をわずかに含む)
3. 10YR3/2 黒褐色粘土
4. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (粗砂を含む)
5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 (粗砂を含む)
6. 5GY2/1 オリーブ黒色粘土 (粗砂を多量に含む)
7. 7.5GY3/1 暗緑灰色粘土
8. 7.5GY3/1 暗緑灰色粘土 (細砂を含む)
9. 2.5Y3/2 黒褐色粘土 (粗砂をわずかに含む)
10. 10Y3/1 オリーブ黒色粘土 (粗砂を多量に含む)
11. 5GY3/1 暗オリーブ灰色粘土

0 2m



1. 10YR3/2 黒褐色粘質土 (粗砂をわずかに含む)
2. 10YR3/2 黒褐色粘質土 (粗砂・炭をわずかに含む)
3. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (粗砂・炭をわずかに含む)
4. 10YR3/2 黒褐色シルト質粘土
5. 7.5Y5/2 灰オリーブシルト
6. 5GY2/1 オリーブ黒粘土
7. 7.5Y2/1 黒色粘土
8. 2.5Y3/1 暗オリーブ褐色シルト質粘土
9. 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土
10. 5Y3/2 オリーブ黒色粘土 (粗砂をわずかに含む)
11. 10YR3/2 暗褐色粘質土 (粗砂・炭をわずかに含む)
12. 2.5Y3/2 暗褐色粘質土 (粗砂・炭をわずかに含む)
13. 7.5Y2/1 黒色粘土 (粗砂を含む)
14. 5GY3/1 暗オリーブ灰色粘土 (粗・細礫を含む)
15. 10Y4/1 灰色シルト
16. 5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土
17. 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土
18. 7.5GY3/1 暗緑灰色粘土 (粗砂を含む)

図 37 2区 中層遺構 井戸 平面・断面図 (S = 1/40)

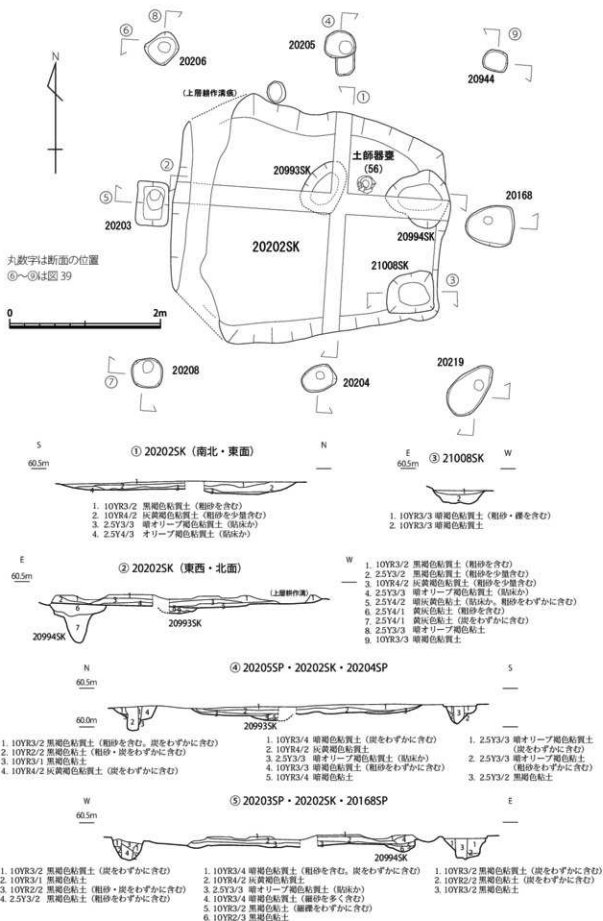


図 38 2区 中層遺構 20202SK 平面・断面図① (S = 1/50)

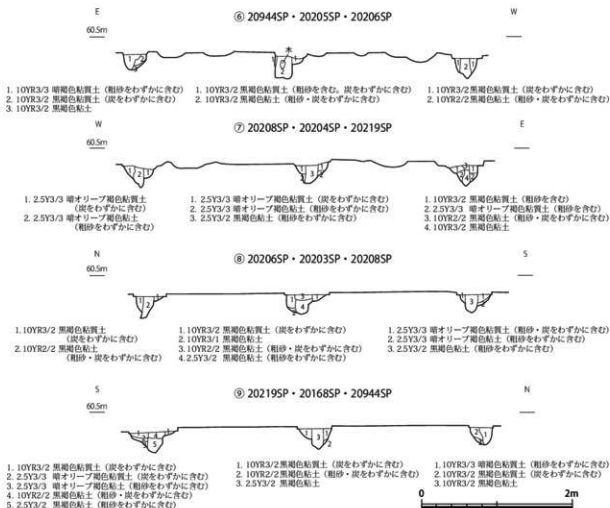


図 39 2区 中層遺構 20202SK 平面・断面図② (S = 1/50)

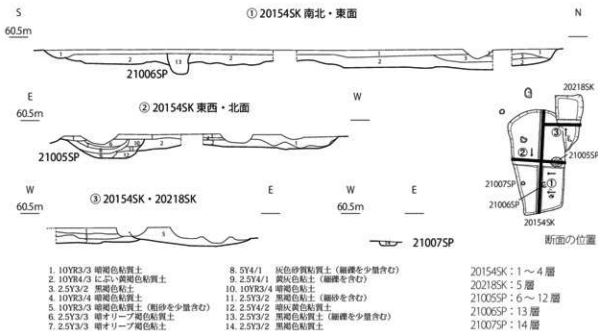


図 40 2区 中層遺構 20154・20218SK 断面図 (S = 1/40)

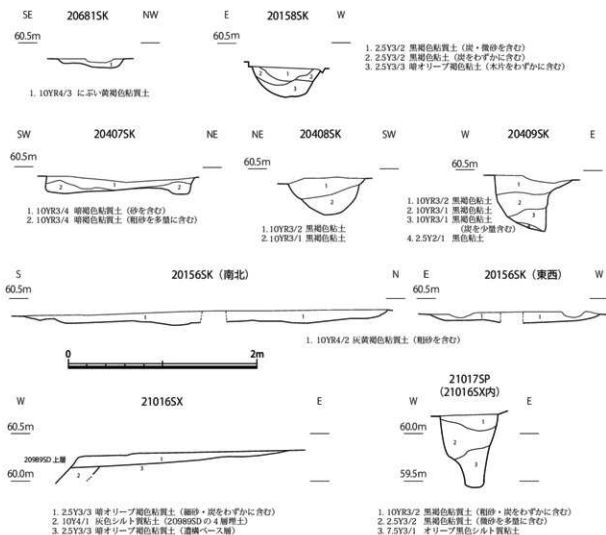


図 41 2区 中層遺構土坑 断面図 (S = 1/40)

約 0.5 ~ 0.8 m の円形土坑である。埋土には砂が含まれ、土師器片が出土している。ピット 3 基は直径約 0.25 m の小ピットである。20154SK の底面には黄褐色粘質土 (図 40 の 2 層) が全体に堆積しており、これも貼床である可能性がある。上記の土坑・ピットはいずれもその上面に構築されている。20154SK からは土師器が出土している。時期は中期前半である。

20154SK の北東隅に接する形で 20218SK が存在する。南北 2.9 m ・東西 1.4 m の長方形土坑で、深さ約 0.25 m のすり鉢状である。構築されたのは 20154SK よりも後であるが同時併存した可能性もある。

20158SK は 20166SE の西約 3m の地点に位置する円形土坑である。直径 0.8 m、深さ 0.4 m を測り、断面形は弧状である。出土遺物は土師器があり、時期は古墳時代中期と考えられる。埋土には炭化物や木材の細片も含まれる。廃棄土坑である可能性が考えられる。

20156SK は調査区北東部遺構群の南西隅、河道の屈曲部に近い位置に存在する。20154SK のほぼ真南約 6 m の地点にあたる。南北 3.9 m ・東西 1.9 m の楕円形土坑である。深さ最大約 0.15 m の浅く広い窪みである。土師器の細片が出土している。

21016SX は 20156SK の西隣に位置し、遺構の西辺は河道に接している。21016SX 埋土の堆積時期は河道 4 層以降～河道 1 層以前であり、古墳時代中期前半～中頃であると考えられる。河岸の作業

場や捨て場であった可能性が考えられる。21016SX 底面には 21017SP が存在する（図 41 の断面は 21016SX 埋土除去後）。直径 0.6 m・深さ 0.75 m を測るピットである。

20407・20408・20409SK は河道より南に位置する土坑である（図 36・41）。調査区東辺沿いに 3 基の土坑が近接して存在している。20407SK は一辺 1.1~1.5 m の隅丸方形である。深さ最大 0.2 m と浅いが壁面はほぼ垂直に立ち上がり断面形はコの字状を呈する。20408SK は直径 0.6~0.8 m の円形土坑である。深さ 0.4 m、断面形は砲弾形である。20409SK は直径 0.7~0.9 m の円形土坑である。深さ 0.6 m を測り、壁面は一部垂直気味に立ち上がり断面形は U 字状になる。これらの土坑からの出土遺物には土師器があり、時期は古墳時代中期であると考えられる。

20681SK は調査区西部、河道より西側に位置する直径 0.7 m の円形土坑である。20681SK 周辺は河道の氾濫層が薄く広がる一帯であり、その氾濫層下で検出した遺構である。深さ 0.1 m 弱と浅い。土師器の細片が出土している。

調査区中央~北部にかけての各所に大小の溝が存在する（図 42・43）。調査区北東隅付近や東部など、複数の溝が集まる地点も見られる。以下に地点ごとに述べる。

調査区北東部の遺構群（井戸・土坑・ピット）の東側、調査区の北東隅にあたる地点には複数の溝が存在する（図 42）。南東-北西方向ないし南北方向の溝が主である。これらの溝は南端が河道に重なる可能性があるが、いずれも調査区外にあり直接の関係性は不明である。

20127SD は調査区東壁沿いに位置する。わずかに蛇行しつつ南北方向に伸び、南端は東側に屈曲する。幅約 1.5~1.9 m を測る。深さ約 0.6~0.8 m で断面形は砲弾形を呈し、溝の壁面は部分的に崩落痕が見られる。周辺に位置する溝の中で最も古い時期の溝であり、深さが最大でも 0.3 m 程度である他の溝とは位置付けが異なる遺構である。一定の流水があったようであり、漸次埋まっている。出土遺物は石器の小片のみである。

20127SD の西側には概ね南東-北西方向に伸びる深さ 0.3 m 前後の溝が複数存在する。これらの溝は遺構の重複関係および土層断面から埋没順が確認できる。古いほうから順に 20225SD →（河道氾濫層）→ 21026SD・20195SD → 20992SD → 20196SD である。21026SD と 20195SD は時期的前後関係が不明で、あるいは同一の溝であった可能性もある。これらの溝の南側には河道からの氾濫層が薄く広がる一帯（図 35）があり、20225SD のみは氾濫層下で検出される遺構である。いずれの溝も出土遺物は少ないが 20195SD 以降には須恵器が含まれており、時期は古墳時代中期であると考えられる。20225SD のみ前期に遡る可能性もある。

20196SD は上幅約 0.6 m・下幅約 0.2~0.3 m を測る断面台形の溝である。北端付近では溝底面でピット 4 基（21030~21033SP、図 42）を検出している。うち 3 基は直径 10 cm 弱の柱が遺存している。簡単な橋のような構造物であった可能性などが考えられる。20196SD からは中期の土師器と須恵器が出土している。これらの溝の中では遺物量が最も多い。

20992SD は幅約 1.0~1.8 m を測り、一連の溝の中で最も幅広である。土師器が出土している。

20195SD 深さ最大約 0.2 m の浅めの溝で西端部は緩やかに浅くなって消える。中期の須恵器と土師器が出土している。後に掘削された 20992SD によって分断されているが、位置関係や埋土の共通性などから本来は 21026SD と同一の溝であった可能性がある。

20225SD は南東-北西方向に直線的に伸びる溝で、幅約 1.1~1.4 m を測る。深さは最大約 0.25 m で、底面高は北側がわずかに低くなる。土師器片がごく少量出土している。

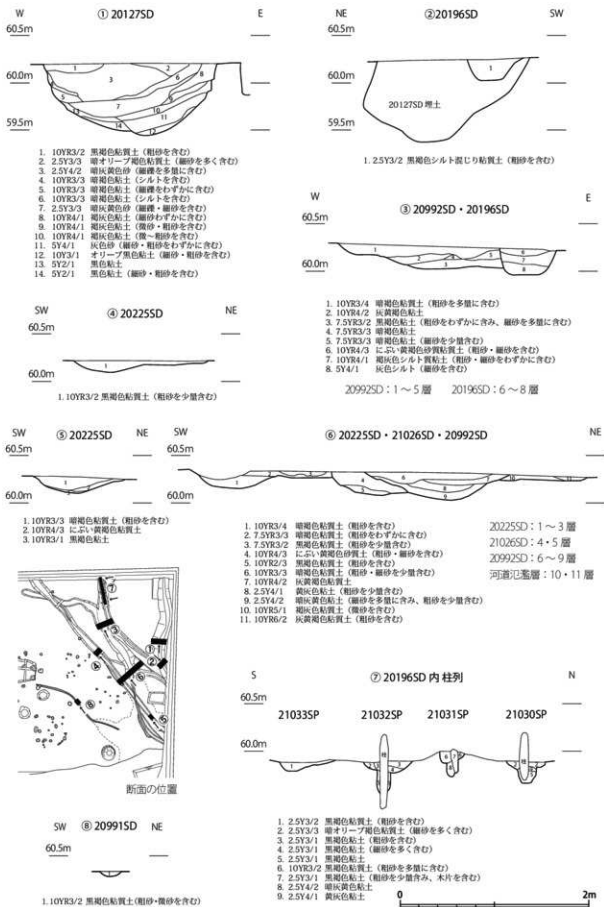


図 2 2区 中層遺構横断面図① (S = 1/40)

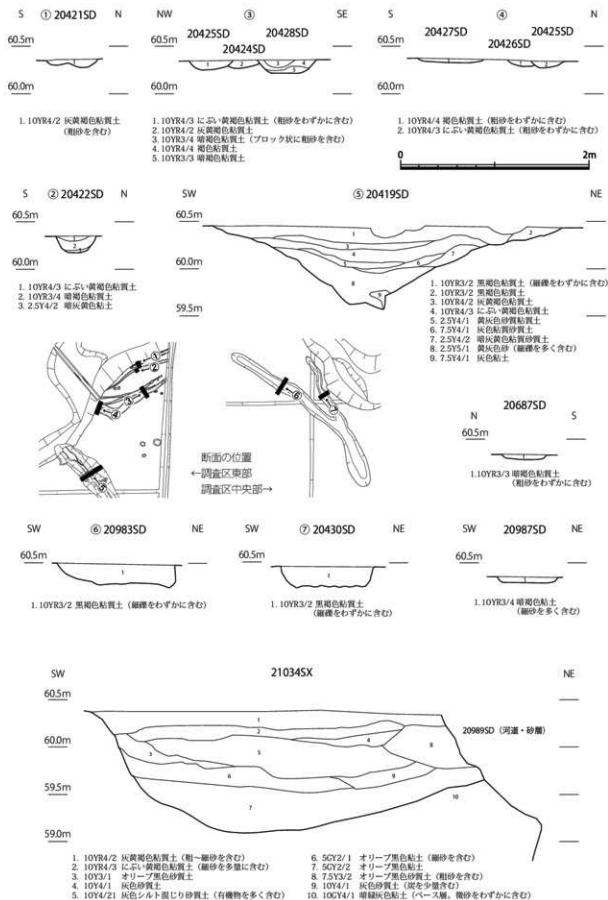


図 43 2区 中層遺溝横 断面図② (S = 1/40)

20991SD は調査区北東部の土坑・ピット群の東半部に位置する溝である。幅約 0.25 m、深さ約 0.1 m を測る。先述の河道氾濫層より新しい遺構である。土師器の細片が出土している。埋土は周辺のピットと同様である。

調査区東辺沿い、河道南岸にも複数の溝が存在する地域がある(図 43)。20421・20422・20424～20428SD は河道の南岸に接する位置に掘られた溝群である。それぞれ幅約 0.3～0.5 m、深さ 0.05～0.2 m の小溝である。溝の西端は多くが河道に接続する。出土遺物は非常に少なく、土師器の細片がごく少量あるのみである。

20419SD は河道南岸に接する比較的大型の溝である。南東―北西方向にほぼ直線的に伸びる。幅約 2.0～3.8 m、深さ最大約 0.9 m を測る。断面の形状は三角形を呈する。埋土の下半は砂層であり、一気に埋まっている。出土遺物には弥生時代～古墳時代前期の土器がある。20419SD の埋没は河道最上層の堆積より早いことも平面で確認できる。図 36 に示す 20524SK は直径約 0.7～1.1 m、深さ約 0.4 m を測る不整形の土坑状の落ち込みである。20419SD 肩部に構築された作業土坑などの可能性が考えられ、埋土は共通する。

20430SD と 20983SD は調査区中央部、河道の南側屈曲点付近に位置する溝である。Y 字状に枝分かれする溝で、北側に分かれる細い溝を 20430SD としている。幅約 0.8～1.3 m、深さは約 0.2 m を測る。断面形は台形を呈し、全体に底面はほぼ平坦である。埋土は他の中層遺構の溝と同様であるが、遺物は出土していない。

20987SD と 20687SD は調査区北西隅に位置する溝である。幅約 0.4～0.6 m、深さ 0.05 m の屈曲する溝である。耕作溝によって分断されているが本来は同一の溝であったと考えられる。遺物は出土していない。

20985SD は 20983SD の西に位置する。深さ 0.05 m 未満の微砂土がうすすらと堆積する浅い落ち窪みである。微砂土は河道氾濫層と似る。ごく少量ながら中期の須恵器と土師器が出土している。底面には足跡状のくぼみもまばらに存在する。遺構の南端部は遺構ベース層が砂層(縄文時代河道)になることで不明瞭となって消える。

中層遺構に属すピットは多く存在し、その数は約 120 基を数える(図 44～47)。調査区北東部および東辺沿い中央付近に大部分が集中する。出土遺物が少なく個々のピットに対して時期が明確なのは限られるが、他の古墳時代遺構(主に中期)との埋土の共通性や遺構の位置関係などから、多くは古墳時代中期のピットであると考えられる。

調査区北東部、河道北岸には特に多くのピットが存在し、これらの中には柱穴を一定量含む(図 34)。先述のとおり明確に建物となる柱列は 20202SK 周囲の柱穴群のみであるが、これらの他に簡単な構造物になる可能性があるものも存在する。20166SE の南東隣や 20225SD 西隣の一帯などがこれにあたる。河道北岸でもこれらの遺構群から西に離れた位置(図 35 西端)には、5 基のピット(20937～20941SP)が並ぶ地点がある。隅丸長方形のピットが 5 基、約 0.4 m 間隔で一直線に並ぶ。深さ約 0.2～0.3 m のピットで、明確な柱痕は無い。並ぶ向きは河道と並行するようだが完全には一致しない。

調査区東辺沿い、河道南岸の小溝群付近にも同様のピットが複数存在する。北岸と比較して小型のピットが主であるが柱穴も含まれる。

この他に調査区南東隅付近に 3 基のピット(20573・20574・20528SP)が存在する。

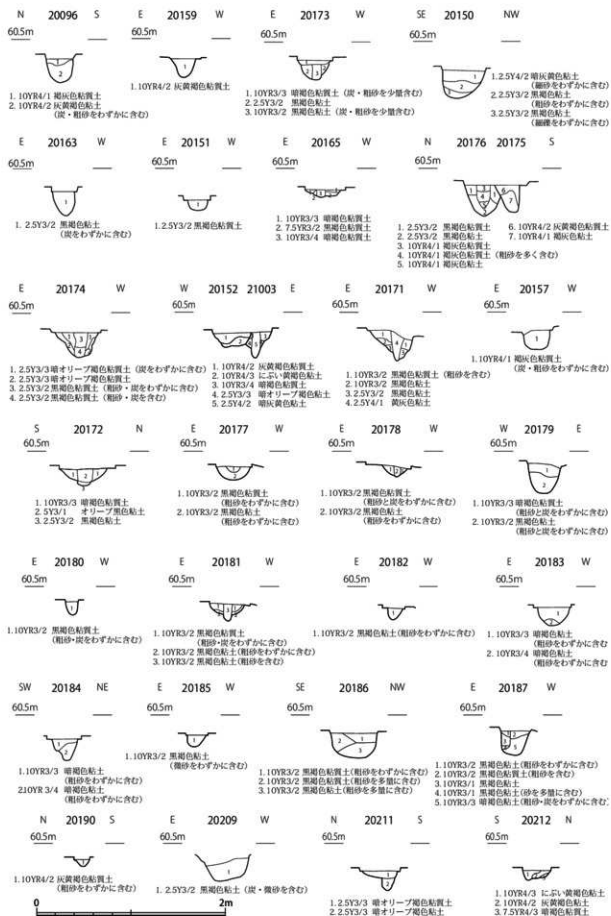


図 44 2区 中層遺構ピット 断面図① (S = 1/40)

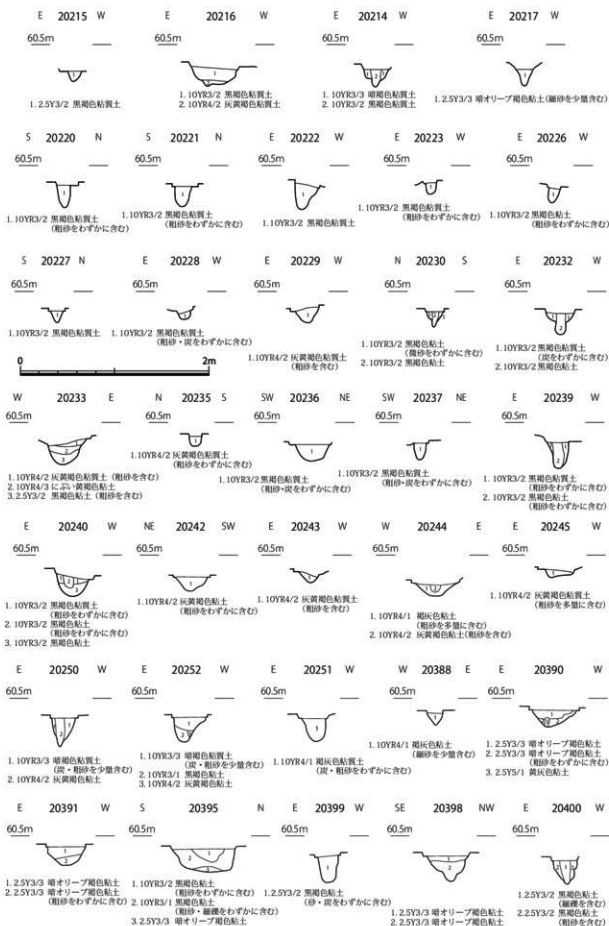


図 45 2区 中層遺構ビット 断面図② (S = 1/40)

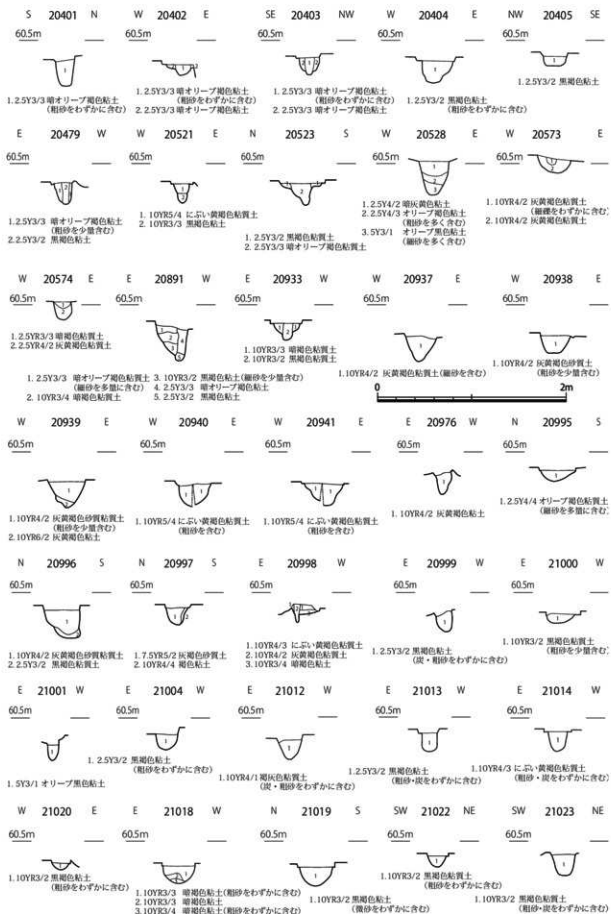


図 46 2区 中層遺構ピット 断面図③ (S = 1/40)



図 47 2区 中層遺構ビット 断面図④ (S = 1/40)

河道は遺構の規模が大きく出土遺物も非常に多い、中層遺構の中核を成す遺構である。この古墳時代の河道に対しては 20989SD という遺構名を用いて調査・記録を行っており、調査記録や出土遺物にはこの名称を付して保管している。なお、調査の初期段階においては河道南半部を便宜上 20418SD (NR) として扱っているが、後に 20989SD に統一しており同一の河道を指す。

河道は調査区北半に位置し、その半分近い面積を占める大型の河道である (図 34・49)。幅約 12～30 m、深さ最大約 2.5 m を測る。この範囲内で流れが時期的に変化している。調査区の東から西へと流れ、調査区の中央付近で北西方向に流れを変える。概ね南から北に向かって低くなる現在の周辺地形からすると、この河道の東半における東→西南西の流れは独特であり、人工的に作られた流れである可能性も考えられる要素と言える。

大規模な古墳時代河道の存在については試掘調査の段階で認識がなされていた。試掘調査 3 区は全体が河道の範囲内に含まれることから、本発掘調査の上層遺構検出の段階において、初めてその範囲がほぼ特定されるに至った。河道最上層には古墳時代中期後半の土器が一定量含まれることから、当初は主としてその時期の河道であるという認識であった。河道の調査は、まずその上面に存在する河道の最終段階の堆積と思しき土坑・落ち込みの調査から実施している。図 49 に示す 20270SD および 20417SX がそれにあたる。これらの遺構が試掘調査段階で河道ベース上に存在する溝として認識されていたものである。同遺構は本質的には河道の一部と言えるが、調査記録上は別の遺構番号を付与して遺物の取り上げを行っている。中期後半の土器や祭祀遺物が出土している。この後、河道の調査全体の計画を練る目的で河道北半部に河道を横断する先行トレンチを設定し、河道の堆積や遺物の状況を確認している。その結果、河道下半に初期須恵器を含む古墳時代中期前半の遺物が多量に存在すること、同じく木材も多量に出土し何らかの構造物のある可能性があること (後に結果として明らか遺構が確認された)、調査には多くの時間を要することなどを把握するに至った。

図 48 は河道北半の横断面 (先行トレンチ北壁) である。これを元に全体を河道 I 層～河道 V 層に分けて把握し、以後の調査を進め、また各層の認識に問題が無いことを確認している。河道各層の内容は以下のとおりである。ただし、河道という遺構の性質上、層位の違いを認識することが難しい部分も多い。遺物の取り上げに際しては出土層位を明確に判断し得るものについて、これら出土層位を明記している。

河道 I 層が河道の最上層にあたる灰白色砂～黄褐色微砂層で、河道上面のほぼ全体に広がって存在する。厚さ約 0.2～0.7 m である。中期後半の遺物を含み、この時期に河道はほぼ埋没したと考えられる。その他に下層に由来する中期以前の遺物も一定量存在する。調査はまずこの I 層を除去することから始まり、その下面で河道 II～IV 層が検出される形となる。

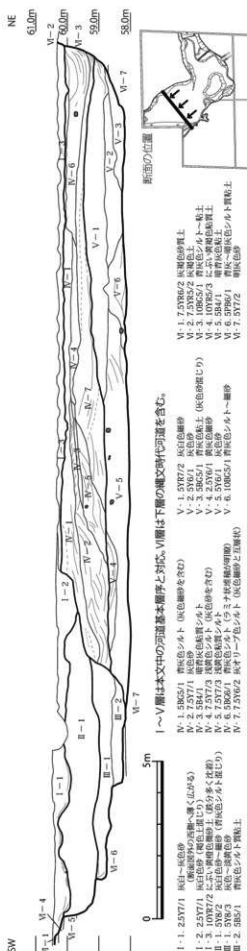


図 48 2区 中層遺構河道 断面図 (S = 1/120)

河道Ⅱ層は灰白色系の砂で部分的にシルト層を挟む。河道Ⅲ層はⅡ層下に位置する灰～淡黄色砂・青灰シルト層である。Ⅱ・Ⅲ層の境界は不明瞭であり、調査の過程においては可能な範囲で分けて認識しているが一連の堆積であると考えられる。河道Ⅱ・Ⅲ層は図 49 のように河道内で溝状に堆積している。次に述べる河道Ⅳ層段階で河道の大部分が一旦埋没しかけた後に、再び流れを取り戻した流路に対する堆積がこのⅡ・Ⅲ層であると考えられる。Ⅲ層底面は地点によっては河道底面に達する。Ⅱ・Ⅲ層からの出土遺物は大部分が下層に由来する中期前半以前の遺物であるが、わずかに中期中頃の土器を含むため、この時期の堆積であると考えられる。

河道Ⅳ層は主として青灰色シルト層からなり、微砂～砂を含む細かな層の重なりが見られる。緩やかに河道が埋没していった時期の堆積と考えられる。厚さ約 0.5～1.5 m を測る。元は河道全体に広がっていたと考えられるが、Ⅱ・Ⅲ層が堆積する流路によって当該部分では削られている。Ⅳ層、特に上半部は他の層と比較して出土遺物が非常に少ないため、調査の都合上、部分的に重機を用いた掘り下げを行って他の調査時間を確保している。出土遺物の時期はⅤ層と同じく中期前半以前に収まる。

河道Ⅴ層は河道底面に堆積する。厚さ約 0.5～1.2 m を測る。主として砂層からなるが部分的に粘土～シルト層も見られる。また、Ⅴ層中には後述するしがらみ遺構(杭列)が構築されており、これらの木材間にも同じくシルト層が多く堆積する。明確にⅤ層として認識できる土層が存在する範囲は、河道北半東側(しがらみ遺構がある一帯)および河道南端部(南に膨らんで屈曲する一帯)である。主な出土遺物としては初期須恵器・韓式系土器を含む多量の土器、木製品、動物骨などがある。初期須恵器は TK73 型式以前の一帯であり、Ⅴ層中にはこれより新しい時期の遺物は含まれない。また、河道中からは縄文時代～古墳時代前期の遺物も出土しており、その量はⅤ層が最も多い。ただし、これらは古墳時代中期の遺物と比較して表面の劣化が激しく、長く流水に晒されていることが確認できる遺物が大半を占める。

図 48 で河道Ⅵ-7 層としている砂層は、古墳時代河

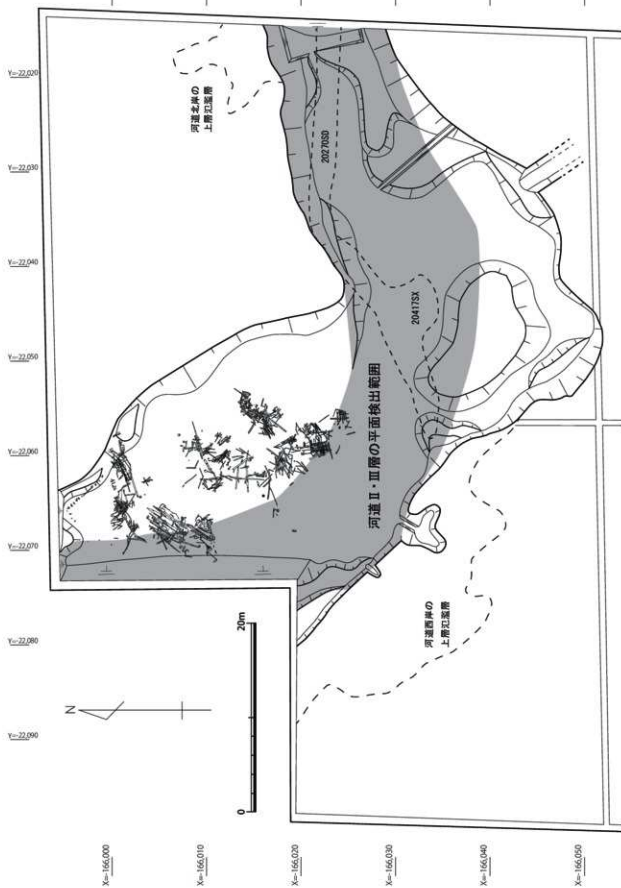


図49 2区 中層遺構河道 平面図 (S = 1/400)

Y=22,070

Y=22,060

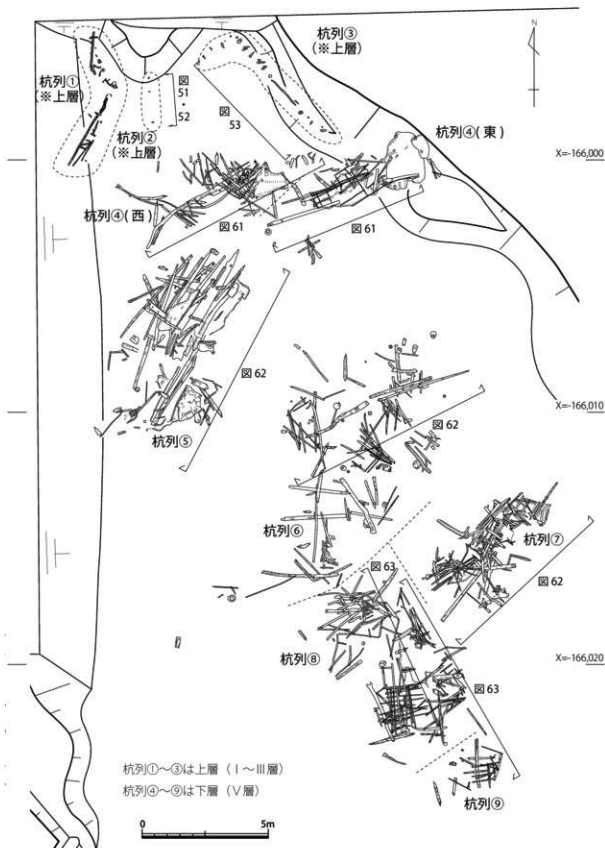


図 50 2区 中層遺構河道 しがらみ道構認識図 (S = 1/150)

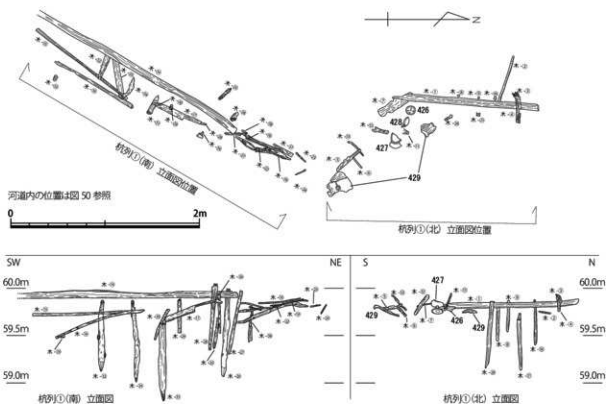


図 51 2区 中層遺構河道 杭列①平面・立面図 (S = 1/40)

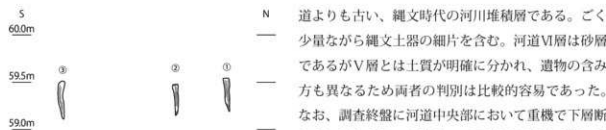


図 52 2区 中層遺構河道 杭列②立面図 (S = 1/40)

道よりも古い、縄文時代の河川堆積層である。ごく少量ながら縄文土器の細片を含む。河道VI層は砂層であるがV層とは土質が明確に分かれ、遺物の含み方も異なるため両者の判別は比較的容易であった。なお、調査終盤に河道中央部において重機で下層断ち割り調査を行った結果、VI層砂層が古墳時代河道底面からさらに2m以上の深さまで堆積していることを確認している。

次に河道内の状況について述べる。河道北半の東側では複数の杭列が出土している(図50~63)。これらをまとまりごとに杭列①~⑨として調査を行っている。杭列①~③と④~⑨では出土層位が異なる。杭列①~③は比較的小規模な杭列で、河道IV層の堆積上に構築されている。構築時期は杭列①・②は中期中頃以降、杭列③は中期前半以降であると考えられる。杭列④~⑨は河道V層中に構築されており、これらを一括して「しがらみ(柵)遺構」としている(図54)。この下層のしがらみ遺構は構築・利用時の状態からおそらくは概ね位置を保ちつつ倒壊した状態で出土している。構成材の一部は上部が河道IV層下半にまで頭を出す状態であった。しがらみ遺構周辺(主として河道V層。しがらみ内部を含む)から出土する遺物の時期はTK73型式以前にあたる。しがらみ遺構の利用および埋没はこの時期にあたり、構築の開始時期については出土遺物や杭列の状況などから、この時期からそれほど遡らない可能性が高いと考えられる。元はしがらみ遺構の構成材であったと推測される木材は河道II~IV層からも散発的に出土している。河道II・III層段階の流路が通る河道北半西側などにも、本来はしがらみ遺構が展開していた可能性があるが遺存していない。

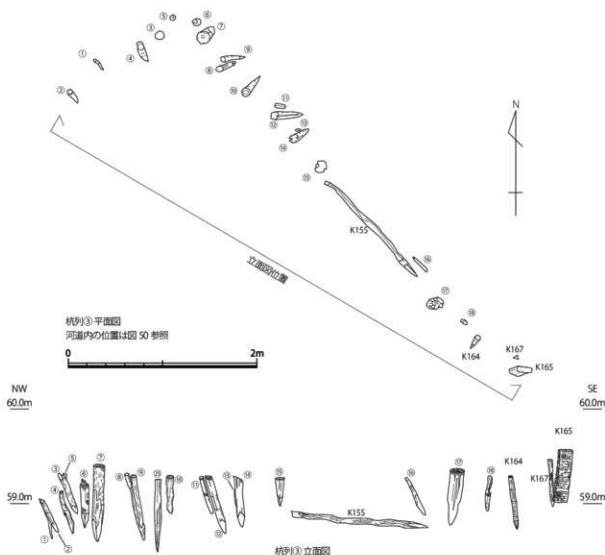


図 53 2区 中層遺構河道 杭列③平面・立面図 (S = 1/40)

しがらみ遺構は加工木・自然木・樹皮などの木材を多数組み合わせで構築されている。加工木は先端を尖らせただけの杭状のものから、他所からの転用品、農具などの木製品まで多様な内容を含む。しがらみ遺構は棒材を(やや不規則な)格子目状に組み、さらに樹皮や板材と合せるような地点も見られる。基本的に倒壊状態での出土であるが、各杭列は長軸が河の流れと概ね直交する方向に構築されており、機能としては水制の役割を果たしていたのではないかと推測される。

以下に、各杭列の状況を述べる。

杭列①は河道北端に位置する(図 50・51、図版 39・40)。垂直に打ち込まれた複数の杭とその上端に水平に並べられた横材から成る。検出長は約 8 mを測り、平面形はくの字状に途中で屈折する。南端は調査区外に続く。杭列上面は河道上面から約 0.5 mの深さにある。河道Ⅱ・Ⅲ層段階の流路が西側に位置していたことを踏まえると、その時期の護岸施設であった可能性も考えられる。

杭列②は杭列①の約 2 m東に位置する簡素な縦杭列である(図 52、図版 40)。上面高は杭列①よりやや低いと同様の遺構であった可能性がある。

杭列③は河道北端、河岸沿いに位置する縦杭列である(図 53、図版 40)。河岸が細かく屈曲する地点にあたり、それに合わせるような形で杭列③もくの字状に屈折する。直径約 0.1~0.15 m、長さ

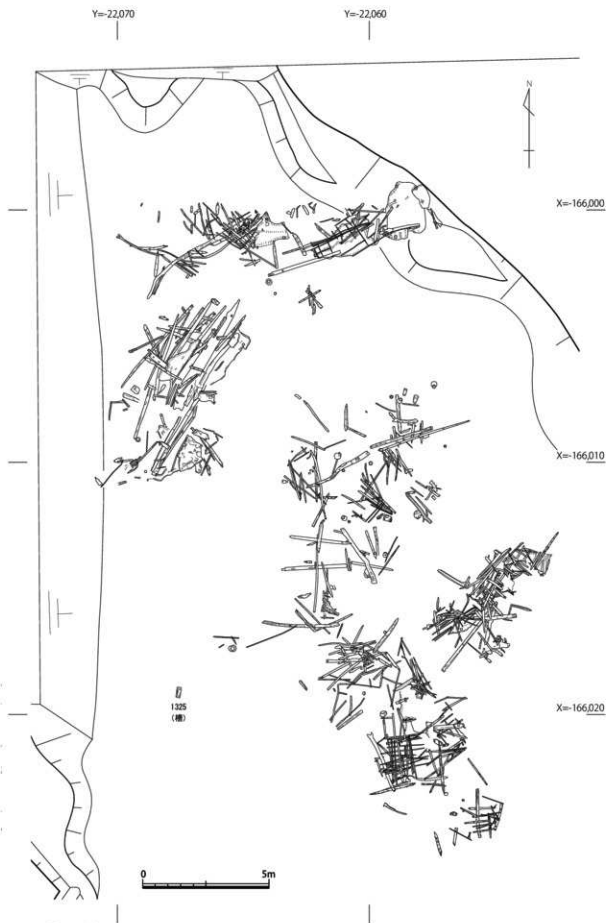


图 54 2区 中層遺構河道 下層しからみ平面図 (S = 1/150)

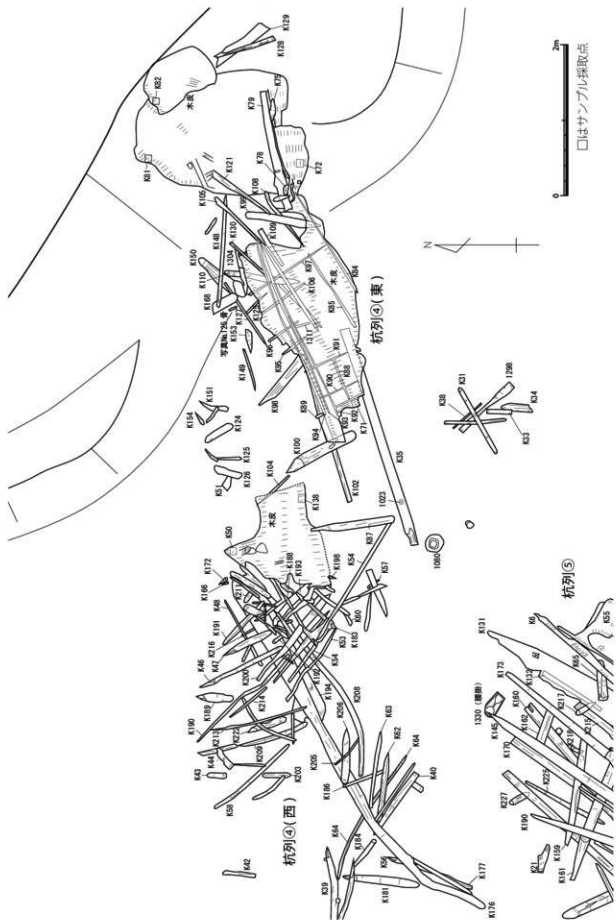


图 55 2区 中層遺構河道 杭列④平面图 (S = 1/50)

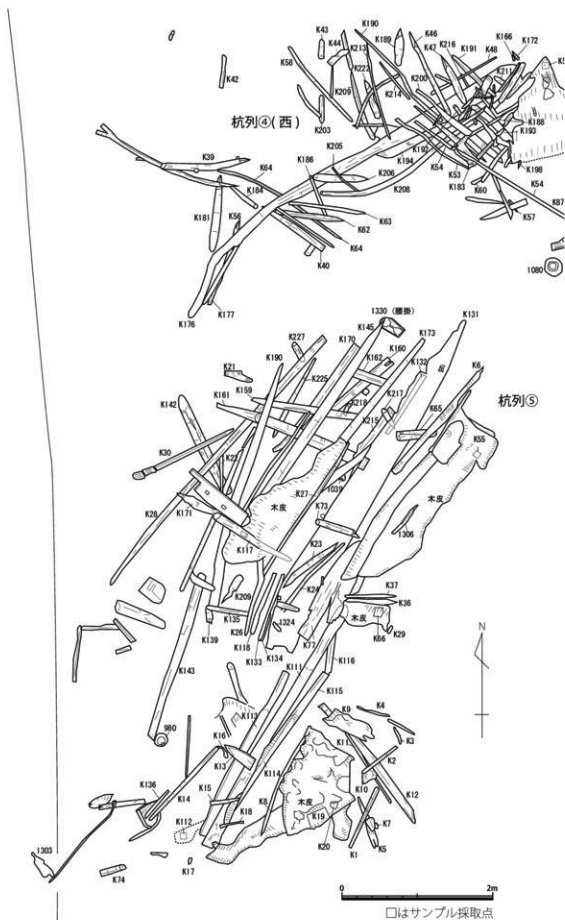


図 56 2区 中層遺構河道 杭列⑤平面図 (S = 1/50)

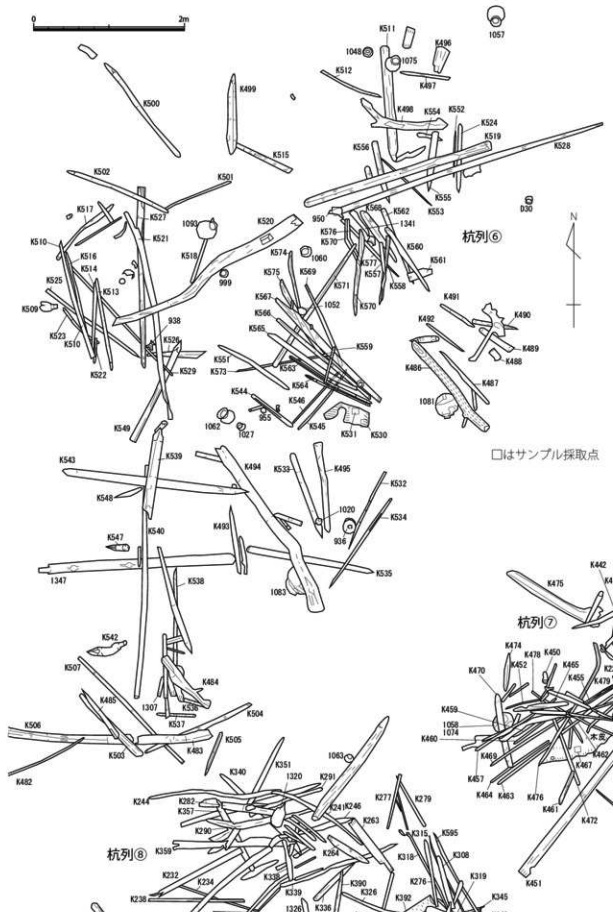
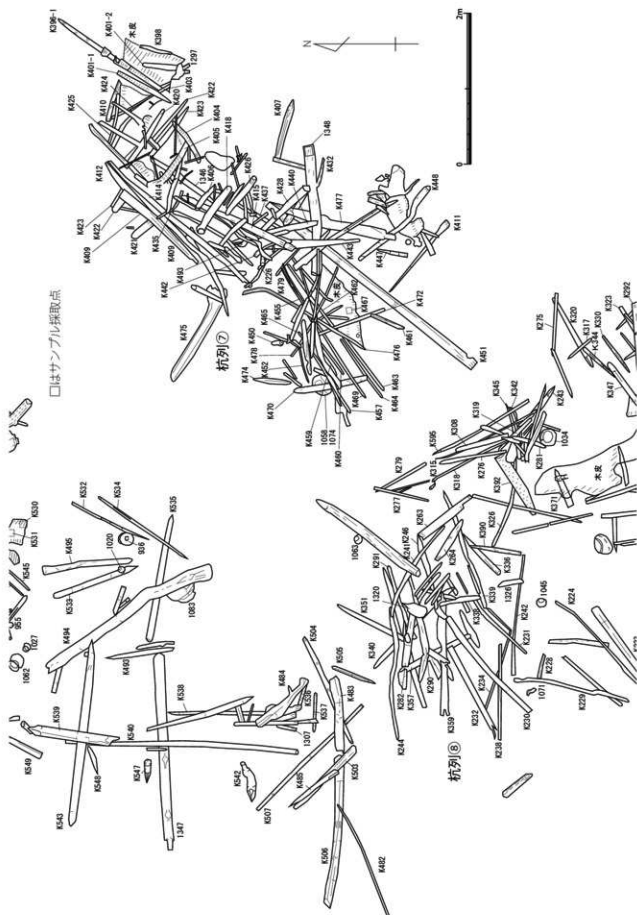


図 57 2区 中層遺構河道 杭列⑥平面図 (S = 1/50)



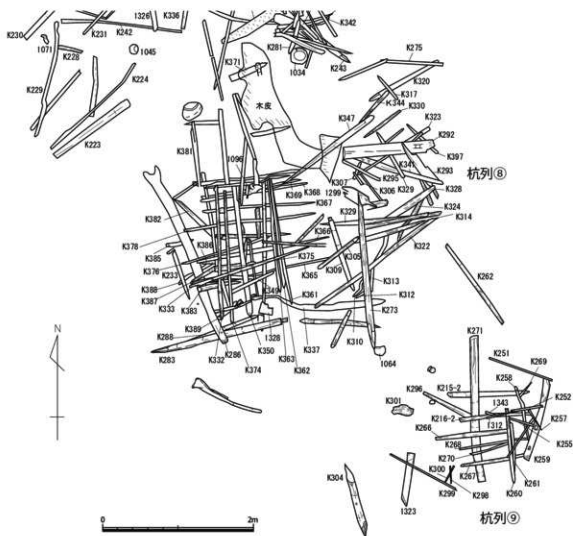


图 59 2区 中层造橋河道 杭列⑧南半・⑨平面図 (S = 1/50)

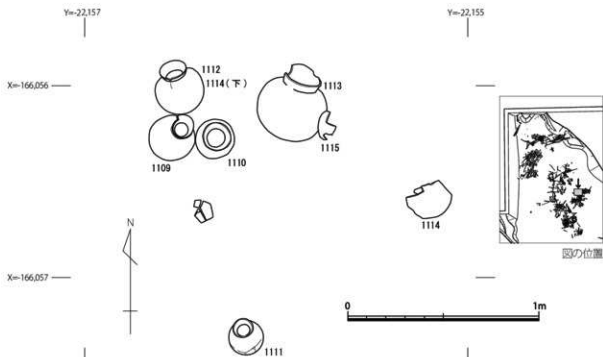


图 60 2区 中层造橋河道 杭列⑧下 土器出土状況図 (S = 1/20)

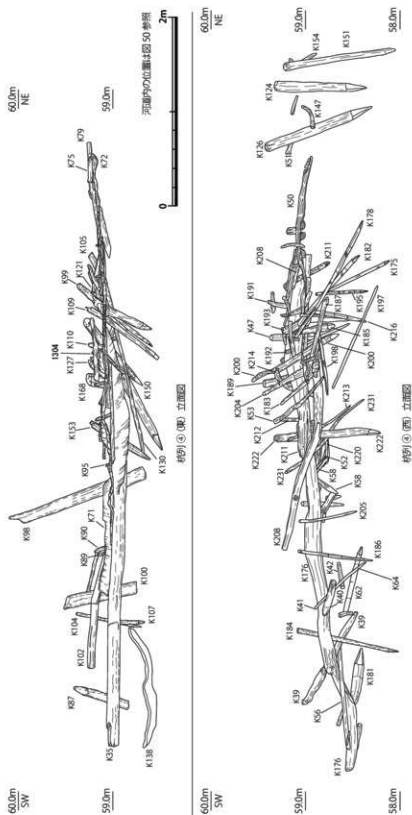


図 61 2区 中層遺構河道 杭列④立面図 (S = 1/40)

約 0.3 ~ 0.8 m 程度の杭材が長さ約 6 m にわたって直線的に並ぶ。上面の検出高は河道検出面から約 0.8 m の深さである。護岸施設である可能性が考えられる。河道IV層上層に打ち込まれる形で構築されている。時期は中期前半以降である。

杭列④~⑨は河道下層に構築された、しがらみ遺構を構成する杭列群である。出土地点のまとまりごとに④~⑨に便宜上分けているが、本来は一体のものであった可能性もある。調査時には杭列ごとに时期的差異がある(構築・利用・廃絶のタイミングに差)可能性を考えて確認作業を進めたが、明確な差異は見出されなかった。若干の时期的前後関係はあると想定されるが、廃絶時期はV層から出土している初期須恵器を始めとする土器群と対応するものと考えられる。

杭列④はしがらみ遺構の一番北に位置し、東西方向に伸びる(図 55・56・61)。中央付近でやや前後に位置がずれるため、杭列④内で(西)(東)に分けている。検出上面は一部突出している部材を除くと、河道上面から約 1.0 ~ 1.6 m の深さにある。河岸に近い東側が高い傾向にある。東西方向に長く太めの横木が通り、その周囲に縦~斜めの材を絡ませる。東側では大型の本皮を被せるような地点も見られる。木材に混ざって馬骨・馬

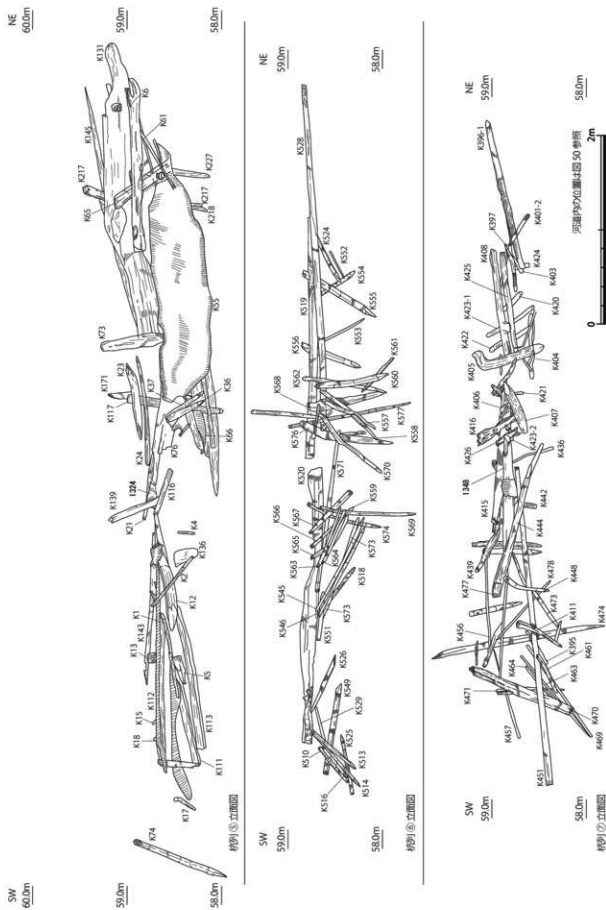


图 62 2区 中层遺横河道 杭列⑤・⑥・⑦立面图 (S = 1/40)

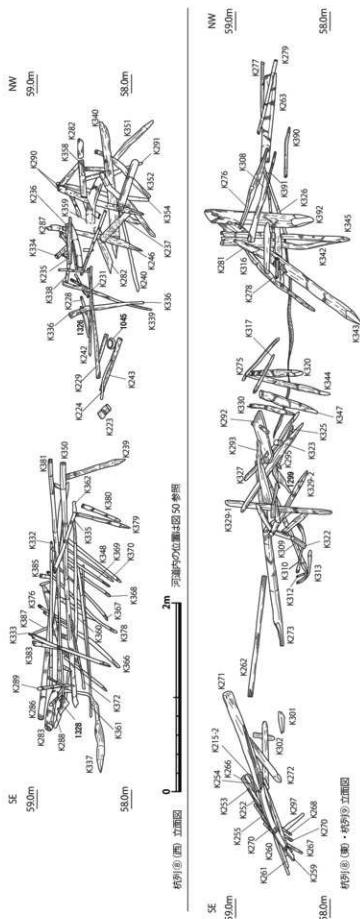


図 63 2区 中層遺構河道 杭列⑧・⑨立立面図 (S = 1/40)

歯も出土している。

杭列⑤は杭列④の南西に位置する(図 56・62)。しがりみ遺構の中で最も大型の木材が固まって出土している。南南西—北北東方向に軸を揃えて比較的大型の長材を並べるような形であり、他の杭列とはやや方向が異なる。これらと絡み合う小型の杭材は他より少ない。上面高は杭列④とほぼ同じである。杭列⑤の北東隅に引っ掛かるような形で木製腰掛(図 149—1330)が出土している。これは杭列⑤に組み込まれたというより、別の地点から流された結果ここに留まった形であると考えられる。

杭列⑥はしがりみ遺構の中央部に位置し、他よりも散乱した状態で出土している(図 57・62)。平面図中では空白となっているが、本来は杭列④・⑤の間に木材が散乱していた。これは同地点が先述の先行トレンチ内に位置し、調査の都合上、木材の細かな出土地点情報が欠失しているためである。上面高は河道上面から約 1.5—1.8 m の深さである。他の杭列より散逸具合が激しいが、流れと直交すると思われる比較的大型の横木は残る。中央付近には斜めに打ち込まれた杭群もある程度残る。木材に混ざって土器も多く出土している。

杭列⑦はしがりみ遺構東端に位置する(図 58・62)。南西—北東方向に軸を揃えた上で、細かく多様な材が密集する。上面高は杭列⑥と同様である。流れが当たる上流側は材の流失が多いと考えられる。

杭列⑧は杭列⑦の南西隣に位置する(図 58・59・63)。南・北それぞれ平面約 3—4 m 大の塊りに分かれると考えられる。北側の一群は比較的小型の材の集

まりであり、倒壊具合が他より激しい。一方、南側の一群は杭を含む長材が格子目に組まれた状態がよく残されている（図版 46）。組んだ状態をほぼそのままに奥に倒れた形と思われる。

杭列⑨は最も南に位置する（図 59・63）。小規模で使用材も小型が中心であるが、杭列⑧南側と同様に格子目状に組んだ状態が残る。ほぼ完全に平たく横倒しになった状態で出土している。上面高は河道上面から深さ約 1.6 m である。

これら杭列の構成材に流木を加えた多数の木材が、平面的には河道全体から広く出土している。層的には河道 V 層が最も多く、次いで IV 層→II・III 層と基本的に下層ほど多い傾向にある。I 層からの出土はほぼ無い。これらの時期は古墳時代中期（特に前半）を中心とし、それ以前のものが混ざる形と考えられる。杭列の構成材については可能な限りで個別番号を付与して発掘調査時に記録を行っている。杭列①～③の木材は杭列ごとの番号を、杭列④～⑨および周辺からの出土木材には通しの K 番号を付与し、調査・整理・保管の各段階でこの番号をそのまま使用して管理している。個別番号を付与した木材は約 650 点あり、表 1～9 にそれぞれの内容や処置についてまとめている（K 番号は図 55～63 中の番号と対応。ただし出土状況図では実測図掲載遺物については遺物番号を記載）。このうち約 260 点については資料全体を持ち帰って橿原市教育委員会で保管している。ただし一部の大型木材については運搬・保管の都合上、切断を行っている。その他の資料については調査現場で簡易実測・メモ写真撮影を行った後に分析用として拳大のサンプルのみを持ち帰っている。これは木材の量が非常に多く、全点の保管が困難であるゆえの措置である。資料の取捨選択については、基本的に遺存状態が良好な資料（加工木・自然木を問わない）や明瞭な木器・加工品と判断されるものを中心に全体持ち帰りとしている。個別番号のある資料以外にも、主として流木として出土した木材について一定量を持ち帰り保管している。保管している木材資料の分量は遺物コンテナ約 100 箱強＋大型木器槽（長さ 2～4 m 大）5 基分である。このうち木製品を中心とする一部の資料について遺物の項で報告しているが、多くは水漬け状態での保管に留まる。

サンプル採取を行った資料のうち 150 点に対して整理作業段階で樹種同定分析を実施している。対象資料と個々の結果は表にまとめている。分析範囲内では針葉樹 6 種、広葉樹 20 種の存在が確認されている。内訳はブナ科シイ属が最も多く 44 点、次いでブナ科コナラ属アカガシ亜属が 18 点と多い。以下、資料点数順にツバキ科サカキ属サカキが 15 点、ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節が 10 点、クスノキ科クスノキ属が 8 点、マツ科マツ属・クスノキ科クスノキ属クスノキが各 7 点、マツ科モミ属・ヒノキ科アスナロ属が各 4 点、ヤナギ科ヤナギ属・ブナ科コナラ属コナラ亜属クヌギ節・クスノキ科タブノキ属・ツツジ科スノキ属シャシャンボ・ハイノキ科ハイノキ属が各 3 点、ヒノキ科ヒノキ属・ブナ科クリ属クリ・クワ科クワ属・ツバキ科ツバキ属・ミズキ科ミズキ属が各 2 点、カバノキ科ハンノキ属・イチイ科カヤ属カヤ・コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ・シキミ科シキミ属シキミ・バラ科サクラ属・同モモ亜属（もしくはスモモ亜属）・ツバキ科ヒサカキ属・不明樹根が各 1 点である。サンプル採取とした資料は、しらがみ構成材のうち直径約 5～15 cm 大の自然木もしくは先端のみを軽く加工した杭材を中心としている点は留意が必要である。

この他に保存処理を行った木製品 26 点についても併せて樹種同定を行っている。各詳細は遺物の項で述べるが、樹種としてはコウヤマキ、ツバキ、ヤブツバキ、ヒノキ、アカガシ、クリ、ヒイラギ、スタジイが見られる。

河道からの出土遺物としては中期を中心とする古墳時代の土器、木器・木材、土製品、石製品、動物骨、鉄滓に加え、古墳時代前期以前の土師器、弥生土器、縄文土器、石器などがある。特に古墳時代中期の土器が大量に出土しており、中でも初期須恵器が非常に多い点特徴として挙げられる。土器全体における初期須恵器の比率は一割にも満たないが、土器自体の量が遺物コンテナ数百箱と非常に多く、初期須恵器の絶対数は多い。河道から出土した初期須恵器は把握できる範囲で個体数にして約200点を数える。初期須恵器の時代的位置付けとしてはTG232型式～TK73型式に相当すると考えられる。これらの初期須恵器と共に韓式系土器、瓦質土器も出土している点が注目される。河道V層および下層杭列にはこれより新しい時代の土器は含まれておらず、まさにこの初期須恵器に対応する時代の堆積であると考えられる。同層からは土器の他にも、先述の多量の木器・木材や動物骨（主として馬）、鉄滓などの特徴的な遺物も出土しており、今後注目される遺物の一群と言える。河道は最終的に古墳時代中期後半に埋没する。河道上層からの出土遺物としては中期中頃～後半の遺物が存在するが、量的には中期中頃の遺物が多い。

河道内からは馬の骨(大半が歯)が散乱した状態で出土している。その一部はV層からの出土であり、下層杭列内に混ざりながら出土したものもある。馬骨の詳細については第三章第8節で述べるが、付近に複数の馬が存在していたことは確実であり、その骨が河道内に散乱するような状態にあったことは興味深い点である。

遺物の出土地点については、平面的に見ると河道のほぼ全域に散乱する形で土器が出土している。遺構的には河道北半東側にしがらみ遺構があり河岸に存在する主な遺構も河道北～東側に多いという要素が見られるが、河道内での遺物出土地点は分散状態にある。河道屈曲部の南岸斜面から完形に近い土師器甕が出土するといった状況も見られる(図版50)。

特徴的な遺物の出土状況を示すものとして、杭列⑦の下でまとまって出土した土器群が挙げられる(図60・122、図版52)。河道の最下面に甕・壺がまとまって据えられている。中には二重口縁壺や鳥足文の施された甕(ただし下半のみ)も含まれる。杭列⑦はこれらの土器群をほぼ覆い隠す砂層の上に構築されている。その為、土器群は杭列⑦の記録・解体が進んだ調査終盤になって存在が確認されている。

河道に関連する遺構として21034SXがある(図34・43)。河道の南西岸に存在する不整形な落ち込みである。深さ最大約1.5mを測り、中央付近が最も落ち窪む。最終的に河道からの流入土によって埋まっている。その時期は河道Ⅱ・Ⅲ層以前であり、中期中頃以前であると考えられる。出土遺物はごく少量の土師器片があるのみである。河岸に構築された何らかの作業場であった可能性などが考えられる。

表1 中層遺構・河道出土木材一覧①

※番号	処理状況	杭 列	形 状	樹 種	備 考	残存長 (cm)	解・径 (cm)	断面形状	樹 皮
1	全体持ち帰り	5	杭			89	7	円	有
2	全体持ち帰り	5	自然木			18	4	円	有
3	全体持ち帰り	5	杭			34	4	円	無
4	全体持ち帰り	5	加工木			43	3.5	方	無
5	全体持ち帰り	5	杭			32	6	みかん割	無
6	全体持ち帰り	5	自然木			14	7.5	円	無
7	全体持ち帰り	5	自然木			10	5.5	円	右
8	全体持ち帰り	5	自然木			14	4.5	円	右
9	全体持ち帰り	5	礎石			—	—	—	右
10	全体持ち帰り	5	礎石			—	—	—	右
11	全体持ち帰り	5	自然木			48	4	円	右
12	全体持ち帰り	5	杭			180	11	円	無
13	全体持ち帰り	5	杭			43	14	六角	無
14	全体持ち帰り	5	自然木			17	5	円	右
15	全体持ち帰り	5	加工木			23	4	みかん割	右
16	全体持ち帰り	5	自然木			24	10	不整形	右
17	全体持ち帰り	5	杭			28	4	円	有
18	全体持ち帰り	5	杭			27	4	円	有
19	全体持ち帰り	5	礎石			—	—	—	有
20	全体持ち帰り	5	礎石			—	—	—	有
21-1	全体持ち帰り	5	加工木			45	11.5	四角	無
21-2	全体持ち帰り	5	自然木			33	5	円	右
22	全体持ち帰り	5	加工木			55	7	みかん割	無
23	全体持ち帰り	5	杭			89	7	円	無
24	全体持ち帰り	5	自然木			92	5	円	右
25	全体持ち帰り	5	自然木			25	3	円	右
26-1	サンプル採取	5	杭	ブナ科シイノ		131	6	円	無
26-2	全体持ち帰り	4西	加工木			161	6.5	円	無
27-1	サンプル採取	5	杭			148	3	半円	有
27-2	全体持ち帰り	4西	加工木			246	3	円	有
28	部分持ち帰り	5	加工			132	7	円	無
29	全体持ち帰り	5	自然木			31	4.5	円	右
30	全体持ち帰り	5	杭			106	5.5	円	有
31	全体持ち帰り	4	加工			110	11	四角	無
32	全体持ち帰り	4	留着		図 139-1298	102	10	円	右
33	全体持ち帰り	4	加工木			35	6	四角	無
34	全体持ち帰り	4	自然木			40	12	円	有
35	部分持ち帰り	4	杭			91	6	円	無
36	全体持ち帰り	5	杭			73	9	円	無
37	全体持ち帰り	5	杭			82	78	円	無
38	全体持ち帰り	4	自然木			54	3.5	円	有
39	全体持ち帰り	4西	杭			142	7	円	無
40	全体持ち帰り	4西	杭			88	9	円	無
41	全体持ち帰り	4西	自然木			104	5	円	有
42	全体持ち帰り	4西	杭			45	7.5	円	有
43	全体持ち帰り	4西	杭			33	6.5	円	有
44	全体持ち帰り	4西	加工木			26	7.8	四角	無
45	全体持ち帰り	4西	自然木			47	5	円	有
46	全体持ち帰り	4西	杭			119	8	円	無
47	全体持ち帰り	4西	杭			106	9	円	無
48	サンプル採取	4西	杭			90	5	円	無
49	全体持ち帰り	—	自然木			30	7	円	右
50	全体持ち帰り	4西	加工木			24	8	四角	無
51	全体持ち帰り	4東	加工木			18	10	四角	無
52	全体持ち帰り	—	杭			32	4.8	みかん割	右
53	全体持ち帰り	4西	杭			130	6	円	有
54	全体持ち帰り	4西	自然木			13	12	不整形	有
55	全体持ち帰り	5	礎石			15	10	—	有
56	全体持ち帰り	4西	杭			150	12	—	無
57	全体持ち帰り	4西	自然木			66	5	円	右
58	全体持ち帰り	4西	杭?			88	5	円	無
59	全体持ち帰り	—	加工木			48	3	四角	無
60	全体持ち帰り	4西	杭?			79	4	円	無
61	全体持ち帰り	5	自然木			92	5	円	右
62	全体持ち帰り	4西	杭			64	7	円	無
63	全体持ち帰り	4西	杭			93	5	円	無
64	全体持ち帰り	4西	杭			98	6	円	無
65	全体持ち帰り	5	加工木			84	12	みかん割	—
66	全体持ち帰り	5	礎石			19	14	—	有
67	全体持ち帰り	—	—			44	4	三角	—
68	全体持ち帰り	—	—			—	—	—	—
69	全体持ち帰り	—	—			117	6	円	無
70	全体持ち帰り	5	曲削又継		図 141-1306	51	8	—	無
71	サンプル採取	4東	自然木			—	—	—	—
72	サンプル採取	4東	—			—	—	—	—

※ 資料番号は欠番あり。各種情報は調査・整理の過程で生じた欠落あり。形状：自然木は、遺存する範囲内に明確な加工面が無いもの。断面形状：方形は、断面に横・面を持ち、その数値が不明瞭なもの。

表2 中層遺構・河道出土木材一覧②

K番号	発掘状況	杭 列	形 状	樹 種	備 考	残存長 (cm)	解・径 (cm)	断面形状	樹 皮
73	サンプル採取	5	自然木	ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ節		103	13	無	無
74	サンプル採取	5	杭	クスノキ科クスノキ属 クスノキ		70	9	円	無
75-1	全体持ち帰り	4 束	自然木?		表面炭化	34	9	不整形	無
75-2	全体持ち帰り	5	板材			284	16	四角	無
76	全体持ち帰り	5	転用			416	46	不整形	無
77	全体持ち帰り	5	自然木			70	25	円	無
78	サンプル採取	4 束	自然木			—	—	—	—
79	全体持ち帰り	4 束	転用			75	9	四角	無
80	全体持ち帰り	4 束	締打釘		図 142-1309	37	9	四角	無
81	サンプル採取	4 束	—			—	—	—	—
82	サンプル採取	4 束	—			—	—	—	—
83	サンプル採取	5	杭			68	5	無	無
84	—	4	杭			140	4	円	無
85	サンプル採取	4 束	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		76	5	円	無
86	サンプル採取	4 束	杭			109	3	円	無
87	サンプル採取	4 西	杭	ヒノキ科アスナロ属		122	13	円	無
88	サンプル採取	4 束	転用			41	1	無	無
89	サンプル採取	4 束	杭			48	3	円	無
90	サンプル採取	4 束	転用	ブナ科シイ属		32	4	半円	無
91	サンプル採取	4 束	杭			54	5	楕円	無
92	サンプル採取	4 束	杭			28	3	半円	無
93	サンプル採取	4 束	丸太	ブナ科コナラ属 アカガシ亜属		79	11	半円	無
94	サンプル採取	4 束	自然木			—	—	—	—
95	サンプル採取	4 束	杭	ブナ科シイ属		47	5	円	無
96	サンプル採取	4 束	杭			45	4	円	無
97	サンプル採取	4 束	杭			32	5	円	無
98	全体持ち帰り	4 束	転用			170	14	円	無
99	サンプル採取	4 束	杭	ブナ科ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ節	表面炭化	132	8	無	有
100	サンプル採取	4 束	丸太	ヒノキ科アスナロ属		132	14	円	無
101	全体持ち帰り	4 束	礎?		図 140-1304	36	7	—	無
102	サンプル採取	4 束	加工木	ミズキ科ミズキ属		250	10	円	有
103	サンプル採取	4 束	杭			43	5	楕円	有
104	サンプル採取	4 束	杭			74	3	無	無
105	サンプル採取	4 束	杭	マツ科マツ属 (二葉松類)		212	6	円	無
106	サンプル採取	4 束	杭			27	4	円	無
107	サンプル採取	4 束	杭			63	3	円	有
108	サンプル採取	4 束	自然木			76	4	円	有
109	全体持ち帰り	4 束	転用			90	7	四角	無
110	サンプル採取	4 束	杭	ブナ科シイ属		46	6	無	無
111	部分持ち帰り	5	加工木			55	14	方	—
112	サンプル採取	5	—			—	—	—	—
113	全体持ち帰り	5	転用?			194	11	四角	無
114	全体持ち帰り	5	転用?			132	10	四角	—
115	サンプル採取	5	杭	ミズキ科ミズキ属		193	5	円	無
116	全体持ち帰り	5	転用			44	16	四角	無
117-1	サンプル採取	5	転用		建築材?	155	11	六角	無
117-2	全体持ち帰り	5	自然木	榎子		21	5	不整形	有
118	全体持ち帰り	5	杭			105	9	—	無
121	全体持ち帰り	4 束	杭			52	6	円	有
122	全体持ち帰り	4 束	加工木			23	9	四角	無
123	全体持ち帰り	4 束	紡績用?		図 142-1311	37	2	—	無
124	サンプル採取	4 西	杭	ブナ科コナラ属 アカガシ亜属		98	10	無	無
125	サンプル採取	4 西	自然木			68	5	円	無
126	全体持ち帰り	4 西	杭			125	8	—	無
127	サンプル採取	4 束	杭	ブナ科シイ属		117	5	円	無
128	サンプル採取	4 束	杭			49	6	円	無
129	全体持ち帰り	4 束	加工木			95	16	—	有
130	サンプル採取	4 束	杭?	ブナ科シイ属		152	6	楕円	有
131	全体持ち帰り	5	転用			184	21	四角	無
132	全体持ち帰り	5	転用			51	10	四角	無
133	サンプル採取	5	杭	ブナ科シイ属		128	6	半円	無
134	サンプル採取	5	杭			121	5	円	無
135	サンプル採取	5	杭			154	7	円	有
136	サンプル採取	5	杭?	ブナ科ブナ科コナラ属 コナラ亜属クヌギ節	表面炭化	51	5	円	有
137	全体持ち帰り	5	礎		図 146-1324	58	13	—	無
138	サンプル採取	4 西	—			—	—	—	—
139	全体持ち帰り	5	加工木			116	11	八角	無
140	全体持ち帰り	5	加工木			352	8	方形	無
141	サンプル採取	4 束	自然木			59	5	円	有
142	サンプル採取	5	杭	クスノキ科クスノキ属		210	13	円	無
143	サンプル採取	5	杭	ブナ科シイ属		147	11	円	無
144	サンプル採取	5	丸太			119	11	円	無

表3 中層遺構・河道出土木材一覧③

K番号	処理状況	材 列	形 状	樹 種	備 考	残存長 (cm)	解・径 (cm)	断面形状	樹 皮
145	全体持ち帰り	5	転用			366	9	四角	無
146	全体持ち帰り	4	転材			148	22	四角	無
147	全体持ち帰り	4	転材			25	5	円	無
148	サンプル採取	4	転			97	7	円	無
149	—	4	転			55	3	円	有
150	サンプル採取	4	転	ブナ科コナラ属 コナラ亜属クヌギ類		149	8	円	有
151	サンプル採取	4	転			106	9	円	無
152	サンプル採取	4	転			95	4	円	無
153	全体持ち帰り	4	転			75	8	円	無
154	サンプル採取	4	転	ブナ科シイ属		40	5	円	無
155	サンプル採取	3	転	ブナ科シイ属		121	6	無	有
156	全体持ち帰り	5	曲割又継		図140-1303	40	12	—	無
157	サンプル採取	5	転		表面炭化	112	4	円	有
158	サンプル採取	5	加工木			69	13	円	無
159	全体持ち帰り	5	転			37	8	八角	無
160	全体持ち帰り	5	加工木			145	11	円	無
161	サンプル採取	5	加工木	ブナ科コナラ属 アカガシ亜属		59	9	円	無
162	全体持ち帰り	5	加工木			120	15	方形	無
163	全体持ち帰り	5	加工木?			120	11	円	無
164	サンプル採取	3	転	ブナ科シイ属		27	6	円	無
165	全体持ち帰り	3	加工木		表面炭化	55	14	方形	無
166	サンプル採取	4	転			49	4	半円	無
167	サンプル採取	3	転	ブナ科シイ属		29	3	円	無
168	サンプル採取	4	転	クスノキ科クスノキ属 クスノキ		111	12	円	無
169	サンプル採取	5	転			138	7	円	無
170	全体持ち帰り	5	加工木			239	19	方形	無
171	全体持ち帰り	5	転			167	10	四角	無
172	サンプル採取	4	転	ブナ科シイ属		83	8	円	無
173	全体持ち帰り	5	加工木			371	10	八角	無
174	サンプル採取	—	—			—	—	—	—
175	サンプル採取	4	転			87	5	円	無
176.1	サンプル採取	4	転	ヤナギ科ヤナギ属		108	12	無	無
176.2	サンプル採取	4	転			88	26	円	有
177	サンプル採取	4	転			66	6	円	無
178	サンプル採取	4	転			157	4	円	無
179	サンプル採取	4	転			103	4	円	無
180	サンプル採取	4	転			146	11	無	無
181	サンプル採取	4	転	クスノキ科タブノキ属		85	10	円	無
182	サンプル採取	4	転			68	6	円	無
183	サンプル採取	4	転	ツツジ科スノキ属シャシヤンボ		59	4	円	無
184	全体持ち帰り	4	転			67	6	円	有
185	サンプル採取	4	転			76	4	円	無
186	サンプル採取	4	転	マツ科マツ属〔二葉松類〕		100	4	円	無
187	サンプル採取	4	転			114	4	円	無
188	サンプル採取	4	転			63	3	半円	無
189	サンプル採取	4	転	クスノキ科クスノキ属クスノキ		95	11	円	無
190	サンプル採取	5	転			178	6	円	無
191	全体持ち帰り	4	転			144	10	円	無
192	全体持ち帰り	4	転			70	12	円	有
193	全体持ち帰り	4	転			98	11	円	無
194	サンプル採取	4	転			82	4	円	無
195	サンプル採取	4	転		表面炭化	65	5	無	無
196	サンプル採取	4	転			126	4	半円	無
197	サンプル採取	4	転			86	5	円	無
198	サンプル採取	4	転	ブナ科シイ属		69	4	円	無
199	全体持ち帰り	4	加工木			71	4	四角	無
200	全体持ち帰り	4	転			178	12	円	有
201	サンプル採取	4	転			87	9	円	無
202	全体持ち帰り	4	加工木			22	8	不整形	無
203	サンプル採取	4	転			—	—	—	—
204	全体持ち帰り	4	転			60	5	円	無
205	サンプル採取	4	転			61	4	みかん割	無
206	全体持ち帰り	4	転			90	9	円	無
207	全体持ち帰り	5	転材			257	38	四角	無
208	サンプル採取	4	転	ヤナギ科ヤナギ属		103	12	円	有
209	サンプル採取	4	転			99	7	円	有
210	全体持ち帰り	4	加工木			37	6	四角	無
211	サンプル採取	4	転	バラ科サクラ属ウメ or モモ亜属		144	13	円	有
211	—	4	転			—	—	—	—
212	全体持ち帰り	4	加工木			111	6	円	無
213	サンプル採取	4	転	ブナ科シイ属		149	3	円	有
214	サンプル採取	4	転			60	7	みかん割	無
215	全体持ち帰り	5	転材			301	15	四角	無
216	サンプル採取	4	転	ブナ科シイ属		88	9	半円	無
217	全体持ち帰り	5	転			40	14	円	有

表4 中層遺構・河道出土木材一覧④

K番号	処理状況	肌 判	形 状	樹 種	備 考	残存長 (cm)	解・径 (cm)	断面形状	樹 皮
218	サンブル採取	5	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		102	8	円	有
219	全体持ち帰り	4	加工木			15	4	四角	無
220	サンブル採取	4	杭			60	3	円	無
221	サンブル採取	4	杭			130	4	円	無
222	全体持ち帰り	4	杭			80	12	八角	無
223	サンブル採取	8	杭	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		93	9	円	有
224	サンブル採取	8	杭	ブナ科ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ部		107	4	円	無
225	サンブル採取	5	杭	ハイノキ科ハイノキ属		143	7	円	無
226	全体持ち帰り	8	加工木			69	12	四角	無
227	全体持ち帰り	5	自然木?			122	12	円	有
228	サンブル採取	8	杭			30	6	円	無
229	サンブル採取	8	杭			48	4	円	無
230	サンブル採取	8	杭			50	11	円	無
231	サンブル採取	8	杭	ブナ科ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ部		114	4	円	有
232	全体持ち帰り	8	板材			115	10	四角	無
233	全体持ち帰り	8	加工木			87	6	方形	無
234	全体持ち帰り	8	加工木			152	3	四角	無
235	サンブル採取	8	杭			57	6	四角	無
236	サンブル採取	8	杭	ブナ科シイ属		39	5	楕円	無
237	全体持ち帰り	8	杭+転用			107	11	六角	無
238	サンブル採取	8	杭			68	7	みかん割	無
239	サンブル採取	8	杭			65	7	円	無
240	全体持ち帰り	8	加工木			43	6	円	無
241	全体持ち帰り	8	加工木			11	4	不整形	一
242	サンブル採取	8	杭			76	5	円	有
243	サンブル採取	8	杭	ブナ科ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ部		74	5	円	有
244	サンブル採取	8	杭	ブナ科シイ属		90	9	円	無
245	サンブル採取	8	杭			66	6	四角	無
246	サンブル採取	8	杭			109	7	円	無
247	サンブル採取	8	杭	表面炭化		104	7	円	無
248	サンブル採取	8	杭			63	5	みかん割	無
249	サンブル採取	8	杭			111	6	円	無
250	サンブル採取	8	杭			102	5	円	無
251	サンブル採取	9	杭	マツ科モミ属		82	4	円	無
252	全体持ち帰り	9	板材			52	4	四角	無
253	全体持ち帰り	9	人押棒?		図 143-1312	73	4	—	無
254	全体持ち帰り	9	杓?		図 151-1343	32	4	—	無
255	サンブル採取	9	転用?	ブナ科シイ属		24	4	みかん割	無
256	サンブル採取	8	杭			44	5	平円	無
257	サンブル採取	9	杭			35	2	平円	無
258	サンブル採取	9	杭	クスノキ科クスノキ属		68	5	円	無
259	全体持ち帰り	9	転用材		建築材?	118	11	四角	—
260	サンブル採取	9	夫太	ツツジ科スノキ属シャシヤホ		112	7	円	無
261	サンブル採取	9	杭			76	4	円	無
262	サンブル採取	9	杭			109	5	平円	無
263	サンブル採取	8	自然木	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		74	12	円	無
264	サンブル採取	8	杭	クスノキ科クスノキ属クスノキ	表面炭化	62	11	円	無
265	サンブル採取	8	杭			113	6	円	無
266	サンブル採取	9	杭	クスノキ科タブノキ属		87	6	円	無
267	サンブル採取	9	杭			76	4	円	有
268	サンブル採取	9	杭	ブナ科シイ属		101	4	円	無
269	サンブル採取	9	杭			54	6	みかん割	無
270	サンブル採取	9	杭			93	3	無	無
271	サンブル採取	9	杭	クスノキ科クスノキ属クスノキ		200	11	円	無
272	全体持ち帰り	8	杭+転用			122	11	—	無
273	サンブル採取	8	杭			99	9	円	無
274	全体持ち帰り	8	曲納又榿		図 139-1299	56	18	—	無
275	サンブル採取	8	杭			54	4	円	無
276	サンブル採取	8	杭	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		93	6	平円	無
277	サンブル採取	8	杭	ブナ科シイ属		66	5	みかん割	無
278	サンブル採取	8	杭			28	7	円	無
279	サンブル採取	8	自然木	ヤナギ科ヤナギ属		32	5	円	有
280	全体持ち帰り	8	加工木			32	3	四角	無
281	サンブル採取	8	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		75	8	円	無
282	サンブル採取	8	杭	ブナ科シイ属		120	12	円	無
283	全体持ち帰り	8	転用		建築材?	170	8	円	無
284	全体持ち帰り	8	葉?		図 148-1328	19	20	—	無
286	サンブル採取	8	杭	クスノキ科タブノキ属		110	11	円	有
287	サンブル採取	8	杭			145	7	円	無
288	サンブル採取	8	杭	ブナ科シイ属		68	5	円	無
289	全体持ち帰り	8	さしほ形		図 144-1320	36	18	—	無
290	サンブル採取	8	杭	ブナ科ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ部		184	10	円	無
291	サンブル採取	8	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		170	9	円	無
292	全体持ち帰り	8	加工木			193	10	四角	無

表5 中層遺構・河道出土木材一覧⑤

K番号	処理状況	杭 列	形 状	樹 種	備 考	残存長 (cm)	解・径 (cm)	断面形状	樹 皮
293	サンプル採取	8	転用ウ	ブナ科シイ属		30	6	円筒	無
294	サンプル採取	8	杭			29	6	円	無
295	サンプル採取	8	杭			64	6	円	無
296	サンプル採取	9	杭			112	8	無	無
297	全体持ち帰り	8	杭			95	8	円	無
298	サンプル採取	9	自然木			10	2	無	無
299	サンプル採取	9	杭	ブナ科シイ属		106	5	円	無
300	サンプル採取	9	杭			37	6	四角	無
301	サンプル採取	9	自然木	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		38	18	無	無
302	サンプル採取	8	杭			34	8	円	無
303	全体持ち帰り	9	礎		図 146-1323	61	11	—	無
304	サンプル採取	9	杭	マツ科マツ属 [二葉松類]		117	9	円	無
305	サンプル採取	8	杭			66	4	円	無
306	サンプル採取	8	杭			70	3	円筒	無
307	サンプル採取	8	杭	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		38	3	四角	無
308	サンプル採取	8	杭	クスノキ科クスノキ属クスノキ		53	7	円	無
309	サンプル採取	8	杭			74	6	円	無
310	—	8	自然木			15	3	円	有
311	サンプル採取	8	杭			91	4	円筒	無
312	サンプル採取	8	杭			16	2	円	無
313	サンプル採取	8	杭	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		31	5	円	無
314	サンプル採取	8	杭			122	7	円	無
315	サンプル採取	8	杭			65	3	円筒	無
316	サンプル採取	8	杭			147	7	円	無
317	サンプル採取	8	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		45	6	円	無
318	サンプル採取	8	杭			52	3	円	無
319	サンプル採取	8	杭			57	6	円筒	無
320	サンプル採取	8	杭	ブナ科ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ類		36	7	円	無
321	サンプル採取	8	杭			117	5	円	無
322	—	8	加工木			45	4	四角	無
323	サンプル採取	8	杭	ブナ科シイ属		65	4	円	無
324	全体持ち帰り	8	杭			80	5	円	無
325	サンプル採取	8	杭			40	7	円	無
326	サンプル採取	8	杭	ハイノキ科ハイノキ属		82	4	円	無
327	サンプル採取	8	杭			90	7	円	有
328	サンプル採取	8	杭	マツ科マツ属 [二葉松類]		135	11	円	無
329	サンプル採取	8	自然木			158	10	無	無
330	サンプル採取	8	杭	ブナ科シイ属		103	6	円	無
331	サンプル採取	8	杭			96	4	円	無
332	サンプル採取	8	杭			144	5	楕円	無
333	全体持ち帰り	8	転用材			198	8	角	無
334	サンプル採取	8	杭			96	8	円	無
335	全体持ち帰り	8	加工木			70	6	四角	無
336	サンプル採取	8	杭			93	7	円筒以上	有
337	サンプル採取	8	杭	ツツジ科スノキ属シャシヤンボ		154	10	円	無
338	全体持ち帰り	8	板材			50	7	四角	無
339	サンプル採取	8	杭			197	7	円	無
340	サンプル採取	8	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		132	11	無	無
341	サンプル採取	8	杭			146	10	円	無
342	サンプル採取	8	杭			161	7	無	有
343	サンプル採取	8	杭			135	10	円	無
344	サンプル採取	8	杭			52	7	円	無
345	全体持ち帰り	8	—			143	12	方型	無
346	サンプル採取	8	杭			170	8	円	無
347	サンプル採取	8	杭	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		158	8	円	無
348	サンプル採取	8	杭			136	7	円筒	無
349	サンプル採取	8	杭			64	7	円	無
350	サンプル採取	8	杭	ブナ科ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ類		82	6	円	有
351	サンプル採取	8	杭	クスノキ科クスノキ属		112	9	円	右
352	サンプル採取	8	杭			103	7	円	有
353	全体持ち帰り	8	礎		図 147-1326	54	11	—	無
354	サンプル採取	8	杭			127	7	みかん型	無
355	サンプル採取	8	杭			94	6	円	無
356	全体持ち帰り	8	礎		図 139-1300	29	6	—	無
357	サンプル採取	8	杭			154	9	円	無
358	サンプル採取	8	杭+転用			65	8	—	無
359	サンプル採取	8	自然木	ケワ科ケワ属		95	11	無	無
360	—	8	杭			110	3	円	無
361	サンプル採取	8	杭			191	5	円	有
362	サンプル採取	8	杭	ブナ科シイ属		93	5	円	無
363	サンプル採取	8	杭			70	5	円	無
364	全体持ち帰り	8	加工木			61	4	四角	無
365	サンプル採取	8	杭			131	5	円	無
366	サンプル採取	8	杭	ブナ科シイ属		107	6	円	無
367	サンプル採取	8	杭	ブナ科シイ属		160	5	みかん型	無
368	サンプル採取	8	杭			116	5	円	無

表6 中層遺構・河道出土木材一覧⑥

K番号	処理状況	杭 列	形 状	樹 種	備 考	残存長 (cm)	解・径 (cm)	断面形状	樹 皮
369	サンブル採取	8	杭	ブナ科シイ属		94	4	円	無
370	サンブル採取	8	杭			115	5	円	無
371	全体持ち帰り	8	平材			78	10	角	無
372	サンブル採取	8	杭			57	4	無	無
373	全体持ち帰り	8	加工木			60	4	四角	無
374	サンブル採取	8	杭			92	5	円	無
375	全体持ち帰り	8	加工木			48	5	角	無
376	サンブル採取	8	杭			67	4	円	無
377	サンブル採取	8	杭			67	5	円	右
378	サンブル採取	8	杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕		50	4	円	無
379	サンブル採取	8	杭			70	7	円	無
380	サンブル採取	8	杭			64	4	円	無
381-1	サンブル採取	8	杭			158	5	円	無
381-2	サンブル採取	8	杭	マツ科モミ属		227	6	円	無
382	サンブル採取	8	杭			62	8	円	無
383	サンブル採取	8	杭	ブナ科ブナ科コナラ属 コナラ亜属クヌギ部		103	5	円	無
384	サンブル採取	8	加工木			108	12	円	無
385	サンブル採取	8	杭			70	5	円	無
386	サンブル採取	8	杭			17	4	円	無
387	サンブル採取	8	杭	ブナ科シイ属		60	5	円	無
388	サンブル採取	8	杭			78	7	円	無
389	サンブル採取	8	杭	ブナ科シイ属		81	7	みかん割	無
390	サンブル採取	8	杭?			72	5	円	無
391	サンブル採取	8	杭	ブナ科シイ属		92	5	円	無
392	全体持ち帰り	8	平材		転用杭?	143	15	四角	無
393	サンブル採取	7	不明			11	4	みかん割	無
394	サンブル採取	7	—			—	—	—	—
395	サンブル採取	7	—			—	—	—	—
396	全体持ち帰り	7	杭			181	8	四角	無
397	全体持ち帰り	7	自然木?			41	7	円	右
398	サンブル採取	7	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		44	4	円	無
400	サンブル採取	7	杭			25	3	円	無
401	サンブル採取	7	杭			37	5	円	無
402	全体持ち帰り	7	加工木		図 138-1297	21	40	—	無
403	全体持ち帰り	7	加工木			85	6	角	無
404	サンブル採取	7	杭	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		103	9	円	無
405	全体持ち帰り	7	杭			108	9	円	右
406	サンブル採取	7	杭	ブナ科シイ属		58	5	円	無
407	サンブル採取	7	杭	ツバキ科ツバキ属		84	10	円	無
408	サンブル採取	7	杭			100	7	円	無
409	全体持ち帰り	7	転用		建築材?	135	12	六角	無
410	全体持ち帰り	7	自然木?			29	7	円	右
411	サンブル採取	7	杭	シキミ科シキミ属シキミ		107	7	円	無
412	サンブル採取	7	杭	クスノキ科クスノキ属クスノキ		36	4	円	無
413	サンブル採取	7	杭			88	7	円	無
414	サンブル採取	7	杭	ブナ科シイ属		134	4	円	無
415	全体持ち帰り	7	転用材			187	11	9	無
416	サンブル採取	7	杭			105	9	円	無
417	全体持ち帰り	4	垂木材		図 152-1346	216	12	8	無
418	全体持ち帰り	7	加工木		謀者六有	69	12	円	右
419	サンブル採取	7	杭	ブナ科シイ属		46	3	円	無
420	サンブル採取	7	杭			50	7	円	無
421	サンブル採取	7	杭			112	8	円	無
422	サンブル採取	7	杭	ブナ科クワ属クワ		99	10	円	無
423	サンブル採取	7	杭	ブナ科ブナ科コナラ属 コナラ亜属コナラ部		80	5	円	無
424	—	7	自然木			22	2	円	右
425	サンブル採取	7	杭			108	5	円	無
426	全体持ち帰り	7	転用杭?			63	6	四角	無
427	サンブル採取	7	杭			44	7	みかん割	無
428	サンブル採取	7	杭			76	8	円	無
429	全体持ち帰り	7	加工木			36	3	円	無
431	サンブル採取	7	杭			63	6	円	無
432	全体持ち帰り	7	杭			35	3	—	無
433	全体持ち帰り	—	杭			70	4	円	右
434	サンブル採取	7	杭			31	7	円	無
435	サンブル採取	7	杭	ブナ科シイ属		93	6	円	無
436	サンブル採取	7	杭			54	5	円	無
437	サンブル採取	7	杭	ブナ科シイ属		92	4	円	無
438	サンブル採取	7	杭			60	5	円	無
439	サンブル採取	7	杭	ケワ科ケワ属	表面炭化	48	7	円	無
440	サンブル採取	7	杭			108	10	四角	無
441	全体持ち帰り	—	加工木			24	10	四角	無
442	サンブル採取	7	杭	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		50	4	円	右
443	全体持ち帰り	7	杭			112	13	円	無
444	全体持ち帰り	7	加工木			186	11	円	無
445	サンブル採取	7	加工木			113	13	円	無

表7 中層遺構・河道出土木材一覧⑦

K番号	処理状況	肌 列	形 状	樹 種	備 考	残存長 (cm)	解・径 (cm)	断面形状	樹 皮
446	全体持ち帰り	7	梁材		図152-1348	170	18	円	無
447	サンパム採取	7	杭			105	4	円	有
448	サンパム採取	7	杭	ツバキ科ツバキ属		121	7	楕円	無
449	全体持ち帰り	—	平材			65	14	四角	無
450	サンパム採取	7	杭			92	8	円	無
451	全体持ち帰り	7	加工木			304	13	方型	無
452	サンパム採取	7	杭			31	2	円	無
454	サンパム採取	7	杭			59	3	円	無
455	サンパム採取	7	杭	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	表面皮欠	65	7	円	無
456	サンパム採取	7	自然木?	ツバキ科ヒサカキ属		85	9	円	無
457	サンパム採取	7	不明	クスノキ科クスノキ属		29	4	円	有
458	サンパム採取	7	杭			79	6	楕円	無
459	サンパム採取	7	杭			95	6	円	有
460	サンパム採取	7	杭	クスノキ科クスノキ属		153	5	円	無
461	サンパム採取	7	杭			50	5	円	無
462	サンパム採取	7	杭	ヒノキ科ヒノキ属		80	4	円	無
463	サンパム採取	7	杭	ハイノキ科ハイノキ属		125	5	楕円	無
464	全体持ち帰り	7	転用		建築材?	145	8	円	無
465	サンパム採取	7	自然木			116	6	円	有
466	全体持ち帰り	7	杭			76	7	無	無
467	全体持ち帰り	7	平材			51	7	四角	無
468	サンパム採取	7	杭			55	7	円	無
469	サンパム採取	7	杭	クスノキ科クスノキ属		155	4	円	有
470	サンパム採取	7	丸太	マツ科モミ属		143	9	円	無
471	全体持ち帰り	7	自然木			62	3	円	有
472	サンパム採取	7	杭			112	8	円	無
473	全体持ち帰り	7	転用		建築材?	67	9	みかん割	無
474	全体持ち帰り	7	転用			183	14	四角	無
475-1	全体持ち帰り	7	加工木			92	12	方型	無
475-2	全体持ち帰り	7	加工木			73	16	円	無
476	全体持ち帰り	7	杭			138	8	方型	無
477	サンパム採取	7	杭	クスノキ科クスノキ属		27	4	無	無
478	サンパム採取	7	杭	ヒノキ科アスノコ属		136	5	無	無
479	全体持ち帰り	7	板材			56	6	方型	無
480	サンパム採取	6	杭			105	4	円	無
481	サンパム採取	6	杭			44	7	四角	無
482	サンパム採取	6	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		162	4	円	有
483	全体持ち帰り	6	加工木			104	10	四角	無
484	サンパム採取	6	自然木	マツ科マツ属〔二葉松類〕		81	11	無	有
485	サンパム採取	6	杭			78	9	円	無
486	全体持ち帰り	6	自然木			86	11	円	無
487	サンパム採取	6	杭	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		92	7	四角	無
488	全体持ち帰り	6	加工木			17	9	四角	無
489	サンパム採取	6	杭			60	8	円	無
490	サンパム採取	6	杭			90	6	円	無
491	サンパム採取	6	自然木			27	5	無	無
492	—	7	自然木			14	3	円	有
493	サンパム採取	6	杭			58	6	円	無
494	サンパム採取	6	自然木			122	15	楕円	有
495	全体持ち帰り	6	加工木?			230	12	—	無
496	サンパム採取	6	自然木	ブナ科クリ属クリ		33	17	円	無
497	サンパム採取	6	杭			49	4	円	無
498	サンパム採取	6	自然木			118	12	無	有
499	サンパム採取	6	杭			120	11	円	有
500	サンパム採取	6	杭			145	9	円	無
501	サンパム採取	6	杭			96	4	円	無
502	サンパム採取	6	杭			62	6	円	無
503	サンパム採取	6	杭			133	10	方型	無
504	全体持ち帰り	6	杭			72	7	円	無
505	サンパム採取	6	杭			72	7	円	無
506	サンパム採取	6	丸太	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		158	15	無	無
507	サンパム採取	6	杭			40	6	円	有
508	全体持ち帰り	6	梁		図141-1307	—	—	—	—
509	サンパム採取	6	自然木			20	9	無	無
510	サンパム採取	6	杭	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		124	6	円	無
511	サンパム採取	6	丸太			163	13	無	無
512	全体持ち帰り	6	杭			89	5	円	有
513	サンパム採取	6	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		85	6	円	無
514	サンパム採取	6	杭	ブナ科シイ属		56	5	円	無
515	サンパム採取	6	杭			95	11	円	無
516	サンパム採取	6	杭	クスノキ科クスノキ属		112	5	円	無
517	サンパム採取	6	杭	ブナ科ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ類		102	8	みかん割	無
518	サンパム採取	6	杭	ブナ科シイ属		95	7	円	無
519-1	サンパム採取	6	杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕		78	14	円	無
519-2	全体持ち帰り	6	板材			195	22	四角	無
520-1	サンパム採取	6	杭			81	12	円	無

表8 中層遺構・河道出土木材一覧⑧

K番号	処理状況	杭 列	形 状	樹 種	備 考	残存長 (cm)	解・径 (cm)	断面形状	樹 皮
520-2	サンブル採取	6	自然木			153	15	円	無
521	サンブル採取	6	杭			91	11	円	無
522	サンブル採取	6	杭			60	5	円	無
523	サンブル採取	6	杭	ブナ科シイ属		54	5	円	無
524	サンブル採取	6	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		87	5	円	無
525	サンブル採取	6	杭	ヒノキ科ヒノキ属		151	6	円	無
526	全体持ち帰り	6	杭			80	9	四角	無
527-1	サンブル採取	6	杭			86	9	円	無
527-2	サンブル採取	6	杭			90	11	円	無
528	全体持ち帰り	6	転用		建築材?	380	8	八角	無
529	サンブル採取	6	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		184	6	円	無
530	サンブル採取	6	—			—	—	—	—
531	サンブル採取	6	—			—	—	—	—
532	サンブル採取	6	杭			108	6	円	無
533	サンブル採取	6	杭			89	9	円	無
534	サンブル採取	6	杭			144	5	無	無
535	サンブル採取	6	杭	ブナ科シイ属		109	10	みかん割	無
536	全体持ち帰り	6	加工木			56	7	円	無
537	全体持ち帰り	6	杭			55	4	円	無
538	サンブル採取	6	杭			165	6	円	無
539	サンブル採取	6	杭	ヒノキ科ヒノキ属		143	12	無	無
540	サンブル採取	6	杭			314	8	円	無
541	全体持ち帰り	6	建築材(柱)		図 152-1347	261	12	円	無
542	サンブル採取	6	杭			151	11	円	無
543	全体持ち帰り	6	加工木			229	14	円	無
544	サンブル採取	6	杭			89	5	みかん割	無
545	サンブル採取	6	杭	カバノキ科ハンノキ属		113	5	円	無
546	サンブル採取	6	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		107	3	円	無
547	サンブル採取	6	杭			111	10	円	無
548	サンブル採取	6	杭			153	8	円	有
549	サンブル採取	6	杭	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ		150	9	円	無
550	サンブル採取	6	杭			108	9	円	有
551	サンブル採取	6	杭	イチイ科ヤケヤケヤ		139	6	円	無
552	サンブル採取	6	杭	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		60	4	円	無
553	サンブル採取	6	杭			108	6	四角	無
554	サンブル採取	6	杭			54	8	円	無
555	サンブル採取	6	杭	ブナ科シイ属		103	9	円	無
556	サンブル採取	6	杭	マツ科ヒメミ属		102	10	円	無
557	サンブル採取	6	杭			56	7	円	無
558	サンブル採取	6	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		79	4	円	無
559	サンブル採取	6	杭	ブナ科コナラ属アカガシ亜属		46	3	円	無
560	サンブル採取	6	杭			130	7	円	有
561	全体持ち帰り	6	自然木			44	15	不整形	有
562	サンブル採取	6	杭			140	5	円	有
563	サンブル採取	6	杭			117	5	円	無
564	サンブル採取	6	杭			94	6	円	無
565	サンブル採取	6	杭			84	9	円	無
566	サンブル採取	6	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		174	6	円	無
567	全体持ち帰り	6	加工木			196	11	八角	無
568	サンブル採取	6	杭			121	9	円	無
569	サンブル採取	6	杭			124	5	円	有
570	サンブル採取	6	杭			184	8	円	無
571	サンブル採取	6	杭	ツバキ科サカキ属サカキ		189	5	円	無
572	全体持ち帰り	6	羽子板形		図 151-1341 遺木?	52	11	—	—
573	全体持ち帰り	6	転用?杭			137	5	円	無
574	サンブル採取	6	杭	バラ科サクラ属		123	7	円	右
575	サンブル採取	6	杭			127	10	円	無
576	全体持ち帰り	6	加工木?			62	9	円	右
577	全体持ち帰り	6	杭			118	6	方型	無
595	—	8	杭			144	5	円	無
杭列土木1	全体持ち帰り	1	加工木			140	9	四角	無
杭列土木5	全体持ち帰り	1	加工木?			22	2	四角	無
杭列土木6	全体持ち帰り	1	加工木			18	1	四角	無
杭列土木7	全体持ち帰り	1	加工木			63	6.5	四角	有
杭列土木8	全体持ち帰り	1	杭			39	4	円	無
杭列土木9	全体持ち帰り	1	自然木			11.5	2	円	有
杭列土木10	全体持ち帰り	1	自然木			51	4.5	円	有
杭列土木11	全体持ち帰り	1	加工木			46	4	三角	無
杭列土木12	全体持ち帰り	1	自然木			26	4.5	不整形	有
杭列土木13	全体持ち帰り	1	自然木			29	1.5	円	有
杭列土木14	全体持ち帰り	1	加工木			240	12	四角	無
杭列土木15	全体持ち帰り	1	加工木			92	5	円	無
杭列土木16	全体持ち帰り	1	板材			113	4	四角	有
杭列土木17	全体持ち帰り	1	加工木			30	9	四角	無
杭列土木18	全体持ち帰り	1	加工木			41	2	三角	無
杭列土木19	全体持ち帰り	1	自然木			30	1	円	有

表9 中層遺構・河道出土木材一覧⑨

木番号	処理状況	坑列	形状	樹種	備考	残存長 (cm)	幅・径 (cm)	断面形状	樹皮
坑四①木20	全体持ち帰り	1	杭			63	4	円	無
坑四①木21	全体持ち帰り	1	杭			60	5	五角	無
坑四①木22	全体持ち帰り	1	自然木			79	4.5	円	有
坑四①木23	全体持ち帰り	1	自然木			12	1	円	無
坑四①木24	全体持ち帰り	1	自然木			15	1	円	無
坑四①木25	全体持ち帰り	1	杭			91	6.5	円	有
坑四①木26	全体持ち帰り	1	杭			37	6	円	有
坑四①木27	全体持ち帰り	1	加工木			66	4	四角	無
坑四①木28	全体持ち帰り	1	加工木			69	4	四角	無
坑四①木29	全体持ち帰り	1	加工木			38	4.5	四角	無
坑四①木30	全体持ち帰り	1	杭			33	3.5	円	有
坑四①木31	全体持ち帰り	1	杭			62	6	四角	無
坑四①木32	全体持ち帰り	1	杭			75	8	円	有
坑四①木33	全体持ち帰り	1	自然木			35	3	円	有
坑四①木34	全体持ち帰り	1	杭			73	8	円	有
坑四①木36	全体持ち帰り	1	杭			42	2.5	円	有
坑四②木01	全体持ち帰り	2	杭			32	5	円	有
坑四②木02	全体持ち帰り	2	杭			31	4.5	四角	無
坑四②木03	全体持ち帰り	2	杭			34	5.5	不整形	有
坑四③木01	全体持ち帰り	3	杭			28	5	円	無
坑四③木02	全体持ち帰り	3	杭			33	3.5	円	有
坑四③木03	全体持ち帰り	3	杭			46	10	円	有
坑四③木04	全体持ち帰り	3	杭			41	5	円	有
坑四③木06	全体持ち帰り	3	杭			45	7	円	有
坑四③木07	全体持ち帰り	3	杭			79	11	円	有
坑四③木08	全体持ち帰り	3	杭			71	7	円	有
坑四③木09	全体持ち帰り	3	杭			69	8	円	無
坑四③木10	全体持ち帰り	3	杭			42	6	円	有
坑四③木11	全体持ち帰り	3	杭			41	5.5	円	無
坑四③木12	全体持ち帰り	3	杭			52	8	円	無
坑四③木13	全体持ち帰り	3	杭			28	5	円	有
坑四③木14	全体持ち帰り	3	杭			58	8	円	無
坑四③木15	全体持ち帰り	3	杭			29	8	円	有
坑四③木16	全体持ち帰り	3	杭			45	4	円	有
坑四③木17	全体持ち帰り	3	杭			60	9	円	無
坑四③木18	全体持ち帰り	3	杭			35	4.5	円	有

下層遺構 (図64～66)

下層遺構は縄文時代の遺構である。基本層序Ⅳ層上面なし層中に存在する。先述のとおり調査全体の都合上、下層遺構については調査区南半に設定した下層トレンチ1～5区で調査を行っている(図64)。下層トレンチ1～4区は基本層序Ⅲ層下に良好な地盤面が存在し、かつ周囲で縄文時代遺物や遺構と思しき土層断面が確認される地点に設定している。調査区南西部には縄文時代以前の河道と目される砂層の広がり確認されており、その調査を目的として同5区を設定している。なお、下層遺構には22000番以降の遺構番号を付与して上・中層以降と分けている。

下層トレンチ1～4区および周辺部では当初、遺構と思われる褐色粘土系の埋土(基本層序Ⅲ層に近い)からなる落ち窪みの存在を複数確認していた(これらの存在が下層遺構調査の契機のひとつとなった)。結果として、これらの大部分は風倒木痕であることを確認するに至っている。図64のトレンチ中に破線で示す地点がこれにあたり、この他に調査区壁面においても同様の土層断面を確認している。いずれも木根自体は残っておらず横転した状態の土層断面のみが確認されている。また、遺物は出土していない。

風倒木痕以外では土坑1基とピット2基が存在する。

22001SKは下層トレンチ1区東半に位置する土坑である(図65)。東西約2.4m、南北約1.4mを測る平面形が不整形の土坑である。土坑の西半が一段深く落ち窪み形状で、深さ最大約0.2mを測る。褐色系の粘質土～粘土が堆積しており、底面から縄文土器の細片が出土している。22001SKの上面高は同地点一帯の上・中層遺構面よりも約0.2m下の深さにある。

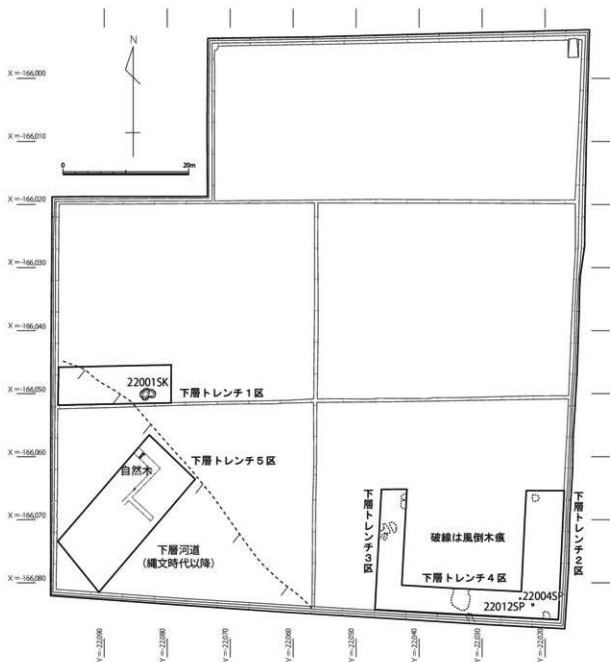


図64 2区 下層遺構 平面図 (S=1/600)

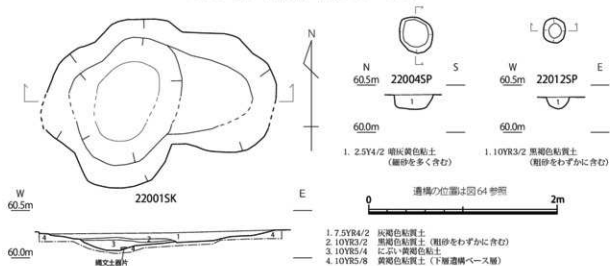


図65 2区 下層遺構 平面・断面図 (S=1/40)

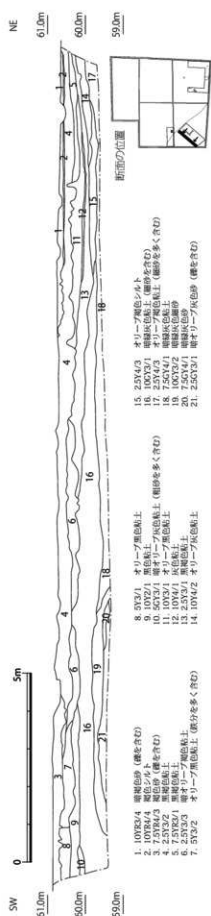


図 66 2区 下層トレンチ 5区 土層断面図 (S = 1/100)

22004SP および 22012SP は下層トレンチ 2～4 区の南東部に位置するピットである。どちらも円形ピットで、22004SP は直径約 0.4 m、22012SP は直径約 0.25 m を測る。ふたつのピット間の距離は約 4 m で、周囲に同様のピットは見られない。両ピットの上面高は、周辺一帯の上・中層遺構面よりも約 0.2 m 深い位置にある。

下層トレンチ 1～4 区の遺構面検出にあたっては基本層序 III 層を人力で掘り下げを行っており、その過程で縄文土器片および石器片が少量出土している。全体像が分かる資料はほとんど無いが、遺物の時期は縄文時代後～晩期を中心とする。その他、調査区北半部を中心に、ごく少量の弥生土器片が出土している。同 2 区では調査区東壁沿いの地点を下層遺構面からさらに約 1 m の深度まで断ち割り調査を実施している。主に微砂～粘土層からなる堆積が続いており、遺物は出土していない。

調査区南西部には南東-北西方向に伸びる河道が存在する(図 64)。上面付近からごくわずかに出土する遺物から主として縄文時代の河道であるという認識の下、下層トレンチ 5 区を設定し調査を行うこととなった。検出面から約 1.6 m の深さまで重機と人力の併用で掘り下げを行っている。厚く河川堆積層が堆積しており、上面付近で出土するものと同様の土器・石器の細片がごく少量含まれるのみであった。時期は縄文時代晩期以前であると考えられる。河道内からは流木と思われる自然木も出土しているが量は限られる。この河道下にもより古い段階の別の河道が存在しており、その範囲は調査区北半部にも広がることを中層遺構調査時の断ち割り調査においても確認している。

第7節 2区 遺物

2区の調査で出土した遺物には、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・瓦質土器・製塩土器・埴輪・土製品・瓦器・陶磁器・籬羽口・鉄滓・石器・石製品・木製品・木材・果実製品・布・動物骨・骨器・銅銭がある。古墳時代、とくに中期の遺物が量・種類ともに多い。縄文時代～弥生時代の遺物も一定量出土しているが、下層遺構・ベース層から出土したものと後世の遺構に混ざる形で出土したものとがある。上層遺構およびそれ以降の堆積層からは中世以降の土器が出土しているが量は限られる。

出土遺物の量は土器・石器等が遺物コンテナ約500箱分、水漬け保管の木製品・木材が遺物コンテナ約100箱強と大型木器槽5基分である。前者は古墳時代の土師器と須恵器が大部分を占める。これらは中層遺構の河道から出土したものが大半である。

今回報告を行う遺物は、概ね全体像の分かる遺物および出土遺構・層序の時期や性格をよく表わすと考えられる遺物を抽出している。ただし2区は全体として出土遺物量が非常に多いため、報告外にも図化可能なレベルの遺物が多く残る。中層遺構の河道から出土している土器と木材は特にその傾向が強い。土器は遺跡・遺物の特性上、初期須恵器については出来る限り多く報告するよう努めているが、及ばなかった資料も一定数存在する。一方、土師器については報告外の資料が多数を数える。遺存状況の良い資料や特徴的な資料を中心に報告を行っているが、これに近い状態の資料も報告外に多く存在する。河道からは木材も多量に出土している。このうち用途がある程度特定可能であるような木器については基本的に報告を行っている。この他にも加工木・自然木が多数存在している。発掘調査時における木材の取り扱い・保管状況については第6節で述べている。これらの遺物の詳細な状況や取り扱いについては各遺物の項で触れる。

以下に各遺構、層序ごとに出土遺物について報告する。

上層遺構（図67）

上層遺構は中世以降の耕作溝や土坑、ピットである。中世から一部は近世にかけて形成された遺構であると考えられる。当該時期の遺物量は限られ、それらも細片状態での出土が基本である。耕作溝からは調査区北半部を中心に、中層遺構に由来すると考えられる古墳時代中期の遺物が出土している。量的には中世以降の遺物よりも多い。中世で時期が特定できる遺物は13世紀代を中心とし、その前後の時期も含む可能性がある。また、耕作層の上層からは陶磁器片もごく少量出土している。

39・41～45は耕作溝から、40は調査区中央部のピット（20412SP）から出土した遺物である。42～45は下層に由来する古代以前の遺物である。

39は手づくね成形の土師器小皿である。口径8.8cm・器高1.4cmを測る。ナデ調整を施すが底部外面は未調整で残される。

40・41は13世紀後半の瓦器塊である。40はほぼ完形で口径9.7cm・器高3.3cmを測る。断面三角形の小さな高台が全周の3割程度に付く。これは剥離したものが当初からの状態であるのかは不明瞭である。41は口径10.8cm・器高3.5cmを測る。表面が磨滅しており暗文の状況などは不明である。

42は土師器高環の坏部である。表面の磨滅のため細かな調整は不明であるが、外面下半には強め

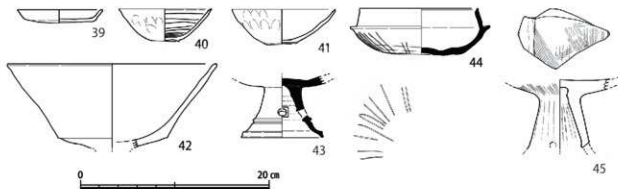


図 67 2区 上層遺構出土土器 (S=1/4)

の横ナデ調整が見られる。43は須恵器高環である。円形スカシが二方向に穿たれる。44は須恵器環身である。底部には放射状のヘラ記号がやや乱雑に施される。45は土師器高環である。環部には内外面ともにハケ調整を施す。円形スカシが三方向に穿たれていると考えられる。

中層遺構 (図 68~152)

中層遺構は古墳時代の遺構群である。遺構・遺物ともに多く、今回の調査の中核を成す一群である。古墳時代中期を中心とし、特に中期前半の遺構・遺物が多い点が特徴的である。また、後述する河道(20989SD)を中心に、古墳時代前期および弥生時代、縄文時代の遺物も一定量出土している。ただし河道から出土したこれら古い時代の遺物は、古墳時代中期の遺物群と比較して流水による表面の摩耗度合いが全体が高く、河道上流から流されてきたものも多いと考えられる。

以下に出土遺構・層位ごとに報告を行う。遺構の報告順は基本的に第6節での順に倣う。河道(20989SD)の出土遺物については河道内での基本層序ごとに報告を行うが、整理・報告作業の都合上、石製品・鉄滓・木製品・動物骨等については遺物種で括って報告を行う。これらの出土層位・出土状況については個々の報告で触れることとする。

202345E (図 68・69-47・51・55・59・61)

47・51は202345E 井戸枠より上層の埋め土からの出土である。47は須恵器高環の脚部である。スカシは三方向で円形であると考えられるが、スカシ上半を欠くため火焔形である可能性も考えられる。51は土師器高環の環部である。脚の上端部は折れて環部との接合部に残る。内面底部に工具の静止痕が螺旋状に残る。

55・59は井戸底面付近から出土した土師器である(図37・図版24下)。55は二重口縁壺の口縁部である。上下二段に突帯を貼り付けて巡らせる。59は甕の下半部である。井戸枠中央の底に据え付けられるような形で出土している。外面は縦方向のハケ調整、内面はユビナデを施す。

61は井戸枠(東辺中央)に使われた板材の一つである。建物の扉からの転用品であると考えられる。長さ92.0cm・幅28.8cm・厚さ3.6~5.3cmを測り、これが中軸で縦に二分割されているものの元の形状どおりに合わせた形で井戸枠として利用されている。片側(井戸枠時の上側・枠外面にあたる)に門受けがあり、扉板からの転用に際して厚みのある門受けの上部を削ぎ落としたと考えられる。上下ともに扉の軸は遺存しておらず、井戸枠の上端であった門受け側は特に損傷が激しい。門受けより

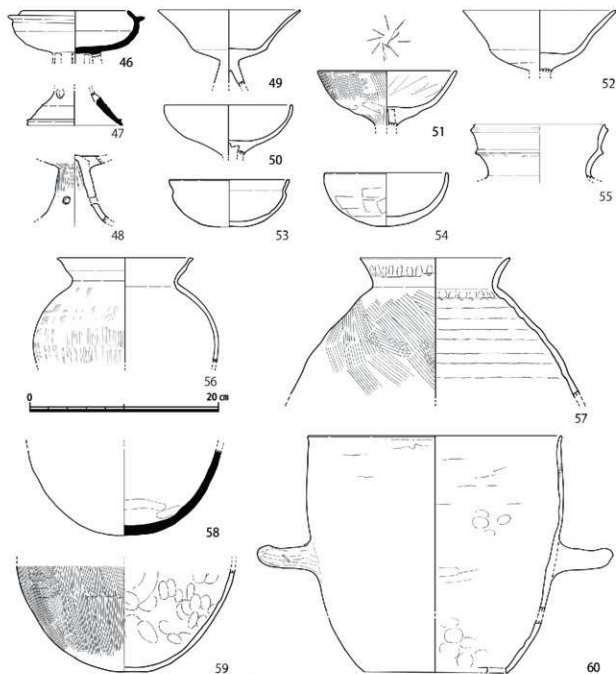


図 68 2区 中層遺構 土坑・井戸・ピット出土土器 (S = 1/4)

下には斜め方向の線状の傷が多く残る。いずれの段階で付いた傷であるかは不明である。20234SEの井戸枠材としては61の他にも約30点の板材・丸太材が出土している。中には方形および円形の穿孔を施す材も見られる。これらの井戸枠構成材については全て持ち帰り保管をしている。

20166SE (図 68-46・53・57・60)

46は20166SEの最上層である埋め土から出土した須恵器有蓋高坏である。坏部は完存している。脚部には八方向にスリット状の透かしが存在していたことが窺える。色調は特徴的な灰白色を呈する。全体に回転ナデで調整を施す。

53・57・60は中層の流入土からの出土である。53は土師器坏である。比較的丁寧なナデ調整が

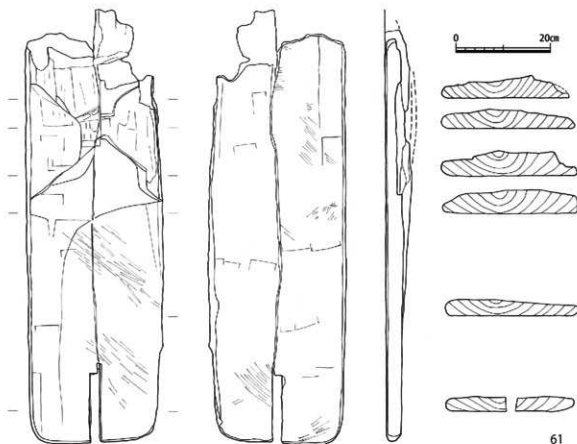


図 69 2区 中層遺構 20234SE 出土土師材 (S = 1/8)

施されているが表面の磨滅範囲が広く詳細は不明である。57は土師器壺である。体部は外面に左肩上がりの幅広のハケ調整を施し、内面には粘土紐痕が明瞭に残る。60は土師質の甗である。薄手で非常に硬く焼き締まっている。底部は小型の円孔が多く配される形であると考えられるが、遺存範囲が限られるため全体像は不明である。把手の形状は扁平である。

20169SE (図 68-58)

58は20169SEの下層から出土した須恵器甗である。球形に近い甗の体部下半であると考えられる。内面中央部および外面に降着灰が付着する。内外面ともにナデ調整を施す。

20202SK (図 68-49・52・56)

49・52・56は20202SKの貼床層より上層から出土した土師器である。49・52は高坏である。49は表面が強く磨滅しており、当初の形状は稜がより明瞭であった可能性もある。52は底部外面にケズリを施す他はナデ調整を施す。脚部上端は坏部に挿入された状態のまま折れている。56は甗の上半部である。貼床上に据え置かれたような状態で出土している(図版27)。色調は明橙色を呈する。これは新堂遺跡周辺出土の土師器では高坏・坏によく見られるものであり、胎土の状況も同様である。表面は磨滅しているが体部に縦方向のハケ調整が確認できる。

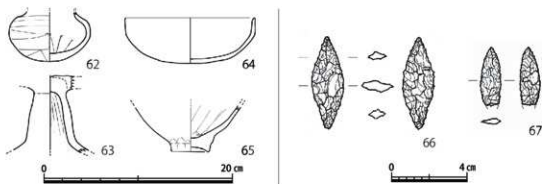


図 70 2区 中層遺構 溝出土遺物 (S = 1/4・1/2)

20154SK (図 68—50・54)

50・54 は 20154SK の南東部からまとまって出土した土師器である。50 は塊形の高環部で、脚部は挿入部分から剥落している。接続部には棒の刺突痕が明瞭に残る。54 は環である。やや厚手の作りである。外面はケズリを丁寧に施して滑らかに仕上げている。

21023SP (図 68—48)

48 は 2-1 区南東部に位置する 21023SP から出土した土師器高環である。円形スカシを三方向に穿つ。棒の刺突痕が存在する。

20196SD (図 70—63)

63 は 20196SD から出土した土師器高環の脚部である。環部にはわずかであるが漆が付着する。

20225SD (図 70—62)

62 は 20225SD から出土した土師器小形壺の体部である。外面にはやや粗いケズリを全体に施す。

20985SD (図 70—64)

64 は調査区南西部に位置する 20985SD から出土した土師器環である。破片状態であるがほぼ全体が遺存する。表面が磨滅しており細かな調整は不明である。20985SD から出土した土器片はいずれも同様の状態である。

20419SD (図 70—65~67)

65 ~ 67 は 20419SD 下層の砂層から出土している。65 は弥生土器甕の底部である。外面に黒斑が存在する。66・67 はサヌカイトの石鏃である。66 は無茎の柳葉形である。長さ 4.8 cm・幅 1.7 cm・厚さ 0.5 cm・重量 4.5 g を測る。67 は無茎の柳葉形で下部を欠く。長さ 3.1 cm・幅 1.0 cm・厚さ 0.3 cm・重量 0.9 g を測る。流水に晒されたためか破面も含めて稜は全体にやや丸みを帯びる。20419SD からはこれらの他に古墳時代前期と考えられる土師器の小片が出土している。

河道 (209895D) (図 71~151)

河道は今回の調査の中核を成す遺構である。出土遺物の大部分は河道からの出土であり、その種類・量ともに豊富である。河道は古墳時代中期を中心に機能しており、中期後半にはほぼ埋没したと考えられる。河道からは特に古墳時代中期前半の遺物が多量に出土している。中期前半の遺物は河道底面付近からも多く出土している。また、河道全体に散らばる形で古墳時代前期および弥生時代、縄文時代の遺物も一定量出土している。

河道出土遺物のうち、土器・土製品については河道内での出土層位（第6節で示す河道Ⅰ～Ⅴ層）別に報告を行う。ただし上層杭列（杭列①）、下層杭列（杭列④～⑥）、および杭列⑦下での一括出土については個別にまとめる。

石製品・鉄滓・木製品等については遺物整理の都合上および遺物の性質から、河道全体を通しての遺物種単位で報告を行う。これらの遺物の出土層位・状況の詳細については各個に触れることとする。動物骨と有機質遺物については第8・9節で報告を行う。

河道Ⅰ層 土器・土製品 (図 71~74)

河道Ⅰ層は河道の最上層にあたる砂・微砂層であり、河道上面のほぼ全体に広がって存在する。第6節で述べた河道埋没段階の流路の一つと考えられる 20270SD 出土土器もここに含む (71・107・116・128・134)。

河道Ⅰ層からは古墳時代中期後半以前の遺物が出土している。古墳時代中期後半は新堂遺跡の他地点での調査（主として遺跡南部）において最も多く遺構・遺物が発見されている時期である。河道Ⅰ層、特にその上面付近において中期後半の遺物が一定量出土している。その一方で河道下層に由来する中期前半～中頃の遺物も多く出土している。

68~104 は須恵器である。

68~73 は蓋環の蓋である。いずれもこの時期に通行の製品である。68 は完形で口径 11.2 cm・器高 4.4 cm を測る。70 は肩部が丸みを帯びる。72 は完形で口径 13.3 cm・器高 4.2 cm を測る。頂部は平坦面が広い。73 も完形で口径 12.8 cm・器高 3.4 cm を測る。頂部の半分が全体に凹凸形状である。

74~80 は蓋環の身である。79 が約 6 割の遺存状態であることを除くと、他はいずれもほぼ完形である。74 は底部が尖る形状であるが座りは良い。75 は平底の形状で、ナデ調整・ヘラケズリとも回転痕が明瞭である。76 は全体が下膨れの形状である。ヘラケズリによる稜が非常に鮮明である。77・78 はどちらも底部のヘラケズリをロクロを用いずに施している。ケズリの単位は細かく、方向は乱雑である。口縁の立ち上がりは 77 がやや内湾気味であるのに対し、78 は反り上がる。80 は外面底部中央付近にヘラケズリ面よりも凹凸直径約 4 cm 大の円形溝が巡る。さらに × 字状のヘラ記号が刻まれる。ヘラ記号は溝内にも通る。

81~86 は有蓋高環の蓋であり、いずれも頂部につまみを有する。81 以外は中期前半に遡ると考えられる蓋である。81 は完形で口径 12.5 cm・器高 4.8 cm を測る。つまみや肩部、口縁の各端部は丁寧に小さく摘まみ出されている。82 は口径 12.6 cm・器高 5.2 cm を測る。全体を回転ナデ調整で仕上げる。82 や 83 を始めとする今回出土した中期前半の蓋の特徴として、その多くが内面全体に焼成

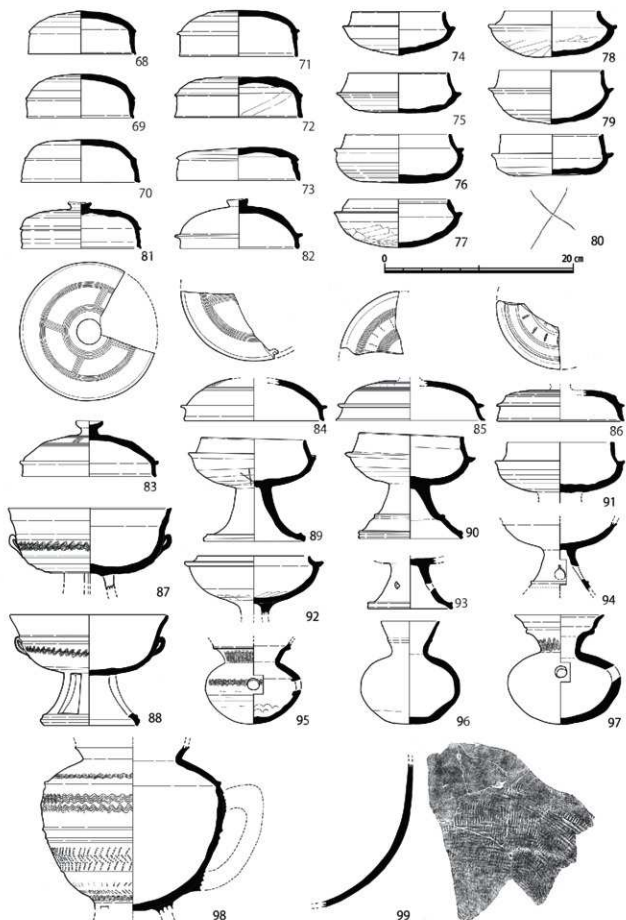


图71 2区 中石器时代 河道1层出土器物① (S=1/4)

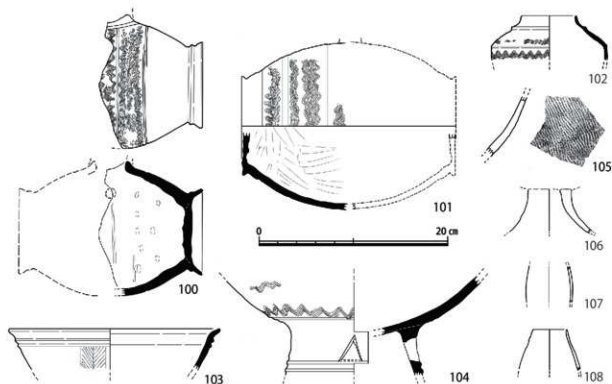


図72 2区 中層遺構 河道1層出土遺物② (S=1/4)

時の降着灰や自然釉が付着している点が挙げられる。これは上下をひっくり返した状態（つまみ側を床に）で一点一点個別に焼成したことを示すと考えられる。

83は同様の蓋が今回の調査で多数出土している。同様の文様をもつ例は全国的に見てもほぼ無く、かつ今回の調査では多数がまとめて出土している点において、今回の初期須恵器を象徴する資料と言える。出土個体数は若干の派生品を含めると約30点を数える。特徴として、垂直に立ち上がる短めの口縁、丸みを帯びる頂部、粘土紐貼り付けによって張り出す肩部、背の高いつまみ等の要素が挙げられる。さらに最大の特徴として頂部に施される文様がある。これは幅約0.5～0.8cmのハケ状工具によって描かれる櫛描文様（器面には5～7条の線として表われる）で、頂部のつまみを中心とした内・外二重の同心円帯の間に四方向（概ね十字形）に線を配置する形を基本とする。83の文様はその典型例である。文様はこれを基本形として個体ごとにアレンジを加える例も見られる。文様以外の調整は回転ナデを基本とする。83は口径13.8cm・器高5.7cmを測る。外側同心円文のやや外付近を境にして焼き色に明確な差異が見られ、前述の焼成時に文様とつまみを保護する焼き台を使用していた可能性を指摘できる。

84も83とほぼ同様の蓋であると考えられる。84のほうが肩部が鋭く張り出し、文様も鮮明である。85は同心円文帯の間に四点から成る列点文を施す。破片であるため、列点文の他に十字の櫛描文様が存在していたのかは不明である。口縁は他の個体よりも開く形状である。86は同心円上の凹線間に列点文を配する。復元口径は約13cmと他よりも小型である。

87・88は無蓋高坏である。87は復元口径17.0cmを測る。幅約0.8cmの粘土板を把手として貼り付ける。方形のスカシを四方向に穿つ。88は口径16.7cm・器高11.5cmを測る。台形スカシを三方向に穿つ。

89～92は有蓋高坏である。89は外面坏部下半に×字状のヘラ記号がある。脚部にスカシは無い。

90も同じく脚部にスカシは無い。裾部に歪みがあり、やや座りが悪い。91は脚部が剥落している。坏部底の剥離面には、接合のために付けた乱雑な刻み目が確認できる。92は口縁の立ち上がりが高く、口径11.6cmを測る。外面下半はヘラケズリの後に回転ナデを施して仕上げている。

93・94は高坏脚である。93は菱形のスカシを三方向に穿つ。外面の回転ナデ調整が非常に強い。94は円形の上部に短い突起を足す形状のスカシを二方向に穿つ。陶質土器に見られるいわゆる火焰形スカシを指向した形であると考えられるが、一般的な火焰形とは乖離している。胎土・色調は一般的な須恵器と同様である。全体に回転ナデ調整を用いる。

95～97は甕である。95は穿孔時に外から内へと押し出され捲れ上がった粘土が、ほぼそのまま内面に残る。96は穿孔部分を欠き、壺である可能性もある。全体に細頸で、さらに口縁部の半分は大きく歪んでいる。97は体部下半にヘラケズリを施した後に全体をナデ調整で滑らかに仕上げている。

98は把手付脚付壺である。体部の上・下段には波状文、中段には四点から成る刺突文を綾杉状に施す。頸部は下部が残るのみであるが、段・稜が存在したと考えられる。体部には大きめの把手の剥離痕が残る。把手は施文後に付けられており、剥離面には接続用の刺突痕が多数残る。脚は上端部がわずかに残る。上部のスカシは四方向に穿たれているが形状は不明である。

99は甕の底部付近の破片である。焼成がやや悪く表面は黄灰色を呈するが須恵質である。外面はタタキを施し、一部はそれをナデ消している。内面はナデ調整である。

100・101は樽形甕である。どちらも穿孔部分は遺存していない。100は焼成がやや甘く、内面は赤灰色を呈する。中軸線上に施される波状文は乱れがある。101は体部だけの破片で口縁部を欠く。外面の色調は黒灰色を呈する。

102は短頸壺である。外面に自然釉が付着し波状文や稜の一部が不明瞭となる。

103・104は器台である。103は口縁部上端である。縦方向に綾杉文を施す。104は坏部外面に波状文を施すが、全体に粗い。坏部内面には自然釉と降着灰が存在する。

105は韓式系土器の破片である。甕や甔の可能性はある。外面にタタキ、内面にナデ調整を施す。

106は瓦質焼成の高坏脚である。表面は全体に磨滅している。坏部との接続面で剥離している。

107・108は製塩土器である。どちらも葺頭卵形で、色調は薄橙灰色を呈する。河道I層からはこの他にも製塩土器の細片が少量出土している。

109～174は土師器である。

109は鉢もしくは壺の下半部である。外面は平滑だが内面はヘラ状工具で軽く成形したのみである。

110・111は坏である。110は厚手の作りで重量感がある。底面に黒斑が存在する。111は上半部が内湾する形状である。底部には平坦面がある。

112～137は高坏である。112は内外面ともにハケ調整を放射状に施す。113は全体に磨滅が激しいため詳細は不明であるが、口縁部全体に煤が付着する。114は脚との接合時に坏部側から粘土を充填する様子が確認できる。115は形状が須恵器の脚に近いが土師質である。スカシは円形で、数は不明である。116～118は脚部である。117は脚部上端を包み込んだ坏部が部分的に遺存しており、接合状況が断面確認できる。119～121は大型の高坏である。119は坏部が完形で残り、口径21.6cmを測る。粗いミガキを施す。120は内外面ともハケ調整を施した後にナデで仕上げる。121は坏部底面に薄く煤が付着する。脚柱部にミガキ、裾部にハケ調整を施す。122は塊形の坏部である。

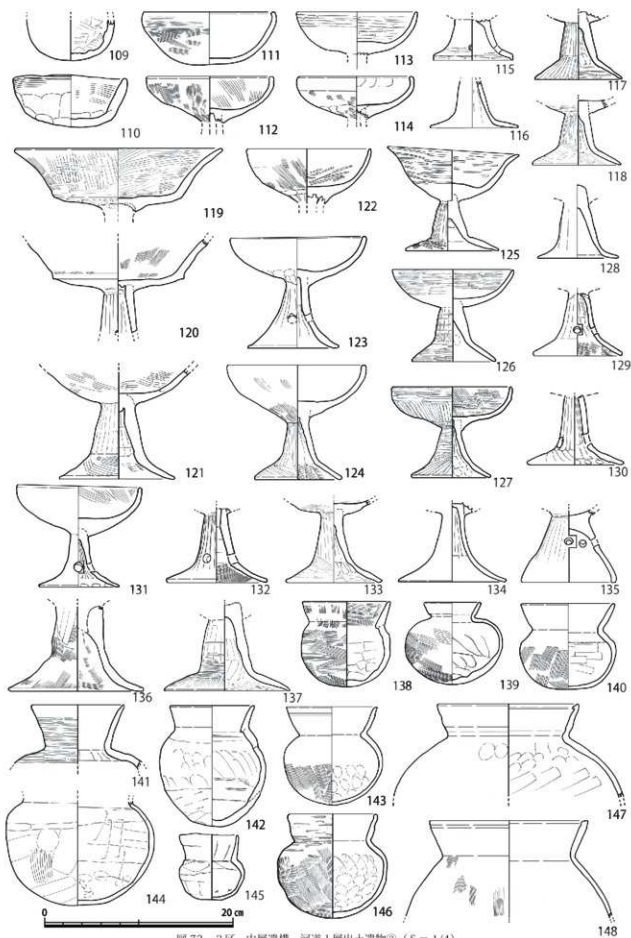


图 73 2区 中層遺構 河道1層出土遺物③ (S=1/4)

脚部内面の中軸から外れた位置に棒状具の刺突痕がある。123は円形スカシを一ヶ所に施す。スカシの外縁は不整形である。124は坯部を強めの回転ナデで仕上げる。坯部底面は貼り付けた粘土によって盛り上がる。125は表面が磨滅しているがミガキを確認できる。脚部上半は中実である。126は細かなミガキを全体に施す。ミガキの方向は部位によって一定である。127はやや小型の塊形高坏である。ハケ調整とミガキを併用する。128～130は脚部である。128は坯部が剥落し、挿入した脚部がそのまま遺存した状態である。129は円形スカシを二方向に穿つが、位置は対面からわずかにずれる。130も円形スカシを二ヶ所に穿つが、それぞれ高さが異なる。131は塊形高坏で、厚手の坯部に比して脚部は細くやや貧弱である。132～137は脚部である。132は縦方向のミガキを施し、面取り状を呈する。円形スカシを三方向に穿つ。135は壺・甕の台である可能性もある。中段やや上の位置に円形スカシを三方向に穿つ。色調は他と異なり暗灰褐色を呈する。136は厚手の作りで、下半にハケ調整を施す。137は坯部が剥離し、接合前の脚部が遺存した状態である。上端部には坯部の剥離痕や接合面に施された刻み目を確認できる。

138～140は小形丸底壺である。138は粗めのハケ調整を施す。頸部のくびれは弱い。139は短頸壺に近い。口縁から肩部にかけて、幅約1cmの溝状の欠けがある。これは使用に際して意図的に割られた可能性がある。

141は細頸壺である。外面にミガキを施す。142は長胴の壺である。平底であるが置くと傾く。粘土の継ぎ目が内外で確認できる。143は小形壺である。口縁上半に明瞭な沈線が巡る。内面には炭化物が付着する。144は広口壺であると考えられる。内面下半には指頭圧痕が多く存在する。145は小形壺あるいはミニチュア土器に含まれる可能性もある。粘土組織が確認でき、体部にはその線が斜めに通る。146は小形壺である。ミガキとハケ調整を施すが全体に磨滅している。底面を除く全体に薄く煤が付着する。147・148は広口壺である。148は外面口縁下に鈍い凹線が巡る。

149・150は二重口縁壺である。149は口縁部に緩やかな段をもつ。150は肩部に米粒大の刺突が四点並ぶ。全体に器面が滑らかな仕上がりである。

151～170は甕である。151は体部中央に一ヶ所、0.5cm大の穿孔がある。152は表面が全体に強く磨滅している。肩部にヘラ状工具痕が残る。153は外面に底部から肩部まで一連で掻き上げるハケ調整を施す。154は外面底面を除く全体に薄く煤が付着する。155は下膨れの体部をもつ。内面下半に長い指圧痕が残る。156は球形の体部をもつ。内面体部上半は連続的に指で斜めに掻き上げた痕が明瞭に残る。157は部位ごとに仕上げの調整が明瞭に分かれる作りである。158は下半部が尖り気味の形状である。底面付近の剥離状況から、台が付く可能性も考えられる。159は大きく開く口縁部をもつ。160は他よりも粗めのハケ調整を施す。肩部付近のハケは弧状を描く傾向にある。161は底面付近を広く打ち欠いて穿孔を行っている。色調は特徴的な明クリーム灰色を呈する。162は長胴甕の上半部である。体部は内面も外面と同じハケ調整を施す。163は長胴甕の下半部である。薄手の作りである。外面全体に煤が付着する。164は最大径33.0cmを測る球形甕の体部である。外面底部には使用時の擦れが明瞭に残る。165は大型の甕の上半部である。内面体部には粘土組織が確認できるが全体にナデ調整で平滑に仕上げている。166は長胴甕の上半部である。外面の肩部以下に煤が付着する。煤の付着する範囲が肩部を境に明瞭に分かれる。167は大型の球形甕の体部である。ハケ調整は非常に長いスパンで施される。器壁が全体に厚く、肩部付近は特にその傾向が強い。168は内面体部を細かなナデ調整で仕上げる。外面は上半にハケ調整を施し、下半は磨滅により不

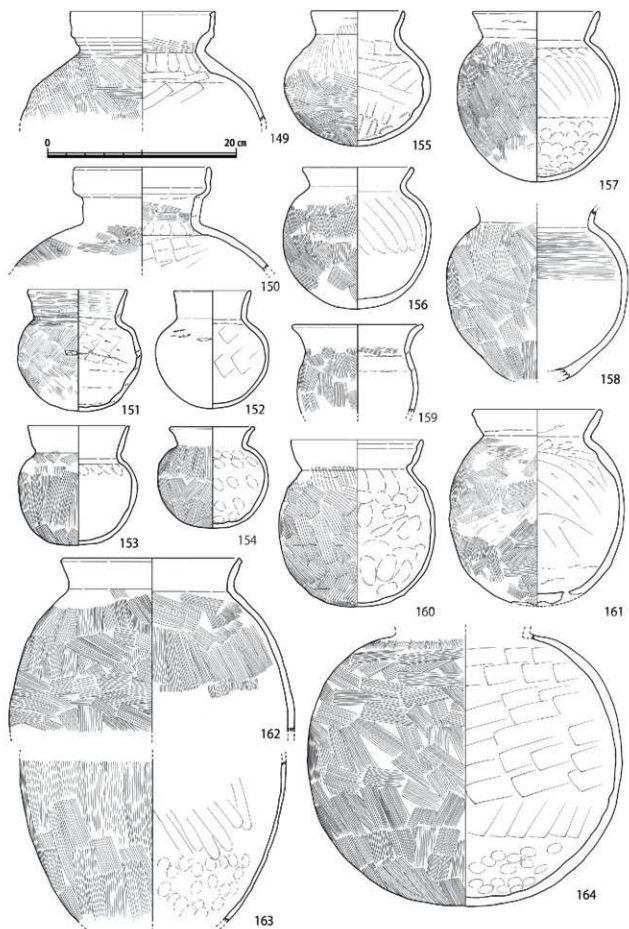


图 74 2区 中層遺構 河道1層出土遺物③ (S=1/4)

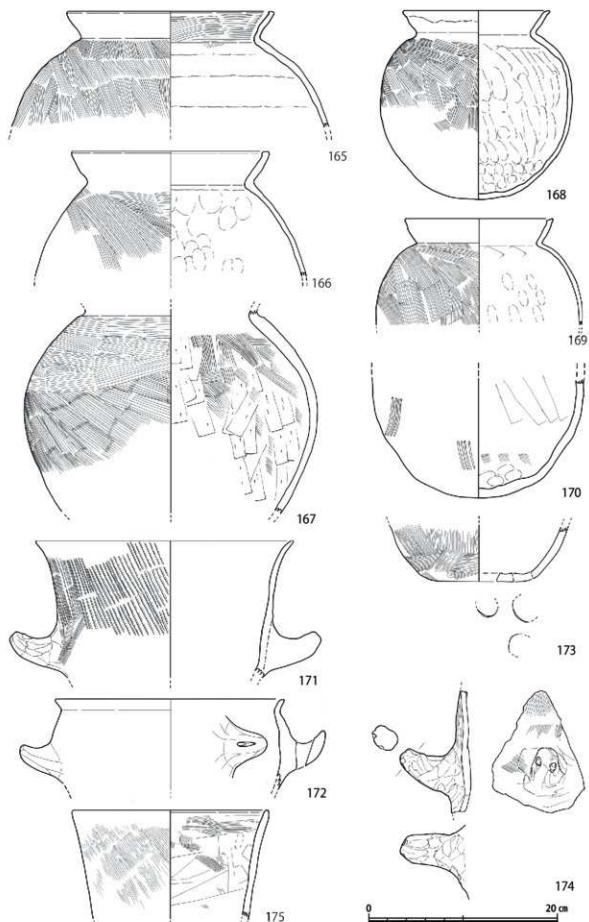


图 75 2区 中層遺構 河道1層出土遺物③ (S=1/4)

明である。169は口縁端部にやや幅広の面を作る。170は長胴の裏ないし壺の底部であると考えられる。厚手の作りであり、外面には一部にタタキ状の痕が存在する。

171は土師質の甎である。上方が開く形状である。外面には斜め方向のタタキもしくはハケが施されているが磨滅により判別が難しい。172は土師質の鍋である。注ぎ口の有無は不明である。把手は左右で位置と形状がやや異なる。173は土師質の甎の底部である。全体に被熱による変色が認められる。174は土師質の甎もしくは鍋の把手である。把手の下面端部付近に鼻孔のような二つの穴が並ぶ点特徴である。

175は円筒埴輪の上部片である。復元口径20.6cmを測る。

河道Ⅱ・Ⅲ層 土器・土製品(図76~86)

河道Ⅱ・Ⅲ層は河道がⅣ層の堆積によって概ね没した後に再び流れを取り戻した流路部分に堆積したと考えられる(図49)。埋土の堆積時期は古墳時代中期中頃であると考えられる。ただし当該時期の遺物は限られ、下層に存在して巻き込まれた中期前半以前の遺物の数が多い傾向にある。その比率は河道Ⅰ層よりも高い。

176~242は須恵器である。

176~186は有蓋高環の蓋で、河道Ⅰ層で述べた特徴的な文様をもつ一群である。176は83と同様の典型的な例である。十字文様の線はやや湾曲する。焼成がやや悪く表面の半分程度が赤灰色を呈する。177は櫛描きの同心円に沿う形で、櫛描きと同じ工具による斜めの刺突文を並べる。つまみの上部は不明である。内面頂部はナデ調整が施されておらず、指頭圧痕や指紋が多く残る。178は内側の同心円文の幅が狭く、間を埋める線も三方向である。外側の同心円文の内外で焼き色が分かれており、焼き台の使用が想定される。179はつまみが失われている。制作時につまみを取り付ける作業の影響か頂部付近に空気が入り込んだ結果、つまみ部分のみが割れて失われてしまったようである。全体の形状は口縁が内傾する点特徴である。180は他よりも器高が低く全体に広がる形状である。後から描かれた十字文様が、内側の同心円文上に食い込んでいる。181は同心円文の幅が狭く、間の櫛描文様は三方向であると考えられる。つまみ頂部の凹みが深い点も特徴である。182は177と近い文様構成であると考えられる。177よりも刺突文の間隔は広く、角度は垂直に近い。肩部の張り出しは鈍い。183は頂部の破片で、十字文様であると考えられる。つまみ端部や環部の割れ口の状況から、意図的に割られた可能性が考えられる。184は五方向に櫛描文様を施している可能性が考えられる。環頂部につまみとの剥離面が見えており、接合前に同心円状のスタンプを押すことで接合強度を上げようとしたことが確認できる。185は184と同様のつまみ接合面が存在する。内面にはにぶい緑色の自然釉が厚く付着する。186は178と近い形状であると推測される。

187は蓋環の蓋である。完形で口径12.0cm・器高4.1cmを測る。頂部は平坦である。

188~190はつまみ付の蓋で、上部に文様は無い。188は全体を回転ナデ調整で仕上げる。文様がある一群と同じく倒置した状態で焼成している。つまみはやや小ぶりである。189も全体を回転ナデ調整で仕上げる。口縁部は開く形状である。190はつまみのみが剥落しており、剥離面に同心円のスタンプを施している。他と異なり上面に自然釉が付着しており、正置状態で焼成したことが窺える。

191・192は蓋であると考えられる。つまみの有無は不明である。191は内面に自然釉が付着し、

あるいは浅広い器台の坏部であるかもしれない。192は肩部より上に文様状の凹線が三条以上巡る。

193・194は無蓋高坏である。193はほぼ全体を回転ナデ調整で仕上げる。脚部下半に三角形のスカシを三方向に穿つ。スカシのうち一つは頂部が横にずれる歪んだ三角形である。194も全体を回転ナデ調整で仕上げる。長方形スカシを三方向に穿つと考えられる。焼成はやや悪く薄赤灰～黄灰色を呈する部分が多い。

195は大型高坏である。口縁は受部があり蓋が存在する可能性があるが、焼成時に重ね焼きはしておらず坏部内外に自然釉が付着する。坏部中段に粘土紐を貼り付けた稜がある。それより上に波状文、下に刺突文を稜形状に施す。刺突文は列に乱れが多く、一部はハケ痕も残る。

196・197は有蓋高坏である。どちらも蓋とは合わさずに焼成している。196は全体を回転ナデ調整で仕上げる。脚部に正三角形のスカシを二方向に穿つ。さらに三角の頂点から上方向に、内面まで貫通しない直線を引く。197は特徴的な灰白色を呈し、明緑色の自然釉が付着する。紀州系の須恵器との指摘もある。全体に厚手の作りである。細長いスカシを三方向に穿つ。

198は無蓋高坏である。坏部は今回の調査で多く出土している有蓋高坏の蓋を上下反転させたような形状である。全体をナデ調整で仕上げる。199は大型高坏もしくは器台の坏部である。上に波状文、下に二段の刺突による列点文を施す。脚部上端にはスカシが存在することが確認できるが形状・数は不明である。

200は把手付高坏である。坏部下半に把手が剥落した痕がある。同じく下半には刺突による列点文を稜形状に施す。脚部のスカシは細く11方向に穿つ。

201・202は高坏もしくは坏身である。201は内外面全体を特徴的な光沢のある暗灰色の膜(釉?)が覆う。陶質土器に同様の製品が見られるとの指摘もある。内部の空気による膨らみが複数存在する。202はナデに用いた布地の静止痕が複数存在する。

203～206は無蓋高坏である。203は立ち上がりが短く内傾する。外面下半にはヘラケズリを施す。204は201と同様の特徴の膜をもつ。坏部底面に201よりも多くの自然釉が付着し、窯体の一部と思われる粘土や灰も溶着している。脚の上端部がわずかに遺存する。205は全体を回転ナデ調整で仕上げる。脚部は剥落しており、剥離面に接合のための乱雑な刻み目が確認できる。206も同様の剥離面が確認できる。外面はヘラケズリの後にナデ調整で仕上げるが、わずかにケズリ痕が残る。207は高坏の脚部である。細い方形のスカシを10方向前後に穿つ。

208は器種不明の口縁部である。外面には波状文を施す。内面には自然釉が付着する。

209は平底碗の底部であると考えられる。210は碗(カップ形とも)である。全体の約4割が遺存する破片であり、把手の有無は不明である。外面の波状文より下は細かなケズリの後に粗いナデ調整を施す。211は210とほぼ同様の構成であるが、全体の形状は細身でくびれも明瞭である。把手の有無は不明である。内面の回転ナデ調整は強く、一部は小さな段を成す。212は樽形の鉢である。外面に波状文を施し、その下方に頸状を描く。

213は須恵質の不明土製品である。本来は中空の球形であったと考えられるが割れて内部が確認できる状態となっている。外面は平滑である。現在の重量は約120gで、元は200g程度であったと推測される。全体の約7割の範囲に薄く釉が付着するが、その範囲内にも小さな欠けが見られる。焼き台の一種などの可能性が考えられる。

214～221は器台である。214は坏部の破片で、外面にコンパス文と波状文を施す。コンパス文は

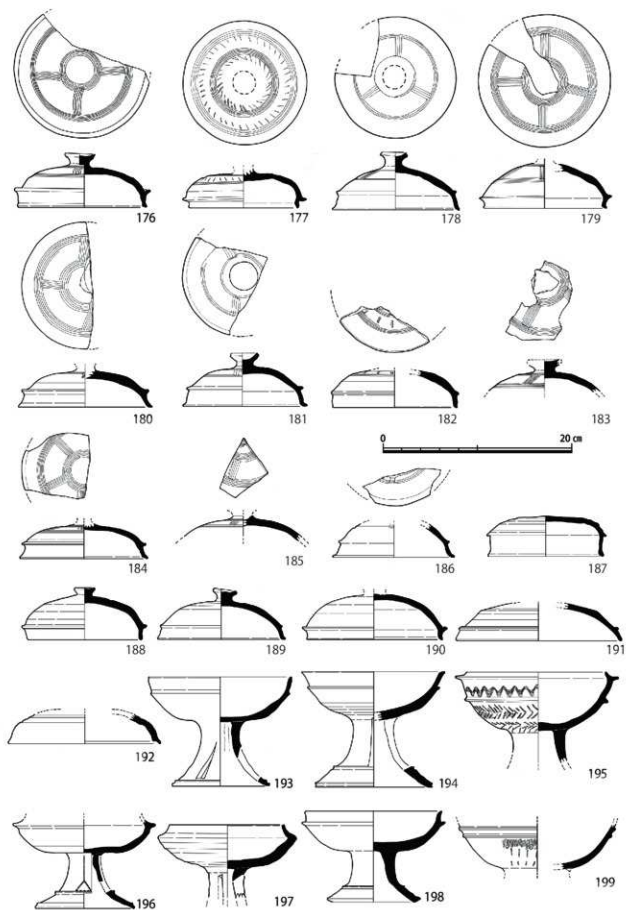


图 76 2区 中層遺構 河道Ⅱ·Ⅲ層出土遺物① (S = 1/4)

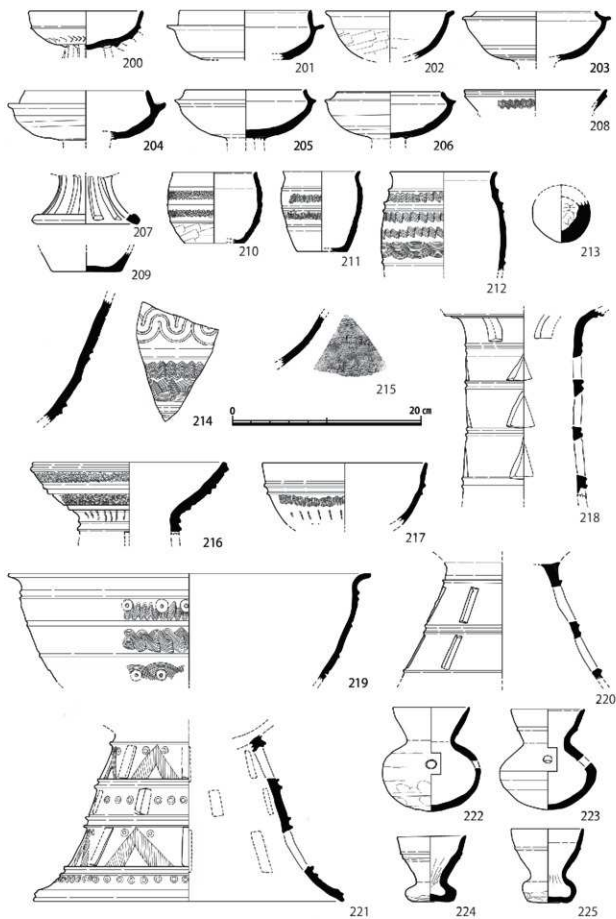


图 77 2区 中層遺構 河道Ⅱ・Ⅲ層出土遺物② (S = 1/4)

軸芯が明瞭で全体に非常に精緻なラインを描く。破片下端部にもコンパス文と同様の線の一部がわずかに確認できる。両者の間に波状文と鎖状文を描く。線はいずれも深く明瞭である。215は米粒大の四点から成る刺突文を並べる。216は筒型器台の上部である。坏部下端と筒部上端にそれぞれ刺突文を施し、一連の文様としている。上部には窯体からの付着物が多い。217は比較的小型の器台で、波状文と刺突文を施す。218は筒型器台の筒部である。スカシは最上段が方形で、その下に三角形が四段続く。各段とも四方向で、位置は方形と三角とで異なる。219は坏部上半の破片である。全体に薄手の作りである。波状文・鎖状文・組紐文の上から、中央に芯を持つ円形スタンプ文（直径1.4 cm）を施す。器壁が薄いため、スタンプ芯部分が内面に浮き出している。220は脚部上半である。坏部が剥落しており、断面で接合時の粘土の貼り足しが確認できる。長方形のスカシが上下に並ぶ。スカシの一部は上辺と下辺がずれて平行四辺形となっている。221は脚部である。長方形のスカシ、山形を縦線で充填する文様、直径0.6 cmの円形刺突文（竹管文か）を配置する。山形文様は後の段階で付けられており、一部は粘土貼り付けの稜の上面に線が及ぶ。

222・223は盃である。222はヘラケズリとナデ調整を施す。外面にはわずかに粘土紐が確認できる。全体に丸みを帯びた形状である。223は体部上半が直線的であるため下膨れ気味に写る形状である。穿孔は上向きである。外面は全体を回転ナデ調整で滑らかに仕上げる。

224・225は小形平底壺である。この器形は日本列島の土師器小形丸底壺が朝鮮半島南部で在地化し陶質土器として制作されるようになったものと理解される。いわゆる咸安系土器ともされる。224・225はともに色調は須恵器に一般的のものであり日本列島製であろうと考えられるが、なお議論の余地は残る。224は外面底部付近をケズリで仕上げる他は回転ナデ調整で仕上げる。内面下半には絞り痕が残る。225は224よりわずかに大きいのが全体の作りは同様である。外面底部のみ225は指で丁寧に平らに均している。

226～235は壺である。226は盃である可能性もある。内面頸部に接合痕が残る。他はナデ調整で平滑に仕上げている。227は広口壺である。頸部と体部に波状文を施し、その間に櫛描文を縦・横に施す。文様は全体に燃れがちである。228は体部上端と中段に波状文を施す。文様は全体に強く、特に上端部は器面との間に小さな段が生じるほどである。229は直口壺である。底面には据え付けによる直径約10 cm大の擦れ痕が存在する。

230は短頸壺である。肩部には櫛描文の間に波状文を施す。231は口縁端部を外に折り返す。その一部がさらに外に捲れており注口状となっている。自然軸が厚く広く付着し、一部は滴状になる。外面底部にはヘラ記号が乱雑に施される。233は全体を丁寧にナデ調整で平滑に仕上げている。口縁は二重口縁状の作りであるが外観は一重に近いものである。234は大型壺である。233と同様にナデ調整で丁寧に仕上げるが、内面を中心に指頭圧痕が残る。235は口縁の一部を欠くがほぼ完形である。他の出土須恵器と比較して表面に流水の影響が強く見られる。頸部下半から体部上半にかけて波状文と横方向の櫛描文を連ねる。

236～242は甕である。236～238は体部の破片である。236は外面に格子状タタキ、内面はナデ調整を施す。237は外面に斜め方向のタタキの後、ごく細い沈線が横方向に複数段巡る。内面はナデ調整を施す。238は外面の縄目のタタキの後に横方向のナデを施す。内面はナデ調整で仕上げるが、わずかに当て具痕が残る。239は甕の上半部である。外面体部には格子状タタキを密に施す。タタキは意識的に縞き目が分からないように施されている。口縁部および内面はナデ調整で仕上げる。

240は平底気味の甕の底部である。ナデ調整で平滑に仕上げられている。241は239と同様に格子状タタキを密に施す。242はやや平底の甕である。縄目タタキを細かな単位で施し、それぞれが小さな平坦面を作る。内面はナデ調整とハケ調整を施す。

243は瓦質寄りの甕である。外面にはタタキ、内面にはケズリとナデ調整を施す。下半には大きめの指頭圧痕が残る。244は瓦質の甕である。上半は縄目タタキの後、直交する沈線が巡る。内面はナデ調整を施す。

245～247は韓式系土器である。245は平底鉢で全体をナデ調整で仕上げる。外面には薄く煤が付着するが、底面には無い。246は甕あるいは鍋であると考えられる。外面に格子状タタキを施した後に上部はナデ消している。247は甕の下半部である。平底で、直径約2cm大の蒸気孔を多数穿つ。外面には斜め方向の弱めのタタキを施す。

248は製塩土器である。外面に条痕がある。

249・250はミニチュア土器である。249は平底甕形である。250は手づくね成形の鉢形である。作りは粗く口縁は波打つ。

251・252は土師質の蓋である。今回出土している初期須恵器の高環蓋を模したものと考えられる。

253～404は土師器である。

253は坏である。表面が磨滅しているがミガキ、ケズリが確認できる。

254は把手付壺(カップ形)である。須恵器の模倣品であると考えられる。把手は外側から挿入されており、上側は内側に完全に貫通している。

255～327は高環である。

255は深手の壺形高環である。全体に強いミガキを施しており、一部は溝状になる。256は細長くくびれる脚柱部をもつ。坏部外面に意図的と思われる打ち欠きが存在するが内面までは達していない。257は裾端部を小さく内側に折り返す。258は調整の一部に非常に細いハケを用いる。259は大きく開く坏部をもつ。坏部内面には敲打によると考えられる大小の窪みが多数存在する。また、底面が焼けており、何らかの作業に利用した可能性が高い。260は坏部と脚部を接合した後の頭部に細いヘラ状工具で沈線を巡らせる。261は非常に明るい橙色を呈する。細かな調整は不明である。262は坏部で底面に直径4cm大の脚部の剥離痕がある。剥離面は接合のための粗い刻み目が存在する。263は厚手で重量感がある。ハケ調整を施すが粘土紐痕が残る。264は細かなミガキを全体に施す。265は挿入式の脚部がそのまま剥落している。内面のミガキは放射状に施す。266は小形で、粘土のひび割れが目立つ。267は脚部の抜け落ちにより坏底面に穴が空いた状態である。268は脚接合時の刺突痕が明瞭に残る。269は内面底部付近に青海波文状の痕が残る。271は脚状端部が残る刺突痕が残る。272は坏部下半から柱部にかけて細いハケ調整を施す。273は深い壺形で、脚付壺の可能性が高い。坏部下半に稜があり、それより上にハケ調整を施す。274は円形スカシを三方向に穿つ。ミガキは非常に細かい。275は古墳時代前期の小形器台で円形スカシを穿つ。方向は不明である。276は坏部中央を柱状に突出させる。突出の周りに挿入された脚部は剥落している。277は坏部内面に0.1cm大の細かな敲打痕が多数存在する。278は鉢形の坏部である。外面より内面のミガキが強く施されている。

279～327は高環の脚部である。279は全体に比して大きめの円形スカシを三方向に穿つ。280は垂直気味に立ち上がる柱部をもつ。内面はひび割れを含む絞り痕が存在する。281は内面脚柱部を

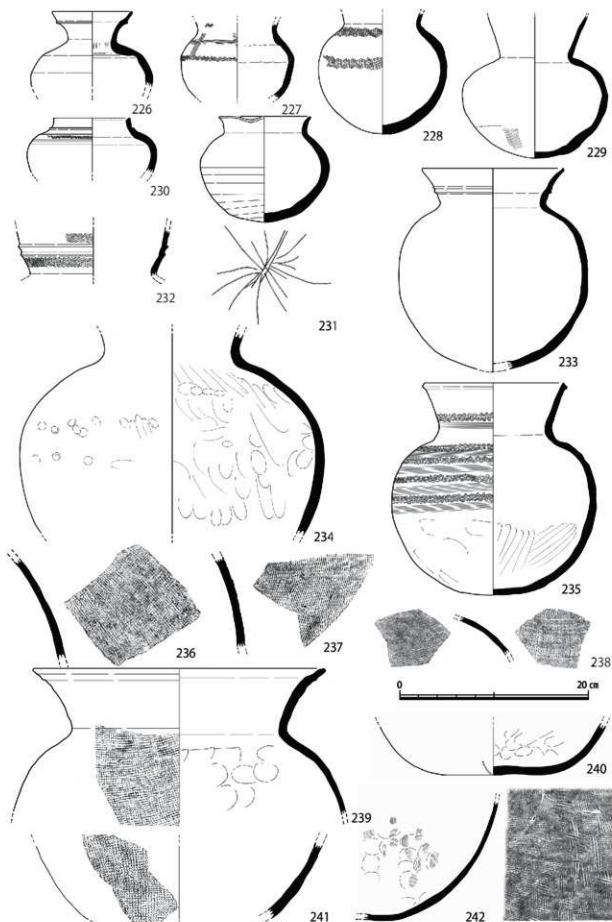


图 78 2区 中層遺構 河道Ⅱ・Ⅲ層出土遺物③ (S = 1/4)

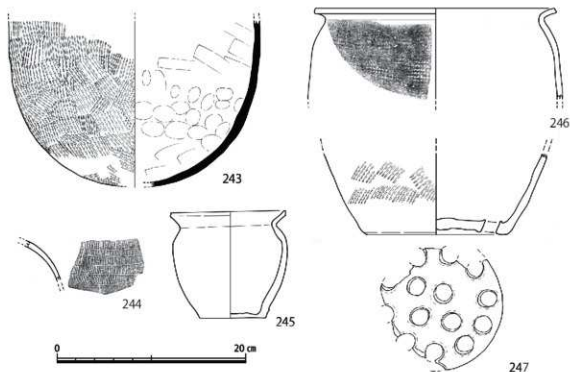


図 79 2区 中層遺構 河道Ⅱ・Ⅲ層出土遺物④ (S = 1/4)

ヘラ状工具で削り抜いている。円形スカシを二方向に穿つが位置は対面からずれる。282は外面をミガキで丁寧に仕上げる。283は柱部の広がりが多い形状である。284～286はいずれも外面に縦方向を主体とする細かなミガキを施す。287は内外面ともにハケ調整を施す。288は小型の脚で脚柱部は面取り状にミガキを施す。289は口縁部が剥離した状態である。外面の環部底面には指頭圧痕が多く残る。290は柱部上半から環部底面にかけての範囲の接合断面が確認できる形で割れている。291は環部との接合部分を強くナデ付けている。環部は大きく傾いていると考えられる。292も脚部上端への環部粘土貼り足し状況が断面確認できる資料である。293は横方向を主体とするミガキを全体に施す。294は276と同様の環部接合方法である。環部には細かなハケ調整を施す。295は裾部に非常に目立つ黒斑が存在する。296は脚部下半が山形の形状で螺旋状にミガキを施す。297は裾にヘラ記号が存在する。山形の枠を三本の縦線で充たした記号が二つ横に並ぶ。298は器壁が薄く、内面まで平滑に仕上げている。299は内面柱部に絞りによる特徴的な溝が並ぶ。300は上端に環部側に属す突起が割れて残る。301は柱部が縦に二分される形で割れた破片であり、粘土の貼り足しや接合状況が断面でよく確認できる。302は細頸で、ミガキとハケ調整を施す。303は裾端部の形状が特徴的である。304は内面脚柱部もナデ調整によって平滑に仕上げている。305は太い脚柱部をもつ。色調は他の高環に見られない暗褐色を呈する。306は内面脚柱部のケズリを回転を利用して一筆で施している。307は全体の形状が須恵器の高環に似るが焼成は土師器である。ナデ調整で仕上げる。308は環部が剥落しており、接合面には同心円状の凹線が存在する。309は外面のミガキがやや強く、脚柱部は面取り状になる。310は内面にハケ調整を放射状に施す。311は中心に脚柱部から挿入された突起が残る。突起は下側から器壁に強くナデ付けられて脚柱部と一体化している。312は外面のミガキと内面のケズリがともに面をもつ。313は全体の形状が丸みを帯びる。314

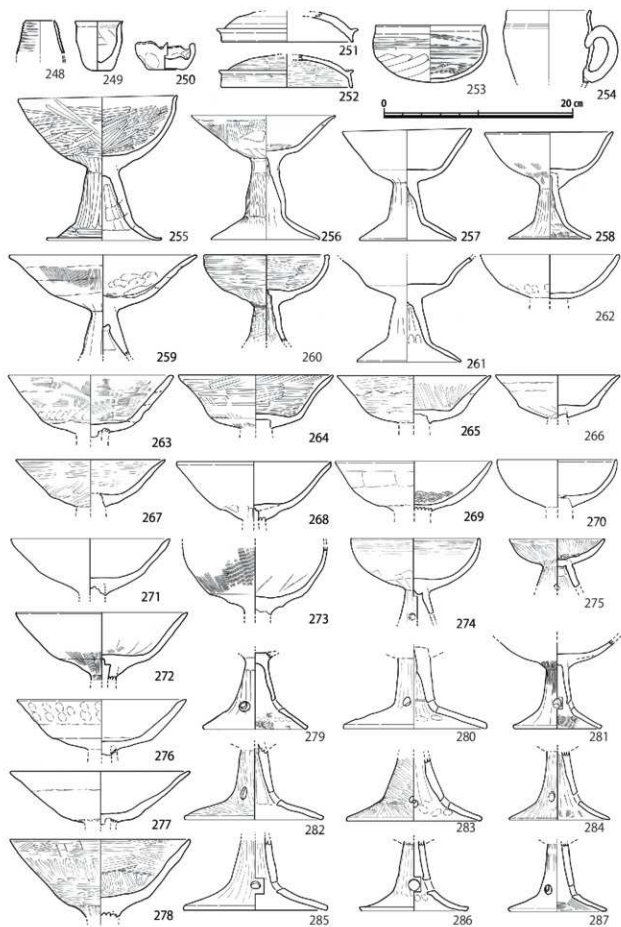


图 80 2区 中層遺構 河道Ⅱ・Ⅲ層出土遺物⑤ (S=1/4)

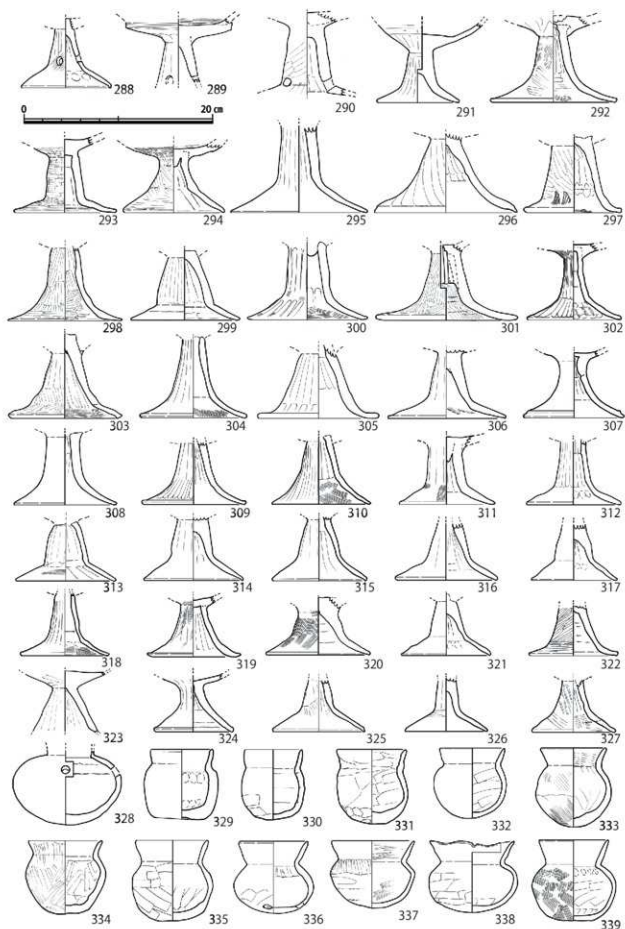


图 81 2区 中層遺構 河道Ⅱ・Ⅲ層出土遺物⑥ (S = 1/4)

は絞りの回転が上部の断面でも確認できる。315は裾端部を下方に小さく折り返す。316は他より長く流水に晒されたのか表面の磨滅度合いが高い。317は脚柱部上半が中実である。318は内面にハケ調整を施す。その際に付いた工具の静止痕が、深い二条の線として存在する。319は外面にハケ調整を広く施して仕上げる。320は遺存する坯底部が厚く、台付甕の台である可能性も考えられる。321は上端に絞りの回転によって作り出された突起が飛び出る。322は細かなミガキを螺旋状に施す。323は直線的に開く柱部で裾部の形状は不明である。324は小型の脚で、上半部は底面に対してやや傾く。325は裾端部に小さな面を作る。326は表面がやや磨滅しているが平滑な仕上がりであることが確認できる。327はほぼ全体が黒斑に覆われ、内面は特に炭化の度合いが強い。

328は甕である。外面は全体をナデ調整で仕上げる。下半は先にケズリを施すが回転ヘラケズリではないことが窺える。

329～334は小形甕である。ミニチュア土器と分類すべき可能性のあるものも含む。329は体部が厚手で重量感がある。底部中央には窪みを作り出す。330は表面に凹凸が目立つ。平底状であるが座りは悪く傾く。331は全体にケズリを施し、内面は特に粗い。332は体部がきれいな球形の小形丸底甕で、外面は平滑に仕上げる。333は体部に直径4cm大の表面の剥がれが存在する。334は平底気味で、やや粗いケズリとミガキを施す。

335～353は小形丸底甕である。335は外面体部のケズリが粗く面をもつ。336は下膨れの形状で、下半に穿孔をもつ。337は肩部の張り出しが強く、調整の差異もあり尖った印象を与える。338は口縁端部を広く打ち欠いており、端部は波打つ。339はやや平底の形状である。外面にハケ調整を施す。340は細かなハケ調整を施す。341は体部下半もケズリの後にナデ調整を施し全体を平滑に仕上げる。体部はきれいな球形である。342は体部中央に穿孔を施す。直径0.2cm大の孔のために外側を2～3cm大に広く薄く削っている。343は丸底であるが座りは良く安定する。外面に細かなハケ調整を施すが目立たない。344は体部下半に2.5×0.6cmの細長い穿孔が存在する。長く流水に晒されたためか、全体に鉄分が厚く吸着している。345は全体に被熱痕が見られ、内面を中心に薄く煤が付着する。346は細頸で、肩部にはミガキを施す。下半はケズリだが滑らかに仕上げている。347は外面口縁部以外は全体にやや粗い調整を施す。348は体部下半に穿孔を施す。直径0.1cm大の孔のために外側を3cm大の円形に広く削っている。体部下半には煤が薄く付着している。穿孔は煤付着後に行われている。349は344と同様に鉄分が吸着している。350は全体に厚手の作りである。胎土に0.3cm大程度の白礫が多く含まれる。351は幅広のハケ調整を施す。352は二重口縁甕である。小さな平底で座りが良い。353は頸部付近にハケ調整とナデ調整を施しており、場所によってくびれの形状に差異が大きい。

354は甕である。強いナデで頸部に凹線を巡らせる。内面には薄く煤が付着する。

355～359は小形丸底甕である。355は下膨れの形状である。356は粗いハケ調整とミガキを施す。357はケズリ、ハケ、ミガキ、ナデを施すがいずれもやや粗い仕上がりである。358は遺存する口縁上端部に剥離面が認められる。二重口縁であった可能性も考えられる。359は器面全体に凹凸や平坦面が目立つ。

360は小型だが厚手の甕である。表面の調整は不明である。361は甕の体部で、上段・下段にそれぞれ鈍い稜をもつ。362は甕体部下半の破片である。破片状態で鉄分が吸着しており、この塊形の形で使用された可能性もある。363は直口甕である。体部上半に二ヶ所、底部付近に一ヶ所の穿

孔がある。上部の穿孔については盃のような印象を与える。364は平底壺である。底部付近が厚く安定感がある。365は直立気味の口縁をもつ壺である。ハケ調整はスパンが長い。

366・367は壺もしくはやや細頸の甕である。366は細かなハケ調整を密に施す。367はやや大型で体部下半は尖り気味である。表面、特に下半は劣化している。

368は広口壺である。頸部のくびれはなだらかで外面に漆が付着する。369は肩部が張り出す形状である。口縁端部の一ヶ所に棒状具で押し付けたような窪みが外向きに存在する。370は内面底部に炭化米が薄く付着している。371は表面に凹凸が目立ち、粘土粗痕も確認できる。

372～378は二重口縁壺の上部である。372は体部との接続部分で剥離している。373は全体を回転ナデ調整で仕上げる。374は各部の稜がやや鈍い。頸部と体部にはハケ調整を強めに施す。375は土師質の筒型器台である可能性も考えられる。下端部にわずかに波状文が残る。376は口縁下段であり、残存部の上端に上段の剥離面がある。外面はハケ調整の後ナデ調整で仕上げる。377は二重口縁壺の頸部であると考えられる。くびれ部を階段状に仕上げる。内面全体に黒漆が塗布されている。378は外面および内面口縁部に黒漆が薄く塗布されている。表面が荒れているため詳細な範囲は不明である。

379は平底鉢である。体部外面に縦方向の並行タタキを施し、他はナデ調整で仕上げる。特に外面底部は平坦に仕上げている。内外面ともに上半と下半で色調に差異があり、使用時の影響が感じられる。

380は大型の鉢である。内外面ともハケ調整を施す。使用している工具は両者で異なる。381は平底鉢である。内面底には使用による器面の荒れが存在する。382は手づくね成形の平底鉢である。器壁は凹凸が多く、口縁も波打つ形状である。

383～404は甕である。383は体部上半に0.5～1.0cm大の不整形な穿孔がある。胎土中に含まれる大きめの礫を除去した穴を利用している可能性もある。384は底部に据え置いた際の擦れが明瞭に残る。内面のケズリはやや粗く一部は段になる。385は短く丸みを帯びた口縁を外側に折り返す。やや強いミガキを施す。386は平底気味で座りが良い。外面は丁寧にナデ調整で仕上げる。387は外面全体に煤が付着し、内面底部には炭化米が付着する。内外面とも平滑に仕上げている。388は口縁端部をごく小さく上方に摘み上げる。体部は上半を中心に凹凸が目立つ。389は細いハケ調整を掻き上げて連ねる。内面底部には上部の成形時に落ちたと考えられる粘土粒が複数付着する。390はくびれがなだらかなこともあって口縁部が長めの印象を受ける形状である。391は口縁部の粘土の貼り足しや凹線によって二重口縁状に見える形状である。外面はナデ調整で仕上げる。392は体部下半に横長の穿孔を施す。その右上にも穿孔を試みたと考えられる剥がれが存在するが貫通はしていない。393は外面に太いハケ調整を施す。内外面に薄く煤が付着する。394は外面の頸部より下に煤が付着する。395は口縁部をハケ調整の後にナデ調整で仕上げるがハケ痕も明瞭に残る。396は外面体部に左肩上がりの弱いタタキが残る。397は形状から、須恵器の模倣品あるいは焼成不良品であると考えられる。

398～400は長胴甕である。398は体部上半に約1×4cm大の横長の穿孔を施す。外面には長く流水に晒され砂粒が当たった凹みが多数存在する。399は体部中央のやや上に最大径が来る形状である。外面体部下半に煤が付着する。400は外面体部にスパンの長いハケ調整を施す。遺存する下端付近に煤が付着する。

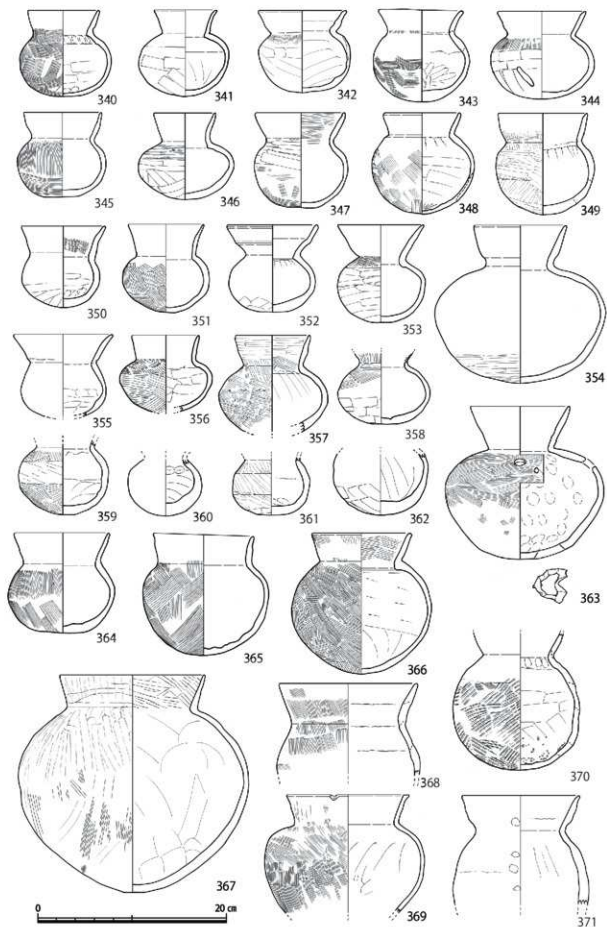


图 82 2区 中層遺構 河道Ⅱ・Ⅲ層出土遺物② (S = 1/4)

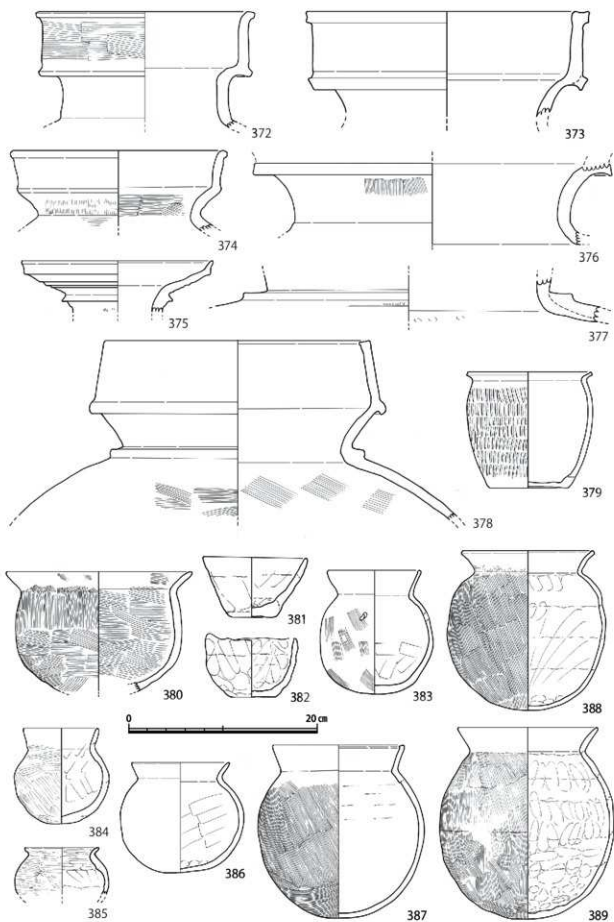


图 83 2区 中層遺構 河道Ⅱ・Ⅲ層出土遺物⑧ (S = 1/4)

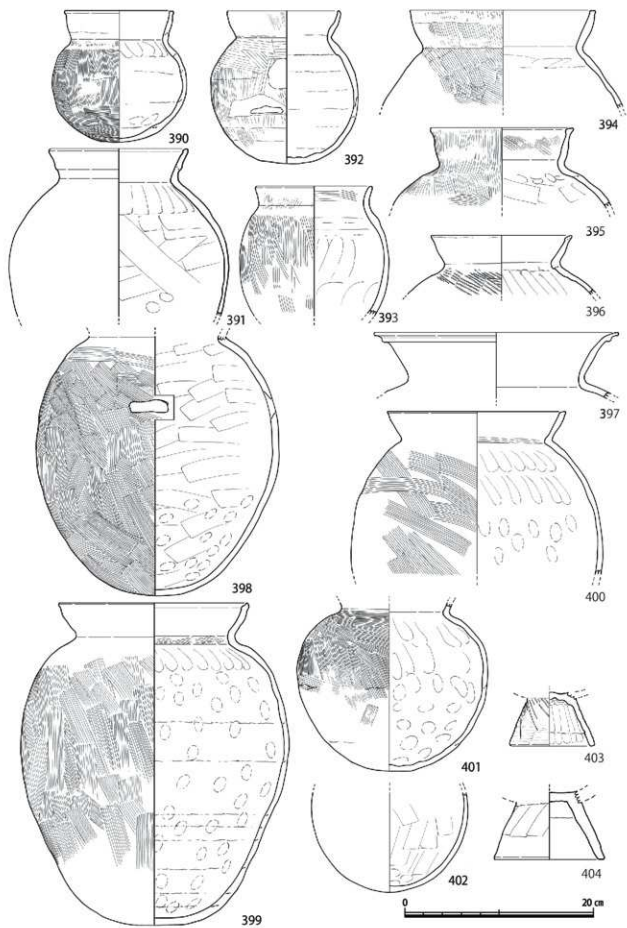


图 84 2区 中層遺構 河道Ⅱ・Ⅲ層出土遺物⑨ (S=1/4)

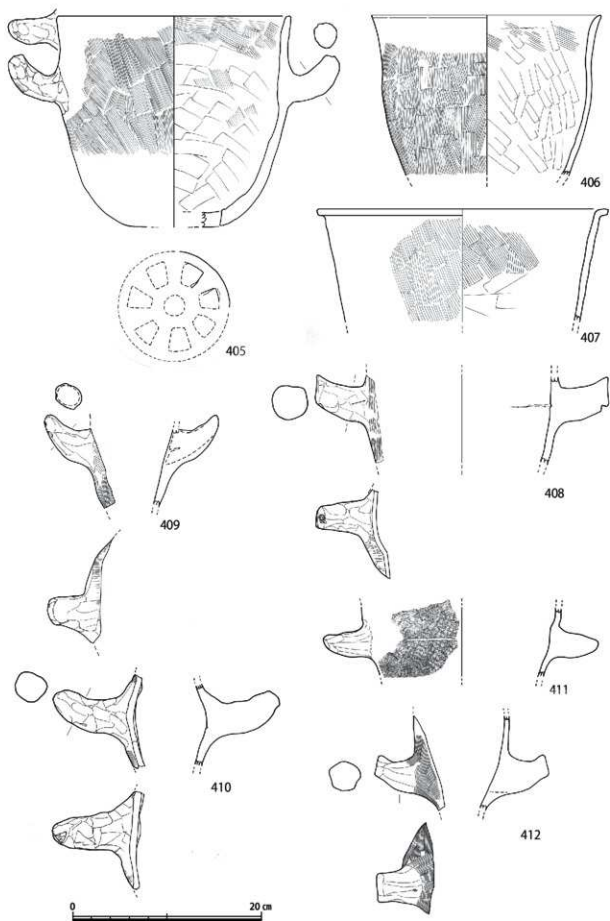


图 85 2区 中層遺構 河道II·田層出土遺物② (S = 1/4)

401は肩部が張り出す形状である。外面底部以外の全体に薄く煤が付着する。402は球形の体部下半である。外面の調整は不明である。

403・404は台付裏の台部である。403は体部底から体部上半にかけてヘラ状工具による線を描く。線は放射状に、概ね長い線と短い線を交互に描く。404は体部との剥離面がわずかに残るが、全体に丸みを帯びている。台部のみを反転して鉢状の器として再利用していた可能性も考えられる。

405～407は甗である。405は体部の高めの位置に丸みを帯びた把手が付く。蒸気孔は外側に台形の孔が並ぶ形状であると推測される。遺存するのは外側二ヶ所のみである。406は甗の上半部である。把手は遺存しておらず図化していない。外面のハケ、内面のケズリとも細かな単位で重ねている。407は上半部の破片で直線的な形状である。あるいは大型の鉢である可能性もある。細かなハケ調整を施す。

408～414は甗あるいは鍋の把手である。408は甗である可能性が高い。下面に支え棒痕が隣接して二つ並ぶ。把手外側は平坦に成形されている。409は把手根元の表面粘土が剥離しており、体部への接合・貼り足し方法が断面で確認できる。把手下面の先端付近に支え棒痕がある。410は鍋であると考えられる。内面には把手の挿入・成形によるひび割れが存在する。把手下面の先端付近には支え棒痕の可能性のある段が見られる。411は体部の中段、把手の左右延長線上に凹線が巡る。把手はわずかに上方に反り上がる形状だが、凹線の水平ラインとはやや振れる。412はやや不整形な形状で、外側には平坦面を作る。把手下面の根元側には支え棒の可能性のある不整形な窪みが存在するが、胎土中の礫の剥落である可能性も残る。413は大きく反り上がる把手である。上方からの切込は下まで貫通する。体部には格子タタキを施す。414は反り上がる角状の把手である。切込は中央付近で止まり下まで貫通しない。下面先端付近に平面形V字状の支え棒痕がある。

415～418は甗の底部である。415は丸底で、直径0.5～1.0cm大の円形蒸気孔を多数穿つ。孔の大きさは大小二種に分かれる。416は平底で、蒸気孔は中央に円形、その周囲に台形を放射状に並べる（八ヶ所程度か）形であると考えられる。417は丸底の甗下半部で、把手は遺存しておらず図化していない。細長い蒸気孔を放射状に二重に配置すると考えられるが中心部付近の詳細は不明である。体部は丁寧にナデ調整、ミガキを施して平滑に仕上げている。418は丸底気味だがわずかに稜をもつ。台形の細かい蒸気孔を並べる。中心部付近の状況は不明である。外面体部には細かな格子タタキを施す。

419～423は弥生土器である。419は台付裏である。420は小型高環の脚である。円形スカシを四方向に穿つ。スカシの配置と高さはやや乱れる。421は長頸壺である。全体が流水の影響を強く受けている。頸部下に二条の波状文を施す。体部下半には大小二つの穿孔がある。422は鉢である。ケズリとミガキを施すが特に外面に粘土のひび割れが目立つ。423は器台の脚部である。流水の影響が強く、破片端部が丸みを帯びる。円形と三角形のスカシを穿つ。

424は鱗付円筒埴輪である。鱗と突帯の剥離痕が存在する。黒斑が見られるが硬質な焼成である。回転台を用いない横ハケを施す。

425は土製紡錘車である。ほぼ完形である。丸みを帯びた円柱形で、直径3.7cm・厚さ2.1cm・重量34.8gを測る。孔の直径は0.6cmである。上面と下面はわずかに窪む。

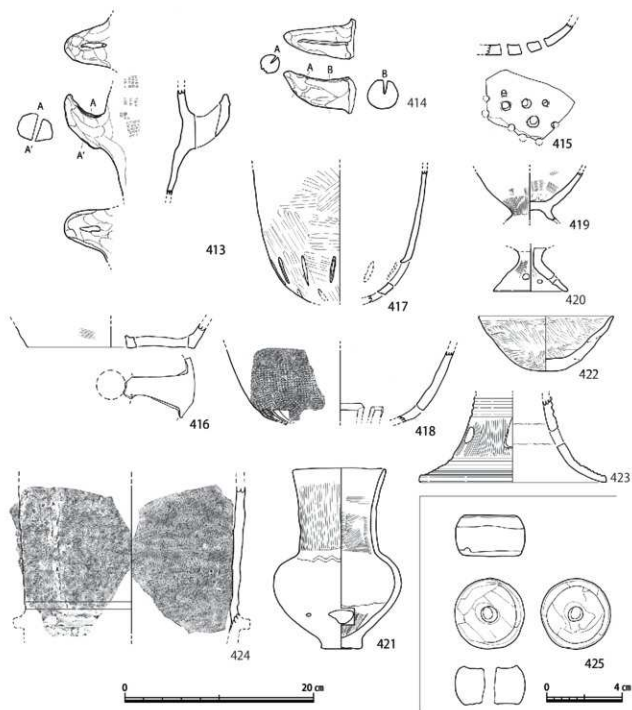


図86 2区 中層遺構 河道Ⅱ・Ⅲ層出土遺物① (S = 1/4・1/2)

河道上層杭列① 土器 (図87)

杭列①は河道の上層であるⅠ～Ⅲ層の時期に構築されたと考えられる杭列である。杭列①内からは木材とともに土器が出土している (図51・87)。

426は須恵器高環の脚部である。円形スカシを四方向に穿つ。スカシを穿つ高さはそれぞれやや異なる。427は土師器高環である。接合時の刺突痕が明瞭に残る。表面が磨滅しているが、ミガキ・ハケ調整が確認できる。428は土師器甕である。体部は中央よりやや上に最大径がくる形状であると考えられる。肩部にハケ状工具の先端を押し付けた三連の綾杉文様が存在する。口縁部は内外面と

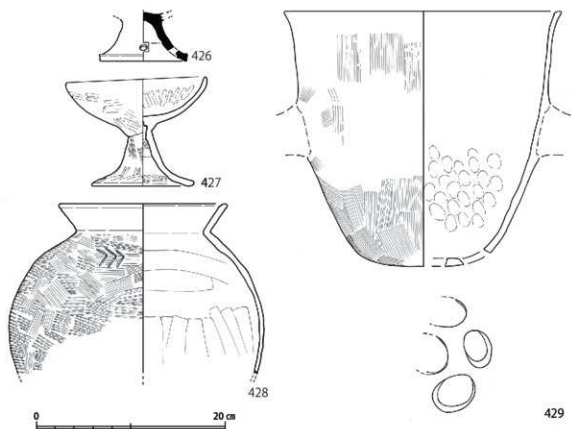


図 87 2区 中層遺構 河道上層杭列1出土土器 (S=1/4)

にも強い回転ナデ調整を施し、一部は線が強く残る。429は土師器甕である。丸底で楕円形の蒸気孔を並べる。蒸気孔は全体で七つあったと推測される。把手は剥落しており、形状は不明である。体部側の把手剥離面にも成形時のハケ調整が確認できる。内面は全体に強いナデ調整で仕上げる。

河道IV層 土器・土製品 (図 88～98)

河道IV層は主として青灰色シルト層からなり、微砂～砂層との互層状堆積となる部分もある。下層の杭列が埋没した後、河道全体が緩やかに埋没した時期の堆積と考えられる。IV層でも上半部は出土遺物が他と比べて非常に少なく、ここに示す遺物の大部分がV層に近い下半部から出土している。出土遺物の時期は古墳時代中期前半以前に収まる。V層に見られる中期初頭の遺物を多く含むが、それより新しい時期も少量見られる。

430～475は須恵器である。

430～437は高坏の蓋であると考えられる。430は83と同様の蓋であるが、文様は十字形から大きくずれており、Y字の間に一方向を足したような形となっている。431も同様に十字形に乱れがあり、遺存範囲では三方向か四方向か判断が難しい。つまみは他よりやや大型である。432は文様構成は他と同様であるが、径が小さく背の高い形状である。つまみも背が低い。上面には焼き台の痕と考えられる色調の違いが存在する。433は他より幅広の柳描同心円文様の間に、5点から成る刺突文を密に並べる。つまみは失われているが、ごくわずかにその立ち上がりが確認できる。倒置した状態で焼成している。434は頂部に3点～10点から成る刺突文を放射状、一部は綾杉状に施す。つまみは裾がわずかに残る。色調と焼成は他と異なり淡灰白色を呈する。435は幅広の同心円文と刺

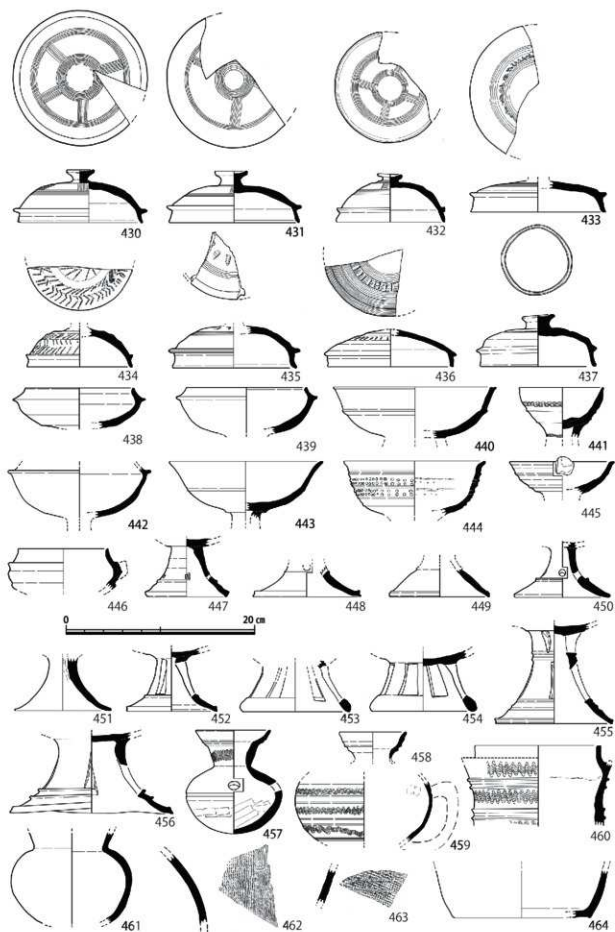


图 88 2区 中層遺構 河道V層出土遺物① (S = 1/4)

突文を施す。434と435は同じ工具を用いている。436は頂部に広く同心円の櫛描文様を施す。同じく同心円状にハケ状工具による刺突文を施す。つまみの有無は不明である。倒置した状態で焼成している。437は肩部に稜をもち、頂部に凹線を巡らせる。つまみは根元が太い。倒置して焼成しており、内面には濃緑色の自然釉が厚く付着する。

438～445は高環である。438は外面下半をヘラケズリ後にナデ調整で仕上げる。内面には焼成時の付着物が多い。439は下端にわずかに脚部への立ち上がりが確認できる。440は無蓋高環である。全体に強めの回転ナデ調整を施す。脚部には細長いスカシを十方向に施すと考えられる。441は特殊な形状で、小型器台である可能性もある。脚部は中空である。環部は胎土中に空気が多く含まれ、全体に大小の膨らみが存在する。一部は焼成時に破裂している。環部底面には自然釉と降着物が付着している。442は全体に回転ナデ調整を施す。443は無蓋高環である。脚部との境には突起状の段が巡る。内面環部には広く薄く自然釉が付着する。444は外面に直径0.2cm大の小突起が四列巡る。この突起は内面側からの針状工具による刺突で作り出されている。内面側にはその刺突孔と割付線が巡る。突起の一部は外面側にも小孔が貫通している。445も441と同じく小型器台である可能性もある。環部底面を中心として全体に緑色自然釉が付着する。口縁端部には直径1.5cm大の焼成時降着物が付着しており、その周囲の釉は藍色を呈している。

446は把手付高環であると考えられる。野中古墳出土の陶質土器に同様の器形がある。把手は根元のみが遺存する。全体に明緑色の自然釉が付着する。本体の色調は明灰色を呈する。

447～456は高環の脚部である。447は方形棒を挿入して穿孔したスカシを四方向に穿つ。スカシは均等配置からずれる。448は円形スカシを穿つ。遺存するのは二ヶ所で、当初は三方向であったと考えられる。449は裾部の破片である。稜の位置が他より高い。450は円形スカシを四方向に穿つ。451は裾端部が薄く、ラッパ状に開く形状である。内面上半にはしぼり痕が明瞭に残る。452は台形スカシを三方向に穿つ。外面は全体に付着物が多い。453は台形スカシを六方向に穿つと考えられる。454も453とほぼ同様の個体である。どちらも内外面を回転ナデ調整で仕上げる。455は上段に逆三角形、下段に長方形のスカシをそれぞれ四方向に穿つ。下段スカシの一部は上端の幅が狭く三角形に近い形状となる。内面環部底には接合のための刻み目が確認できる。456は大型の高環で、下半は全体に歪みが大きい。三角形スカシを四方向に穿つ。

457は甕である。下半は細かなケズリで滑らかに仕上げる。波状文は施文位置が上下する。

458は甕あるいは壺の口縁部である。自然釉がごく薄く付着する。459は壺あるいは埴の小片である。把手の剥離痕が存在する。波状文は各段で様相が異なる。460は壺の口縁部である。受部先端の形状は不明である。形状から蓋が存在する可能性が考えられるが、口縁部および受部には自然釉が付着する。下半は体部との接合のため粘土が貼り足されており、遺存範囲ではそこに空気が入り込み剥離している。461は壺である。全体を回転ナデ調整で丁寧に仕上げる。

462・463は甕あるいは壺の体部である。462は外面に細かな並行タタキを重ねる。内面はナデ調整を施す。463は格子タタキの上から横方向に凹線を二本施す。内面はナデ調整を施す。

464は平底甕あるいは鉢の底部である。全体に回転ナデ調整を施す。底部外縁は小さく突出する。465は蓋付鉢であると考えられる。外面に山形文様を施す。外面には自然釉が付着する。

466～468は把手付埴である。466は把手取り付け時の押し付けによって全体に歪みが生じている。467は大型の底部で、把手は根元で剥離している。内面に自然釉が付着する。468は把手である。

下端は体部との接合面で剥離している。

469～475は器台である。469は三角形のスカシを各段互い違いに穿つ。波状文の状況は各段で異なる。頸部に粘土を貼り足して作った段には縦方向のひび割れが目立つ。470は脚部に三角形のスカシと横方向の凹線を巡らせるだけの簡素な作りである。脚部と環部の剥離面には環部側に刻み目が確認できる。471は筒部の破片である。粗めのハケ状工具によって波形文様と、同工具による楕圓形の刺突文を施す。下端には小型の円形スカシを穿つ。472は方形スカシと直径1.3cm大の中央に芯を持つ円形スタンプ文を施す。外面環部底面に自然釉が厚く付着する。473は脚部の破片で鋸歯文の内部を斜線で充填する。474は上下二本線からなる山形文様の間に縦線を充填する。475は環部底面の破片で、下端に脚部との剥離面がある。475とは逆に二線の山形文様の外側を線で充たす。坏上部は鋸歯状になると考えられる。

476～485は韓式系土器である。

476は甕もしくは壺の肩部である。斜格子タタキを施す。477は格子タタキを丁寧に施す。器の上下と格子の方向を合わせていると考えられる。478は鉢の口縁部であると考えられる。斜格子タタキを施し、上部をナデ調整で仕上げる。479は平底の甕底部である。蒸気孔は直径1.4cm大の小円孔を並べる形である。外面に格子タタキを施す。480は甕の把手周辺の破片である。格子タタキを施す。把手下面には支え棒痕がある。孔の位置は把手下面中央からややずれる。481・482は鉢もしくは甕の口縁部である。481は大型で厚手の作りである。外面には平行タタキを施す。タタキは強く、一部には段差が生じている。482は口縁端部直下まで格子タタキを施す。483は甕の体部であり、外面には単位の大きい格子タタキを施す。上半はナデ調整で仕上げるが部分的にタタキ痕が残る。内面は全体をナデ調整で仕上げる。外面下半には煤が薄く付着する。484・485は甕の体部である。どちらも外面に斜格子タタキ、内面にナデ調整を施す。484は外面に直径1～2cm大の敲打によると考えられる剥離が多く存在する。

486は瓦質土器の甕であると考えられる。外面に鳥足文タタキを施す。

487～491は土師質のミニチュア土器である。487は弥生土器蓋に似た形状の蓋である。小孔が対面の二ヶ所に存在する。488～491は鉢もしくは壺形である。488は平底気味で全体に不整形である。489は下部の粘土が剥離している。490は内面中央に炭化米が付着する。ヘラ状工具痕が複数存在する。491は下半部が厚い。底部が尖り、座りが悪い。

492・493は製塩土器である。492はチップ状の小片である。内面はケズリ、外面はナデを施す。493は裁頭卵形である。外面はタタキ、内面はハケ調整を施す。

494・495は土師質で韓式系土器の可能性が有る。494は平底鉢の底部である。外面にハケ調整、内面にケズリを施す。495は鉢の口縁部である。ナデ調整で仕上げるが、わずかにタタキ・ケズリの痕が残る。

496～498は鉢である。496は手づくね成形でミニチュア土器に含まれる可能性がある。497は平底で、全体にヘラ状工具の掻き上げ、静止痕が存在する。胎土・焼成は弥生土器に近い。498は全体をナデ調整で仕上げる。

499は須恵器高環蓋と同様の形状の蓋であるが、焼成・胎土ともに土師器と同じである。全体に回転ナデ調整を施す。

500～692は土師器である。

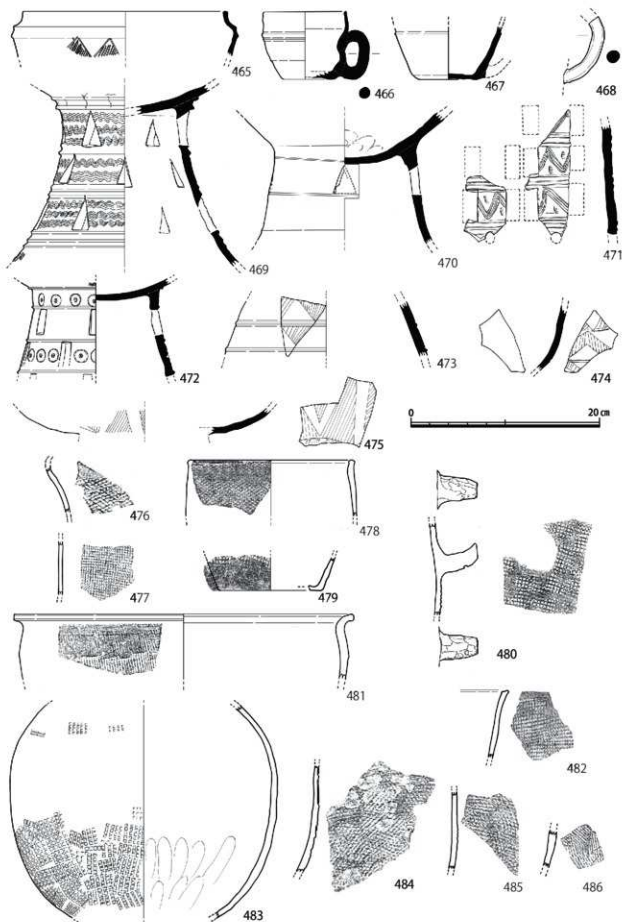


图 89 2区 中層遺構 河道IV層出土遺物② (S = 1/4)

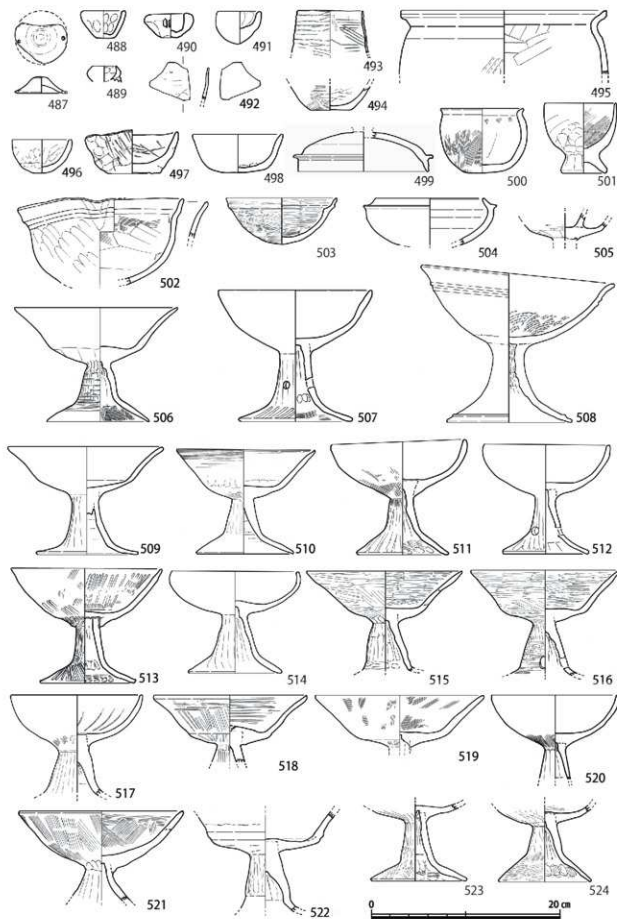


图 90 2区 中層遺構 河道IV層出土遺物③ (S = 1/4)

500は鉢である。全体に丸みを帯びるが底部は小さな平坦面をもつ。口縁部を中心に煤が付着する。501は脚付鉢である。内面は底部中央から螺旋状に掻き上げるようにハケ調整を施す。502は片口鉢である。全体に歪みが見られる。503は小形丸底鉢である。全体にミガキを施す。各部の稜は丸みを帯びる。内面底部に黒斑が存在する。504は須恵器の坏あるいは高坏の坏部に近い形状の土師器である。外面体部にケズリを施した後に全体を回転ナデ調整で仕上げる。

505は台付高坏である。坏部中央に直径約3.5cm、高さ1.5cmの上方が開く円柱状の台が存在する。

506～605は高坏である。

506は内面裾部に当て布の痕が明瞭に残る。507は流水に長く晒されたためか、表面が非常に磨滅している。508は形状が須恵器高坏に近い。内面坏部には青海波文の当て具痕が存在する。坏部はやや傾く。須恵器の模倣品、あるいは須恵器職人による製品であると考えられる。509は脚柱部外面のミガキが面取り状を成す。510は口縁部付近の回転ナデ調整が非常に強く、線が明瞭に残る。511は脚柱部上端から坏部下半にかけて一連でハケ調整を施す。512は円形スカシを三方向に穿つ。位置は偏る。513は外面全体にミガキを施す。内面には刺突痕がある。514は口縁が強く内湾する形状である。坏部底面が盛り上がる。515は幅の広いミガキを施し、脚部は面取り状になる。516は表面が磨滅しているがミガキが確認できる。517は坏部外面の表面が全体にごく薄く剥離している。内面には工具の当て具痕が放射状に存在する。518は坏部底面中央が盛り上がる。この部分に貼り足された粘土の一部が剥落しており、挿入された脚上端部が見える状態となっている。519は上端部をわずかに残して脚部が折れている。内面に深めの刺突痕が存在する。520は坏部の内外面に強めの回転ナデ調整を施す。521はハケ調整の後にナデ調整で仕上げるが、ハケが多く残る。522は脚柱部上半が中実である。外面の各部屈曲付近に鈍い凹線を巡らせる。523は中軸からずれた位置に刺突痕がある。524は断面で坏部と脚部の接合状況が確認できる。坏部底面に脚部挿入時のひび割れがある。525は内面坏部に放射状のミガキを施す。526は内面坏部に工具の静止痕が放射状に残る。この他のハケ調整やミガキ、ケズリいずれも螺旋状に施されるのが特徴的である。527は大型の高坏である。脚部は縦方向のミガキの後、横方向のミガキを施す。528は須恵器の高坏に似た形状であり、立ち上がりはそれらより低い。回転ナデ調整で仕上げる。529は浅く開く形状の坏部である。刺突痕および剥離面の状況がよく確認できる。530は外面上部に凹線が二条巡るが、これは口縁部付近のナデ調整によるものである可能性がある。531は坏部底面が広く平坦な形状である。脚部との剥離面は平坦である。532は大型かつ厚手の作りである。上端部は粘土を貼り足して成形しており、その部分の多くが剥がれ落ちている。533は外面坏部を強くナデ上げており、その凹凸が残る。534は脚部が丸々抜け落ちている。535は内面に太いミガキを施す。内外面に薄く煤が付着する。536は脚部との剥離面も含む全体に、流水に晒されことによる鉄分が厚く吸着している。537は磨滅により細かな調整は不明であるが全体に平滑な仕上がりである。538は全体に強めの回転ナデ調整を施す。539は径が小さい形状である。外面には薄く粘土を貼り足した稜が存在する。540は外面に非常に細かなハケ調整を施す。541・542はともに径がやや小さく、内外に横方向のミガキを施す。543は内外面にハケ調整を放射状に施す。544は浅く開く形状で、細かなミガキを施す。545は内面全体に煤が付着し、さらに0.1～0.2cm大の敲打痕が多数存在しており、何らかの作業に用いた可能性がある。外面底部には広く剥離痕がある。546は接合部の状況が断面で確認できる。

547～605は高坏の脚部である。547は内面裾部に布目痕が明瞭に残る。548はミガキ、ハケ、ケ

ズリのいずれも縦方向を強く指向して施される。549は内外面に煤が付着する。環部は口縁部が立ち上がる部分で剥離している。550はためのミガキを施す。551は脚部の中ほどに円形スカシを一ヶ所に穿つ。552は外面に部分的に煤が付着する。553は接合部分が断面でよく確認できる。554は円形スカシを三方向に穿つ。表面は磨滅しているがミガキが確認できる。555は内面脚柱部以外を丁寧な回転ナデ調整で仕上げる。形状や調整から須恵器の模倣品である可能性もある。556は大型でやや厚手である。557は脚部上端が環部底面にまで突き抜ける。色調にはぶい赤褐色で他の高環群と異なる。558は太い脚柱部に短く広がる裾部をもつ。端部はわずかに反り上がる。559は環部と脚部の接合後に外面を強めにナデ付けた痕がある。560は内外面とも裾部の凹凸が目立つ。561は脚部上端の接合面に螺旋状の刻み目が確認できる。上端から約1cm下には環部の剥離痕が線状に巡る。562は円形スカシを三方向に穿つ。配置は均等である。563はやや小型の円形スカシを三方向に穿つ。564は内面裾部のハケ調整をはじめ全体に整然とした調整を施す。565はミガキの面が明瞭である。566は上端に環部との接合面がそのまま残る。567は大型の円形スカシを三方向に穿つ。568は円形スカシを二方向に穿つが、位置は対面から大きくずれる。569は環部との接合面がそのまま残り、剥離面にはハケ状の線が同心円状に巡る。円形スカシを一ヶ所に穿つ。570は外面脚柱部に一連のミガキを螺旋状に施す。571は外面上半と内面裾部にハケ調整を施す。572は挿入した脚部がそのまま残る。上端まで中空である。573は絞りによって閉じた上部を刺突によって貫通している。574はケズリとナデ調整を施す。外面に薄く煤が付着する。575は幅が広いミガキを螺旋状に施す。576は接合部の剥離面が平坦である。裾部の広がり是不均等でやや傾く。577はやや幅広のミガキを施す。578は幅広のミガキを長いスパンで施す。579は全体に厚手の作りで重量感がある。脚上部は広がる形状である。580は面取り状にミガキを施す。581は環部から挿入された突起が脚上端にナデ付けられ一体化している。582は上端部が環側に残って折れたと考えられる。583は外面の半分程度に薄く煤が付着する。584は内面脚柱部に絞り痕と余剰の粘土粒が残る。585は外面下半に鈍い凹線が巡る。586は外面全体に回転ナデ調整を施す。形状と合わせて須恵器の模倣品である可能性がある。587も同様の可能性がある。588は外面に煤が薄く付着し、裾部にはさらに上からの敲打痕がある。589は表面の磨滅が激しく調整は不明である。脚柱部上半は中実である。590は裾が大きく広がり、端部はやや反り上がる形状である。591は絞り痕が明瞭に残る。592は内面に裾部のナデによって生じた段が存在する。593は上端部に環部の突起に対応すると考えられる窪みが存在する。594は脚柱部の中ほどに凹線が巡る。595は裾端部を上方に捲り返して作っている。596は外側裾部にハケ調整を施す。597は裾部が内外面とも小さくうねる形状である。598は外面に細かなハケ調整を施す。599は内面も含めて全体を平滑に仕上げる。600は内外面の裾部にハケ調整を施す。601は脚柱部下半が未調整で、器壁が大きく波打つ。602は外面にやや粗いハケ調整を施す。603は外面環部底面を含む各部にハケ調整を施す。台付裏の台である可能性もある。604は裾部全体がやや上方に膨らむ形状である。605は外面にミガキ、内面にナデ調整を施して平滑に仕上げる。

606は短頸壺である。外面にミガキ、内面にナデ調整を施し平滑に仕上げる。

607・608は小形平底壺である。607は丸底壺が潰れたものと考えられる。全体に作りが粗い。体部に米粒形の刺突による穿孔が存在する。608は底面を丁寧にナデで平底を作り出す。口縁端部に注口状の捲れが存在するが、口縁上半部は全体の半分弱しか遺存していないため意図的に作り出したものであるかは不明である。

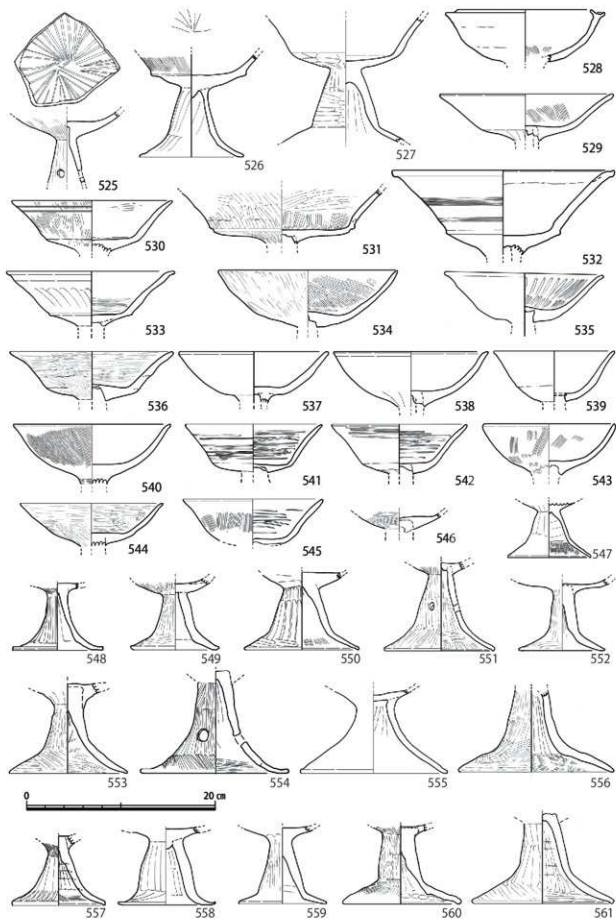


图91 2区 中層遺構 河道IV層出土遺物④ (S = 1/4)

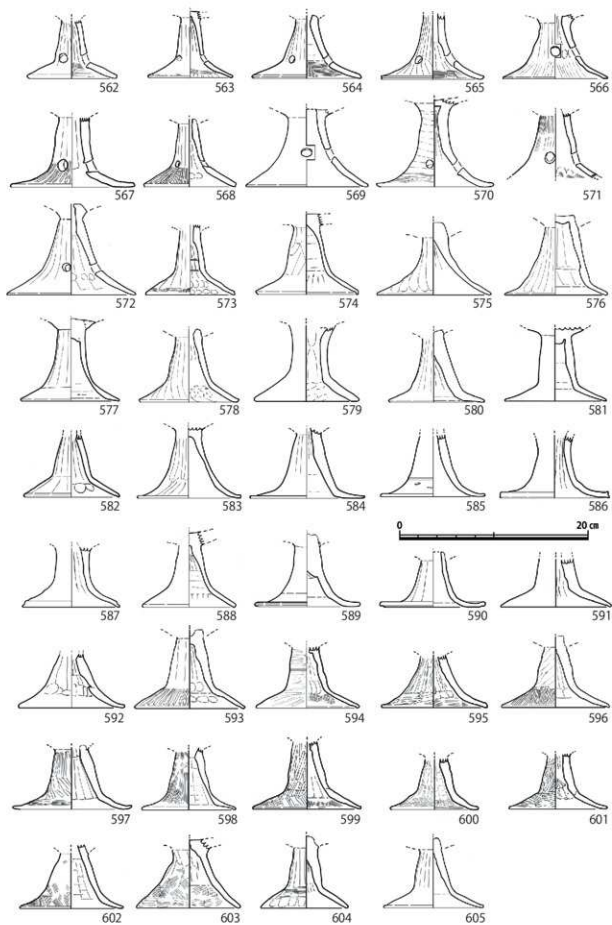


图 92 2区 中層遺構 河道IV層出土遺物③ (S = 1/4)

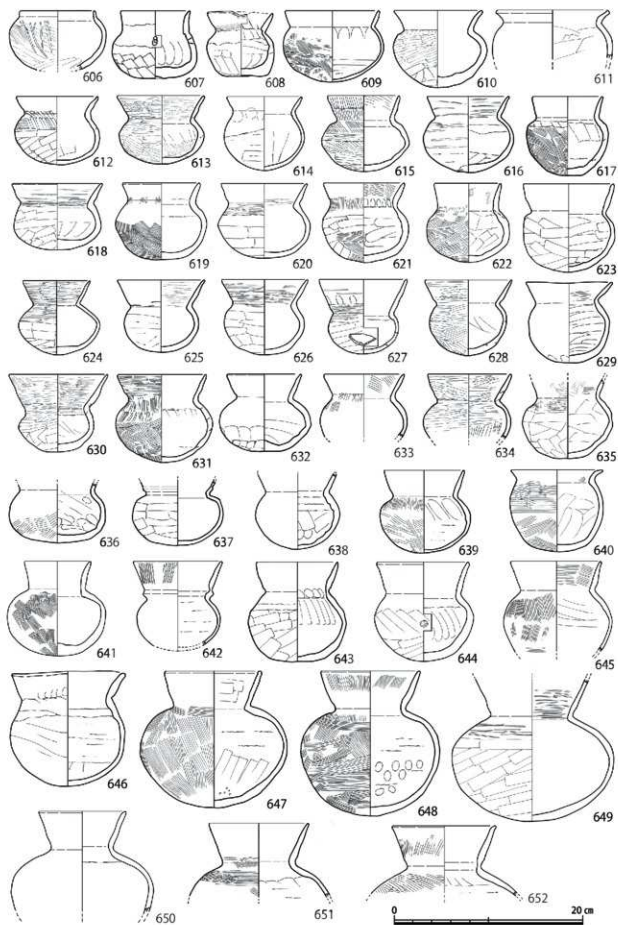


图 93 2区 中層遺構 河道V層出土遺物⑥ (S = 1/4)

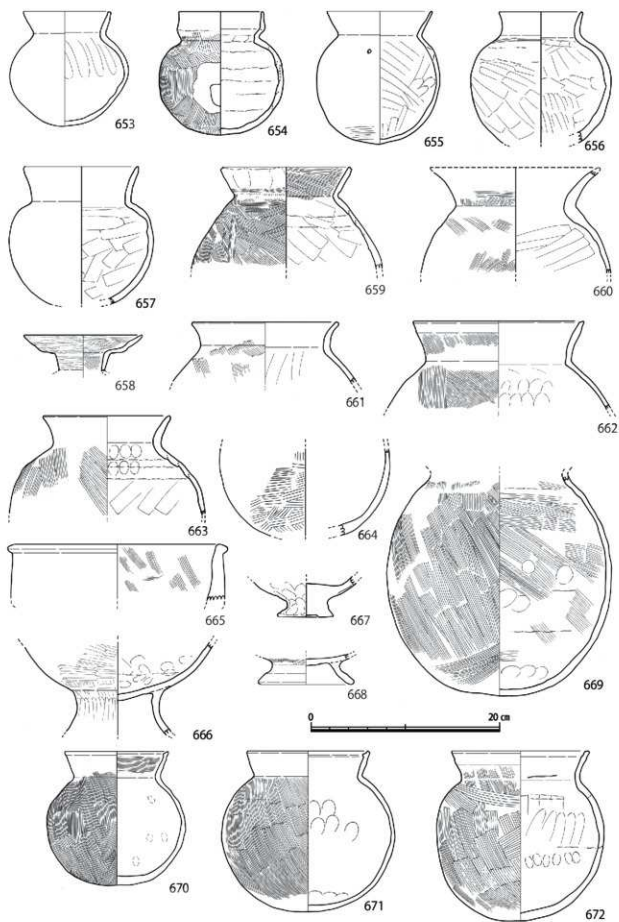


图94 2区 中層遺構 河道IV層出土遺物② (S=1/4)

609～639は小形丸底壺である。609は幅広の形状である。外面体部に細かなハケ調整を施す。610は全体に厚みがあり重量感がある。外面は鉄分が吸着する。611は平底鉢である可能性も考えられる。612は細かなケズリ、ミガキを施す。内外面とも鉄分が吸着する。613は横方向を主体とする細かなミガキを施す。614は外面体部中ほどに右肩上がりの粘土組織が確認できる。615は外面下半にある大きな黒斑が非常に目立つ。616は体部下半の表面にひび割れが目立つ。617は平底気味の形状である。頸部下に面を持たせるような強いナデを施す。618は下膨れ気味の形状で底部付近に表面粘土の剝離が存在する。619は細かなハケ調整を施した後にナデ調整で仕上げる。620はケズリ、ミガキ、ナデ調整を施し、全体を平滑に仕上げる。621は外面体部にケズリとハケ調整が入り乱れるように施す。全体の作りは粗い。622は内面の仕上げが粗く、ケズリの余剰粘土粒がそのまま残る。623は外面体部に細かい面を作るような粗いケズリを施す。624は口縁部から肩部にかけて細かなミガキを施す。625は直線的に開く口縁部をもつ。内外面ともに流水を受けて鉄分の吸着も見られる。626はやや強いミガキを施す。627は丸みの強い体部をもつ。体部下半には2×1cm大の不整形な穿孔がある。628は外面にミガキ、内面にナデ調整を施し平滑に仕上げる。629は全体にナデ調整を施すが粗く、口縁端部は波打つ形状である。630は体部にケズリによる凹凸が目立つ。631は外面にのみ鉄分が吸着する。632は平底気味で座りが良い。内面底部がケズリ残しによって盛り上がる。633は幅の広いハケ調整を施す。634は細かなミガキを施す。内外面に鉄分が吸着する。635は全体に作りが粗く凹凸が目立つ。636は下膨れの形状である。内面に指で削り取った痕が明瞭に残る。637はナデによって頸部に段と稜を作り出す。638は外面は全体に平滑に仕上げるが内面は粗く残る。639は外面体部にハケ調整を施す。体部下半に敲打によると思われる直径1cm大の痕が複数存在する。

640は広口小壺である。底部は緩やかに弧を描く。641は細頸壺である。ハケ調整はやや強く掻き取るように施す。642は頸部に稜をもつ小形丸底壺である。外面口縁部には縦方向のミガキを施す。643は全体に粗い作りである。頸部には鈍い凹線が半周する。644は体部中央に輪形のスタンプがあるが貫通はしない。内面底部には炭化物が付着する。645は細かなハケ調整を施す。肩部以下は薄く作られている。646は広口壺で、全体に作りが粗い。口縁端部および頸部のラインは波打つ。

647～652は直口壺である。647は外面全体に煤が付着し、内面底部には少量ながら炭化米が付着する。648は長いスパンのハケ調整を施す。649は外面の口縁部および肩部に煤が付着する。650は内外面ともにナデ調整で仕上げる。651は内面体部のケズリが強く、頸部との間に段が存在する。652は頸部にナデによって凹線を巡らせる。外面には幅広のハケ調整を施す。

653は全体が流水によって磨滅しており細かな調整は不明である。外面に部分的に鉄分が吸着する。654は二重口縁壺である。口縁部上段はわずかに内傾する。体部中央表面を広く削り、その下半に隅丸長方形の穿孔を施す。655は小形の甕である。肩部に0.4cm大の円形孔を内側から削って穿つ。656は短頸壺である。全体に厚手の作りである。657は表面の磨滅により細かな調整は不明である。外面は平滑な仕上がりだが、内面は粗く削り残す。658は上半が大きく開く二重口縁壺である。上面には塗布された朱がわずかに残る。659は細頸の甕である。ケズリ、ハケ調整、ナデ調整のいずれも強く施されている。660は大きく外反する口縁部をもつ壺である。661は広口壺である。外面に煤が付着する。頸部に押し付けるようなハケ調整を施す。662は外面の頸部以下に煤が付着する。口縁上半部のナデ調整が強く、外面に小さな稜が存在する。663は内面に輪状の粘土組織が明瞭に

残る。664は壺もしくは甕の体部片である。幅の広いハケ調整を施す。665は二重口縁壺の口縁部である。黒漆が塗布されており、内面は厚い。666は器台あるいは台付壺の底部である。ナデ調整で丁寧に脚部を貼り付けてミガキを施す。667・668は台付の壺あるいは甕である。667は台の底部形が直径5.5～6.0cm大の不整形である。中央部はやや凹む。668はハの字状に開く。台の内面は仕上げが粗い。

669～692は甕である。669は体部がやや縦長の球形で、外面に細かなハケ調整、内面には異なる工具を用いたハケケズリを施す。内面下半に炭化物が付着する。670は外面にハケ調整を密に施す。体部は表面に細かな凹凸が存在する。671は球形の体部をもつ。外面体部下半には煤が薄く付着する。底部は使用により擦れている。672は外面口縁上半部に鈍い凹線が巡る。671と同様の煤、擦れが存在する。673は体部下半がわずかに窄まる球形で、外面肩部以下の範囲に煤が付着する。674はやや厚手の作りで、外面の仕上げがやや粗い。673と同様に煤が付着する。675は底部が小さく平坦である。外面の口縁部および体部下半に煤が付着する。同じく体部下半には煤の付着後に付いた直径0.5～2cm大の不整形な表面剥落が多数存在する。676は頸部に歪みが存在し、場所によって形状が異なる。677は外面と内面で異なるハケ調整を施す。色調は他の甕と異なる淡乳灰色を呈する。678は体部中央のやや上に最大径がある形状である。外面肩部以下に煤が付着する。679はやや縦長の球形体部をもつ。外面体部下半に煤が付着する。680は外面に幅の広いハケ調整を施す。外面体部全体に煤が薄く付着する。681は長胴甕である。外面の肩部以下に煤が付着するが底部付近はそれを欠く。682は下半がやや細くなる長胴甕である。遺存範囲全体に煤が付着する。683は外面体部中ほどに薄く煤が付着する。外面のハケ調整、内面のケズリ、ナデ調整ともに平滑に仕上げる。684は表面が磨滅しているがハケ調整が確認できる。685は頸部直下が小さく開く形状である。ハケ調整とケズリを細かい単位で施す。686は体部中央が張り出す形状である。外面下半に煤が付着する。

687・688は韓式系土器甕である。687は外面に横方向の細かな並行タタキ、内面はナデ調整を施す。焼成も一般的な土師器よりやや硬質で、須恵器甕の模倣品である可能性もある。688は甕の底部である。外面に平行タタキを施す。内面は強めのナデ調整を施す。

689は土師器甕の底部である。690は甕あるいは壺の底部である。内面に少量の炭化米が付着する。

691・692は土師器台付甕の台である。691は外面上半に体部と一連と考えられるハケ調整を施す。692は裾端部を内側に折り返して平坦面を作る。全体に鉄分が多く吸着している。

693～700は甕である。693以外は土師質である。693は底部が丸底気味である。蒸気孔は1.8～2.5cm大の不整形孔を中心に一つ、その周囲に七つを配置する。外面は平行タタキを施し、内面上半は青海波文の当て具痕が存在する。把手は水平方向に伸びて先端がやや上方に向く。把手の先端に近い位置に支え棒痕がある。体部の把手間には水平方向に鈍い凹線が巡る。694は平底である。蒸気孔は直径2.2～2.8cm大の円形孔を、中央に一つ、その周囲に九つを配置する。把手は細く、外側が上方を向く。上面からの切込は溝状で貫通しない。外面は平行タタキを斜め方向に整然と施す。695は丸底の底部である。蒸気孔は直径1.8～2.2cmの正円形である。中央に一つ、周囲に七つ程度を配置すると考えられる。蒸気孔の周囲には凹線を円形に巡らせる。外面の平行タタキは底面にも施される。696は体部中ほどの破片である。大型の把手は根元から約2cmの高さの位置で折れて失われている。外面と内面で異なるハケを用いる。697～700は底部の破片である。697は丸底の底部で、蒸

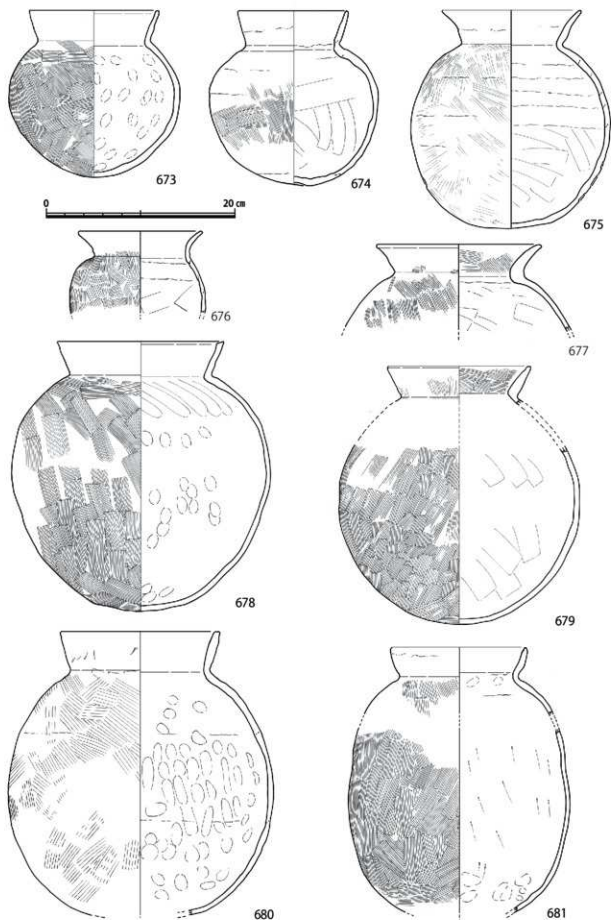


图 95 2区 中層遺構 河道IV層出土遺物⑧ (S = 1/4)

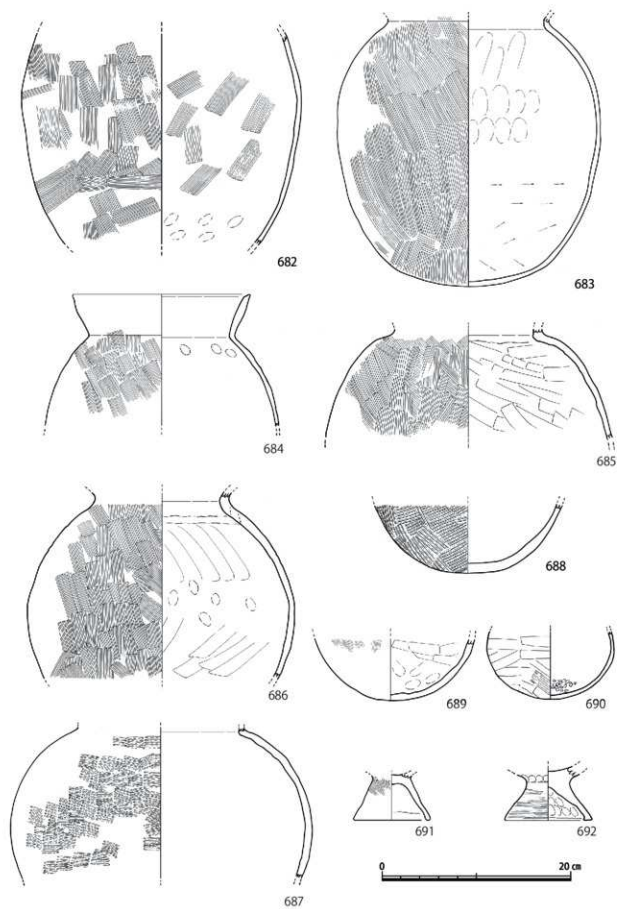


图 96 2区 中層遺構 河道IV層出土遺物⑨ (S = 1/4)

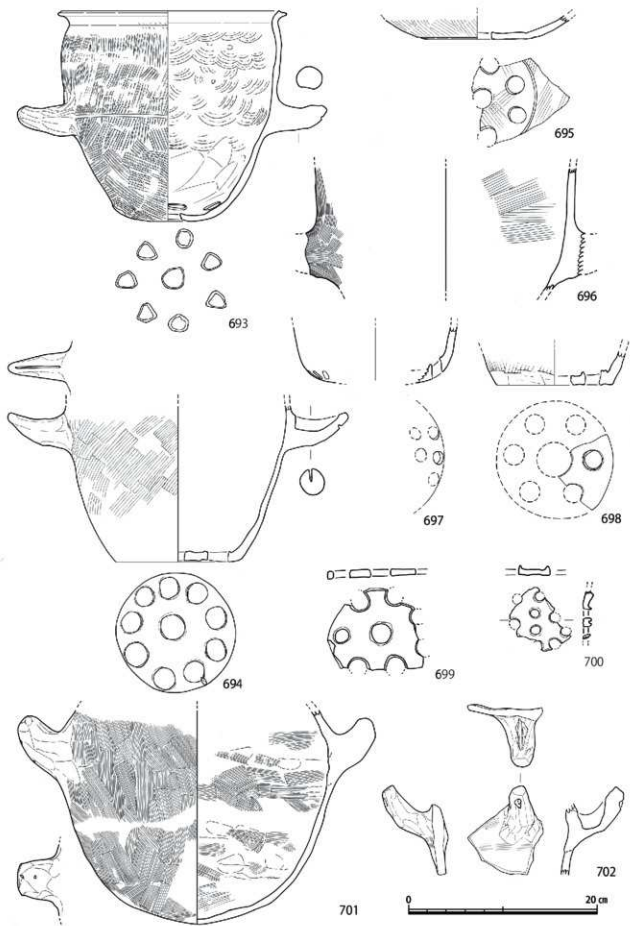


图 97 2区 中層遺構 河道IV層出土遺物② (S=1/4)

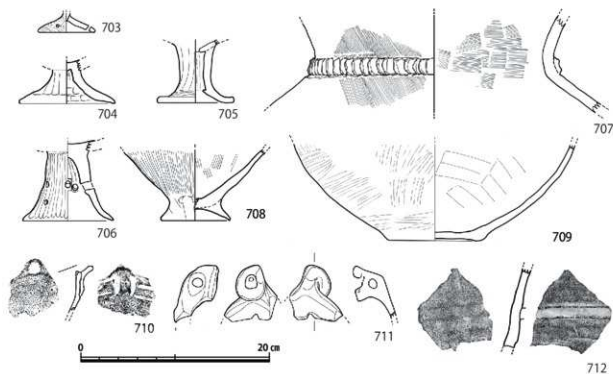


図98 2区 中層遺構 河道IV層出土遺物⑩ (S=1/4)

気孔は直径1.3cm前後の小円孔を多数配置する形であると考えられる。小円孔は底面側からの棒状具の刺突で穿たれている。698は須恵質の破片である。外面は淡灰色、内面は明赤褐色を呈する。平底で、中央にやや大きい円孔、その周囲に直径1.7cm大前後の円孔を配置する形であると考えられる。外面には平行タタキを強めに施す。699・700は平底の底部片である。699は蒸気孔配置が695に近いと考えられる。遺存する円孔の大きさは直径1.5～2.3cmを測る。700は直径約1.0cm大の小円孔を多数配置する。底面側に平行タタキを施す。

701は土師質の鍋である。球形の体部のやや高い位置に把手が付く。把手は厚く、根元から反り上がる。把手下面には支え棒痕である可能性がある小さな窪みが二ヶ所に存在する。体部は内外面ともにハケ調整を施す。

702は甔あるいは鍋の把手である。把手は細く、根元から高く反り上がる。上面からの切込は貫通しない。把手下面の外側部分に支え棒痕が存在する。

703はミニチュア土器の蓋である。弥生土器蓋を模したと考えられる。0.2cm大の小円孔が約1cm間隔で二つ並ぶ。頂部の形状は不明である。

704～709は弥生土器である。いずれも表面に流水の影響を受けている。704は脚部である。外面にやや粗いミガキを施す。705・706は高坏の脚部である。705は坏部底部に孔が存在する。706は直径0.6cm大の小円孔を不規則に配置する。遺存する範囲内で9ヶ所が存在する。外面全体に縦方向のミガキを施す。707は広口壺である。外面頸部に幅1.5cmの突帯を貼り付け、指で連続する段を作り出す。708は甔あるいは鉢の底部である。外面に縦方向のミガキを施す。709は大型の平底壺の底部であると考えられる。底部径は9.2cmを測る。

710・711は縄文土器である。どちらも表面は磨滅している。710は鉢の口縁部で、ヘラ描き直線文を施す。711は鉢の波状口縁の頂部である。

712は円筒埴輪の上半部であると考えられる。突帯は剥落している。下端に方形のスカシが存在する。表面が磨減しており調整は不明である。

河道V層 土器・土製品 (図99～111)

河道V層は河道の底面に堆積する。砂層を主とし一部に粘土～シルト層を含む。河道V層中にはしがらみ遺構(下層杭列④～⑨から成る)が構築されている。多数の初期須恵器、韓式系土器、土師器、木製品が出土している。出土遺物の時期はTK73型式以前であると考えられ、V層中にはこれより新しい時期の遺物は含まれない。今回出土した初期須恵器の一群の時期的位置付けにとっても重要な層位である。また、下層杭列④～⑨の内部から出土した遺物群についてはV層出土遺物と一連であると考えられるが、分けて図112以降にまとめている。

713～765は須恵器である。

713～725は蓋である。基本的につまみが付くと考えられるが、遺存状況により直接確認できないものもある。713～719は先述の83と同様の今回出土須恵器に特徴的な文様・形状の蓋である。この種の蓋はV層と下層杭列中からも出土しており、元はこの時期に属す遺物であると確認できる。713は文様の一部を欠くが十字文様はほぼ正十字形であると考えられる。倒置した状態で焼成しており、上面には輪状の焼き台の使用による色調の違いが見られる。この種の蓋の典型例と言える個体である。714はつまみに段が存在する。文様は内側の同心円文が幅広く、かつ器径がやや小型であることから、全体に詰まった印象を受ける。715は同様の文様配置を波状文で施す。十字文様のうち一つは直線に近い緩やかな波形を描く。器高は他より低い一方、つまみは大型である。内面には緑色自然釉が厚く付着し、一部は頂部端にまで垂れる。716は713と715の間のような文様で、直線の同心円文間に波状文を施す。方向は四方向であると考えられる。つまみは裾の一部を残して剥落しており、坏部側の剝離面には接合のための同心円文のスタンプが押されている。717も典型的な文様構成であると考えられる。全体の形状に歪みや空気の膨らみが存在する。718は配置がややずれる十字文様であると考えられる。各文様の線幅はやや狭い。内面には自然釉と降着物が多く付着する。719は立ち上がりが低い形状である。文様は他より強く施され、外側の同心円文の位置も器外縁より近い。内面のナデ調整は他より粗い。つまみの裾がわずかに残る。

720は太く高いつまみをもつ。つまみの端部は全体が割れており、意図的に打ち欠いた可能性もある。頂部から放射状に櫛描文様を施す。一部には櫛描文様と重なるように刺突文も施す。肩部の稜の位置は低い。721は櫛描と刺突による同心円文をそれぞれ二重に連ねる。つまみの有無は不明である。色調は他と異なる明灰色を呈する。722は壺の肩部付近である可能性も考えられる。外面には自然釉が付着する。上向きの突帯が二重に巡る。突帯の貼り付け後に米粒大の刺突文を巡らせる。723は櫛描文様の内側に幅広い刺突文を並べる。両者は同じ工具を用いていると考えられる。内側の文様やつまみの有無は不明である。724は全体を回転ナデ調整で仕上げしており、文様は無い。つまみは全体が剥落しており、剝離面には同心円文のスタンプが押されている。725も同様の無文の蓋である。返し状の口縁端部は遺存しておらず形状は不明である。つまみは裾部の立ち上がりがわずかに残る。

726～734は高環である。726は坏部の破片で、蓋環である可能性も残る。内外面に自然釉が付着しており、蓋とは別に焼成している。全体に回転ナデ調整を施す。727は上面に降着物が多く凝着

している。脚部には細長いスカシが十方向程度に存在していたと考えられる。728は無蓋高環である。環部の形状は蓋を反転させた形状に似る。全体にまばらに自然釉と降着物が付着し、特に外面の片側には上から長く垂れた痕が存在する。外面環部底面付近に弱い格子目タタキが残る。他は脚部内面を含む全体を回転ナデ調整で仕上げる。729は火焰形スカシの有蓋高環である。新堂遺跡では他の調査において火焰形スカシの陶質土器が出土している。729については焼成・色調が他の須恵器と同様であることから須恵器である可能性が高いと考えられる。火焰形スカシは対面の位置の二ヶ所に存在する。内外面ともに全体を回転ナデ調整で仕上げる。730は肩部が強く張り出す形状である。環部の立ち上がりがあるが、蓋が存在するかは不明である。脚部に三角形のスカシを三方向に穿つ。スカシ上部は内面まで貫通しない。全体に回転ナデ調整を施した後、スカシを穿っている。731は大型高環の環部である。全体を回転ナデ調整で仕上げる。外面下半には細かい単位のケズリ痕がわずかに残る。脚部への立ち上がりがわずかに残る。732は焼成が不良で表面が磨滅しているため細かな調整の確認が難しいが、全体に回転ナデ調整で仕上げており、外面下半にはわずかにケズリ痕が残る。脚上部は細い。

733・734は高環脚の裾部である。733は二条の稜が巡る。細いスカシの下端がわずかに残る。734は器台である可能性もある。粘土組貼り付けによる鋭い突帯が二条巡る。

735～741は器台である。735は塊形の環部である。環部の三割程度が遺存するが全体に歪みが大きく、復元形状は図と若干異なる可能性がある。内面に自然釉が付着する。外面には上半に波状文を、下半に三角の内部を線で充填する文様を互い違いに施す。736は鋸歯文の谷部分を斜線で充填する文様を二段に施す。全体の色調は灰白色で、全体に薄く明緑色の自然釉が薄く付着する。737は環部下半の破片である。鎖状文様と縦方向の刺突文を巡らせる。738は坏底部の破片で脚部の剥離面が確認できる。坏部下端には竹管スタンプ文と単位の細かい鎖状文を巡らせる。剥離面には接合のためにヘラ状工具により刻みを縦横に施す。739は脚部の破片で歪みが大きいため復元径・角度とも変化する可能性もある。内外面にナデ調整を施す。スカシは上・中段に長方形、最下段に火焰形と思われるものを穿つ。火焰形スカシは円形の下半にごく細い線状の上半を足す形である。上半は器全体の変形もあってかほぼ閉じた状態となっているが内面まで貫通はしている。火焰スカシは同様のものが三ヶ所に遺存する。740は脚上半部の破片である。三角形のスカシを穿つ。上端部を始め複数個所に空気膨らみが存在する。実測図は上端部の膨らみと本来想定される線の両者を描いている。741は三角形のスカシを縦に並べる。

742・743は壺である。742は口縁部上段に波状文を施す。外面は体部上半より上に回転ナデ調整、体部下半にケズリ後ナデ調整を施す。743は焼成がやや悪く部分的に赤褐色を呈するが須恵質である。口縁部中ほどに回転ナデ調整による小さな稜を作り出す。

744は壺である。形状は壺に近いが穿孔は無い。外面体部下半に728と同様の格子目タタキを施す。その後の仕上げは743と同様である。口縁部には段のやや上に深い凹線を巡らせる。

745～752は壺である。745は口縁部で、外面に波状文を施す。中段の波状文は二段を上下に重ねる。内面には強い回転ナデ調整を施す。746は外面に複数の稜と凹線、波状文を巡らせる。波状文は全体に鈍く、乱れも多い。747は内面に薄く自然釉が付着する。下端にわずかに波状文が確認できる。748は壺である可能性もある。頸部の波状文には始点と終点の接続部に乱れがある。内外面ともナデ調整で仕上げるが、部分的に指の凹凸が残る。749は外面体部にカキ目状のハケ調整を施してい

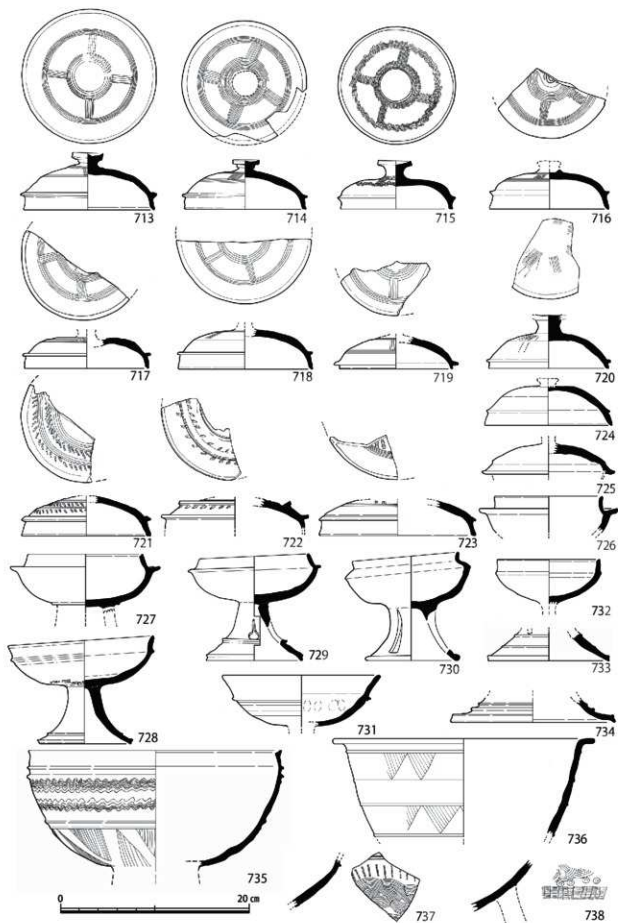


图 99 2区 中層遺構 河道V層出土遺物① (S = 1/4)

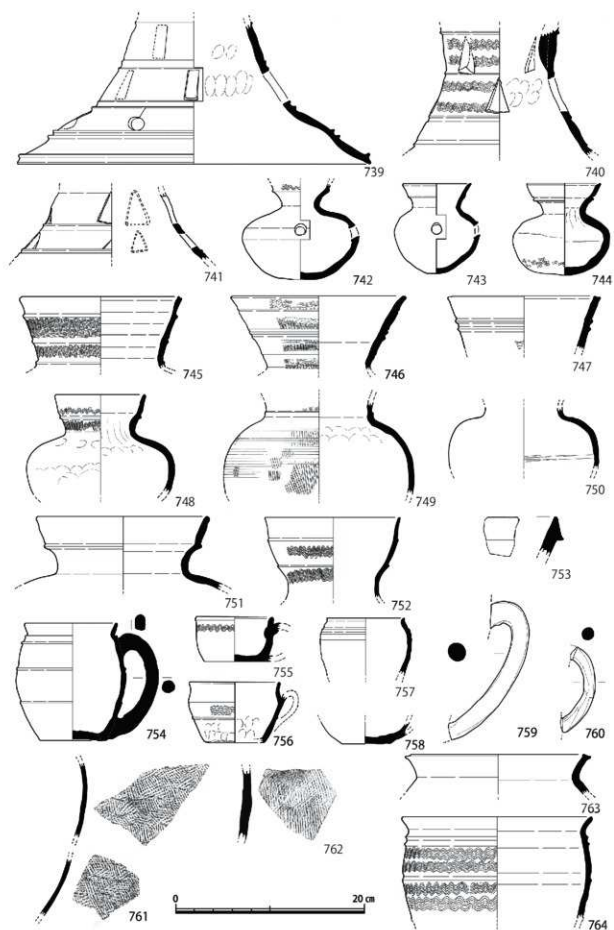


图 100 2区 中層遺構 河道V層出土遺物② (S=1/4)

るが、広く自然釉が付着しており細かな確認が難しい。頸部下端に小さな段をもつ。750はナデ調整で仕上げる。内面だけが特徴的な暗褐色を呈する。751は二重口縁壺である。形状的に土師器の模倣品であると考えられる。内外面の一部に自然釉が厚く付着する。752は湾曲する形状の口縁部である。体部との接続部も丸みを帯びると考えられる。波状文を施す。

753は甕あるいは壺の口縁端部である。厚手の作りで、外側に面を作り出す。

754～758は把手付碗である。754は樽型の平底体部に大きめの把手が付く。底部以外の全体を回転ナデ調整で仕上げる。各部の稜は細いが明瞭である。755は浅い碗で、それに合わせて把手も小型である。平底だが底面には凹凸がある程度残る。上部に波状文を施す。756もやや浅めの碗である。外面には波状文を施すが全体に弱く、薄い自然釉の付着もあって文様は目立たない。外面下半には細かなケズリを施す。把手は根元が残るだけであるが板状の粘土を貼り付けていたようである。757は細かな稜を複数もつ。把手部分は遺存していないが、内面にわずかに把手挿入後のナデと思われる痕が存在する。758は底部で、把手の剥離痕も残る。体部は開いて丸みを帯びると考えられる。内面には自然釉が付着する。

759・760は把手である。759は長さ14.3cmを測り、今回出土した把手の中で最大である。大型の碗か壺の把手であると考えられる。上面に自然釉が付着する。760も同様に自然釉が付着する。下端は体部との接合部分で剥離しており、上端は半ばで折れたようである。

761・762は甕の体部片である。761は外面に並行タタキを細かく施す。内面はナデ調整である。器壁は厚さ0.2～0.3cmと薄い。762は並行タタキを強めに施す。厚さ0.7～0.8cmを測る。763は甕の口縁部である。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。

764は大型の鉢である。内外面に回転ナデ調整を施した後に、外面に凹線や波状文を巡らせる。

765は須恵器甕の口縁部であると考えられる。使用の影響か表面が劣化し瓦質土器に近い質感となっている。

766は瓦質土器甕の下半部である。外面には幅広の平行タタキを密に施す。内面はナデ調整で仕上げるが、当て具痕と考えられる窪みが存在する。

767・768は土師質の鍋である。767は球形の片口鍋であり、口縁部は口のある一帯が周囲よりやや高くなる。把手は片側が剥落している。外面は把手間に凹線を巡らせ、平行タタキを施す。タタキの方向は上半と下半で異なる。内面下半には当て具痕と考えられる青海波文が存在する。768は幅広の片口鍋である。口は上面観が半球形の広い形状である。体部には格子タタキを密に施し、把手間に水平線をナデ付ける。把手は外側がやや反り上がる。把手下面中央には支え棒痕が存在する。

769～772は韓式系土器の甕や鉢の破片である。769は斜格子タタキを施す。770は外面に斜格子タタキを施し、薄く煤が付着する。771・772は外面を格子タタキの後、ナデ調整を軽く施す。771は煤が付着する。

773は韓式系土器の広口甕あるいは鉢である。外面に縦方向の平行タタキを施す。内面はナデ調整を施す。774は韓式系土器壺である。外面体部に格子タタキを重複が無いように施す。口縁部には回転ナデ調整を施す。

775～900は土師器である。

775はつまみ付の蓋である。頂部付近に黒斑が存在する。須恵器の模倣品である可能性がある。

776はミニチュア土器の坏である。端部は外側に折り返してやや波打つ。

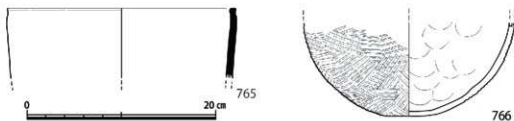


図101 2区 中層遺構 河道V層出土遺物③ (S=1/4)

777・778は坏である。777は体部は丸底で内湾し、口縁は垂直に立ち上がる。内面に細かなミガキを施す。778は平底である。内外面で異なるハケ調整を施す。内面は強く掻き上げる。

779～820は高坏である。

779は全体に厚手で重量感がある。坏部下半以下に粗いハケ調整を施す。坏部上半のナデ調整も全体に粗く、線が多く残る。780は外面坏部下半にナデによって鈍い稜を作り出す。一部は鈍い溝状になる。781は内面坏部に非常に明瞭な太いミガキを施す。坏部には内側から穿った横長の穿孔がある。782は内面脚部に粘土組痕が残り、部分的に組痕を消すように抉る。783は表面が磨滅しているが、ミガキの痕が確認できる。784は外面脚部を面取り状に整形する。785は内面坏部の一部範囲に集中して0.1～0.3 cm大の敲打痕が存在する。786は有稜の大型高坏である。坏部は歪みが非常に大きい。外面坏部にはハケ調整の後に、太いミガキを斜めに施す。787は円形スカシを三方方向に穿つ。788は表面が磨滅しているが、やや粗いハケ調整を広く施すことが確認できる。

789～802は高坏の坏部である。789～793は大型である。789は内面に太いミガキを放射状に施す。790は外反する形状である。表面には大小の凹凸が目立つ。791は底部付近の粘土貼り足しが断面確認できる。792は外面に二条の鈍い凹線を巡らせて稜を作り出す。793は表面が全体に磨滅するが、内面にハケ調整が確認できる。底部には細い刺突痕が存在する。794は外反する形状である。挿入した脚部がそのまま剥落したと考えられる。795は坏部側から挿入した突起が残る。796は外面にミガキを施す。脚部の剥離面は非常に平坦である。797は外面にハケ調整を放射状に施す。内面は強いナデ調整で仕上げているが部分的にハケ調整が残る。798は塊形で、内面に太めのミガキを施す。799は中実の脚上部が途中で折れて残る。800は底部に刺突痕が残る。801は脚部が根元から剥落しており、剥離面に同心円状の刻み目が施されている。脚部の接続位置は坏部中央からずれている。802は全体をナデ調整で仕上げる。底部に刺突痕が残る。

803～820は高坏の脚部である。803は大型で、ミガキ、ハケ、ナデ調整ともに強く施す。804は坏部との接合状況が断面確認できる。805は裾部の立ち上がる角度が高い。806は坏部との接合面で剥離しており、上端に鈍い刻み目を施す。807は弱いミガキを施す。808は細かなミガキを施す。裾部は全体に湾曲し、接地しない部分もある。809は坏底部から突起を挿入しており、上面でその円形の割れ目が確認できる。810は全体に丁寧なナデ調整を施す。内面脚柱部には絞り痕が残る。811は接合時に貼り足した粘土の下端が残る。細かなミガキを施す。812は上端に坏部との接合面が残り、鈍い刻み目が確認できる。外面にミガキを上半部は縦方向に、下半部は横方向に施す。813は外面上半にケズリで面取りを施す。内面のケズリは粗く、不整形な面が多数存在する。814は表面が磨滅しているが全体に平滑に仕上げていることが確認できる。815は外面に細かなミガキを施す。胎土が他と異なり0.1 cm未満の小礫を多く含む。816は面取り状にミガキを施す。817は内面脚柱部上半は絞り痕が残り、下半はハケ調整を施す。818は脚上半部が中実である。819は円形スカシ

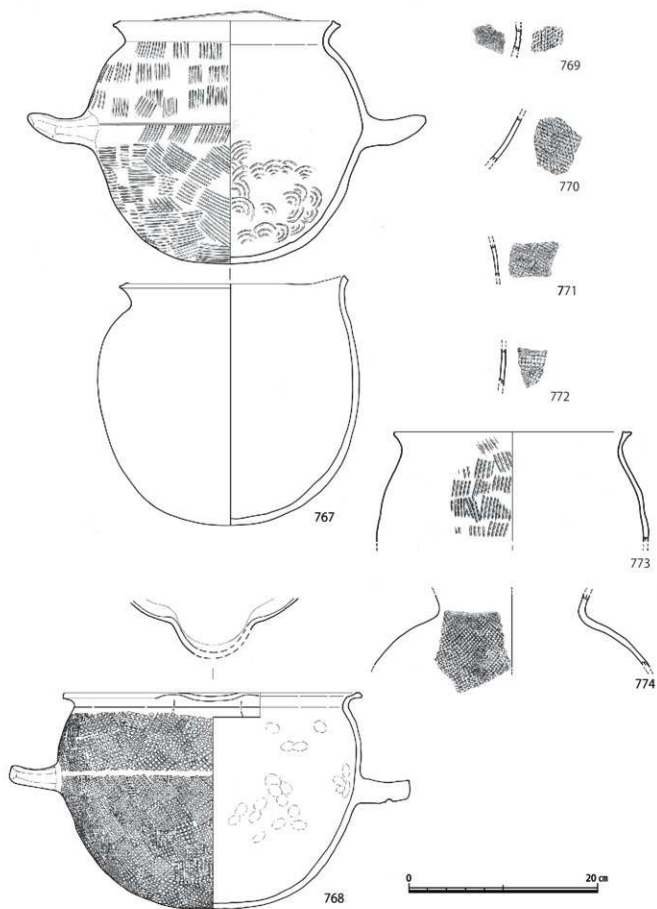


图 102 2区 中層遺構 河道V層出土遺物④ (S = 1/4)

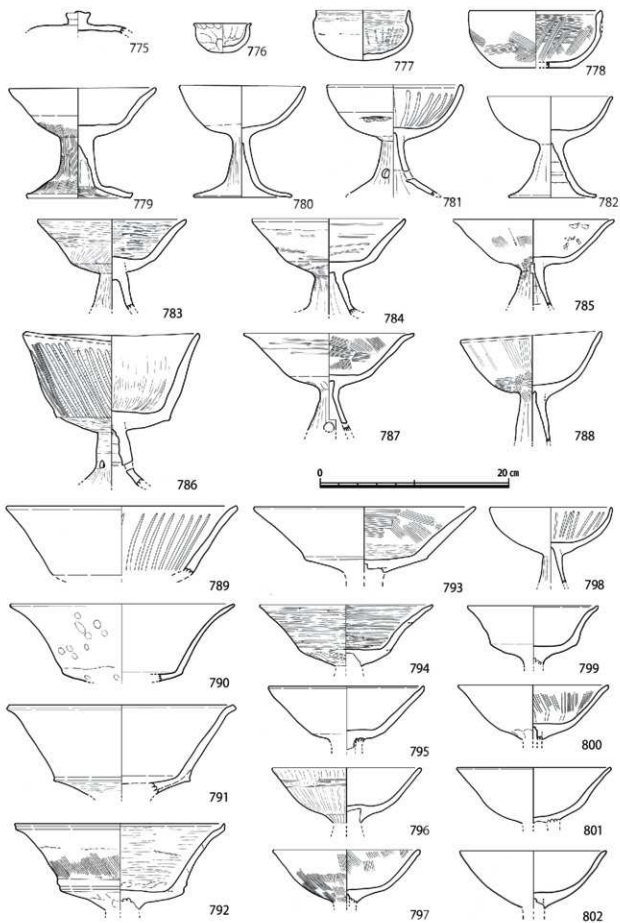


图 103 2区 中層遺構 河道V層出土遺物⑤ (S=1/4)

を一ヶ所に穿つ。820は坏部との接合面で剥落している。脚部にやや大型の円形スカシを二方向に穿つ。

821・822は土師器甕である。821は全体を非常に平滑なナデ調整で仕上げる。外面下半にわずかにケズリの痕が確認できる。822は全体に磨滅しており外面の細かな調整が不明である。穿孔は他の甕よりも大きくやや不整形である。

823～848は小形丸底壺である。823は表面が磨滅しているが口縁部内外面に細かなミガキが確認できる。全体に精良な作りである。824は内面にハケ調整を施す。体部下半に菱形の穿孔を施す。825は体部上半に穿孔を施そうとして取り止めたのか0.7cm大の半球形の窪みが存在する。826は細かいがやや強いミガキとケズリを施す。827はハケ調整、ミガキ、ケズリをそれぞれ同一方向に施す。828は口縁端部が全体が波打つような形状で割れている。意図的に行われた可能性が考えられる。829は高い位置にある肩部までケズリが丁寧に施される。830は頸部を強くナデで稜を作り出す。831は球形の体部をもつ。内面はヘラ状工具でナデを施し、工具の静止痕が残る。832は外面と内面口縁部に幅広のハケ調整を施す。底部はわずかに平底で座りが良い。833は外面に鉄分が吸着する。口縁部は表面に凹凸がやや目立つ。834は外面体部の三ヶ所に2～3cm大の表面を削り取った痕が存在する。穿孔を施そうとした可能性が考えられるが貫通はしていない。835は口縁部下半に強くナデを施して二重口縁状の形を作り出す。836は口縁部内外面に強めのミガキを施す。837は底部に工具痕であると考えられる刺突が存在する。838は口縁端部は薄く、小さく外に開く。839は表面全体の凹凸が大きく、肩部より上は全体に形状も不安定である。840は回転ナデ調整によって口縁部中段と頸部に稜を作り出し、二重口縁状になる。841は口縁部が長く、底部は平底気味で厚みがある。842は体部下半に3cm大の打ち欠きが二ヶ所存在するが貫通はしない。また、外面底部から内面中段にかけて貫通する串状工具による刺突も存在する。843は色調が他と異なる薄明褐色を呈する。844は外面体部の底部を除く肩部以下の範囲に煤が付着する。845は細かなハケ調整を施す。尖底気味で座りは悪い。846は表面が磨滅しているがハケ調整が確認できる。847は全体に鉄分が吸着する。外面口縁部に直径1～2cm大の剝離が三ヶ所横に並ぶ。848は体部下半に2～3cm大の不整形な穿孔が存在する。複数回にわたり強く打ち欠いた痕が確認できる。

849は弥生土器甕の小形品である可能性が考えられる。全体に作りは粗く、台状の底部も潰れ気味である。850は短頸壺である。全体が磨滅しており、外面には胎土中の小礫が多く浮かび上がる。851は小形壺だが厚手の作りで重量感がある。852は細頸壺である。外面のケズリは明瞭な面をもつ。853・854はミニチュア土器に含まれる可能性がある小形壺である。853は外面下半に細かなケズリを施し、他はナデ調整で仕上げる。底部中央には窪みが存在する。854は内外面ともミガキとケズリを施す。855はミニチュア土器甕である。細かなミガキを施し、全体に丁寧な作りである。856は球形体部の細頸壺である。外面に鉄分が吸着する。外面にミガキを施し滑らかに仕上げる。

857～872は壺である。857は細頸壺である。外面はミガキ、内面はハケ調整とナデ調整をそれぞれ密に施し平滑に仕上げる。858は外面に幅広のミガキを施す。内面には大型の指圧痕が残る。859は平底壺である。外面体部に薄く煤が付着し、その他の範囲も被熱痕が確認できる。860は平底壺あるいは平底鉢の底部である。外面底部には敷布痕が存在する。861は体部中央に内面側から削り取った孔が存在する。862は外面体部中段に縦方向のハケ調整をケズリ状に施す。内面には少量の炭化米が付着する。863は外面に部位ごとに方向の決まったハケ調整を丁寧に施す。864は内面に

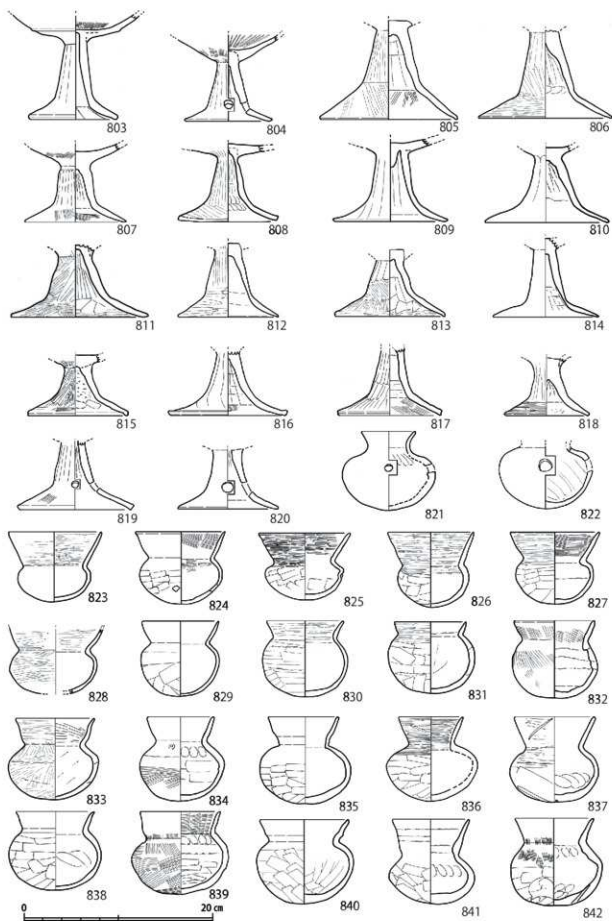


图 104 2区 中層遺構 河道V層出土遺物⑥ (S=1/4)

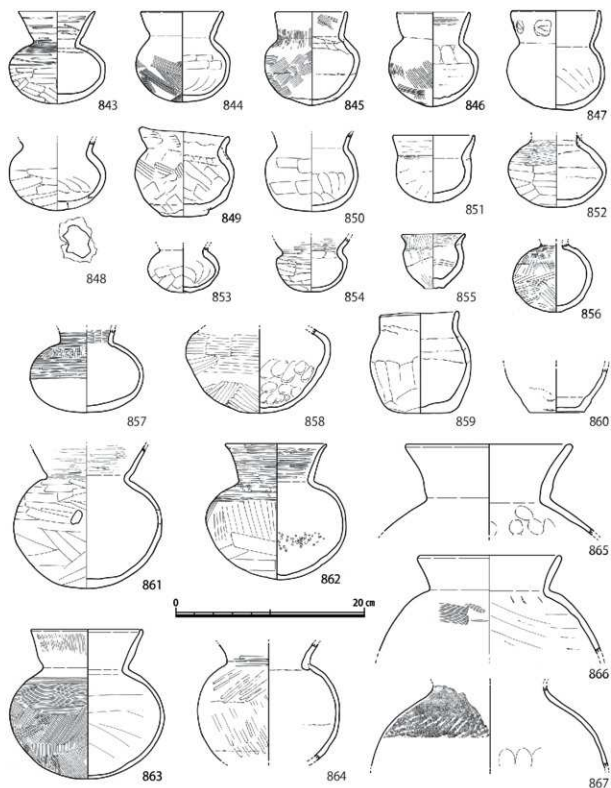


図 105 2区 中層遺構 河道V層出土遺物⑦ (S=1/4)

口縁部の接合痕が明瞭に残るが、他は全体に平滑に仕上げる。865は厚手の口縁部で、口縁上半部は一部のみが遺存する。他の範囲は意図的に打ち欠いた可能性がある。866は裏である可能性もある。内外面に使用による表面の劣化が認められる。867は大型壺の肩部である。外面に粗い格子状タタキを施す。

868は大型の二重口縁壺である。表面は全体に磨滅しているが丁寧に仕上げられていることが確認

できる。体部に三ヶ所、離れた位置に穿孔が存在する。いずれも内側から削って穿たれている。869は外面にハケ調整を密に施す。底部は使用により擦れている。体部下半には煤が薄く付着する。870は細頸の二重口縁壺である。内面頸部に漆が薄く塗布されている。871は下膨れの壺である。外面下半には全体に煤が付着する。底部は擦れている。上半部は器面全体に大きな凹凸が目立つ。872は外面体部下半に幅広く弱いタタキを施す。

873～896は甕である。873はケズリ、ハケ調整の後にナデ調整を施すが、ナデ調整も全体に粗い仕上がりでである。874は肩部が張り出す形状である。外面肩部以下に煤が付着する。875は被熱により外面体部のほぼ全体の表面が薄く剥がれており、細かな調整は不明である。わずかに遺存する範囲には煤が付着している。876は平底気味の甕である。内面および外面上半にハケ調整を施す。外面肩部以下に煤が付着する。877は幅広くハケ調整を施す。外面は底部を除く肩部以下に煤が付着する。878は外面全体に煤が付着する。特に上半は煤が付着し器面が確認できない。口縁端部を境にして内外面で煤の有無が明瞭に分かれる。879は内面に粘土組織が明瞭に残る。外面は肩部に煤が付着する。880は外面に非常に幅広く並行タタキを施し、全体に煤が付着する。色調は他の甕と異なる明橙色を呈する。881は外面の肩部以下に煤が付着する。882は縦方向に長い平行タタキを施し、重なることで一部は格子状になる。外面は底部からやや上の範囲に煤が付着する。内面には成形時の段が残る。883は外面の口縁部と肩部に帯状に煤が厚く付着する。他の部分にも薄く付着するが肩部上から頸部にかけてはほとんど存在しない。内面にも炭化物が薄く付着する。884は外面体部上半部に煤が薄く付着するが、下半部は煤を欠く。885はハケ調整を長いスパンで施す。886は頸部に歪みがあり肩部が詰まる形状である。全周の3割弱の破片であり歪みがあるため全形の復元は異なる可能性がある。887は下膨れ気味の形状で、ナデ調整を施す。厚手の作りである。888は大型で長胴の甕あるいは壺であると考えられる。外面のハケ調整は弱く施される。889は外面体部に幅広くハケ調整を施す。体部下半に煤が付着する。内面底部には炭化米が少量付着する。890は二重口縁をもつ。内外面ともに器面に荒れが存在する。891は口縁部から体部にかけてなだらかに繋がる。外面肩部以下に煤が付着する。892は全体に細かくハケ調整とケズリを施すが、全体に器壁の厚さに斑が存在する。器面にも凹凸が目立つ。外面に広く煤が付着する。893は長胴の甕あるいは壺である。外面に細かなハケ調整を施す。894は体部中央に直径0.7cmの円形の穿孔がある。煤は付着していない。895は大型の甕あるいは壺である。外面にハケ調整のような単位でミガキを施す。煤は付着しない。896は甕の底部である。長胴形であると考えられる。内外面ともにハケ状工具で弱くナデ付けている。外面に煤が付着する。

897は台付甕であると考えられる。底部中央に脚部の剥離痕があり、接合後に施したと考えられるハケ調整も存在する。

898～900は台付甕の台部である。898は薄い端部が外側に広がる形状である。胎土と色調は、いわゆる東海系台付甕とは異なり、在地の土師器と同様である。899は外面の下半に鈍い凹線が半周程度の範囲に遡る。900はタタキ状のハケ調整を施す。内面体部底には炭化物が付着する。

901は土師質の鍋である。把手下面には支え棒痕が左右に二つ並ぶ。支え棒痕は他の個体よりも明らかに深く、装飾とした可能性もある。上端に口縁部と考えられる上方への折り返しが存在する。外面下半には煤が薄く煤が付着する。

902～915は土師質の甕である。902は丸底の底部である。蒸気孔は直径1.2cmの小円孔を複数穿

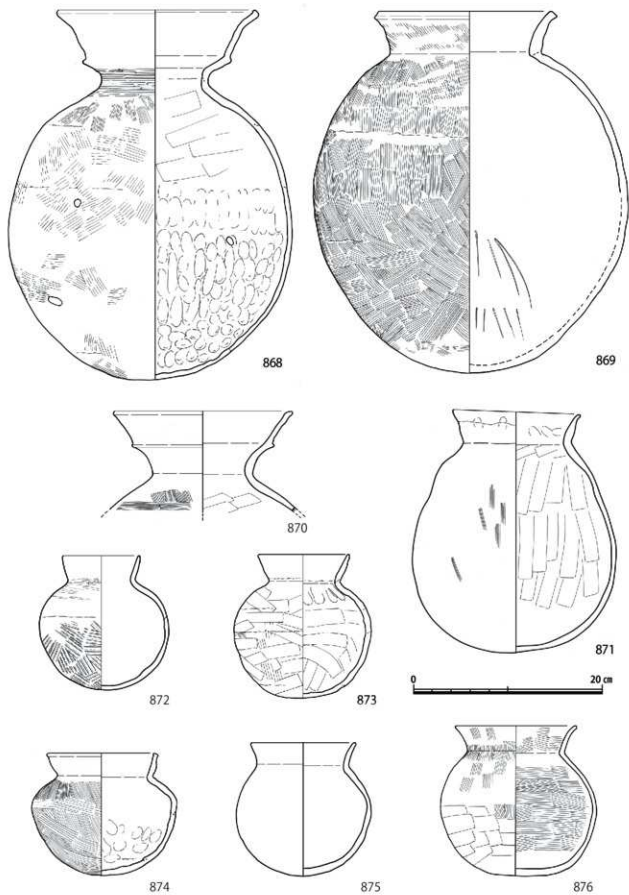


图 106 2区 中層遺構 河道V層出土遺物⑧ (S = 1/4)

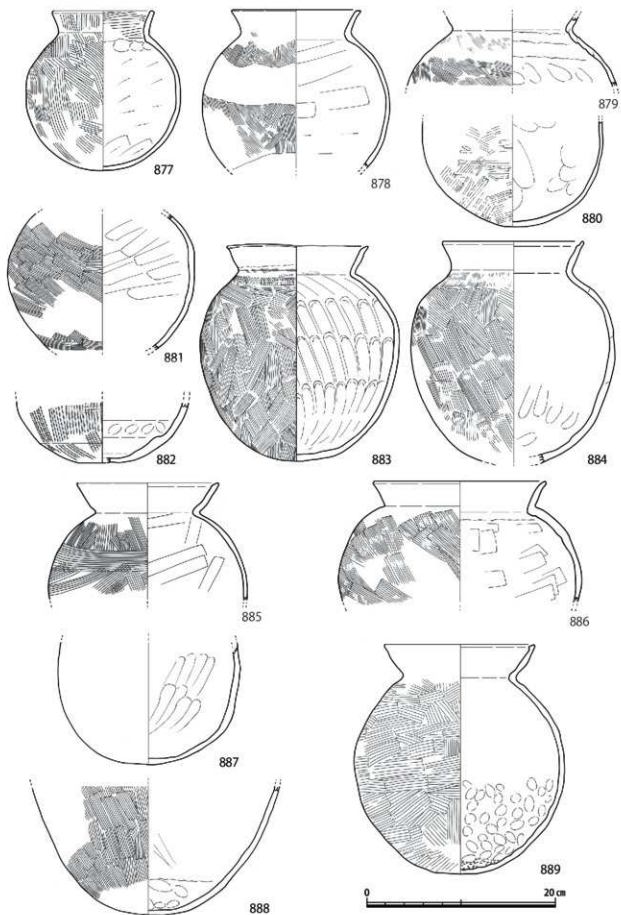


图 107 2区 中層遺構 河道V層出土遺物⑨ (S = 1/4)

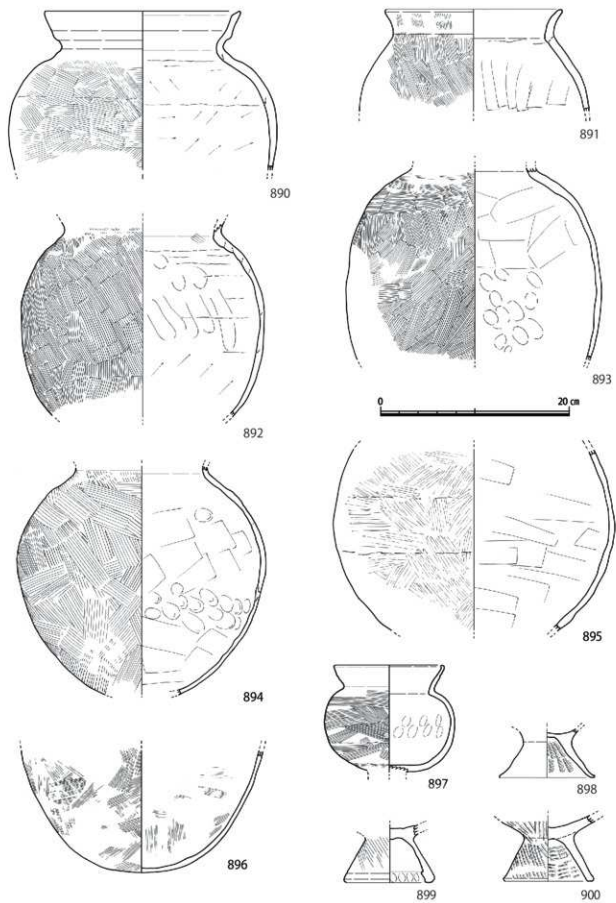


图 108 2区 中層遺構 河道V層出土遺物② (S=1/4)

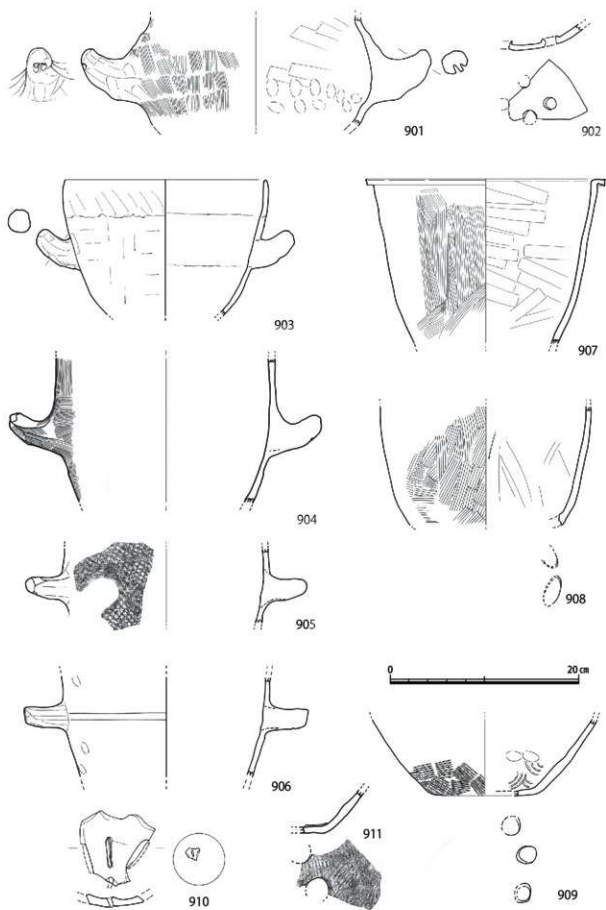


图 109 2区 中層遺構 河道V層出土遺物印 (S = 1/4)

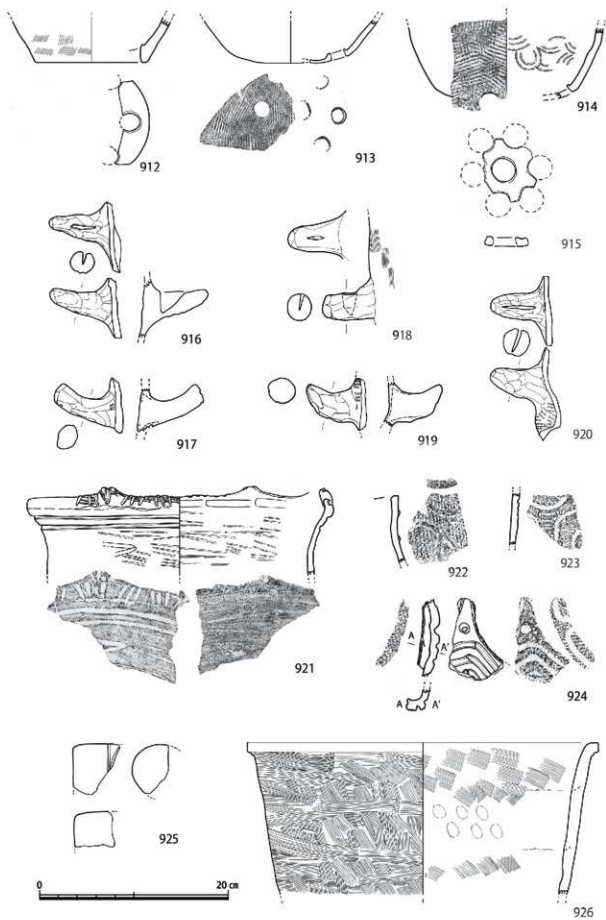


图 110 2区 中层遗物 河道V层出土遗物珍(S=1/4)

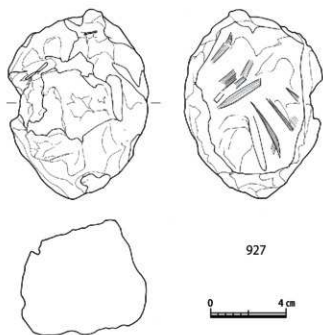


図111 2区 中層遺構 河道V層出土遺物③ (S=1/2)

つ形である。903は全体に丸みを帯びたカップ形を呈する。外面の大部分を縦・横のケズリで仕上げ、他をナデ調整で仕上げる。内面には把手の挿入痕が丸く残る。904は下半がやや丸みを帯びる形状である。外面はハケ調整、内面はケズリ後にナデ調整を丁寧に施す。内面には把手の挿入痕が半円形に残る。把手下面に支え棒痕が存在する。905は外面に格子タタキを施す。内面下半には煤が薄く付着する。把手は円柱状で、ほぼ水平方向に伸びる。把手根元付近の粘土が剥離しており、把手の挿入および粘土の貼り足し状況が断面確認できる。906は全体をナデ調整で仕上げる。小片のため復元径はさらに大きくなる可能性がある。把手は小形で水平に伸びる。把手端部は平坦である。把手下面には支え棒痕がある。把手を内面から挿入したことが確認できる。907は甕体部の破片であり把手は遺存していないので図化していない。口縁は外側に折り返して端部に面をもたせる。908は体部下半の破片で、下端に楕円形と考えられる蒸気孔が確認できる。底部は緩やかな丸底ないし稜が不明瞭な平底である。909は底部の破片で、稜が不明瞭な平底であると考えられる。蒸気孔は直径約1.5cm大の小円孔を複数配置する。底面を含む外面には平行タタキを施す。内面はナデ調整で仕上げるが当て具痕と思しき痕跡がわずかに残る。910は丸底の底部片である。細長い線状の蒸気孔を放射状に施す。911は稜が鈍い平底で、蒸気孔は直径2cm前後の小円孔を複数配置すると考えられる。底部を含む外面には幅広のタタキを施す。912は平底の底部である。蒸気孔は直径2cm前後の小円孔を複数配置すると考えられるが、孔同士の間隔はやや広い。外面にはハケ調整を施す。913は丸底気味の底部であるが遺存範囲は波打つため確実ではない。蒸気孔は直径約1.5cm大の小円孔を配置するが孔間隔は広い。底面を含む外面に平行タタキを施す。914は丸底の底部であると考えられる。蒸気孔は直径約1.5cm大の小円孔を密に施すものと考えられる。外面には平行タタキを施し、内面にはその当て具痕がわずかに残る。915は底部片である。蒸気孔は直径2.0~2.5cm大の円孔を中心に一つと、その周囲に同様の円孔を並べる形である。

916~920は甕あるいは鍋の把手である。いずれも土師質である。916は三角錐形の把手である。上面から断面三角形の切込を加えるが貫通はしない。底面にはごく小さな支え棒痕がある。917は反り上がる形状の把手である。外側に面を作り出すが完全な面ではない。下面先端に支え棒痕が存在する。端面にも同様の小孔が存在する。根元の粘土の剥離によって体部との接続部が断面確認できる。918は甕の把手である。水平に伸びる円柱状の把手で、上面から断面三角形の切込を施す。内面全体が炭化している。919は外側が上方に反り上がる中実の把手である。下面に支え棒痕がある。外面体部には斜格子タタキを施す。内側からの挿入と粘土貼り足しの状況が断面確認できる。920は上面からの切込が深い貫通はしない。外面体部には細かな平行タタキを施す。

921～924は縄文土器である。いずれも流水による表面の磨滅が激しい。921は深鉢である。比較的表面の状態は良好である。縄文時代後期後半の北白川上層式であると考えられる。口縁端部の突起部には竹管状工具による小孔が二方向に穿たれる。口縁端部には縄文を施す。922は波状口縁の深鉢であると考えられる。縄文時代中期に遡る可能性がある。縄文の上から凸帯を貼り付けて文様を描く。923は深鉢の破片で、時期は縄文時代後期後葉である。擦消縄文に竹管で文様を描く。924は波状口縁の深鉢で、時期は縄文時代中期末である。口縁端部に縄文を施す、竹管状工具で凹線と刺突による文様を描く。

925は土鉢である。直径約6cm程度の円柱形であったと考えられる。接合しないが同一個体と考えられる二点が出土している。外面に鈍い凹線が巡る。

926は円筒埴輪である。復元口径35.6cmを測る。比較的硬質な焼成であるが外面に黒斑が存在する。

927は不明土製品である。6～10cm大の不整形な粘土塊で、底面と考えられる平坦な面に藁の痕が残る。この面を下にした状態で熱を受けたことが各面の色調の差異から伺える。重量は約240gである。

下層杭列④～⑨出土 土器・土製品 (図112～121)

河道V層中に構築されている下層杭列(しがらみ遺構)中から出土した遺物である。先述の通り、基本的に河道V層と同様の時期の遺物が出土している。

928～962は須恵器である。

928～930は蓋である。928は83と同種の蓋であるが文様には差異が見られる。内・外の同心円文はともに明瞭な一条の凹線に描かれ、使用工具も異なる。櫛描文様も三方向である可能性が高い。形状や焼成・胎土は同様のものである。929はこの種の典型的な蓋である。内面には濃緑色自然釉が全体に厚く付着する。文様上での特徴としては櫛描文様が他より太い点が挙げられる。930も同様の蓋であるが口縁部の小片であるため全体像は不明である。焼成は他よりやや悪い。

931～936は高環の坏部である。931は無蓋高環で下端にわずかに脚部の立ち上がりが遺存する。全体を回転ナデ調整で仕上げる。932は有蓋である可能性があるが受部は短く、焼成時も組み合わせられていない。脚部には幅広の方形スカシが五方向に存在したと考えられる。全体を回転ナデ調整で仕上げているが、脚より内面はケズリのままである。内面口縁部には回転ナデ調整の水引きの皺が残る。外面上半には自然釉が付着する。933～935は有蓋高環だが蓋は別で焼成されている。933は全体に回転ナデ調整を施す。934はやや小型である。底面に脚部の剝離痕が存在する。935は立ち上がりが他よりも内傾する形状である。脚部には上端部が細いスカシが六方向に穿たれるが形状は不明である。坏部上面には降着物の附着が非常に多い。936は大型の無蓋高環である。全体を回転ナデ調整で平滑に仕上げる。外面中段には凹線が巡る。脚部には細いスカシを四方向に穿つ。

937～942は高環の脚部である。937は裾部である。若干の歪みがあり接地しない部分がある。938は三角形スカシを各三段、四方向に穿つ。スカシは全て同一工具の刺突によって穿たれている。全てのスカシに共通して三角の右下に突起状の窪みが存在する。内面には刺突により捲れ上がった粘土がそのまま残る。外面には全体に自然釉が付着する。939は台形のスカシを五方向に穿つと考えられる。940は菱形の刺突文を各三段に、四ないし五方向に配する。刺突は内面まで貫通せず、内面には押し出された粘土の高まりが確認できる。941は940とほぼ同様の刺突を各三段、四方向に

配する。各刺突の仕上がりは940よりやや粗雑である。上部は坏部との剥離面が残る。942は上部が右に寄った三角形スカシを三方向に穿つ。裾部やや上の稜の下に溝を巡らせることで段を作り出す。

943は小型の埴である。肩部が張り出す形状である。944は把手付埴である。波状文は二段で、上段の文様は場所によって位置が上下する。把手は根元付近で折れている。

945・946は把手である。945は体部との接合面で剥離している。立体的には上下でやや振れている。946は上下とも屈曲部付近で折れている。

947は壺の肩部である。二段の波状文を施す。948は二重口縁状の壺の口縁部である。外面の稜と波状文はいずれも明瞭である。949は壺あるいは甕の口縁部である。

950・951は壺あるいは甕の二重口縁である。950は全体に回転ナデ調整を施すが粗く、回転の乱れや器壁の凹凸が目立つ。焼成もやや悪く一部は黄灰色を呈する。951は上下段とも開く形状である。遺存する範囲では体部は水平方向に開くが、全体の形状の歪みによる可能性もある。952は甕もしくは壺の肩部である。内外面とも丁寧な回転ナデ調整を施す。953は甕の体部である。外面に平行タタキ、内面にナデ調整を丁寧に施す。

954は壺である。全体にナデ調整を施す。肩部より上には自然軸が厚く付着する。955も同様の壺であるが、口縁部根元の位置が中央からややずれる。自然軸と降着物の付着が多い。

956～960は器台である。956は坏部の下半で、下端に脚部の剥離面がある。剥離面には接合のための刻み目が確認できる。外面には組紐文、波状文、刺突文が施される。957は形状から脚部であると考えられるが、坏部の可能性も残る。波状文が内面側にも施されている点特徴的である。958は脚部中段である。山形文の内面を充填する文様、波状文を施す。貼り付けた稜は非常に鋭利に突出する。959は裾部の小片であるが重みによる歪みが大きい。内面裾部には焼成時の付着物がある。960は裾部の破片であるが甕の口縁部の可能性もある。961は最下段のスカシは長方形で四方向であると考えられる。スカシの横幅は不明であるが比較的細いと推測される。内外面とも回転ナデ調整を施し、その線が明瞭に確認できる。962は長方形スカシを二段、異なる方向に穿つ。上段には波状文がわずかに確認できる。

963～972は韓式系土器である。963は大型の鉢である。甕である可能性もある。外面体部に細かな格子タタキを施す。口縁部および内面は丁寧なナデ調整を施す。

964は土師質の甕である。破片のため、復元口径はやや大きくなる可能性もある。把手は湾曲し、先端が根元よりやや低い位置になる。把手下面先端付近には支え棒痕が存在する。外面には格子タタキを施す。965は甕の把手である。把手はわずかに上方に向く。体部内側からの挿入と粘土の貼り足し状況が断面確認できる。外面には格子タタキを施す。体部の把手間に細い凹線を巡らせる。

966は須恵器の壺に似た形状の軟質土器である。体部は球形で外面下半に格子タタキを施し、他をナデ調整で仕上げる。器面にわずかな凹凸は残るが内面を含めて全体に非常に平滑な仕上がりである。外面体部中央には黒斑が存在する。

967～969は平底鉢である。967は外面に目の広い格子タタキを施す。内外面に煤が付着する。968は外面に格子タタキを密に施す。外面及び内面口縁部付近にかけて煤が薄く付着する。969は外面に平行タタキを施す。968と同様に煤が付着する。

970～972は甕の体部片である。いずれも外面にタタキ、内面にナデ調整を施す。970は平行タタキを重ねて施し、一部は斜格子状になる。971は格子タタキと細い平行タタキを場所を分けて施す。

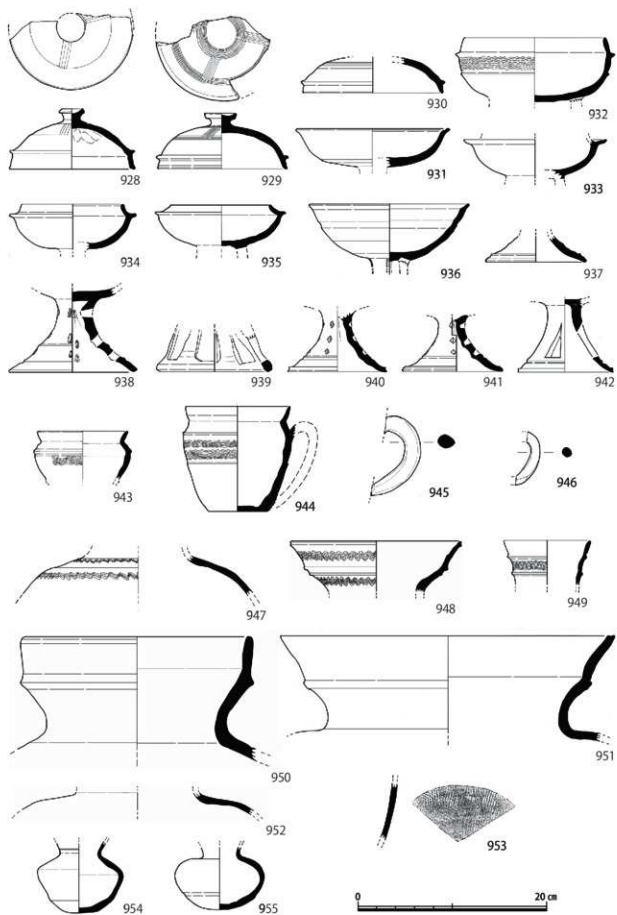


图 112 2区 中层遺構 河道下層杭列4~9出土遺物① (S = 1/4)

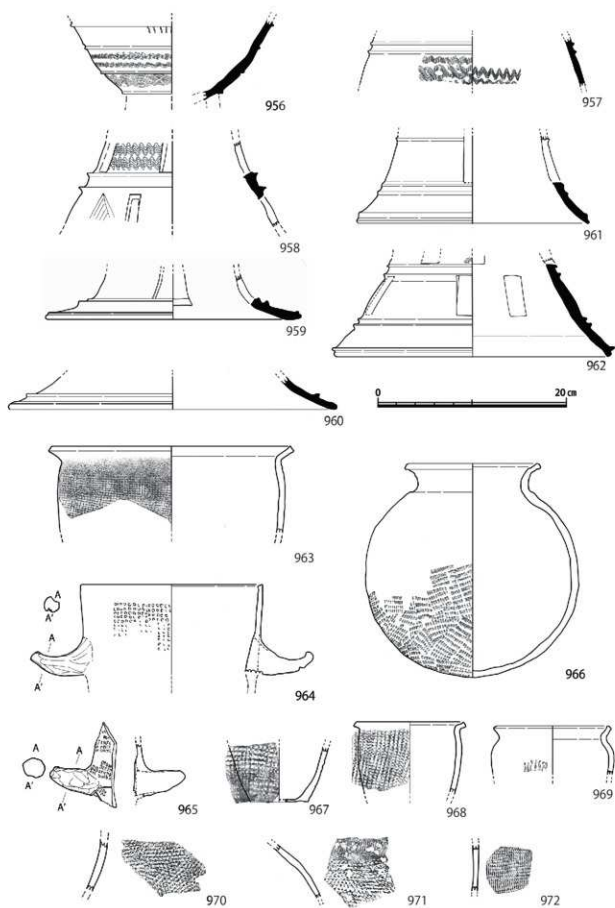


图 113 2区 中層遺構 河道下層杭列4~9出土遺物② (S = 1/4)

色調は他の甕に見られない明橙色を呈する。972は細かな格子タタキを施す。

973～1075、1077～1094は土師器である。

973は坏である。外面下半にケズリを施した後、ナデ調整で仕上げる。全体に平滑に仕上げる。

974～996は高坏である。974は細かなミガキを施す。やや大きめの円形スカシを三方向に穿つ。内面脚部上端には刺突痕がある。975は内面坏部下半にハケ調整の後、やや太いミガキを施す。外面坏部には表面のひび割れが目立つ。円形スカシを三方向に穿つが、それぞれの位置は高さが異なる。976は外面脚部に面取りを施す。脚上半部は中実である。977は外面に接合後のハケ調整を放射状に頸部から口縁部にかけて一連で施す。内面にはミガキを施す。底面には刺突痕と脚上端部が割れて残る。978は内面下半全体に直径0.1～0.3cm大の敲打痕が多数存在する。979は全体にナデ調整を施す。破片の断面を含む内外面に煤が付着している。980は表面が全体に磨滅しているが坏部にはミガキが確認できる。外面脚部は面取り状のミガキを施す。内面は絞り痕が明瞭である。981は内外面ともミガキを等間隔に縦方向に施す。口縁端部は薄く、外に開く。982は内外面にハケ調整を施す。外面は脚部との接合後に一定方向の放射状に施すが、内面は様々な方向に重ねる。

983～996は高坏の脚部である。983は外面脚柱部にナデ調整を面取り状に、裾部にミガキを施す。円形スカシを二方向に穿つが、位置は対面からずれる。984は983と同様の調整を施す。985は外面にやや粗いミガキを施す。986・987は差し込み式の脚部で上端部まで概ね残る。986は接合後に強くナデたためか頸部直下が窪む。987は表面が磨滅しているがミガキが確認できる。988は外面に縦方向の長いミガキを施す。989は脚柱部上方に細い凹線が巡る。内面裾部のハケ調整は各始点が刺突状に残る。990は内面裾部に当て布痕が明瞭に残る。外面は細かなミガキを施す。991は坏部との接合後のハケ調整が脚柱部中央付近にまで及ぶ。頸部下に細い凹線が巡る。992は高坏以外の台である可能性もある。上部からの粘土の挿入が断面確認できる。外面裾部にはやや乱れのあるハケ状の線が巡る。993は外面にミガキを部位によって方向を変えて施す。994は内面の未調整の筒部とナデ調整の裾部との境に爪状の痕が多数残る。995は坏部との接合が断面確認でき、坏底部まで一連の脚部であることが分かる。ナデ調整で仕上げるが全体に凹凸がやや目立つ。996は上部に粘土の挿入が確認できる。

997は大型の鉢である。外面はハケ調整の後、上部にナデ調整を強く施しており、これも線状に残る。内面には指頭圧痕が多く残る。外面に黒斑が存在する。998は丸みのある鉢で、脚が存在する可能性が高いが遺存していない。内面には太いミガキを施す。外面に黒斑が存在する。

999は丸底鉢である。外面下半と内面全体に煤が付着し、さらに内面には炭化物が多く付着する。1000は平底鉢の底部であると考えられる。外面に弱めのハケ調整を施す。

1001～1003は細頸小壺である。1001は球形の体部に短く反する口縁部をもつ。外面に細かくミガキを施す。1002は手づくね成形に近い作りである。外面に黒斑が存在する。1003は底部に小さな平坦面があり座りが良い。

1004～1041は小形丸底壺である。1004は外面に粗いナデ調整を施し、一部にその際の粘土片がそのまま残る。1005は外面体部にそれぞれ面をもつケズリを施す。1006は外面体部に下から掻き上げるハケ調整を施す。1007は全体に鉄分が薄く吸着する。底部は緩やかな平底で座りが良い。1008は外面肩部周辺の表面にひび割れが目立つ。内面下半のケズリは底部を中心に渦巻き状に施す。1009は外面底部以外の全体に煤が付着する。下半は器壁が厚く重量感がある。1010は肩部よ

りに線状に痕が残る強いナデ調整を施す。1011は他より小型である。外面の底部中央から放射状に細かなハケ調整を施す。1012は外面に右肩上がりの粘土紐痕が確認できる。1013はケズリとミガキを施し全体を平滑に仕上げる。1014は底部に小さな面があり座りが良い。内面のケズリは底部が粗い。1015は全体に鉄分が吸着する。底部付近に米粒大の穿孔を内側から施す。1016はやや太いミガキを部位ごとに方向を変えて施す。1017は頸部に強いナデ調整を施した際に、上下に細い凹線が生じている。1018は全体をナデ調整で仕上げる。内面体部は掻き取る形で施す。1019は底部付近に外側から打ち欠いた不整形な穿孔が存在する。その際に周辺にもひび割れが複数広がっている。1020はケズリとナデ調整を横方向に施す。一部に鉄分が吸着する。1021は平底気味で、外面下半に明瞭な面をもつケズリを施す。底部には直径2cm大の窪みをナデで作り出す。1022は肩部が張り出す形状である。外面に鉄分が吸着する。1023はケズリとナデ調整で全体を平滑に仕上げる。1024は全体に器壁が厚く重量感がある。ミガキを細かく施し、その単位ごとに面を成す。1025は全体に厚く鉄分が吸着する。平底の底部には使用時から存在していたと考えられる細長いひび割れが存在する。1026は内面口縁部中段に指先で押さえた痕が等間隔で横に並ぶ。1027はやや幅広のハケ調整を施す。底部は小さな平坦面が存在するが、置くとやや傾く。1028も底部に小さな平坦面があり座りが良い。体部は内面のケズリが粗く、器壁がやや厚い。1029は横方向に長いケズリとナデ調整を施す。1030は外面体部上半のハケが強くとタキ状になる。口縁部は上下の強いナデ調整によって中段が膨らむ形状となる。1031は体部の2割強の範囲で表面が広く薄く剥離している。意図的なものであるかは不明である。1032は体部中段に約1~3cm大の不整形な穿孔が存在する。この対面にも同様のものと思われる痕跡が存在するが、その周囲が破損しており全体像は不明である。1033は肩部に直径0.1cm大のごく小さな円孔が内側から穿たれている。1034は尖り底である。粗いハケ調整を施す。内外面に煤が付着する。1035は外面体部にケズリを螺旋状に施す。1036は全体に厚く鉄分が吸着する。体部中段が大きく張り出す形状である。1037は頸部のナデ調整によって二重口縁に近い形状となる。全体に平滑に仕上げる。1038は底部に小さな平坦面があり座りが良い。頸部は粘土を薄く貼り足してナデ付けており、その一部が剥落している。1039は尖り底で座りが非常に悪い。底部付近にはヘラ状工具によると思われる溝状の窪みが二ヶ所存在する。1040は外面体部にスパンの長いケズリを施す。全体に平滑に仕上げる。1041は内外面に煤が薄く付着する。

1042は広口小壺であると考えられる。平底である。1043は壺の体部下半である。扁球形の体部であると考えられる。外面に煤が付着し、内面にも炭化物がごく少量付着する。1044は細頸壺の体部である。外面には非常に細かなケズリを施し、内外面とも平滑に仕上げる。1045は外に開く口縁をもつと考えられる。外面全体に細かく強めのミガキを重ねる。1046は口縁部が接合面で剥落している。ミガキを細かな単位で施し、それぞれが面を成す。1047は広口壺である。外面体部と口縁部は平滑に仕上げる。内面体部上半には粘土紐痕が明瞭に残る。1048はナデ調整によって全体が非常に平滑に仕上げられている。外面に大きめの黒斑が存在する。1049は細かなミガキとナデ調整によって仕上げる。内面下半にはケズリによる段が残る。

1050~1053は脚付壺である。1050は挿入されていた脚部がそのまま剥落している。外面には鉄分が吸着する。内面には小さく炭化物が付着する範囲がある。内面底部付近には棒状工具を差し込んで成形したと考えられる痕が多く存在する。1051は全体が被熱により表面が劣化しており一部には煤も付着する。脚は上部で折れている。1052は外面が被熱によって劣化しており、わずかにハケ調

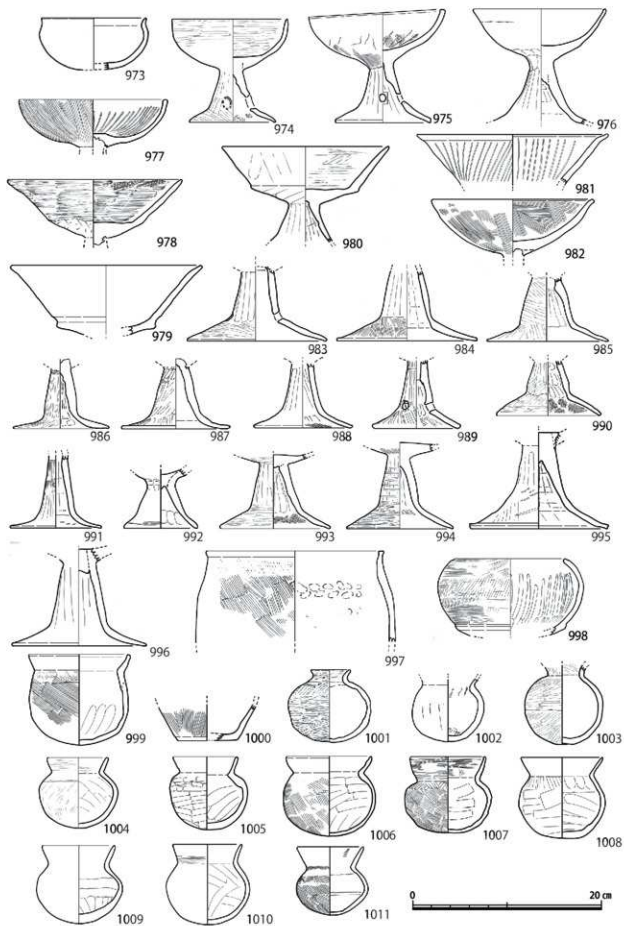


图 114 2区 中層遺構 河道下層杭列4~9出土遺物③ (S = 1/4)

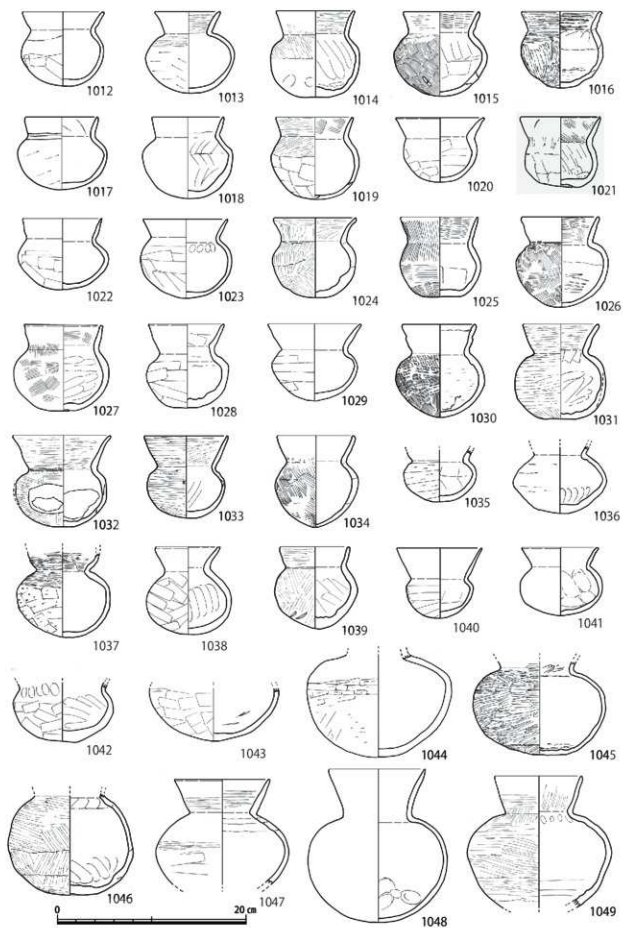


图 115 2区 中層遺構 河道下層杭列4~9出土遺物④ (S=1/4)

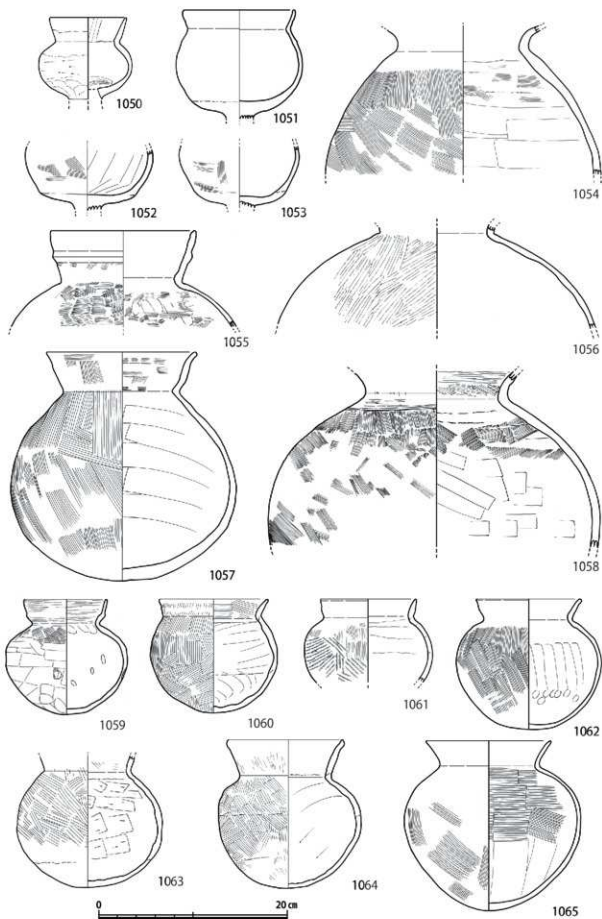


图 116 2区 中層遺構 河道下層杭列4~9出土遺物③ (S = 1/4)

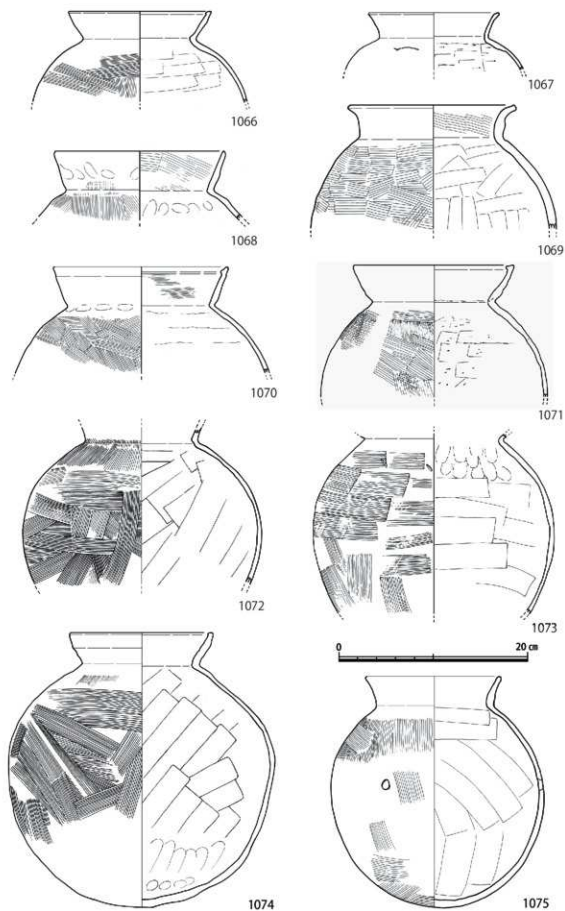


图 117 2区 中層遺構 河道下層杭列4~9出土遺物⑥ (S=1/4)

整が確認できる。内面は比較的遺存状態が良好で、工具の静止痕が複数存在する。1053は内外面が被熱により劣化しており、内面には少量の炭化物が付着する。脚部の断面では粘土の絞りを確認できる。

1054は細頸壺である。非常に細かなハケ調整を施す。口縁上半を欠くが概ね端部に近い位置まで遺存していると考えられる。1055は口縁部中段に稜を作り二重口縁状に仕上げる。内外面で同一工具によるハケ調整を施す。1056は壺の体部上半である。外面が磨滅しているがミガキが確認できる。1057は下膨れの体部をもつ壺である。下半の器壁が厚く重量感がある。体部は細かなハケ調整によって丁寧に仕上げる。体部に比べて口縁部は表面の凹凸や調整の甘さが目立つ。1058は大型壺である。内外面で異なるハケ調整を施しており、外面は特に細かい工具を用いる。

1059～1089は甕である。1059は二重口縁状の甕である。体部下半に約0.5cm大の窪みが存在する。穿孔途中で取り止めた可能性がある。内外面に煤が付着する。1060は鉢に近い形状である。全体に煤が付着し、内面には炭化物も存在する。器面も被熱によって一部変色している。1061は内面に広く粘土組織が残る。内外面に煤が薄く付着する。1062は外面体部に縦に長いスパンのハケ調整を施す。1063は外面に幅広のハケ調整を施す。内面のケズリは丁寧に施される。1064は体部の形状に歪みが大きく、とくに肩部付近は差異が大きい。外面下半には器面の凹凸が目立つ。1065は外面肩部以下に煤が付着する。ハケ調整は強く施されており、器壁は他より薄い。1066はケズリ、ハケ調整、ナデ調整をいずれも丁寧に施す。1067は外反気味の口縁である。外面にヘラ記号が存在するが下端は遺存しておらず全体像は不明である。1068は口縁部の歪みが大きい。大きめの指頭圧痕状の窪みも多く存在する。1069は甕あるいは壺である。形状は同種の須恵器に近い。外面体部と内面口縁部に単位の細かいハケ調整を施す。内面体部のケズリも単位が明瞭である。1070は幅狭のハケ調整を施す。外面肩部以下に煤が付着する。器壁がやや薄い。1071はやや強いハケ調整を施す。外面肩部にハの字形の細いハケ状工具による線刻が存在する。1072は外面のハケ調整と内面のケズリを長いスパンで施す。煤は付着しない。1073は外面頸部下に棒状具による刺突を三ヶ所に施す。外面肩部以下に煤が付着し、体部中央付近は特に多い。1074は口縁部中段に鈍い稜が巡る。外面のハケ調整と内面のケズリを長いスパンで施す。煤は外面底部付近のごく狭い範囲にのみ付着する。1075は体部中段に1cm大の円形の穿孔を施す。内外面体部に煤が付着する。煤は外面の中段付近が厚く、底部付近にはほぼ無い。

1076は瓦質焼成の甕の肩部である。外面に平行タタキの後、ナデ調整を施す。内面は丁寧にナデ調整を施す。

1077は球形の体部の下半である。ナデ調整で仕上げる。1078は長胴気味の甕である。外面の肩部以下に煤が厚く付着する。内面下半には炭化米が付着する。下半部に0.7～1.5cm大の不整形な穿孔が存在する。これは煤の付着後に行われている。1079は外面体部に細かなハケ調整を施す。内外面にごく部分的に煤が付着する。他の甕よりも流水の影響を受けている。1080はわずかに平底気味である。内面の口縁部下半にはナデによる凹線が巡る。外面下半に煤が付着する。1081はやや肩部が張る形状である。外面の肩部以下に煤が厚く付着する。外面体部全体に密にハケ調整を施していると考えられるが煤によって確認できない。口縁部は中ほどから上に粘土を足していることが確認できる。1082は直線的に立ち上がる口縁をもつ。外面の肩部以下に煤が厚く付着しており、下半は調整が確認できない。

1083は土師質であるが全体の形状および製作技法は須恵器と同様のものである。外面体部は平行タタキを細かな単位で施す。底部付近は上部よりもタタキを強く施す。内面には当て具痕と考えられる青海波文が部分的に残り、ナデ調整で仕上げる。口縁部は回転ナデ調整を施す。体部外面には黒斑が存在する。須恵器職人による土師器である可能性が考えられる。

1084は全体に調整を強く粗く施す作りである。器面の凹凸や表面粘土の余剰などが多く見られる。内面にはヘラ状工具端によると考えられる線が多く存在する。外面に煤が付着するが遺存状況は悪く元の範囲は不明である。1085は肩部以下に煤が付着する。底部付近の器壁がやや厚く安定感がある。1086は外面体部に幅広のハケ調整を施す。中段付近は縦横に施して格子状に見える部分もある。口縁端部は内側に面を作る。1087は外面体部にハケ調整を施すが、他の裏と比べて線が弱くハケナデに近い。外面体部下半に煤が付着する。1088は細かなハケ調整を施す。外面口縁部中ほどには工具痕と考えられる刺突が並ぶ。外面体部下半に煤が付着する。1089は緩やかな平底で座りが良い。外面全体に煤が付着し、内面体部にも被熱の影響が確認できる。

1090は平底壺である。小さな平底台が付き、据え置くと口縁部は傾く。外面は全体にナデ調整で仕上げる。粘土組織が残りを隠すように薄く粘土をナデ付ける部分も確認できる。内面口縁部には敲打痕が存在する。

1091～1094は台付甕である。1091は口縁部が鈍く屈曲する。外面体部にハケ調整を強く施す。1092は台部である。1093は体部中央に0.8cm大の小円孔が存在する。穿孔は両側から行われている。体部下半は表面の凹凸が目立つ。1094は外面体部全体に左肩上がりの長いスパンのハケ調整を施す。体部下半に煤が付着するが場所によって斑がある。

1095～1101は土師質の甕である。1095は口縁端部を外側に折り返す。外面にハケ調整を横方向に細かく施す。内側には把手底を押し込んだ円形の窪みがある。1096は外面に格子タタキを施した後、ナデ調整で仕上げる。把手上面には断面形が山形の切込が存在する。貫通はしない。把手下面には支え棒痕であると考えられる窪みが複数存在する。いずれも中軸線上からややずれた位置である。1097は丸底の甕である。蒸気孔は約2～4cm大の不整形円形を七ヶ所に穿孔する。器壁はやや厚手である。1098は把手である。先端以外は把手上にもハケ調整を施す。把手下面には竹管状の支え棒痕が存在する。1099は平底であるが稜は鈍く、蒸気孔は稜の外側にも及ぶ。蒸気孔は直径3cm弱の円孔を中央のやや大きい円孔の周囲に巡らせる形であると考えられる。外面に黒斑が存在する。1100は平底の底部である。円孔あるいは不整形孔を五ヶ所以上に配すと考えられる。1101は平底の底部である。直径1.5～2.0cm大の小円孔を多数穿つ。

1102～1104はミニチュア土器である。1102は鉢で、口縁端部を小さく外に折り返す。外面は鉄分が吸着し、内面は炭化している。1103は平底環である。指頭圧痕が多数存在する。1104は平底鉢である。外面に黒斑が存在する。

1105は不明筒形土製品である。長さ8.5cm、直径2.3cmを測る円柱状である。まるで鉄器のような非常に硬質の焼成である。中軸に直径0.6cmの孔が通り、棒状具に巻き付けて成形したと考えられる。端部は片側が丸く、反対側は別のパーツから剥落したような段が存在する。何らかの把手であった可能性などが考えられる。

1106は不明土製品である。遺存部分は半球形で片側には断面楕円形の筒部が続く痕跡が存在する。外面には小さな粘土塊を貼り付けた小突起が二ヶ所に存在する。

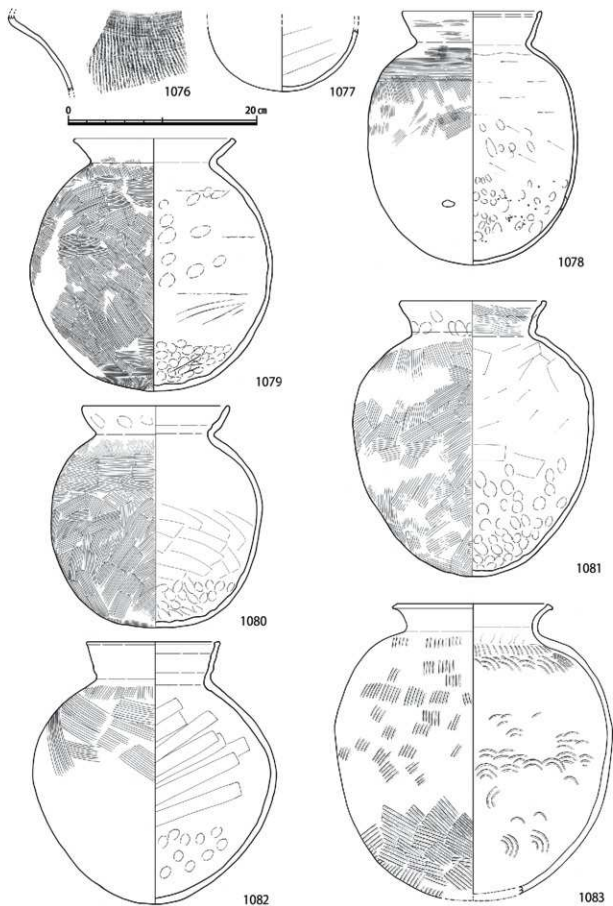
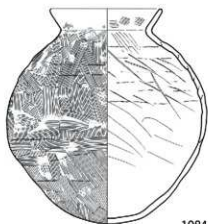


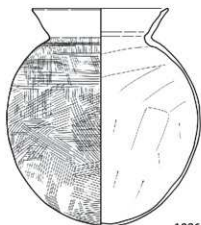
图 118 2区 中層遺構 河道下層杭列4~9出土遺物② (S=1/4)



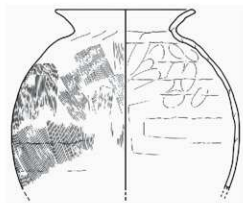
1084



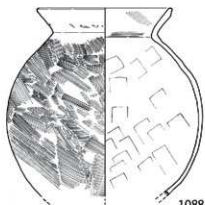
1085



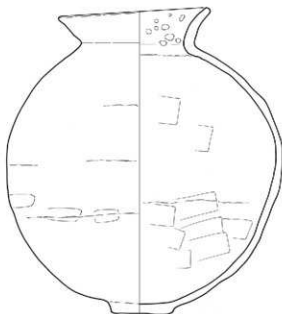
1086



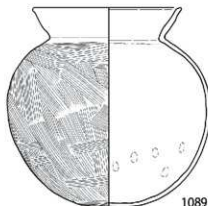
1087



1088



1090



1089



图 119 2区 中層遺構 河道下層杭列4~9出土遺物⑧ (S = 1/4)

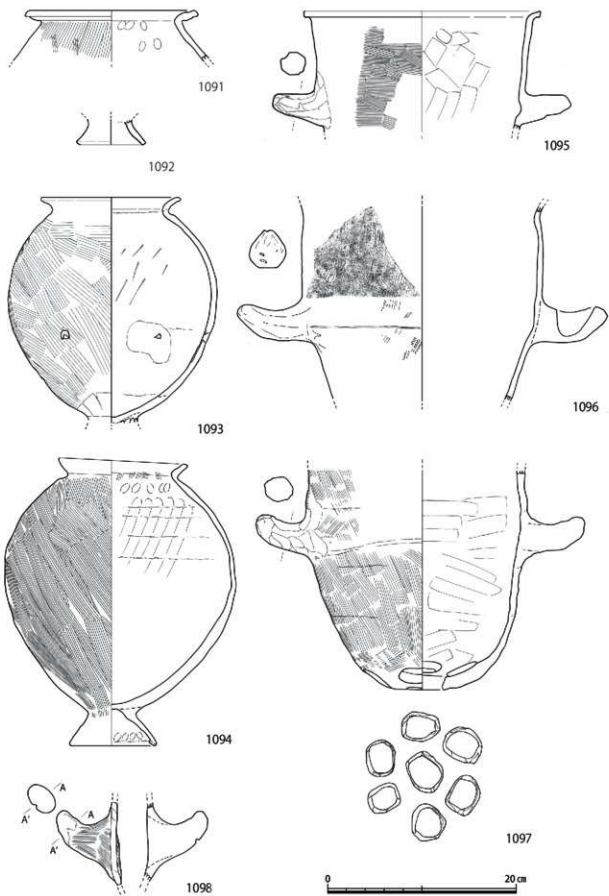


图 120 2区 中層遺構 河道下層杭列4~9出土遺物② (S = 1/4)

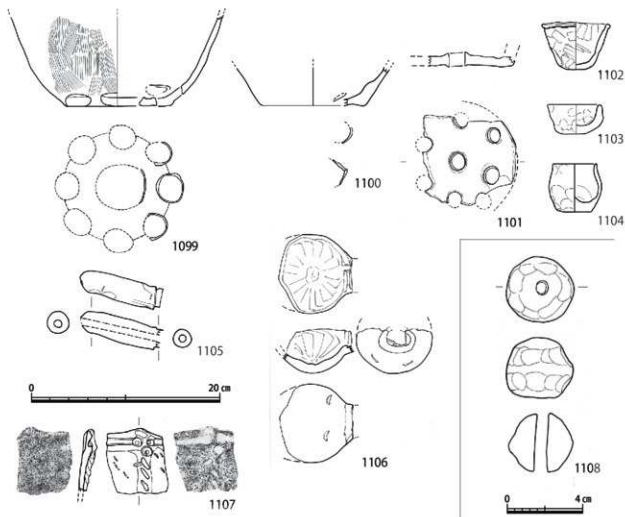


図 121 2区 中層遺構 河道下層杭列4～9出土遺物群 (S = 1/4・1/2)

1107は縄文土器鉢の口縁部である。表面は磨滅している。時期は縄文時代後期中葉であると考えられる。凹線、刺突文、粘土紐貼り付けによる隆線を施す。外面にはわずかに縄文が確認できる。

1108は土製の紡錘車あるいは土錘である。手づくね成形の楕形で、中軸に円形孔が通る。重量36.8gを測る。

下層杭列⑦出土土器・土製品 (図 122)

下層杭列⑦の下からは土器がまとめて出土している (図 60・図版 52)。杭列⑦はこれらの上に構築された形である。これらの土器は遺存状態が良好で 1109～1113 はほぼ完形である。1114 は上半部、1115 は下半部が残る。

1109～1114 は土師器甕・壺である。1109 は全体に細かな調整を施す。全体に煤が付着し、外面体部中ほどが特に多い。1110 は外面のハケ調整、内面のナデ調整をそれぞれ長いスパンで施す。全体に煤が薄く付着するが、外面底部付近はこれを欠く。1111 は全体に表面が薄く剥がれており調整は不明である。外面下半にわずかに煤が付着する部分が残る。1112 は大きく開く二重口縁の壺である。外面はハケ調整とナデ調整を施す。底部付近にごく小さな孔が存在するが意図的な穿孔であるか胎土中の礫の剥落であるか不明である。1113 は外面にハケ調整を施す。体部中段には横方向の帯としてミガキ状の擦れが巡る。焼成前の運搬時の痕跡である可能性も考えられる。1114 は大型の二重

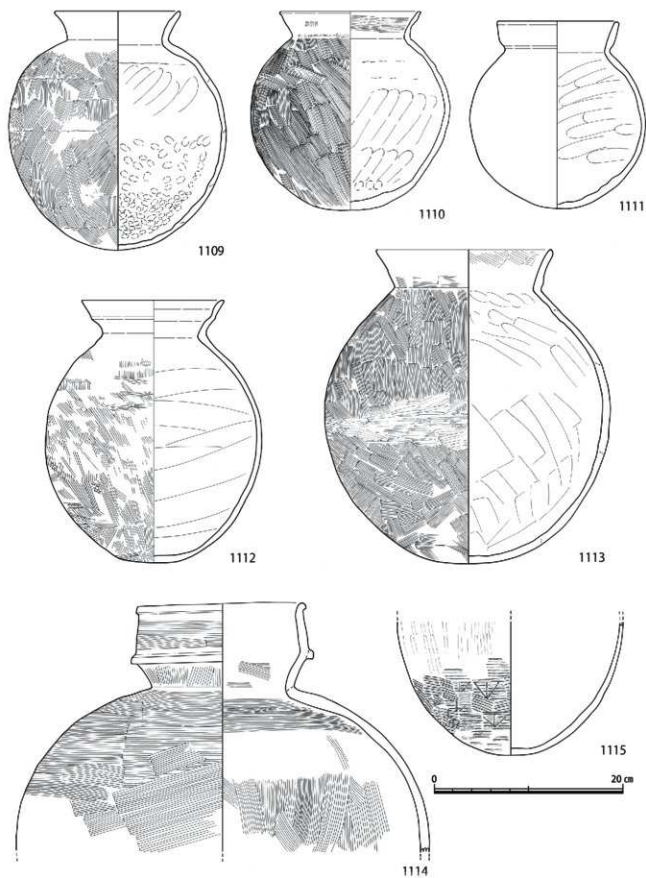


图 122 2区 中層遺構 河道下層杭列7下出土遺物 (S = 1/4)

口縁壺である。幅広のハケ調整を部位ごとに縦・横方向に施す。色調は他の甕・壺と異なる明褐色を呈する。

1115は土師質だが硬質な焼成の甕である。外面下半に細い平行タタキを施し、加えて鳥足文を施す。鳥足文は結節点を下に施される。外面上半はミガキを施し光沢がある。内面はナデ調整で平滑に仕上げる。外面底部付近には表面の剥がれが存在し、その一部を穿孔している可能性もあるが、当該部分は遺存していないので不明である。

河道一括出土土器・土製品(図123~128)

河道から出土した遺物のうち、出土層序が不明確なものである。古墳時代中期以前の遺物であり、数的には中期前半の遺物が最も多い点は他と同様である。ただし今回の調査の特徴である古墳時代中期前半の資料を中心に図化している点は注意が必要である。

1116~1153は須恵器である。

1116~1121は蓋である。1116・1117は先述した今回の調査で特徴的な蓋の典型例である。1116は十字文様のひとつがわずかに薄くなっている。1117は内・外の同心円文間の距離が他よりやや狭い。上面には焼き台による色斑が明瞭に残る。1118はその垂種で、同心円文間にハケ状工具先端の刺突文を並べており、182の文様に近い。つまみは低い。1119は1116と同様の形状であるが無文である。内面には融着物が非常に多い。1120は中期後半の蓋環の蓋である。外面に別個体の破片が融着している。1121はやや大型の蓋である。遺存範囲に文様は無い。肩部の稜は上向きである。色調は明灰色を呈する。

1122・1123は蓋環の身である。1122は全体に丸みを帯びた形状である。1123は口縁部が外反気味に立ち上がる。

1124~1128は高環である。1124は無蓋高環の環部である。全体に回転ナデ調整を施す。内面には自然釉が付着する。1125・1126は環部で、蓋が存在する可能性があるが焼成時は組み合わせられていない。1125は外面下半にヘラケズリを施す。1126は下部の器壁が厚い。1127は脚部で、全体に回転ナデ調整を施す。1128はやや大きい円形スカシを三方向に穿つ。外面、特に環底部には自然釉と付着物が多い。

1129は甕である。各部の文様と調整はいずれも丁寧に施されている。

1130は壺あるいは甕の体部である。全体に回転ナデ調整を施す。

1131は短頸壺である。底部は平底で中央が小さく窪む。上半はやや歪み口縁は波打つ形状である。

1132は壺である。小さな平底で全体をナデ調整で仕上げる。1133は壺の肩部であると考えられる。内面下半に自然釉が付着しており、頸部はあまり狭くならないと考えられる。

1134は樽形の鉢である。把手が付く可能性もあるが、遺存範囲では確認できない。平底の底部付近はケズリを施す。1135は把手付の壺である。底部を欠き、脚が存在していた可能性もある。肩部に自然釉が付着する。1136は把手付の壺である。把手は細い粘土紐を貼り付けており、根元で折れている。他の把手よりも装飾的な形であったと考えられ、把手上側の根元にはU字形の粘土も貼り足されている。把手根元の位置は上・下で左右にずれる。外面底部付近はケズリ状にナデ調整を施すが処理はやや粗い。1137・1138は把手である。1137は細く、屈曲部付近で折れている。1138は断面形が扁平である。体部との接合面で剥離していると考えられる。1139は壺の体部である。全体に

回転ナデ調整を施す。波状文は上下幅にやや斑がある。1140は把手付の平底鉢である。把手は下側根元は接合面で剥離している。内面には自然釉が付着する。

1141は器台あるいは高環の坏部である。中央に芯を持つ円形スタンプ文を並べる。芯の一部は内面に貫通寸前の深さまで至るものもある。1142は壺あるいは甕の肩部である。平行タタキの上から凹線を水平方向に巡らせる。

1143・1144は器台の脚部下半である。1143は方形スカシを穿つ。裾付近は胎土中の空気の膨らみが多い。1144は火焔形スカシと方形スカシを穿つ。火焔形スカシは上部も潰れ貫通している。外面には全体に自然釉が付着する。

1145は平底の甕あるいは壺であると考えられる。内外面ともにナデ調整で平滑に仕上げる。

1146は器台あるいは大型高環の脚部である。スカシは半円形と三角を上下に組み合わせた火焔形の一つである可能性がある。これを四方向に穿つと考えられる。

1147は瓦質焼成に近い甕である。外面体部には平行タタキを整然と施し、その上から水平に凹線を巡らせる。1148は二重口縁壺である。下段の波状文の上端は押し上げられた粘土が瘤状に残る。1149は壺で、口縁部上段は内傾する可能性がある。頸部には粘土を貼り付けて小さな段を作る。1150は壺の頸部である。全体に回転ナデ調整を施す。胎土中の空気の膨らみによる凹凸が目立つ。1151は甕の下半部である。外面下半には平行タタキ、上半には横方向のハケ調整を施す。内面には当て具痕が存在し、上半にはハケ状工具による横方向のケズリを施す。1152は焼成が甘く瓦質に近い仕上がりの甕である。外面には斜格子タタキ、内面にはナデ調整を施す。1153は大型の壺である。二重口縁状の口縁外面の波状文は非常に精緻に施される。外面体部はタタキを施した後にナデ調整で平滑に仕上げる。内面もナデ調整を施す。

1154～1211は土師器である。

1154～1157は坏である。1154は小型でミニチュア土器に含まれる。1155は径に比してやや深い坏である。ナデ調整によって外面より内面のほうが丁寧に仕上げられている。1156は上半部が垂直に立ち上がる。表面は全体に磨滅している。1157は内湾する形状である。内面全体に炭化物が付着しており、器面も炭化している。外面にも被熱痕がある。内面に燃焼物を入れて作業を行ったと考えられる。

1158は坏あるいは高環の口縁部である。須恵器の模倣品であると考えられる。口縁は低く反り上がる。外面には黒斑が存在する。

1159～1185は高坏である。1159は脚柱部に明瞭な面取りを施す。坏部は大きく傾く。円形スカシを二方向に施すが位置は対面から大きくずれて直角に近い位置関係にある。1160は表面がやや磨滅しているが細かなミガキとナデ調整で仕上げている。1161は内面に中軸から横にずれた位置に刺突痕が存在する。大きめの円形スカシを二方向に穿つ。1162は低く開く形状の坏部である。表面は磨滅により不明である。1163は外面にハケ調整の後にナデ調整を施し、ハケは静止痕のみが並ぶように残る。1164は全体にやや厚手の作りである。1165は薄い作りでミガキを施す。脚部は全体が剥落している。1166は口縁端部が外に開く。全体をナデ調整で仕上げが外面にはケズリ痕が残る。1167～1185は脚部である。1167は脚柱部上半は中実である。坏部底面にはヘラ状工具の静止痕が放射状に存在する。1168は脚柱部上半に被熱痕が存在する。円形スカシを三方向に穿つ。1169は内面裾部に当て布痕と工具静止痕が残る。1170は表面が磨滅しており調整は不明であるが、脚柱部

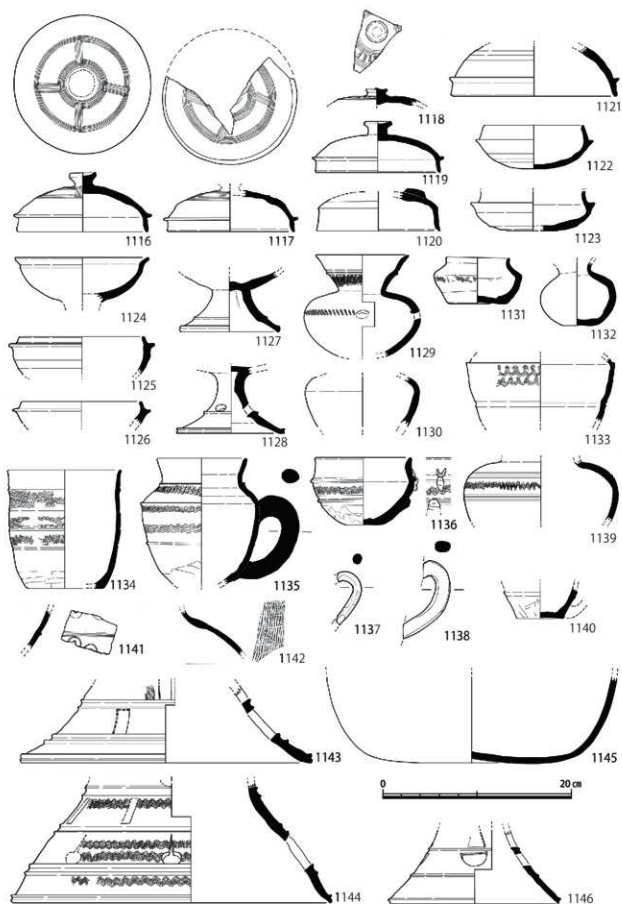


图 123 2区 中層遺構 河道一括出土遺物① (S=1/4)

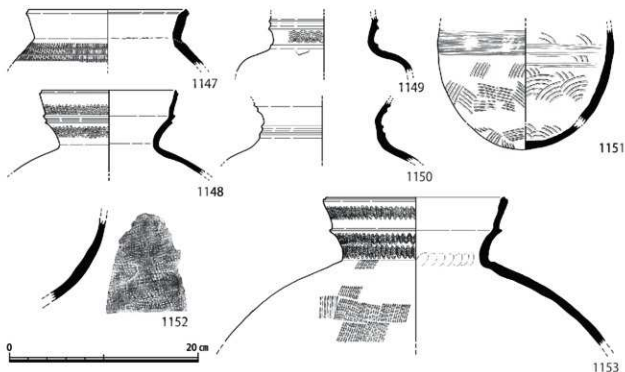


図124 2区 中層遺構 河道一括出土遺物② (S=1/4)

は面取り状にミガキを施す。1171は裾端部を下方に丸く折り返す。1172は坏部との接合面で剥離しており、上端には接合のための刻み目が存在する。1173は表面が磨滅しており細かな調整は不明であるが裾部にハケ調整が確認できる。1174はミガキとナデ調整を施す。1175はハの字に開く形状である。円形スカシを一ヶ所に穿つ。1176は外面にハケ調整の後、ミガキを施すがハケの痕も多く残る。1177は外面にミガキを施し、内面裾部には当て布痕が多く残る。1178は内面脚柱部裾に爪状の刺突痕が巡る。大きめの円形スカシを三方向に穿つ。1179は外面に縦方向に長いミガキを施す。1180は小型で、内外面とも平滑に仕上げる。1181は脚柱部に幅広の面取りを施す。円形スカシを二方向に穿つ。1182は円形スカシを三方向に穿つ。スカシ内側周辺処理が甘く、縁が挟れる部分が多い。1183・1184は全体をナデ調整で平滑に仕上げる。壺等の脚である可能性も考えられる。1185は裾端部の破片である。形状は須恵器の脚に似る。

1186は弥生土器の小形甕である。全体に鉄分が吸着する。細かなミガキを施す。底部はやや窪む。

1187～1191、1193～1196は小形丸底壺である。1187は球形の体部で下半は凹凸が目立つ。1188は調整が全体に粗く、特に内面のケズリが粗い。1189は全体に平滑に仕上げるが外面下半は胎土中の礫の剥落痕が目立つ。1190は全体を非常に滑らかに仕上げている。1191は外面にハケ調整、ミガキを密に施す。1193は表面にひび割れが多く存在する。全体に粗雑な作りである。1194は体部が完存し、口縁部は下端がわずかに立ち上がる。この状態で壺として使用した可能性も考えられる。1195は体部に縦方向にひび割れが存在し、その割れ目を中軸にして綾形状の刺突が施されている。1196は上半部は比較的平滑に作られているが下半は内外面とも非常に粗雑な作りで歪みも存在する。1192は小形甕である。外面肩部と内面上半に煤が付着する。

1197は広口壺である。全体に鉄分が吸着して表面は劣化しているが、ミガキとケズリを細かく施していることが確認できる。1198は壺の上部である。体部全体にケズリを施す。形状は歪みが大きい。1199は下膨れの壺体部である。底面は小さな面があり座りが良い。

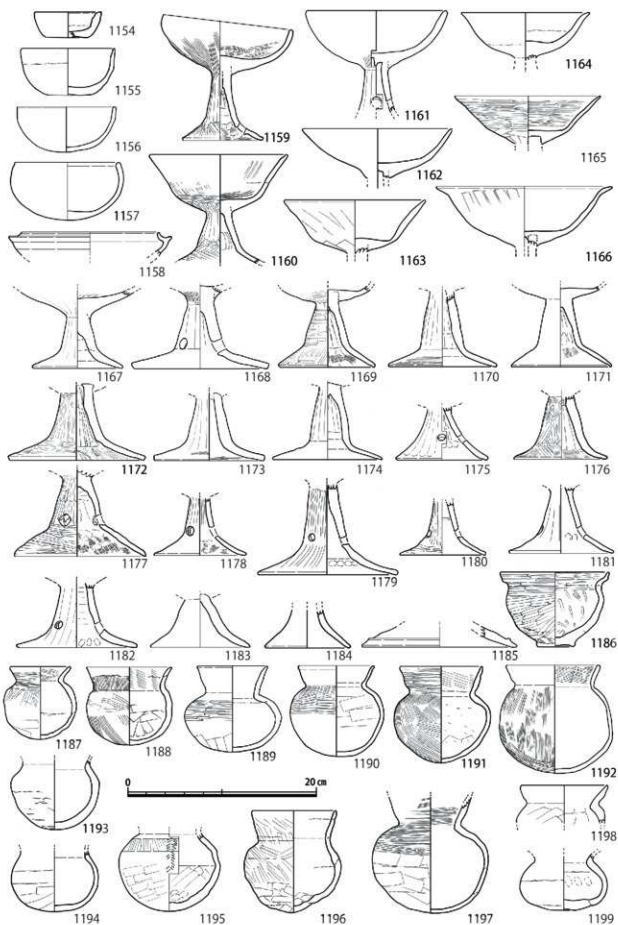


图 125 2区 中層遺構 河道一插出土遺物③ (S=1/4)

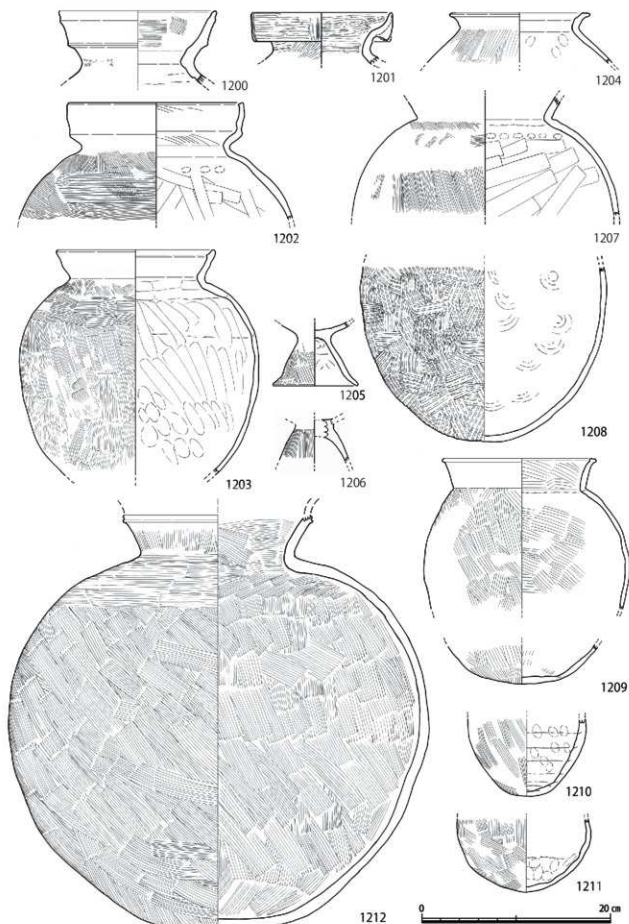


图 126 2区 中層遺構 河道一括出土遺物④ (S=1/4)

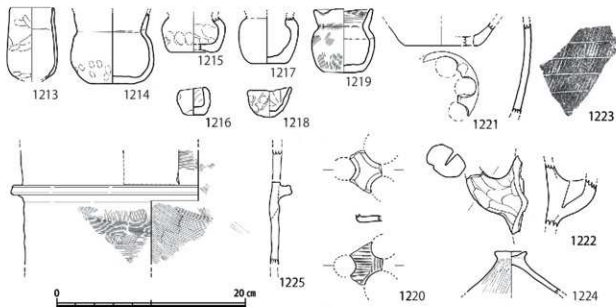


図 127 2区 中層遺構 河道一括出土遺物⑤ (S = 1/4)

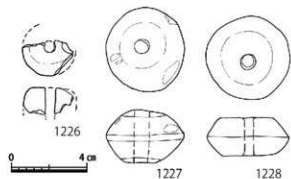


図 128 2区 中層遺構 河道一括出土遺物⑥ (S = 1/2)

1200 は二重口縁壺である。内面頸部には貼り足した粘土の剥落が存在する。1201 は壺の口縁部で、口縁部外面下に粘土を貼り足して外側に面を作る。而上には沈線と隆線を組み合わせた文様を四方向に施す。

1202 は二重口縁の甕である。外面体部にはやや幅広のハケ調整を丁寧に施す。1203 は甕である。外面全体に煤が付着する。

1204～1206 は台付甕である。1204 は頸部には鈍い凹線が巡る。ハケ調整を強く施す。1205 は台部で、裾は広がる。外面にハケ調整を施した後には体部と接合してナデ調整を施す。1206 は関東系の台の上半部である可能性がある。

1207 は大型の甕あるいは壺である。外面はハケ調整の後、肩部以上にナデ調整を施す。1208 は土師質であるが須恵器の技法を用いている。外面には平行タタキを細かく施し、内面には当て具痕が存在する。

1209 は甕で、接合はしないが同一個体であると考えられる上半部と底部が存在しており、合わせて図化をしている。内外面に幅広のハケ調整を施す。全体に煤が薄く付着する。1210 は尖底の甕であると考えられる。厚手で、内面には粘土紐痕が明瞭に残る。1211 は甕あるいは壺の底部である。内面底部付近には指頭圧痕が多数存在する。外面はハケ調整を施す。

1212 は大型の壺である。口縁部は上半を欠くが二重口縁状である。内外面とも細かなハケ調整を施す。外面底部付近に黒斑が存在する。

1213 は製塩土器である。縦長のコップ形である。色調は乳灰色を呈する。

1214～1219 はミニチュア土器である。いずれも手づくね成形である。1214 は小形平底壺である。底部には全体に指頭圧痕が多数存在する。1215 は平底の鉢あるいは壺形である。1216 はごく小さな碗形である。1217 は平底壺である。全体に厚みがある。1218 は小形鉢である。1219 は小形平

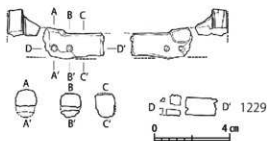


図 129 2区 中層遺構 河道出土骨製品 (S = 1/2)

1222 は土師質の鍋の把手である。幅が広く反り上がる把手である。上部からの切込は斜めに入り、貫通はしない。把手下面には支え棒痕が存在する。位置は中軸からずれる。1223 は土師質の甎あるいは甕の体部である。外面に斜め方向に平行タキを施し、その上から水平方向に凹線を巡らせる。内面はナデ調整を施す。

1224 は弥生土器蓋である。外面に細かなミガキを施す。

1225 は円筒埴輪である。スカシは方形であると考えられるが、幅・高さは不明である。

1226～1228 は土製の紡錘車である。1226 は小型の円柱形であると考えられる。1227 は算盤玉形に近く、上下はやや丸みを帯びる。完形品で重量 40.4 g を測る。1228 は 1227 より扁平で、上下とも平坦な形状である。完形品で重量 32.3 g を測る。

河道出土 動物骨製品 (図 129)

1229 は鹿角製の刀装具である。柄であると考えられる。河道IV層のシルト層中からしがらみ遺構に由来すると思われる流木とともに出土している。柄尻は鹿角下端の膨らみを利用して作られている。柄には直径 0.5 cm 大の円孔が二つ並ぶ。円孔同士は内部で縦に繋がっており、柄尻からも円孔と直交する穿孔が施されていた可能性がある。他の遺存する範囲は中実である。表面は遺存状態が悪いため全体像は不明であるが、柄の一部に鹿角の表皮が残る部分が存在する。

河道出土 鞆羽口・鉄滓 (図 130～132)

鞆羽口および鉄滓は河道内に散らばる形で出土している。基本的に古墳時代中期の遺物であると考えられる。層序別では河道I層から 1232・1237・1241 が、河道II・III層から 1230・1234・1235 が、河道IV層から 1246～1248・1250・1253～1256 が、河道V層から 1249・1251・1252 が、それ

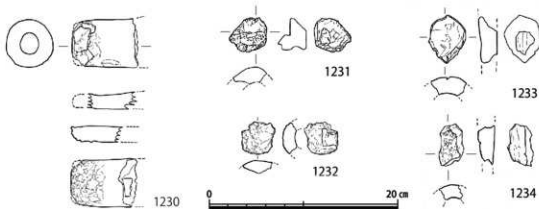


図 130 2区 中層遺構 河道出土鞆羽口 (S = 1/4)

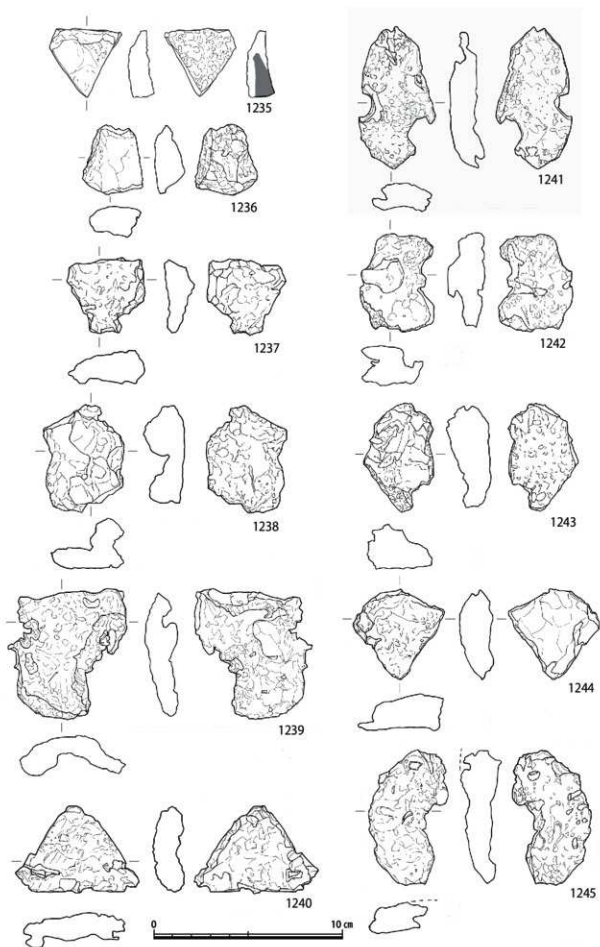


图 131 2区 中層遺構 河道 I ~ III層・河道一括出土鉄滓 (S = 1/2)

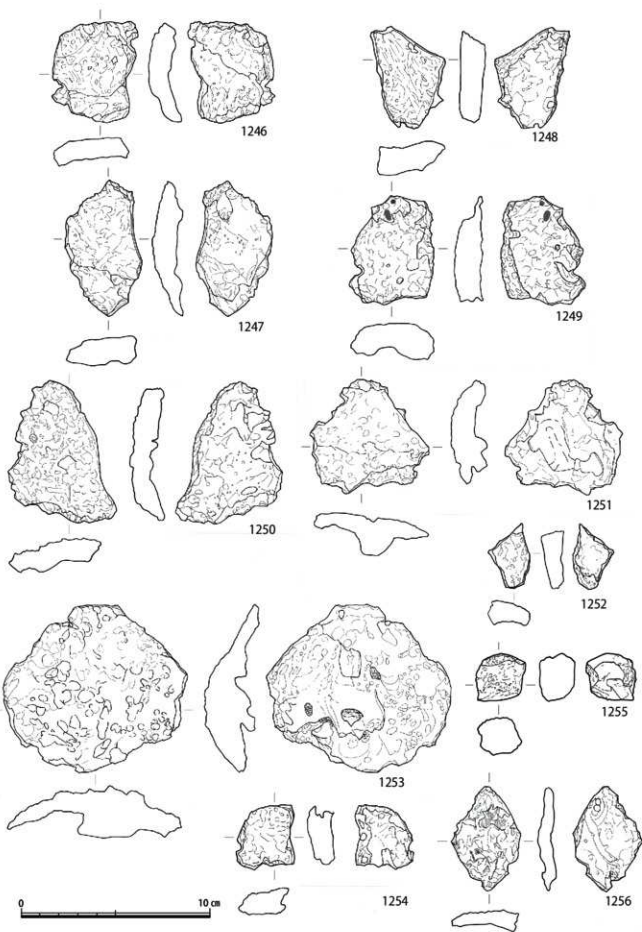


图 132 2区 中層遺構 河道Ⅳ・Ⅴ層出土鉄滓・輪削口 (S = 1/2)

それ出土している。他は河道一括での出土である。

1230～1234、1255は輪羽口である。1230は排気孔側の先4端部から長さ約7cm分が遺存する。直径約5.0～5.3cm、内孔径1.9～2.1cmを測る。先端約4cmの範囲が暗灰色・赤褐色に変色する。1231は先端付近の破片で外面に砂の多い滓が付着する。1232は排気孔端部の破片であると考えられる。1233は輪羽口中ほどの破片であると考えられる。他よりも胎土中に白礫が多い。1234は先端付近の破片である。内面は赤灰色に変色し、外面は被熱による気泡が多く存在する。1255は外面に鉄滓が多く付着する羽口の細片である。

1235～1254・1256は鉄滓である。1235は鉄の周囲に細砂を主体とする滓が付着することが断面確認できる。全体は三角形を呈する。二辺は直線であり、意図的に断ち切られた可能性がある。重量18.4gを測る。1236は片面の鉄の含有率が高い。重量19.9gを測る。1237は片面に白灰色砂が多く付着し、もう片面は黒褐色に変色する。重量20.1gを測る。1238は板状にU字形の塊が取り付けられた形状である。全体に砂礫が多く融着する。重量43.1gを測る。1239は薄い鉢形を呈する。気孔が多く、一部は対面まで貫通する。重量50.3gを測る。1240は1235と同様に二辺が直線的に断ち切られた三角形の破片である。内外面に大小の気孔が存在する。重量26.6gを測る。1241は湾曲する外面に灰白色の細砂が多く、内面は部分的に黒褐色に変色する。重量28.5gを測る。1242は鉄の含有率が他より高い。表面には小礫が融着する。重量28.2gを測る。1243は不整形な小鉄塊に板状の滓が付着する。重量36.6gを測る。1244は両面が灰白色と黒褐色で色調が分かれる。重量28.5gを測る。1245は薄い碗形の縁辺である可能性がある。内側は鉄分が多い。重量36.6gを測る。1246も同じく薄い碗形の一部である可能性がある。外面は全体が細砂で覆われ、内面には鉄やガラス質の融着が多い。重量32.1gを測る。1247も1246と同様の傾向である。重量30.3gを測る。1248は砂礫の集合から成る板状である。片面全体に薄く鉄分とガラス分が融着する。重量34.2gを測る。1249は全体にやや大きめの気孔が目立つ。重量38.2gを測る。1250は薄く湾曲する形状で、内面に広く鉄分が存在する。重量45.7gを測る。1251も同様の形状で、内面中央に2cm大の鉄塊が存在する。重量42.0gを測る。1252は小片だが鉄の含有率が比較的高い。重量10.1gを測る。1253は薄手の碗形滓である。内面中央一帯に鉄分が固まって見られる他は全体に砂礫に覆われる範囲が多い。重量134.8gを測る。1254は内面に鉄分が多い小片である。重量12.2gを測る。1256も1254と同様の破片である。外面に細い溝状の窪みが多い。重量15.3gを測る。

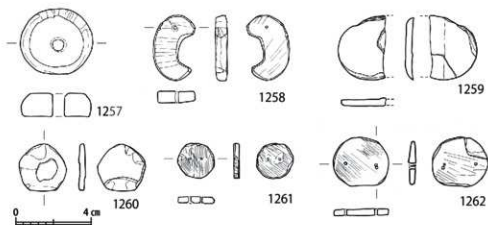


図133 2区 中層遺構 河道出土石製祭祀具 (S=1/2)

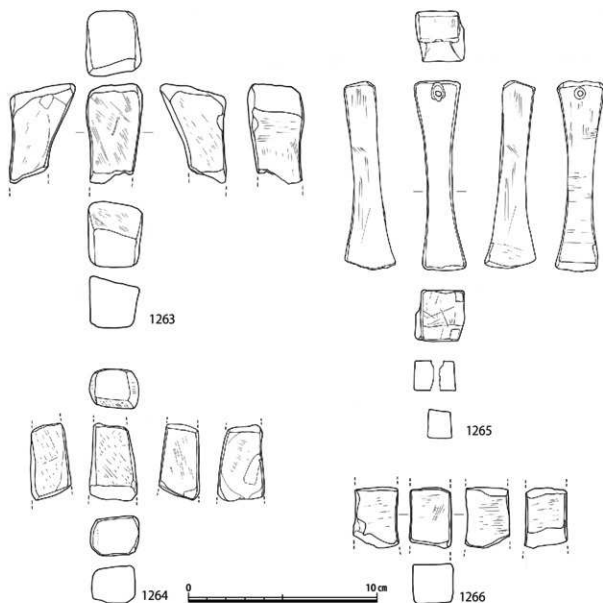


図 134 2区 中層遺構 河道出土 砥石① (S = 1/2)

河道出土 石製品・石器 (図 133～137)

他の遺物と同様に石製品・石器も河道内に広く散在する形で出土している。河道からは主として古墳時代中期の遺物が出土しているが、縄文時代中期～古墳時代前期の遺物もそれぞれ少量ながら出土しており、石製品・石器の中にもその時期にあたると考えられるものが存在する。

1257～1262 は古墳時代の石製祭祀具であると考えられる。1257 は滑石製紡錘車形製品である。上・下に広さの異なる平坦面がある。穿孔の位置は中心からややずれる。重量 27.1g を測る。1258 は滑石製勾玉である。河道最上層に位置する 20417SX からの出土である。直径 0.1 cm 弱の細い穿孔を施す。表面に擦痕が残る。側面はやや丸みを帯びる。1259 は不明石製品の一部である。円形あるいは棒状の先端であると考えられる。断面が薄い層状の石材で、一部は表面が薄く剥離している。1260 は滑石製円盤の未製品であると考えられる。1261 は滑石製双孔円盤である。杭列④内から出土している。外周はやや角張る。直径 0.17 cm 大の小円孔を二つ並べる。1262 は滑石製双孔円盤であるが、片側はやり直したのか二つの孔が接して存在しており合計三ヶ所に孔が穿たれている。

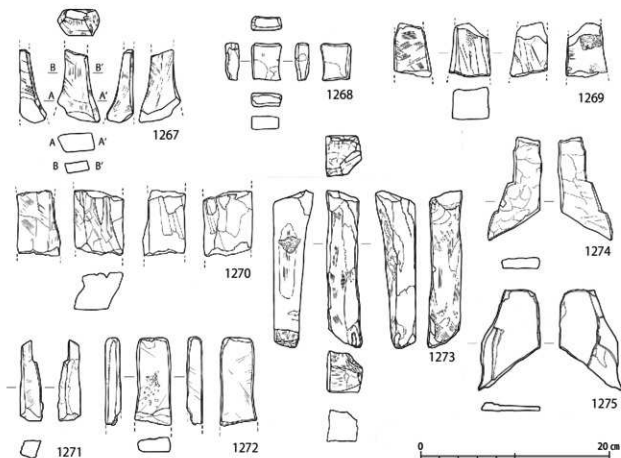


図 135 2区 中層遺構 河道出土 砥石② (S=1/4)

1263～1273 は砥石である。1263 は端部が太くなる棒状砥石の端部である。端面（図の上側）のみは擦痕が無い。1264 は棒状砥石である。各面のはっきり分かれるが稜は丸みを帯びる部分も多い。1265 は完形の砥石である。片側の端部付近に直径0.3～0.6 cm大の穿孔を施しており、紐を通して持ち歩いたものと考えられる。各面とも非常にきれいな面をもち、稜も明瞭である。両端面は他の面より深めの傷が多く、異なる使い方をしていたと考えられる。1266 は棒状砥石の中央部付近であると考えられ、両端に向かってわずかに広がることを確認できる。1267 は同じく両端が太い形状であると考えられるが、他より大型である。また、幅に比して薄い形状で、断面形は長方形となる。1268 は薄い直方体である。棒状が折れたものである可能性もあるが流水の影響による磨滅により判断が難しい。1269 は断面が正方形に近い棒状砥石である。被熱による変色が一部に見られる。破片となった後に被熱したようで、その変色は断面にも広く及んでいる。1270 は角柱の砥石の一部である。断面形は平行四辺形となる。一面には縦軸に沿う深い溝状の使用痕がある。1271 は擦面が二面遺存し、稜は屈曲して繋がる。全体の形状は不明である。1272 は薄板状の形状である。各面とも基本的に平滑であり、稜は丸みを帯びる。端面は敲打に用いた可能性もある。一面には細い棒状具の先端を擦り付けた、あるいは敲打したと考えられる0.2 cm大前後の窪みが複数存在する。1273 は角柱状である。二面は擦面であり非常に平滑である。残る面は原石のまま残る部分が多く別用途に用いたと考えられる。1274・1275 は、くの字形を呈するが当初の形状であるかは不明である。いずれも側面は平滑であるが、広面は凹凸が残る。

1276・1277 は石包丁である。1276 は断面も含めて流水により全体が磨滅している。1277 は表

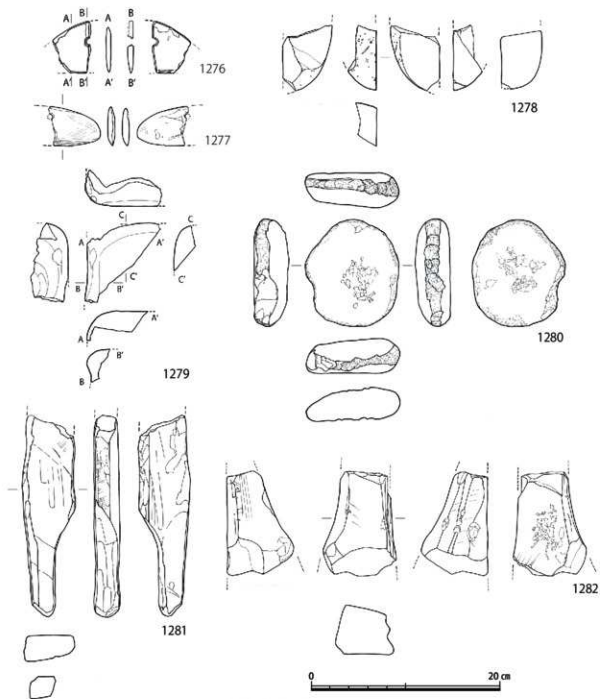


図136 2区 中層遺構 河道出土石器・石製品 (S=1/4)

面が片面は平滑であるが、片面は凹凸や傷が目立つ。1278は叩石・擦石の破片であると考えられる。ただし複数ある断面は比較的平坦で稜も鋭く、この状態で二次利用した可能性もある。1279は石皿であると考えられる。側面中央が大きく窪む。1280は花崗岩の凹石である。敲石、またその受皿としても利用していたようで大小の窪みが全体に存在する。

1281は結晶片岩の石刀である可能性が考えられる。下部は細く持ち手状になる。広面のうち一面は平滑に仕上げている。1282は大型の砥石である。一面には縦軸に沿う太い溝が存在し、矢柄等の棒状具の研磨に使用したと考えられる。他の面も全て擦面として利用されているが、一面には細かな敲打痕が集中して存在する。

1283～1292はサヌカイト製の石器である。1283は木葉形の石鏃である。先端をわずかに欠く。

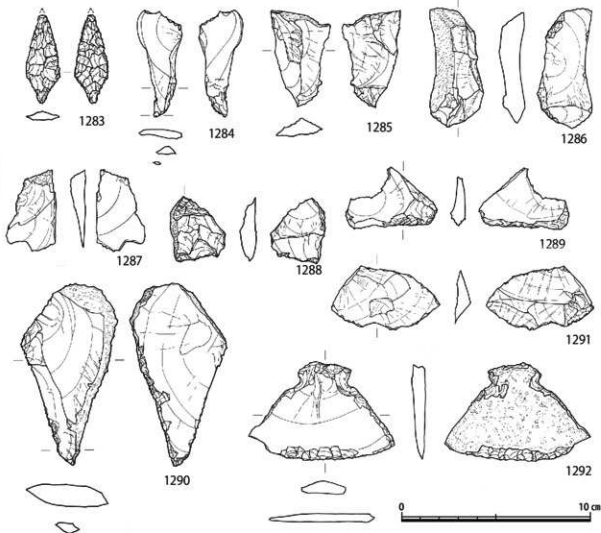


図 137 2区 中層遺構 河道出土石器 (S=1/2)

重量は 3.1g を測る。1284～1289 は剥片である。1284 は形状から石錐の未製品である可能性もある。1288・1289 は楔形石器である可能性も考えられる。1290 は石錐の未製品である。重量 56.2g を測る。側面には原石部分が残る。1291 は使用痕のある剥片で、削器の未製品である可能性もある。端部に部分的に加工を施す。1292 は石匙である。片面は刃部以外は原石面を残す。両面とも刃部中央附近は加工範囲がやや広い。重量 22.7g を測る。

河道出土 木製品 (図 138～152、表 10)

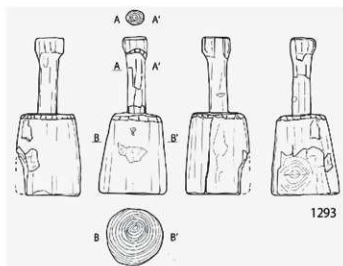
先述の通り河道からは多量の木材が出土している。これらの中で用途不明品も含めて製品として認識できる資料を図化している (1293～1348)。なお、ここで報告する資料以外にも部分的に加工を施した資料 (杭、不明木製品など) も多く存在しており、それらは他の木材とともに水漬けで保管している。特に大型木器槽に保管している長さ 1 m を超えるような大型の資料については建築部材等を含んでいる可能性が高いが、今回はうち 3 点 (1346～1348) のみの報告となる。これらは使用場所がおおよそ把握できる大型の建築部材である。木製品の分類や各種名称については主として奈良国立文化財研究所 編 1993『木器集成図録 近畿原始編』を参考している。

これらの木製品はしがらみ遺構の構成材として組み込まれたり、そこから流れ出て浮いた状態ある

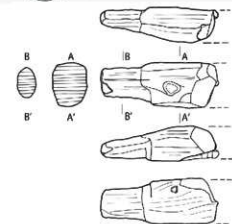
表 10 20234SE・河道出土木製品一覧

報告書 掲載番号	出土地点	樹種	遺物種	長さ (cm)	他法量 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	遺存範囲	K 番号
61	20234SE No.37 (図 37)		扉板 (井戸枠に転用)	(92.0)		28.8	5.3	8割存	
1293	209895D 北西隅 Ⅱ層	ツバキ属	横軸	16.5		7.1	7.0	9割存	
1294	209895D 杭列①付近 V層		袋状鎌の柄	(12.3)		4.7	3.6	先端のみ	
1295	209895D IV～V層		鎌柄	(12.4)		2.9	2.2	先端のみ	
1296	209895D 中央部 V層		田下駄の横木	47.3		5.3	1.0	9割存	
1297	209895D 杭列⑦	コナラ属アカガシ亜属	錠除	(21.2)		(39.5)	1.2	9割存	K402
1298	209895D 杭列④東		整片	(102.0)		9.2	7.4	9割存	K32
1299	209895D 杭列⑧	コナラ属アカガシ亜属	曲柄又鎌	(55.8)		17.5	1.0	8割存	K274
1300	209895D 杭列⑧	コナラ属アカガシ亜属	曲柄鎌?	(29.4)		(6.2)	1.2	軸部のみ	K356
1301	209895D IV層		曲柄鎌の傘部	(8.5)		(3.5)	1.5	1割存	
1302	209895D IV層		曲柄又鎌	49.1		15.4	0.8	8割存	
1303	209895D 杭列⑤	コナラ属アカガシ亜属	曲柄又鎌	(39.8)		(12.4)	2.0	6割存	K156
1304	209895D 杭列④東		曲柄又鎌	(35.7)		(9.1)	1.3	4割存	K101
1305	209895D 北側 V層		曲柄又鎌	(24.9)		(6.8)	0.9	3割存	
1306	209895D 杭列⑤	コナラ属アカガシ亜属	曲柄又鎌	(51.3)		(7.7)	1.3	5割存	K70
1307	209895D 杭列⑥		曲柄又鎌	(37.3)		(6.9)	1.0	3割存	K572
1308	209895D 杭列⑤西端部	コナラ属アカガシ亜属	曲柄又鎌	(41.4)		17.0	1.1	6割存	
1309	209895D 杭列④東		鋸打具 (打)	(42.6)		(10.4)	3.0	6割存	K80
1310	209895D 中央部 IV～V層	ヒノキ	杵	30.3		37.8	2.1	7割存?	
1311	209895D 杭列④東		杵の柄か	37.6		3.4	1.9	柄のみ	K123
1312	209895D 杭列⑨		大秤棒?	(75.4)		4.7	2.6	9割存	K253
1313	209895D 北西隅 IV層		梯子形木製品	(130.5)		5.0	3.6	8割存?	
1314	209895D 中央部 Ⅱ・Ⅲ層	カエデ属	刀剣装具 (鞘尻・口)	3.5		(7.7)	1.0	4割存?	
1315	209895D I層		箱	(8.8)		(5.3)	1.4	片面一部	
1316	209895D V層	ヒノキ	柄	(4.2)		4.3	4.3	柄のみ	
1317	209895D 中央部 IV～V層		筑状器蓋部?	(18.7)		4.8	2.6	一部	
1318	209895D IV層	ヒノキ	刀形木製品	21.5		2.1	0.9	完形	
1319	209895D 杭列⑤	ヒョウタン類	漆塗器	(5.6)		(6.5)	0.7	小片 3点	K137
1320	209895D 杭列⑧	ヒノキ科	さしざ形?	36.4		18.0	1.9	ほぼ完形	K289
1321	209895D Ⅱ・Ⅲ層	ヒノキ	鳥形木製品?	36.0		8.5	2.0	ほぼ完形	
1322	209895D IV層	ヤブツバキ	鳥形木製品?	21.6		6.9	5.6	ほぼ完形	
1323	209895D 杭列⑨	ヒノキ科	槽	(60.9)	高 5.8	(10.9)	1.4	3割存	K303
1324	209895D 杭列⑤	ヒノキ科	槽	57.6	高 7.5	(12.5)	1.9	3割存	K137
1325	209895D 北側 Ⅲ層	ヒノキ	槽	45.3	高 6.1	(17.0)	2.5	6割存	
1326	209895D 杭列⑧	クリ	槽	54.0	高 7.8	(11.0)	1.5	5割存	K353
1327	209895D 北西隅 I～Ⅱ層		盤	(26.6)	高 4.6	(17.2)	1.1	4割存	
1328	209895D 杭列⑧	ヒノキ属	盤	(18.7)	高 (1.5)	(20.1)	1.1	3割存	K284
1329	209895D 杭列⑤	ヒノキ	盤	(34.8)	高 (2.5)	(27.4)	2.2	3割存	
1330	209895D 杭列⑤	コウヤマキ	懸掛	35.7	高 13.6	18.1	3.0	ほぼ完形	
1331	209895D 杭列⑦の上 IV層	ヒノキ	不明板材 (脚?)	26.8		12.7	2.2	完形	
1332	209895D 杭列⑥		不明板材 (脚?)	14.8		27.5	2.0	ほぼ完形	
1333	209895D 杭列⑥		不明板材	25.4		8.9	0.9	9割存	
1334	209895D 北側 IV層		不明棒材	(25.9)		2.5	1.9	7割存?	
1335	209895D 北側 IV～V層		不明製品 (柄?)	(30.8)		2.6	1.9	5割存?	
1336	209895D 先行 TR V層	ヒノキ	三角錐形	(5.2)		1.9	1.9	先端のみ	
1337	209895D 杭列⑤	ヒノキ	平材	9.2		3.9	0.5	完形	
1338	209895D I層		不明製品 (柄?)	(15.0)		1.8	0.7	8割存?	
1339	209895D 中央部 Ⅲ～V層		不明製品	(9.2)		2.0	1.7	一部?	
1340	209895D 杭列⑤		燃えさし	17.2		1.6	0.6	完形	
1341	209895D 杭列⑥	ヒノキ	羽子板形木製品	(52.3)		11.1	2.2	9割存?	K572
1342	209895D 北側 I層	スダジイ	不明角材	(30.3)		6.9	6.5	先端?	
1343	209895D 杭列⑧		筒形製品	(31.5)		4.0	1.4	8割存?	K254
1344	209895D 中央部 IV～V層		板状製品	(57.3)		2.5	2.9	8割存?	
1345	209895D 中央部 I～IV層		不明製品	(82.7)		4.7	1.7	8割存?	
1346	209895D 杭列⑦		垂木	230.5		8.2	7.8	ほぼ完形	K417
1347	209895D 杭列⑥		柱材	262.2		12.2	12.0	9割存?	K541
1348	209895D 杭列⑦		梁材	173.0		14.5	14.1	完形	K446

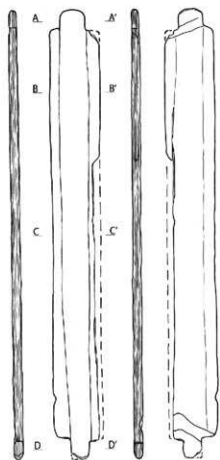
※ 各法量の () は現在残存。樹種同定は保存処理時に行っており、空欄は未処理である。K 番号がある資料は表 1～9 と重複する



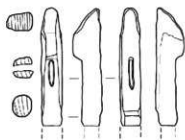
1293



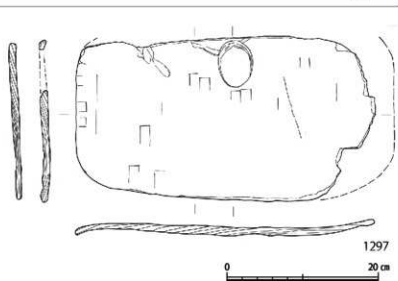
1294



1296



1295



1297



图 138 2区 中層遺構 河道出土木製品① (S = 1/4 · 1/5)

いはしがらみに引っ掛かった状態で出土しているものが多い。

報告する木製品の基本情報は表 10 にまとめている。樹種同定欄は保存処理を行った際に併せて得た情報であり、保存処理済みであることを示す。同欄が空白の資料については未処理で保管を行っている。保存処理は一般社団法人 文化財科学研究センターに業務委託し、トレハロース含浸法による処理を施している。巻尾に掲載している写真はいずれも処理前に撮影した写真である。保存処理を行った遺物の樹種を見るとヒノキが最も多く、次いでアカガシである。他、コウヤマキ、クリ、スダジイ、カエデ、ツバキ、ヒイラギがある。

表 10 の右端列の K 番号は第 6 項の遺構報告で用いたものであり、そちらの図表と対応する。K 番号が空欄の資料については、別途単体での出土記録がある、あるいは一括資料として取り上げが行われた後に木製品として認識されたものである。

1293 は小型の横槌である。身と柄の境は明瞭である。身は裾広がりの釣鐘形で、各面に使用痕が存在する。柄は端が太い。柄の長さは全体で掌大であり、そのまま握るとやや短い印象を受ける。

1294 は袋状鉄斧の柄の斧台部分であると考えられる。斧台の基部付近で折れており、握りは失われている。装着部の端には小さな段が巡るが、位置はきれいに全周せずに途中でずれる。装着部は先端に向かってやや細くなる。

1295 は鎌柄であると考えられる。柄頭部は刃側へ台形状に突出して面を持たせる。柄先端は三角に尖る。装着孔は長さ 2.5 cm、幅 0.4 cm を測る。柄の下半部は失われているが、直線的な柄であったと考えられる。

1296 は両端が小さく突出する平材で、田下駄の横木（棧）である可能性が考えられる。その場合、横幅 50 cm 前後の田下駄となる。厚さは 0.8～1.0 cm と全体で概ね共通する。両突起の稜は丸みを帯びる。片面の両突起根元付近には、斜行する幅 1 cm 強の擦痕が存在する（図右側）。紐・縄の結合によるものである可能性が考えられる。

1297 は鎌に装着する泥除である。縁辺が欠損しているが全体像は幅約 40 cm、高さ約 22 cm 程度の隅丸長方形であると考えられる。経年劣化によってやや歪んでいるが概ね平坦な形状である。厚みもわずかに中央周辺が厚い程度である。柄孔は 6.0×4.5 cm の楕円形を呈する。柄孔の切込方向以外は両面で大きな差異は無い。板目取り材である。

1298 は整片である。杭列④本体よりやや南から他の棒材とともに出土している（図版 51 下）。握部から両搦部へと緩やかに太くなる簡素な作りである。握部の側面には樹皮がそのまま残る部分が多い。握部は外表が削られており滑らかである。片側の搦部端は山形に尖る。この形状に削り出した痕が確認できる。対面の先端はやや斜めの平坦であるが、当初の形状であるかは不明である。搦部は山形側が長い。

1299～1308 は鎌である。曲柄又鎌であると考えられる。いわゆるナスビ形木製品と呼ばれる遺物である。樹種が判明しているものは、いずれもコナラ属アカガシ亜属である。他の資料も同じであると考えられる。出土層位は杭列内を含む IV 層以下の範囲であり、報告する鎌の時期は古墳時代中期前半以前であると考えられる。鎌であると判断できるだけの小片から端部を一部欠くのみのもので存在するが、完形品は無い。

1299 は両刃部の先端を欠くが最も遺存範囲が広い。傘は底辺が水平なきれいな三角で突出する。刃部は下膨れの形状で、先端に近い位置に最大径が存在する。着柄軸は根元からほぼ同一幅で伸び、

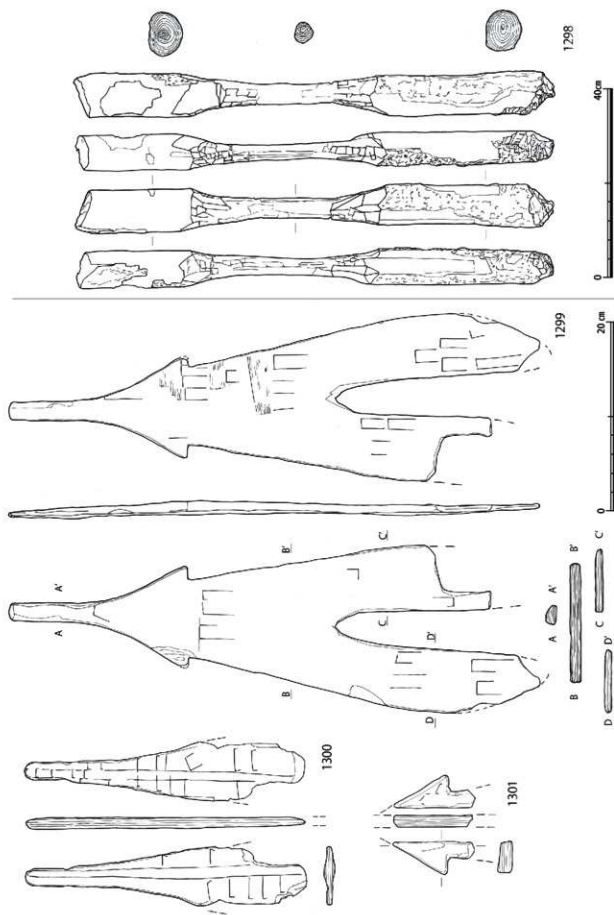


图 139 2区 中層遺構 河道出土木製品② (S=1/8・1/4)

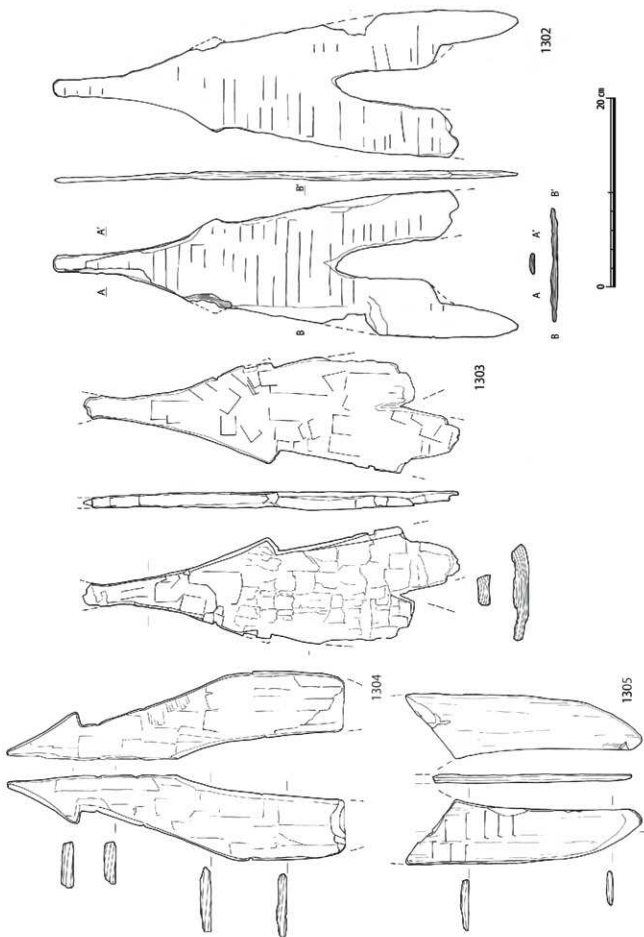


图 140 2区 中層遺構 河道出土木製品③ (S=1/4)

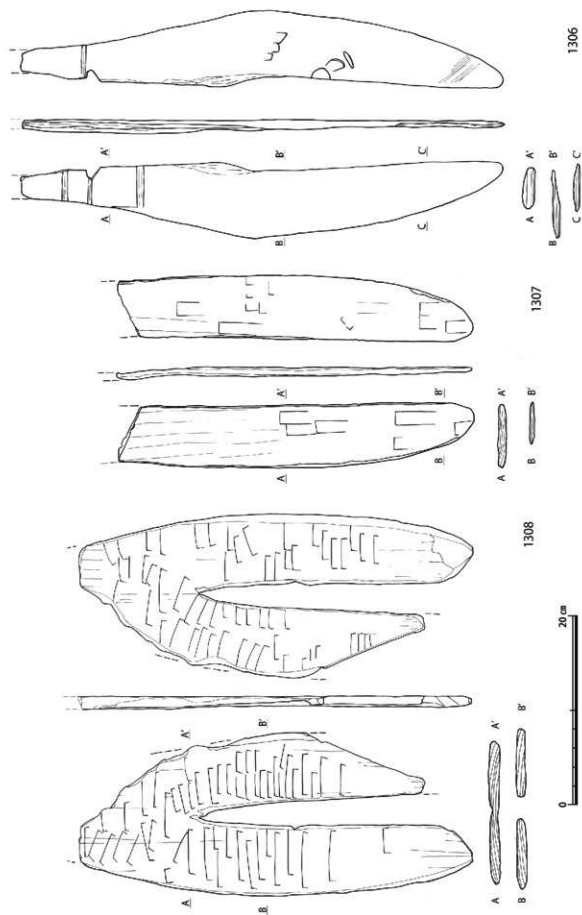


图 141 2区 中層遺構 河道出土木製品④ (S=1/4)

軸頭は膨らまない。表面は磨滅気味であるが縦方向の加工痕が確認できる。片面の傘部下端と刃部上部には幅 1.5～2.0 cm の樹皮が紐状に付着している。柄との緊結に関わる痕である可能性がある。板目取りである。

1300 は鎌の軸部であると考えられるが、他の柄である可能性もある。鎌であった場合も刃部が二又になるか否かは不明である。両面とも中軸線上が約 1 cm 幅で小さく盛り上がり厚くなる。ただし軸部では中軸からややずれる。

1301 は曲柄又鎌の傘部であると考えられる破片である。形状・大きさは 1299 の傘部突起と近いが、厚さは他の鎌と比較してやや厚く、1.5 cm を測る。

1302 は傘部の片側突起と刃部の一部が欠失している。刃部は片側がほぼ先端まで残る。先端付近は破片端部の遺存状況が悪いため確定はできないが、先端約 10 cm 分の内側を削って段を持たせて細くしている可能性がある。傘部の突起は小さく、稜は鈍い。軸部は下側に向かって次第に広がり、傘部から刃部にかけて全体になだらかに繋がる形状である。軸頭部は丸みを帯び、突起は存在しない。厚さは最大でも 0.8 cm と全体に薄く、軸部は特に薄い。両面に横方向の成形痕が確認できる。板目取りである。

1303 は全体が火を受けて炭化している。刃部先端側ほど炭化が進んでおり、特に片面（図の左側）は傘部下半から刃部全体の表面がひび割れている。また、その影響か全体がやや湾曲している。厚さは 2.0 cm と他の鎌より厚く、頑丈である。傘部から刃部にかけての形状は 1302 と概ね同様であるが突起はより明瞭である。軸頭部は失われているがやや開く形状であると考えられる。刃部の又の位置は他よりも低い。

1304 は曲柄又鎌の半身で、おおよそ中軸を含んで縦に割れていると考えられる。傘部突起の下端は水平に近く、突起は明瞭である。刃部の中央付近に最大幅が存在すると考えられるが、それ以下の範囲も同様の幅で続く形状である。他の鎌よりも側面がしっかりと成形されており、一部は面をもつ。又は他よりも高い位置にある。

1305 は又鎌の刃部下半である。先端が遺存する。全体の形状は図よりも下側が開く可能性もある。側面、とくに外側は丁寧に稜を作り出す。その他の部位も全体に丁寧な作りである。

1306 は半身と軸頭部を欠く又鎌である。軸部から刃部に掛けてなだらかに繋がり、傘部にあたる部分は存在しない。外形は上半部は内湾し、刃部途中から外湾する形状となる。上部にはさらに細い軸部が存在する可能性もある。上部には両面に幅 0.4～0.8 cm の樹皮紐の痕が水平方向に残る。これは柄との緊結に関わるものである可能性があるが、外面にはこの他にも植物片の付着が多く判断が難しい。

1307 は又鎌の刃部であると考えられる。長さ約 37 cm を測り、又はさらに上に位置すると考えられる大型の又鎌である。刃部は直線的に伸びる。遺存する上端付近で外縁の屈曲がわずかに確認でき、突起に繋がる可能性がある。

1308 は上部と刃部下端を欠く又鎌である。傘部の突起の有無は不明である。刃部の片側は概ね先端まで遺存していると考えられるが、わずかに欠損している可能性がある。又は高い位置にあり、幅は狭い形状である。全体に工具痕が多く存在する。方向は横方向を中心とする。

1309 は織機の緯打具（杵）である。杭列④東側の内部に組み込まれる形で出土しており、時期は古墳時代中期初頭以前である。全体は細長い羽状を呈して先端が尖る形状で、欠失している対面も同

様に尖ると考えられる。全長は少なくとも60cm以上であったと考えられる。板部分は厚さ1.3cm程度で、屈曲する縁辺部を帯状に肥厚させる。肥厚部分の断面形は2.0~2.8cm大の隅丸方形で、端(尖側)に寄るほど小さくなる傾向にある。縁辺の片面には使用痕が存在し、非常に細かな糸の痕が線状に多数残る。この使用痕は側面ではなく片側上面に存在し、器具をやや立てて使用したことが窺える。全体に火を受けて炭化しているが堅牢である。

1310・1311は紡織機の枠であると考えられる。他の柄である可能性も残るが枠として報告を進める。時期はともに出土層位から古墳時代中期前半以前であると考えられる。1310は腕木一本と支え木が残る。腕木は長さ37.8cmを測る。両側の断面は円形だが支え木との接続部は方形になる。支え木は残存長約31cmを測る。断面形は円形を基本とするが同じく接続部付近は長方形となる。腕木と支え木の接続部は非常に精巧に作られており、方形に加工した支え木の上段を腕木中央の柄穴に挿入した後、木製の楔を打ち込んで固定している(図版129)。また、接続部一带は外形も面と屈曲を合わせた造形に仕上げている。支え木は遺存する下端付近でわずかに段をもって細くなることが確認できる。支え木の長さと同様の腕木の状態は不明である。

1311は1310と同様の枠の支え木であると考えられる。1310の支え木よりも成形痕が目立つ他は基本的に同じ形状である。上端には長さ0.5cmの木製楔が打ち込まれている。支え木の上端から約28cmの位置に小さな段が存在し、それ以下はわずかに細くなる。段より下は約8cmが遺存し、さらに続く。

1312は端部の手前を削り込んで引っ掛かりを作る棒状具である。いわゆる天秤棒である可能性がある。他にも建築部材の一部である可能性等も考えられる。引っ掛かりのある側を上面とした場合、断面形は下面は平坦で上面は丸みを帯びる台形を基本とする。全体では上面側にわずかに反る。上面には擦痕が数ヶ所に存在しており、運搬の使用痕である可能性が考えられる。残存長は約75cmで、反りを考慮すると本来の長さは1m前後ではないかと推測される。

1313は細長い角材に複数の溝を並べた梯子形製品である。幅約5cm、高さ約5cmの角材の一面に対して、幅3~6cmの溝を合計7ヶ所に掘っている。溝の断面形は側面がほぼ垂直になるものと上が開くものがある。溝の深さは材の厚みの半分程度である。溝同士の間隔は14~23cmとやや変がある。残存長約130cmであり、両側にさらに同様のものが続く可能性がある。

1314は刀剣装具の一部である。形状から鞘尻あるいは鞘口の装具である可能性が考えられる。河道Ⅱ・Ⅲ層からの出土であり、時期は古墳時代中期中頃以前である。樹種はカエデ属であり、同種の木材・木製品の存在は今回の調査では他に確認されていない。全周の約4割が遺存する。高さ3.5cmを測り、外面にはその中段に幅1.8cmの文様帯が巡る。文様帯のある面と底面には黒漆が塗布され、文様帯上にはさらに赤彩が施される(図版59・130)。内面には中ほどに段が存在する。文様は浮き彫りで立体的に施文される直弧文である。文様の線部分を浮かび上げられており、赤彩はその裾部分に多く残る。同様の鞘口装具が橿原市四条町所在の四条遺跡からも出土している。

1315は刀剣の鞘であると考えられる。全周の約3割が遺存する。鞘の中程の破片であると考えられる。外面には高さ0.2cmの段を交互に連ねる。稜は明瞭である。内外面とも丁寧な作りである。横断面は内外面でほぼ同じ屈曲を描く。

1316は柄であると考えられる。武器や工具の柄であると考えられる。下部は直径4.3cm、高さ1.8cmの円柱状である。ここからさらに下部に直径2.2cm、高さ0.2cm弱の小さな円形台が作り出されて

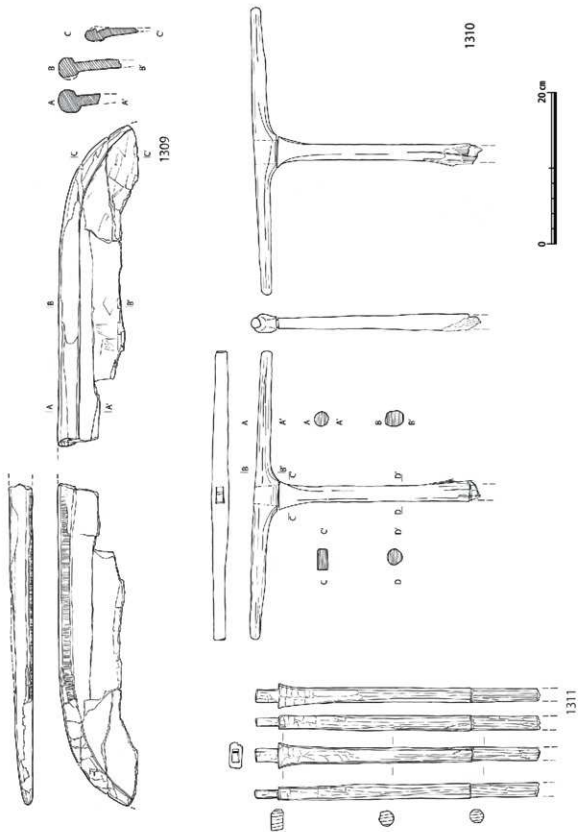


图 142 2区 中層遺構 河道出土木製品⑤ (S = 1/5)

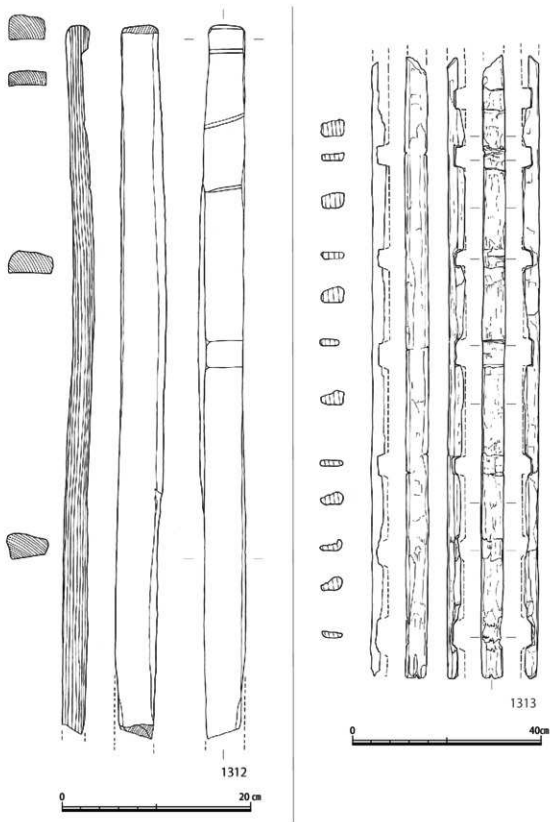


图 143 2区 中磨道桥 河道出土木製品⑥ (S = 1/4 · 1/8)

いる。全体を非常に細かく削って仕上げている。

1317は柱状の製品で、断面形は一面が平坦で残る面が蒲鉾状となる。片側端部から反対側に向かって身幅が少しずつ窄まる。全体にこの形状を丁寧に削り出している。両端部が欠失していることから確実ではないが、これらの形状的特徴から筑状弦楽器の一部である可能性が指摘できる。柁目取りである。

1318は刀形木製品である。河道IV層から出土しており、時期は古墳時代中期前半以前である。樹種はヒノキである。刀は抜身の状態、柄は装具を装着した状態を模して作られている。実際の刀をよく知る人物による製品であると考えられる精巧な作りである。柄は中央が窪み上下に装具を表現する。刀部は刃側を薄く削り出している。上下の端部が炭化している。刀先はわずかに欠失している可能性がある。

1319はヒョウタンを用いた容器である。外面に光沢のある黒漆を塗布する。同一個体であると考えられる破片3点が杭列⑤の内部からまとまって出土している。

1320はさしぼ形木製品である。表面は全体に激しく炭化しており、片面はそのひび割れが全体に広がる。杭列⑥内から出土している。樹種はヒノキである。柄は根元から端部まで次第に細くなる。祭祀具である可能性の他、叩き板等の工具、鋤の未製品であった可能性等も考えられる。

1321は鳥形木製品であると考えられる。ただし古代以降の例ではこれと近い形状の馬形木製品も存在しており、モチーフについては検討の余地がある。河道Ⅱ・Ⅲ層からの出土である。樹種はヒノキである。厚さ2.0cmの板材を加工し、その側面観を中心に形を表出する。一部が削れているのみではほぼ完形である。平面形は片側が半球形に突出し（前方か）、対面が細く尖る（後方、尻尾の表現か）。両者の中ほどに二ヶ所、約1cm大の方形孔を穿つ。二つの孔の位置はそれぞれ高さがやや異なる。前方側の片面には文様状の溝が掘られている。何を表現した溝であるかは不明である。前方側の反対面には非常に浅い円形の窪みが存在する。ただし、こちらは意図的なものではなく廃棄後の傷である可能性も高い。他の部品と組み合わせて使用したはずであるが、その詳細は不明である。二ヶ所の孔を用いて他の部品と合わせる他、細く尖る後方部分を別材の孔に挿入する形などが考えられる。

1322も鳥形木製品としているが他の動物等を表現したものである可能性もある。河道IV層からの出土である。樹種はヤブツバキである。明確にヤブツバキ製である遺物はこれのみである。丸みのある寸胴の体部の前後に二方向の突起が付く形状である。頭・尾に繋がる突起であると考えられるが詳細は不明である。両突起の付く位置は高さが異なり、長さも異なる。長突起が付く面がより平坦であるため、便宜上こちらを底面として記録を行っている。長突起は平面形が方形に近く、先端に小さな窪みが存在する。短突起側は根元部分に方形孔を穿つ。これら突起のいずれか、あるいは両側に別部品を組み合わせていたと考えられる。

1323～1326は槽である。樹種は1323～1325はヒノキ科で、1326のみクリである。いずれも刳物で、割れた状態で出土している。1325以外は下層杭列からの出土である。

1323は口縁長辺側の破片である。各部の稜は明瞭で、底面から立ち上がる部分で割れたものと考えられる。底面は平坦であると考えられる、脚の有無は不明である。短辺沿いには高さ1.1cm、幅3.5cmの段が存在する。対面も同様であるかは不明である。

1324も口縁長辺側の破片であるが、底部もわずかに遺存する。平底で、脚の有無は不明である。口縁端部のラインは、長辺は直線的で、短辺は中央がやや膨らむ。内面の口縁部付近に一ヶ所、炭化

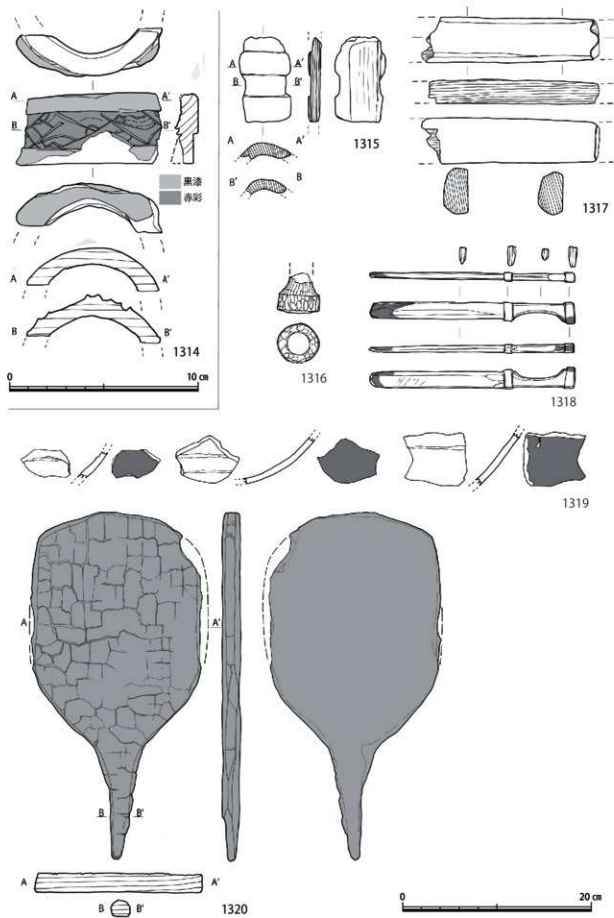
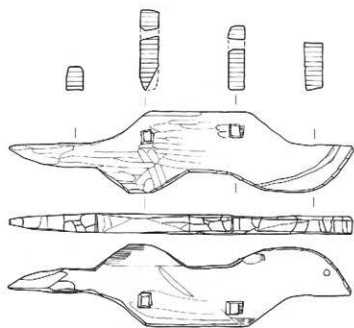
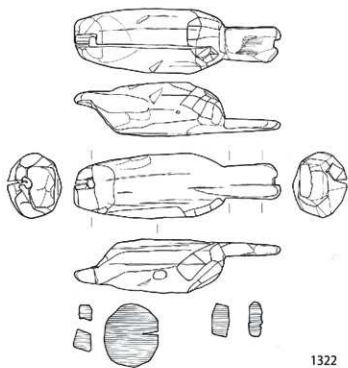


图 144 2区 中石器时代 河道出土木制品② (S = 1/2 · 1/4)



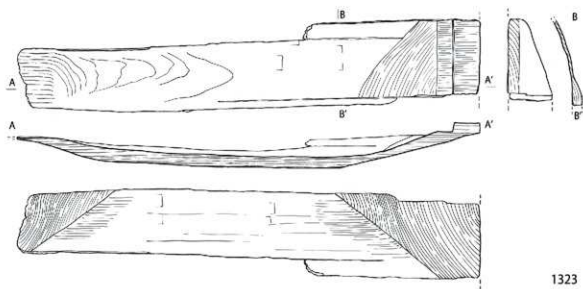
1321



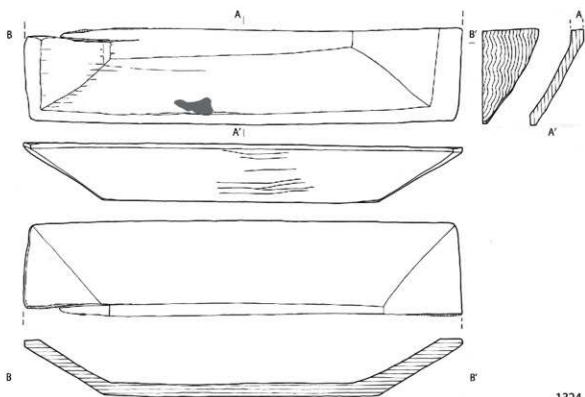
1322



图 145 2区 中層遺構 河道出土木製品⑧ (S=1/4)



1323



1324

图 146 2区 中層遺構 河道出土木製品⑨ (S = 1/5)

する部分が存在する。

1325 は平底である。各部の稜は明瞭で全体に丁寧な作りである。比較的厚手の作りで安定感がある。厚さは長辺側の口縁部が他より薄い。短辺は口縁端部に面を持つが、長辺は真っすぐ立ち上がる。内面底部には使用痕と考えられる擦痕が存在する。外面には加工痕が薄く存在する。片側の短辺中央には木材芯を残したような突起が外側に存在している。その根元以外は失われているが、把手あるいは導水路となる突起が存在していた可能性が高い。

1326 は各面同士がなだらかに繋がる丸みを帯びた形状である。外面底部には平面方形の脚が二ヶ所に存在し、全体では四脚であったと考えられる。短辺は口縁端部に面を持つ。口縁の長辺は全体に膨らむ形状である。

1327～1329 は盤である。1328 は案である可能性もある。1328・1329 はヒノキで、下層杭列から出土している。

1327 は深さ 2.7 cm を測り、浅い槽と理解することもできる。平底の底部端から口縁部中ほどに掛けての位置に斜め向きの脚が存在する。同じように短辺と長辺の変換線状に全体で四脚が存在すると考えられる。短辺は口縁部に面を持つ。

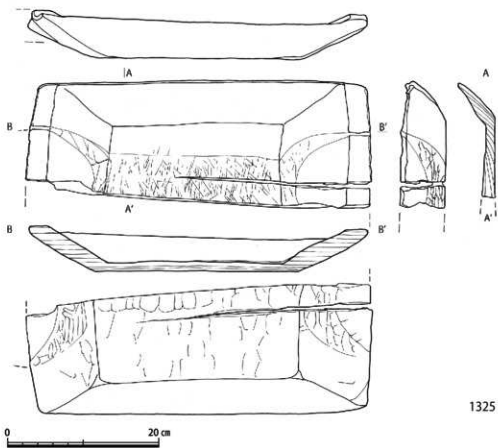
1328 は外面に稜が存在する。非常に浅い盤で、ほぼ平坦に近いと考えられることから、案である可能性もある。表面全体に流水の影響が大きく、内面の一部には炭化も見られる。底面には幅 1.5 cm、深さ 0.8 cm の脚を嵌め込む溝が存在し、脚の上端部がわずかに割れて残っている。脚の高さは不明である。

1329 は深さ最大 1 cm 程度の浅い盤である。口縁端部は面を作り出す。面の幅は短辺が広く長辺はそれより狭い。底部中央には 1.6～2.4 cm 大の不整形な穿孔が存在する。外面の短辺側は部分的に炭化している。底面には短辺と並行して脚の嵌め込み溝が存在する。溝は幅 2.0 cm、深さ 1.5 cm を測る。溝には脚の上端部が折れて残る。

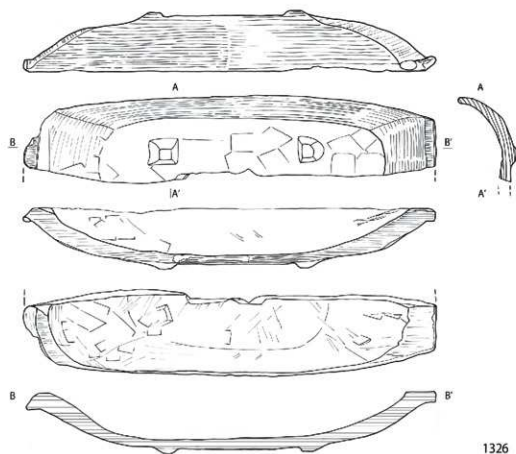
1330 は腰掛である。全体に非常に優美な作りである。杭列⑤の端に引掛かる形で出土している(図版 49)。時期は古墳時代中期前半以前である。樹種はコウヤマキである。座板と脚の片側端部がわずかに破損している以外はほぼ完形である。横木取りの削り出しである。座板は中央が窪み、両側が高くなる形状である。座板端面は丸く厚みを持たせている。欠失している対面も同様であったと考えられる。座板上面には短辺沿いに凹線が刻まれる。座板の上面および下面では年輪がきれいに確認できる。脚は末広りの形状で長辺沿いに二脚存在し、腰掛正面から見ると脚の長側面が見える形である。脚同士は独立して存在している。二つの脚は歪みによる若干の差異はあるものの、ほぼ同一の形状である。短辺から見た脚はハの字形になる。座面は全体に片側長辺に向かって低く傾斜している。経年変化による歪みである可能性もあるが、この低い面を正面として用いていた可能性もある。全体の形状は奈良県三宅町・石見遺跡出土の腰掛に坐る人物埴輪に見られるような祭儀用の腰掛であると言える。座面中央で高さ約 11 cm と小型であり、実際に腰掛けることも不可能ではない大きさではあるが実用的ではない。

1331 はヒノキの不明板材である。平面台形の板材の長辺中央に装飾的な抉りを施す。抉りの両側片は屈曲し、天辺は直線である。厚さ 2.0 cm と重厚な板材である。やや格式の高い案や腰掛の脚であった可能性等が考えられる。

1332 は 1331 と同様の不明板材で、脚として使用された可能性等が考えられる。長方形の長辺中

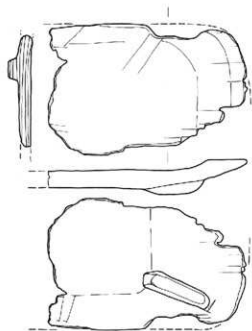


1325

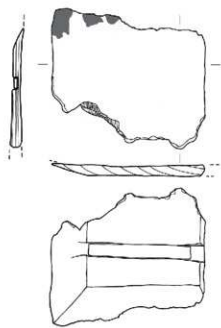


1326

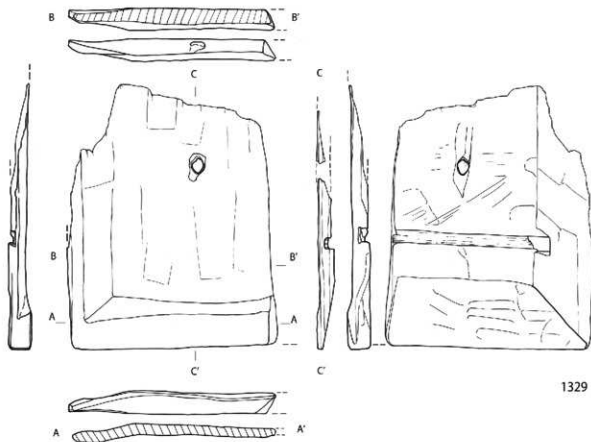
图 147 2区 中层遗構 河道出土木製品② (S=1/5)



1327



1328



1329

图 148 2区 中層遺構 河道出土木製品② (S=1/5)

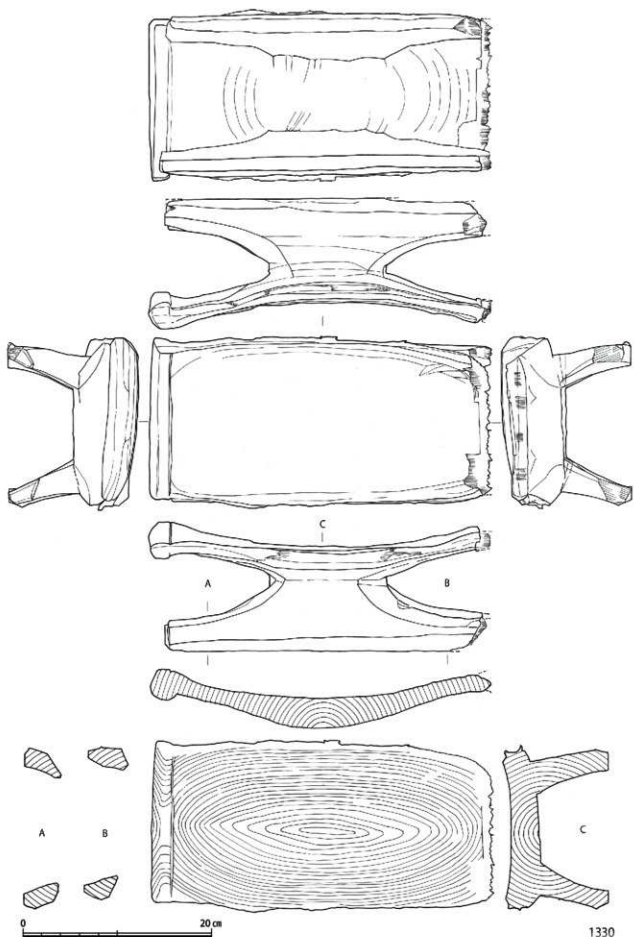


图 149 2区 中层造構 河道出土木製品② (S=1/4)

尖にごく小さな抉りを施す。部分的にスパンの長い加工痕が確認できる。

1333は用途不明の薄い板材である。角を一ヶ所あるいは二ヶ所斜めに切り落とし、長辺に一ヶ所ゆるやかな抉りを施す形状である。直線のまま残された長辺沿いに一ヶ所、米粒大の穿孔が存在している。破損状況から、その5cm程度隣にも同様の穿孔があった可能性が考えられる。細い紐通し孔であると考えられる。

1334は細い板状の不明棒材である。直径0.2~0.3cmの小円孔が8.5cm間隔で並ぶ。紡織具の糸巻である可能性も考えられる。

1335は先端が尖り、やや下がった位置に方形の抉りを施す細長い板状製品である。柄である可能性もある。

1336は砲弾形の不明製品である。ヒノキ製である。直径1.9cmの滑らかな砲弾形で、そこに細い柄が取り付く。精巧な作りである。何らかの道具の先端・石突、鎌である可能性が考えられるが詳細は不明である。

1337は用途不明の平材である。ヒノキ製である。完形で、中央に0.4cm角の方形孔を二ヶ所に穿つ。外面の一部が炭化している。

1338は細い板状の不明製品である。長辺片側は緩やかに湾曲し、下端は膨らんで小さな三角の抉りを施す。全体に表面の遺存状況が悪く、稜は丸みを帯びてしまっている。

1339は先端がなだらかに丸く膨らむ不明製品である。表面は基本的に滑らかであるが部分的に使用痕なのか平坦になる部分が存在する。

1340は長さ17.2cmの燃えさしである。やや振れた長い木端で、先端が炭化している。杭列⑤内から他の小木材と共に出土している。

1341は羽子板形の不明製品である。ただし上端部には先に続く小突起が存在する。一部の角を装飾的に湾曲させて削り落とすなど、全体に精巧な作りである。片面(図の右)が全体に平坦である一方、反対側(図の左)はごくわずかに中央部が膨らむことから、こちらが外面(表面)である可能性が指摘できる。

1342は不明角材である。本体は断面L字形を呈し、端部に隅丸方形の突起が存在する。表面は遺存状況が悪く、各部分が滑らかになっているが本来は稜がもう少し明瞭であったと考えられる。突起部分を別部材に差し込むような建築部材の一部であった可能性等が考えられる。樹種はスダジイであり、建築部材として用いられることもあるが、耐久・保存性の点からあまり適さないともされており、用途の判断は難しい。

1343は用途不明の笏形製品である。断面形は各面とも緩やかに屈曲する形状である。

1344は杭状製品である。断面形は上半部が正方形に近く、下半部は先端に近付くほど細長くなる。先端約8cm分を尖らせる。

1345は細長い棒状の不明製品である。端部に約5cm角の平面方形の膨らみを作り出す。全体の断面形は片面が概ね平坦であるが、反対側は山なりかつ不安定である。

1346は建築部材の垂木であると考えられる。杭列⑦中心部の主要構成材として使用されて出土している。上端部やや下に長さ約13cm、深さ約3cmの抉りを施す。全体はほぼ直線であるが下端がわずかに湾曲する。樹皮は削り落とされている。断面形は膨らみのある方形から円形に近い場所まで斑がある。大型の材を縦に割って使用している。

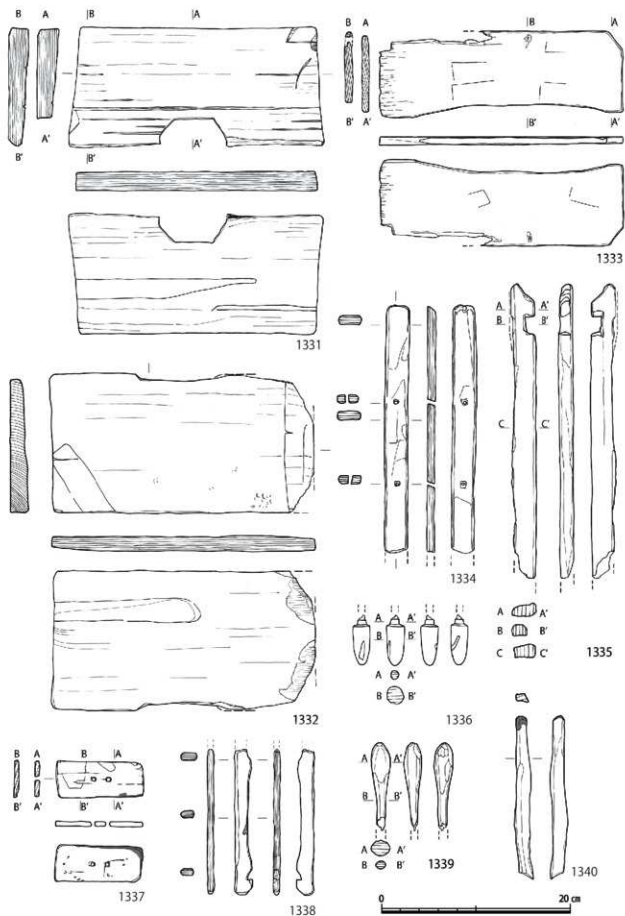


图 150 2区 中层遗構 河道出土木製品② (S=1/4)

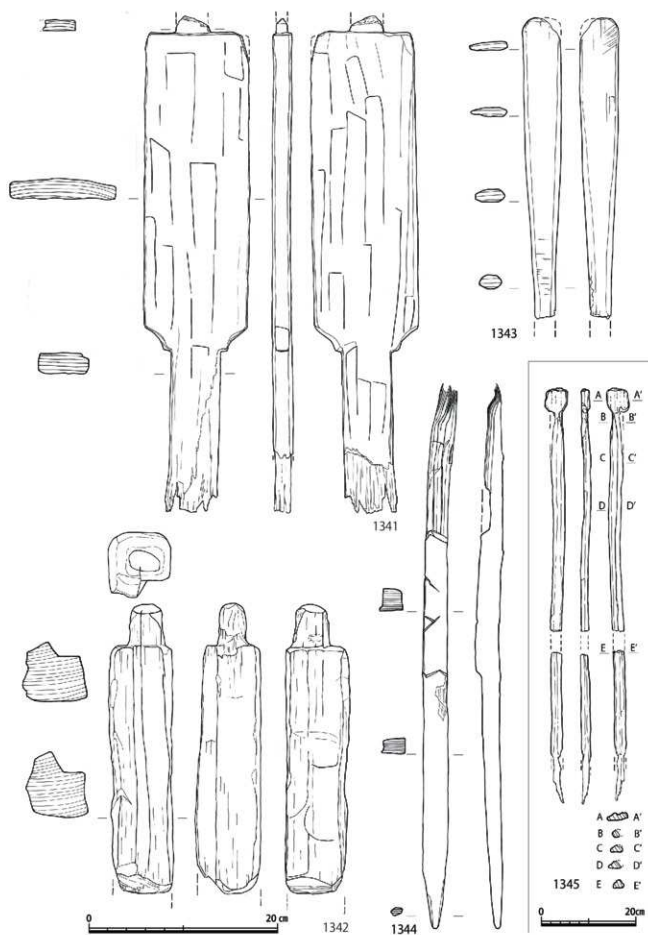


图 151 2区 中層遺構 河道出土木製品④ (S = 1/4 · 1/8)

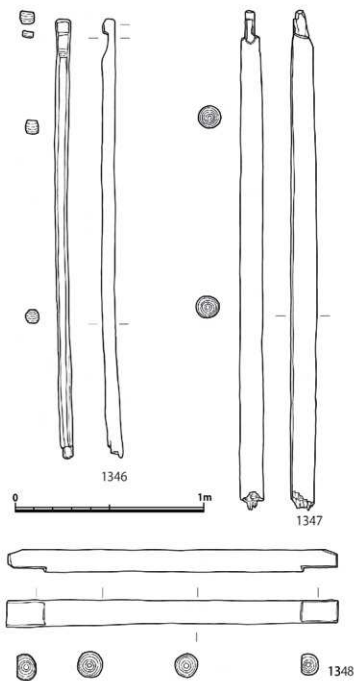


図 152 2区 中層遺構 河道出土木製品群 (S = 1/20)

下の平坦面で柱材を受ける形であったと考えられる。いわゆる二重梁の上段の梁材である可能性も十分に考えられる。樹皮は削り落とされている。

1347は建築部材の柱材であると考えられる。杭列⑥南側から出土している。この一帯は、しがらみが崩壊して細かな木材は流失しているが、本来は杭列⑥北側と同様に組まれていたと考えられ、1347はその主要構成材として使用されていたと考えられる。長さ約250cm、直径12cmの真っすぐな円柱の上端に、高さ約12~16cmの柄と考えられる突起が付く(図版134)。柄は上下二段に分かれ、断面形は下段が方形、上段が円形を呈するが、どちらも不整形な部分がある。柄の根元は柱本体から明瞭な段を持って細くなる部分と、柱本体からなだらかに繋がる部分とがある。柱本体は樹皮が削り落とされている。柱下端は他の部位と比べて非常に遺存状況が悪いが、これは杭列に使用される前の状況(柱としての役割)を反映している可能性が高い。

1348は建築部材の梁材であると考えられる。杭列⑦中心部に組み込まれた状態で出土している。長さ173cm、直径13~14cmの円柱材で両端部の上・下面を加工している。左右でほぼ対称の形状である。上面は端部から長さ約7cm分を斜めに切り落とし、下面は同じく長さ約20cm分を平坦に削り落とす。上の斜面で屋根材を受け、

下層遺構・下層包含層 (図 153)

下層遺構および下層包含層(基本層序Ⅲ・Ⅳ層)からは少量ながら縄文時代後期～弥生時代の遺物が出土している。明確な遺構から出土した遺物は 1349 のみで、他は中層遺構面下の包含層(下層河道を含む)からの出土である。これらの遺物は縄文時代の土器・石器が中心で、詳細時期が不明なものが大半である。時期が分かる遺物は縄文時代後～晩期を中心とする。その他、弥生時代の遺物も存在するが、これは縄文時代と比べてさらに少なく、出土地点も中層遺構面付近に限られる。

1349 は 22001SK から出土した縄文土器片である。鉢であると考えられるが表面は磨滅している。

1350～1354 は下層包含層からの出土で、1350・1351・1354 は下層トレンチ 4 区、1352 は同 2 区、1353 は 2-1 区遺構面清掃時に出土している。1350 は縄文土器の波状口縁の端部である。内外面にわずかに縄文が残る。1351 は縄文土器片で内外面に粗めの縄文を施す。外面は部分的に縄文をナド消していると考えられる。1352 は外面に粗いハケ調整を施す土器片である。1353 はサヌカイトの石鏃である。木の葉形で、刃は全体に鋸歯状である。重量 2.6g を測る。1354 はサヌカイトの剥片である。一面に原石部分を残す。重量 5.6g を測る。

重機掘削・排水溝掘削時 (図 154)

重機掘削時および調査区壁面沿いを中心とする調査用の排水溝を掘削する際に出土した遺物のうち、特徴的なものを挙げる。

1355 は表土直下で出土した寛永通宝である。非常に薄く、破面付近は部分的に捲れ上がっている。

1356 は須恵器把手坏境である。脚が存在する可能性もある。体部に波状文を施し、その上から把手を貼り付ける。把手の上部は屈曲部で折れ、下端は貼り付け面と剥離している。1357 は須恵器器台の口縁部である。内部を縦線で充填する山形文を施し、その外形線沿いに芯をもつ小型の円形スタンプ文を施す。スタンプ文の芯は深く、刺突による膨らみが内面にも小さなひび割れとして表れる。1358 は須恵器坏蓋である。頂部は平坦でヘラケズリはやや強い。肩部には細い凹線が巡り、その上端が小さな稜を成す。1359 は土師器台付境の台部である。作りは丁寧である。坏内面は炭化している。1360 は軟質系土器の蓋である。色調は土師器と同様であるが焼成は硬質で、須恵器の焼き損じである可能性もある。文様は存在しない。1361～1363 は縄文土器である。1361 は鉢の口縁部であると考えられる。1362 は鉢の体部である。外面に条痕が確認できる。同一個体の小片が他にも複数存在するが、全体に遺存状況は悪い。1363 は鉢の口縁部である。外面に蕨状の文様を凹線と刺突で表現する。1364 は不明石製品である。青灰色の河原石を利用している。断面形は三角形で表面は全体に滑らかである。一部に縦方向の細い面が存在する。砥石や刺突具として用いられた可能性がある。重量 32.8g を測る。

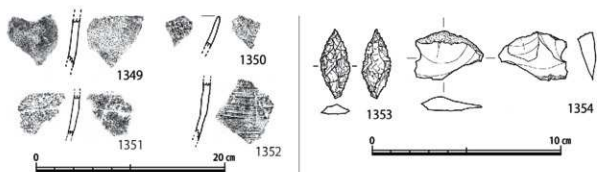


图 153 2区 下層遺構・下層包含層出土遺物 (S = 1/4 · 1/2)

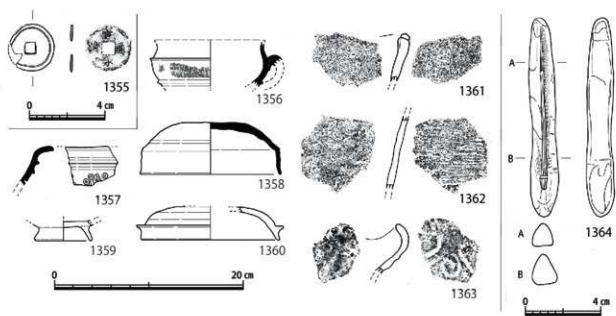


图 154 2区 重機掘削・排水溝掘削時出土遺物 (S = 1/4 · 1/2)

第8節 2区 動物遺存体

新堂遺跡から出土した動物遺存体～ウマ遺存体を中心に～

丸山真史（東海大学）

1. 概要

奈良盆地における発掘調査では、主として低湿な土壌環境で動物遺存体が出土する。新堂遺跡も例外ではなく、流路の埋土から多数の動物遺存体が出土しており、その大部分が古墳時代中期の馬歯・馬骨である。これまでに、布留遺跡や南郷大東遺跡では5世紀中頃から後半の大量の馬歯が出土していることがよく知られている。それ以前のものでは、唐古・鍵遺跡の5世紀前半の馬歯・馬骨が出土しており、奈良盆地で最も古い出土例と考えられている。今回、新堂遺跡から出土した馬歯の一部は、初期須恵器が伴う土層で出土しており、唐古・鍵遺跡の馬の年代を遡る重要な資料として注目される。

新堂遺跡で出土した動物遺存体は、いずれも古墳時代中期の河道（20989SD）から出土しており、破片数にして63点を数える（表11・12。図版61）。鹿角製品が1点（図129-1229）出土しているが、それを除いて種類や部位を特定したものが57点あり、大部分がウマである。馬歯は強固なエナメル質に覆われており、形態を維持するものもあるが、大部分は劣化により破損している。馬骨は保存状態に恵まれず、脆弱な状態となっており、多くの骨が埋没中に腐食したと考えられる。なお、出土した脆弱状態の歯・骨は、表面を洗浄した後、ナチュラルコート塗布して補強した。

2. 時期別の特徴

いずれも河道（20989SD）から出土したものであるが、土層堆積によって推定される時期が異なるため、以下では時期別の出土量および各遺存体の特徴について述べる。

5世紀初頭以前（TK73以前。河道V層・下層杭列出土）

破片数にして19点を数え、そのうち16点が馬歯である。馬歯はいずれも顎骨から遊離した状態で出土しており、上下不明の切歯4点、上顎白歯6点、下顎白歯5点、上下不明の白歯1点を同定した。重複部位数で最小個体数は2個体と推定される。これら白歯のなかで歯冠高を計測でき、死亡年齢を推定（註1）できるものは大部分が5歳前後の幼齢馬ないし若齢馬である。このほかウマの肋骨と距骨と思われるもの1点ずつ、種、部位ともに不明の哺乳類1点がある。肋骨と不明品は、被熱して白色を呈する。

5世紀前半以前（TK216以前。河道IV層出土）

破片数にして37点を数え、そのうち33点がウマであり、28点が歯、5点が骨である。馬歯はいずれも顎骨から遊離した状態で出土しており、上下不明の切歯2点、上顎白歯9点、下顎白歯16点、切歯と思われるもの1点を同定した。重複部位数で最小個体数は2個体と推定される。下顎白歯のうち5点は同一個体の第3前白歯から第3後白歯であり、死亡年齢は生後3～4年で、日本在来の中型馬に相当する体格と推定される。その他の白歯で歯冠高を計測でき、死亡年齢を推定（註1）できる

ものは、大部分が4歳前後の幼齢馬ないし若齢馬と推定され、なかには歯冠のエナメル質の咬耗が進行していない白歯が2点含まれる。馬骨は、肩甲骨(右)1点、橈骨(左1右1)2点、尺骨(右)1点、中手骨(右)1点を同定した。これらに重複部位はないが、出土位置が異なり別個体の可能性もある。橈骨(右)の近位部には、解体痕が見られる。計測できたもので推定される体高は120~125cm 1点、130~135cm 2点である(註1)。

ウマのほか、鹿角製品1点、シカと思われる尺骨(右)1点、ウマあるいはウシの四肢骨1点、種類不明の椎骨と思われるもの1点を同定した。

5世紀後半以前(TK23・TK47以前。河道II層~IV層)

破片数にして3点を数え、そのうち2点が馬歯であり、もう1点はウマの白歯と思われるものを同定した。馬歯はいずれも上顎白歯であり、うち1点の死亡年齢が生後7年以下と推定される。

5世紀(河道上層)

破片数にして4点を数え、いずれも馬歯である。上顎白歯2点、破片化した上下不明の白歯2点以上である。3点は生後5年以内の幼齢馬ないし若齢馬であり、1点は破片化しているため断定はできないが牡馬の可能性もある。ほか、重機掘削時に出土した馬歯1点も5世紀代のものである可能性がある。

3. 新堂遺跡におけるウマ遺存体出土の意義

当調査で大量の馬歯が出土したことは、新堂遺跡に一定量のウマが飼育されていたことを物語る。また、これまで奈良盆地における最古級のウマとして考えられる唐古・鍵遺跡より古い段階にウマが飼育されていたことを示す。唐古・鍵遺跡では、廃絶した井戸の上部で、1個体分の馬骨が容器に収められた状態で出土しており、祭祀に伴う供犠と考えられる(丸山・藤田2014)。一方、本例はいずれも散乱状態で出土しており、解体され河道に投棄されたと考えられる。河道から祭祀に関連する遺物も出土しており、馬との直接的な関係は詳らかではないが、祭祀にともなう供犠の可能性もある。

重複する部位から求められる最小個体数は5世紀初頭以前で2個体、5世紀前半以前で2個体と推定されるが、出土地点が散在しており、実際はさらに多かったと推測される。白歯列や四肢骨から推定される体高は、日本在来の木曾馬や御崎馬などの中型馬に相当するか、それよりやや小さな個体であり、比較的体格の優れた馬が想定される。白歯の歯冠高の計測値から、15点が幼齢馬、10点が若齢馬に推定され(註2)、咬耗が極端に進行した老齢馬はみられない。古墳時代の奈良盆地、河内平野の遺跡では生後8年までの若齢馬が多いという年齢構成と同様である(丸山2016)。また、古墳時代の馬飼いの集落と考えられる部屋北遺跡では、5世紀代は幼齢馬が最も多く、若齢馬が続くという特徴があり(安部2010)、それと同じ傾向を示すことは注目される。現代は、生後まもなくから頭絡を着用するなどの馴致を行い、生後2年程度で騎乗訓練などの調教をすることで、乗馬が可能となる。新堂遺跡において、永久歯の咬耗が進行していない生後2~3年の個体がみられることは、当地近郊で調教等を行っていた可能性もあり、牧の存在が想定される。ただし、河内のように一定規模を有する馬飼いの集団が存在したかは明らかではない。

大和の馬飼について、『日本書紀』元明天皇42年条に「倭飼部」に関する記述がある。9世紀に

成立した『新撰姓氏録』には、允恭天皇の時代に馬一匹を献じ、その馬の額に町形の廻毛があったので、姓を額田部と賜ったという記録から、額田部氏と馬飼いとの間連が指摘される(佐伯 1974)。また、『新撰姓氏録』では額田部氏と倭滝知造氏は同族であることから、馬飼い集団の倭滝知造氏の本貫地を現在の大和郡山形市庵治町であることが指摘される(平林 2017)。この周辺では、前述の田原本町の唐古・鍵遺跡に加え、5世紀中頃の馬の供犠が想定される十六面・葉王寺遺跡、その南には埋葬馬が出土した橿原市の南曾我遺跡などがある(青柳・丸山編 2017、村田編 2012)。いずれの遺跡も庵治町から南に位置しており、新堂遺跡はさらに南に位置する。新堂遺跡では5世紀後半(TK23・47)の須惠器に伴って馬歯が出土しているが、それ以前に比べて出土量は極度に少なく、馬の飼育が5世紀前半を中心としていたと考えられる。以上のことから、奈良盆地における初期的な馬の飼育は新堂遺跡周辺で行われ、その拠点は時代が下ると北へ移ったことが想定される。

4. まとめ

新堂遺跡の調査では多量の馬歯が出土し、推定される馬は幼齢・若齢に集中しており、近郊に牧があったことが想定される。ただし、生後2年以下の馬はいないため、馬の繁殖を行っていたかは明らかではない。大和における馬の飼育は、盆地中央部の低地において、河内とほぼ同時期の5世紀初頭までには始まり、5世紀前半から中頃には、橿原市北部から田原本町にかけての地域へ展開し、5世紀中頃から後半にかけて布留遺跡、南郷大東遺跡などの大規模な集落で馬利用が盛んになると考えられる。解体痕がみられることは、この地に馬が到来した時から、死後も皮や肉などの資源を利用してたと推察される。

当調査におけるウマ遺存体の出土は、大和における初期の馬の飼育の実態を知ることができる重要な資料である。また、当遺跡をはじめとする奈良盆地中央部の低地に展開するウマの埋葬や供犠を行った5世紀の集落と馬飼いの関連を検討することで、「倭飼部」の実相にも迫ることが期待される。

註)

1. ウマの死亡年齢や体高は、西中川駿編(1991)、久保・松井(1999)に倣って、歯冠高や四肢骨の計測値より推定している。
2. 明確な同一個体の白歯は、複数であっても1点として数えた。

【参考文献】

- 青柳泰介・丸山真史編 2017『国家形成期の畿内における馬の飼育と利用に関する研究 -平成26年度～28年度科学研究費基盤研究(c)(一般)成果報告書-』
- 安部みき子 2010『部屋北遺跡出土の動物遺体』『部屋北遺跡I』大阪府教育委員会 pp.249-323
- 佐伯有清 1974『馬の伝承と馬飼いの成立』『馬』社会思想社 pp.119-1136
- 西中川駿編 1991『古代遺跡出土骨から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告
- 久保和土・松井章 1999『家畜その2—ウマ・ウシ』『考古学と動物学』同成社 pp.169-208

平林章仁 2017 『蘇我氏と馬飼い集団の謎』 祥伝社新書 513 祥伝社

丸山真史 2016 「古墳時代の馬の普及と飼育・管理」『古代学研究』208 古代学研究会 pp.12-19

丸山真史・藤田三郎 2014 「唐古・鍵遺跡出土の古墳時代中期の馬骨について」『田原本町文化財調査年報 22』田原本町教育委員会 pp.149-156

村田裕介編 2012 『南曾我遺跡』元興寺文化財研究所

表 11 動物遺存体一覧①

No.	遺構	層位	小分類	部位	左右	備考
1	20989SD 北側杭列⑥付近	V層	ウマ	I1	-	
2	20989SD 東側	IV層	ウマ	上顎 P2	右	L38.1B × H54.7 以上
3	20989SD	上層・砂層 (検出面-1.0 m以下)	ウマ	白歯	右	
4	20989SD 北側	V層	ウマ	上顎 P3/P4	右	L27.5B25.8H53.2
5	20989SD 東	IV層	ウマ	下顎 M3	左	L29.7B12.2H73.7 以上
6	20989SD 杭列⑥内	IV層砂層	ウマ	上顎 M1	右	L24.8B24.6H57.5 以上
7	20989SD 中央付近重機掘削時		ウマ	下顎 M3	左	L × B × H71.0 以上
8	20989SD 中央底面付近	IV層砂層	ウマ	下顎 M17	左	L26.0B15.4H55.9
9	20989SD	上層・砂層 (検出面-1.0 m以下)	ウマ	上顎 P3/P4	右	L29.1B24.6H64.7 以上
10	20989SD 中央	III層	ウマ	上顎 P2	右	L × B × H38.5 以上
11	20989SD	上層・砂層 (検出面-1.0 m以下)	ウマ	上顎 P2	右	L × B × H48.9 以上
12	20989SD 杭列⑦		ウマ	上顎 M3	右	L × B × H41.9 以上
13	20989SD 杭列⑥		ウマ	I2	-	
				I3	-	
13	20989SD 杭列⑥		ウマ	上顎 P3/P4	左	L25.5B24.6H56.6 以上
13	20989SD 杭列⑥		ウマ	下顎 M1 ?	左	L26.2B13.8H66.7
14	20989SD 中央部	V層	ウマ	上顎 M1 ?	左	L25.5B25.7H49.3 以上
15	20989SD 中央	III~IV層	ウマ	下顎 M3	右	L30.3B11.3H60.3 以上
16	20989SD 南側	V層砂層	ウマ	下顎 M1/M2	左	L28.9B13.2H77.5
17	20989SD 杭列⑤の西	V層	ウマ	下顎 M3	右	L × B10.1H63.5 以上
18	20989SD 中央	III層	ウマ	下顎 P3/P4	右	L29.9B15.1H70.4 以上
19	20989SD 北側	IV層砂層	ウマ	上顎 P3/P4	右	L30.2B23.8H61.7
20	20989SD 東端東壁沿い(タチワリ)	V層	ウマ	M3 ?	-	
21	20989SD 中央	IV層砂層	ウマ	下顎 M2	右	L × B × H74.3 以下
22	20989SD 南	IV層砂層	ウマ	I1	-	
22	20989SD 南	IV層砂層	ウマ	I2	-	
23	20989SD 先行トレンチ北	II~IV層	ウマ	上顎白歯	-	
24	20989SD 中央	V層	ウマ	I1	-	
25	20989SD 杭列⑤の下半内部		ウマ	下顎 M3	左	L27.8B12.3H77.3
26	20989SD 北杭列⑤付近	IV層砂層	ウマ	上顎 M1/M2	右	L25.2B24.0H57.7 以上
27	20989SD 東側	IV層砂層	ウマ	下顎 P3/P4/M1	左	L × B × H69.3 前後
27	20989SD 東側	IV層砂層	ウマ	下顎 P3/P4/M1	右	L × B × H65.4 前後
28	20989SD	IV層砂層	ウマ	下顎 P2	左	L29.2B13.4、咬耗ほぼなし
29	20989SD 北西隅杭列①のベース	II層砂層	ウマ	上顎 M2 ?	右	L × B × H55.6
30	20989SD 杭列⑥の北側底面	V層底面	ウマ	下顎 M2	右	L27.5B13.1H72.0
31	20989SD 杭列⑥		ウマ	上顎 M2	右	L27.3B22.1H75.9
32	20989SD 中央部	III層	ウマ	上顎 P3/P4	左	L × B × H60.1 以上
33	20989SD 先行トレンチ北	IV層の下層(砂層)	ウマ	下顎 P2	右	L32.5B14.1H49.5
34	20989SD 杭列⑥	最下層	ウマ	上顎 M3	右	L26.8B50.9H69.5 以上
35	20989SD 中央部	III~V層	ウマ	上顎 M3	左	L × B × H61.9 以上
35	20989SD 中央部	III~V層	ウマ	下顎 P3/P4	右	L29.1B13.5、咬耗ほぼなし
36	20989SD 先行トレンチ北		ウマ	下顎白歯 ?	-	

表 12 動物遺存体一覧②

No.	遺構	層位	小分類	部位	左右	備考
37	20989SD 南	IV層砂層	ウマ	上顎 P2	左	L38.1B24.3H53.0
38	20989SD 南西	IV層砂層	ウマ	上顎 M3	左	L27.0B21.0H41.2 以上
39	20989SD 先行トレンチ北	IV層の下層(砂層)	ウマ	下顎 P3	右	L30.2B15.8H68.4
				下顎 P4	右	L30.1B15.7H78.9
				下顎 M1	右	L26.3B13.3H67.1
				下顎 M2	右	L28.0B13.5H75.2
				下顎 M3	右	L28.9B12.4H76.6
40	20989SD	II～IV層の下層(砂層)	ウマ?	白歯?	-	
41	20989SD 先行トレンチ北	III～IV層	ウマ	下顎 M2?	左	L×B×H41.4 以上
42	20989SD 中央部	III～IV層	ウマ	切歯?	-	
43	20989SD 杭列⑤		哺乳類	肋骨?	-	被熱(白色)
45	20989SD 東側	IV層		哺乳類 椎骨?	-	
46	20989SD 中央杭列⑤付近	IV層砂層	ウマ/ ウシ?	四肢骨?	-	
47	20989SD	IV層	シカ?	尺骨	右	
48	20989SD 南	IV層砂層	ウマ	尺骨	右	
49	20989SD 北側杭列④・⑥の間	V層	ウマ	距骨?	右	
50	20989SD 南側	IV層砂層	ウマ	橈骨	左	Bp72.1
51	20989SD 南西	IV層砂層	ウマ	橈骨	右	GL319.9Bp74.0Bd70.1 近位部前位にハツリ痕
52	20989SD 杭列⑤背面	V層	哺乳類	不明	-	被熱(白色)
53	20989SD 杭列④内	IV層	ウマ	中手骨	右	Bd48.4
54	20989SD 杭列③	IV層シルト	ウマ	肩甲骨	右	GLP88.9

第9節 2区 出土遺物の科学分析

奥山誠義・河崎衣美（奈良県立橿原考古学研究所）

2区の調査において出土した須恵器・土師器の中で漆が付着していると想定されるものについて、付着物がいかなる物質であるか確認するため、科学的な調査を行った。

調査した資料は、表13に示した8点であった。これらは調査担当者によって漆状の物質が付着しているものとして抽出された須恵器あるいは土師器のなかで、さらに科学的な調査に耐えうると筆者が判断し改めて抽出したものと、漆が染込んでいると想定される布（漆布）である。調査に供した試料は、すべて各資料から脱落した破片である。いずれも古墳時代の河道（20989SD）から出土した遺物である。本節の本文・図表中で使用する資料番号（ト番号）は本節のみで独立しており、他節の遺物番号とは対応していない。

調査は、肉眼観察の後、脱落片を実体顕微鏡下で観察した。さらに脱落片を用いて赤外分光分析（以下、FT-IR）により成分分析を行った後、一部の試料に対し走査型電子顕微鏡（以下、SEM）に

表13 科学分析 調査資料と調査内容

資料番号 (ト番号)	遺物種	出土地点・層位	調査内容		
			観察	IR	SEM
ト417	漆付 土師器坏	河道Ⅰ層	●	●	
ト419	漆付 須恵器甕	河道Ⅴ層	●	●	
ト420	漆付 須恵器甕	河道Ⅰ層	●	●	●
ト422	漆付 土師器甕2点	河道Ⅳ・Ⅴ層	●	●	●
ト423	漆付 土師器二重口緑壺	河道Ⅲ～Ⅴ層	●	●	
ト425-429	漆付 土師器高坏	河道Ⅰ層	●	●	●
ト430	漆付 土師器二重口緑壺	河道Ⅱ～Ⅳ層	●	●	
漆布	布 2本	河道Ⅳ層		●	●

よる構造と混入物等の調査を行った。赤外分光分析は、非破壊分析が可能な光音響赤外分光分析法（PAS FT-IR）と微小試料片分析が可能な全反射赤外分光法（以下、ATR FT-IR）を用いた。なお、須恵器・土師器付着物で塗膜構造を持つ試料については、観察所見における表裏の表現は、胎土に接する面を「裏面」とし、露出していた面を「おもて面」として表現した。

結果

ト417 漆状の膜層は外観上黒色を呈するが、実体顕微鏡下の観察において、おもて面の黒色層の直下に褐色の層が観察された（図版62-1～5）。おもて面の黒色層表面には微細な凹凸が存在し、細かな砂粒のほか、赤色や緑色の粒子が散在した。これら粒子は裏面にも確認された。塗膜層は3層ないし4層が確認できた。観察の後、PAS FT-IR測定を行った（図版64左下）。測定の結果、漆に相当する組成を示した。この土師器に付着する漆状の塗膜層は漆によるものと考えられる。

ト419 須恵器内面に黒褐色の塗膜層と共に平織の布が付着していた。この織物は糸目の粗さが顕著であった。経糸と緯糸の関係は不明であるが、図版62-7に示すX-Yの方向を便宜的に使用して観察所見を記す。観察の結果、X方向に並ぶ糸は表面観察上、直径60 μ mほどの糸が390 μ mほどの間隔で並んでいるように見られた（図版62-8）が、断面を観察したところ200～250 μ mほどの糸が隙間なく並んでいることが確認できた（図版62-9・10）。一方、Y方向に並ぶ糸は直径50 μ mほどで、隣り合う糸との間隔がほとんどない状態で密に並んでいた（図版62-11・12）。織密度は200本×

22 本/cm (密×粗)と推定される。実体顕微鏡観察の後、PAS FT-IR 測定を行った (図版 64 左下)。測定の結果、漆に相当する組成を示した。糸の情報は得られなかったが、これは糸の組成を示す情報が漆の成分に埋没しているためと考えられる。本試料を構成する糸は不明である。なお、この須恵器に付着する漆状の塗膜層は漆によるものと考えられる。IR 測定の後、SEM 観察を行いおもて面の織物について明確に糸が交差している状況を確認した (図版 135)。

ト 420 おもて面の黒色層の直下に褐色の層が観察された。おもて面の表面には微細な凹凸が存在した (図版 62-13・14)。おもて面から黒色層と褐色層の 2 層のみ確認できた。おもて面裏面共に細かな砂粒のほか、赤色の粒子が散在した (図版 62-15・16)。観察の後、PAS FT-IR 測定を行った (図版 64 左下)。測定の結果、漆に相当する組成を示した。この須恵器に付着する漆状の塗膜層は漆によるものと考えられる。IR 測定の後、SEM 観察を行い、元素分析を行ったが、色調に由来する元素の確認には至らなかった (図版 135)。

ト 422 漆状の付着物は、顕微鏡下で観察すると炭化物が集積したような粉状の塊となっている様子が観察された (図版 62-17・18)。この粉状塊の表面には砂粒のほか赤色微粒子が観察された。観察の後、PAS FT-IR 測定を行った (図版 64 左下)。測定の結果、漆とは異なるスペクトルを示した (図版 64 下)。このスペクトルに類似するものを検討すると炭化した有機物に近いものであった (図版 64 右下)。このことからこの土師器に付着した漆状物質は何らかの有機物が炭化したものであることが示唆された。IR 測定の後、おもて面と断面の SEM 観察を行った (図版 136)。試料の断面は層状の構造は確認できず、一様な様相を呈していた。おもて面と断面の元素分析を行ったが、色調に由来する元素の確認には至らなかった。

ト 423 漆状の付着物は、顕微鏡下で観察すると炭化物が集積したような粉状の塊となっている様子が観察された (図版 63-19・20)。この粉状塊の表面には砂粒のほか赤色微粒子が観察された。観察の後、PAS FT-IR 測定を行った (図版 64 左下)。測定の結果、漆とは異なるスペクトルを示した (図版 64 下)。このスペクトルに類似するものを検討すると炭化した有機物に近いものであった (図版 64 右下)。このことからこの土師器に付着した漆状物質は何らかの有機物が炭化したものであることが示唆された。

ト 425-429 おもて面は黒色を呈すが、その直下に黒色の層が 3 層確認できた (図版 63-21~30)。これらの層は、おもて面から膜厚が厚い層と薄い層が交互に積層していた (図版 63-30)。観察の後、PAS FT-IR 測定を行った (図版 64 左下)。測定の結果、漆に相当する組成を示した。本試料に付着する漆状の塗膜層は漆によるものと考えられる。IR 測定の後、断面の SEM 観察を行った。実体顕微鏡で 4 層とみられていた層構造が、少なくとも 5 層程度に分けられることが確認できた (図版 137 上)。各層ごとに特徴的な元素の分布は確認できなかった。

ト 430 一部に膜状を呈す部分が見られたが、ほとんどの部分で炭化物が集積したような粉状の塊を呈していた。観察の後、PAS FT-IR 測定を行った (図版 64 左下)。測定の結果、漆とは異なるスペクトルを示した (図版 64 下)。このスペクトルに類似するものを検討すると炭化した有機物に近いものであった (図版 64 右下)。このことからこの土師器に付着した漆状物質は何らかの有機物が炭化したものであることが示唆された。

漆布 この資料は出土直後の簡易的な ATR FT-IR によって漆が染込んだ布であることが想定されていた。布は全体的に黒ないし焦げ茶色を呈した平織の織物である。この織物の構造は、資料の長軸方

向に対して直交する方向に細い糸が使用され、経糸・緯糸に利用される糸はいずれも緩やかなS撚りがかかっていた(図版64-2・4)。その織密度は12×8本/cm程度の目の粗い織物である。脱落片によるSEM観察において、織物の断面を観察した(図版137下)。糸は楕円形を呈し、その糸の中央は空洞で繊維の実体はほぼ残っておらず、外形のみをとどめている状況であった。遺存状況における糸の寸法を調べた結果、長軸方向はおよそ20μm、短軸方向がおよそ10μmであった。繊維実体の多くが消失しており、繊維の同定に必要な断面形状・内腔の有無などの情報が乏しいことから繊維の同定は困難であった。IRスペクトルを詳細に検討した結果、本資料のIRスペクトルは漆にみられる吸収帯が見られるが、完全に一致するものではなかった。資料が地下埋藏中に変質したかあるいは他の物質の吸収帯を示している可能性が考えられる。筆者が過去に測定した結果と照合したところ、西大寺旧境内の発掘調査(西大寺旧境内第25次調査。奈良市2013)で出土した漆付着と想定される繊維製品と同様な結果であった(図版135右上)。

まとめ

調査の結果をまとめる。漆状物質は膜状を呈す資料と粉状ないし粒子状を呈する2分類存在することが確認できた。前者の膜状を呈したのはト417、ト419、ト420、ト425(～429)であった。これらの表面には非常に微小な赤色粒子が点在していた。一部には明瞭な層構造が確認された。一方、後者の粉状ないし粒子状を呈したのは、ト422、ト423、ト430の3点であった。FT-IRの結果から、須恵器・土師器に付着していた漆状物質のうち膜状を呈していた試料については、漆であることが確認できた。これらは、漆に特徴的な2928cm⁻¹と2855cm⁻¹、1713cm⁻¹、1463cm⁻¹、1271cm⁻¹の吸収帯が確認できた。一方、粉状ないし粒子状を呈した試料は有機物が炭化したものである可能性が示唆された。漆布は、織密度が12×8本/cm程度の目の粗い織物で漆が染込んだ織物である可能性が明らかとなった。

【参考文献】

奈良市埋藏文化財調査センター 2013.4『奈良市埋藏文化財調査研究報告第3冊 西大寺旧境内発掘調査報告書I—西大寺旧境内第25次調査』

第IV章 総括

第1節 調査成果のまとめ

今回は新堂遺跡の北端部付近、曲川遺跡に近接する二地点において発掘調査を実施している。大型店舗建設に伴う発掘調査であり、先行して2013年度に実施した試掘調査によって本発掘調査が必要と判断された二地点で実施している（1区・2区）。以下に各調査区および、それらをまとめた調査の成果を、主として時系列順に述べる。なお、主要な出土遺物・遺構の詳細については第2節、周辺を含めた遺跡全体の評価については第3節でまとめる。

【1区】

1区において人間の活動痕跡が確認されるようになる時期は縄文時代後期以降である。遺構ベース層である基本層序V層中に少量ながら縄文時代後期中葉から弥生時代後期後半にかけての土器片・石器片が含まれている。縄文時代については詳細時期不明の土器・石器の細片が中心で、当該時期の遺構は見られない。弥生時代の遺物は時期が判別できるものは大部分が後期後半にあたる。

遺構は、中世以降の耕作関連の痕跡である上層遺構と、それ以前の下層遺構とに分かれる。

下層遺構は溝、井戸、土坑、ピット、足跡群、河道がある。全体に出土遺物が少なく、詳細時期は不明な遺構が多い。このうち最も古い可能性がある遺構としては溝（10146・10219SD）が挙げられ、少量存在する出土遺物から弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺構であると考えられる。調査区南東部では河道（10154NR）の左岸（西岸）を検出している。少なくとも調査区の範囲内では古墳時代中期に埋没したと考えられる。これと近い時期の遺構として調査区南半に位置する溝（10220SD）があり、中期後半の須恵器が出土している。下層遺構の溝はいずれも堆積状況から比較的短期間のうちに埋没したものと考えられる。この他に井戸、土坑、ピット、足跡群が点在しているが詳細時期は不明で、一部は上層遺構の古段階と同時期である可能性もある。古代については遺構は存在しないが、上層の耕作層中から少量の遺物が出土している。

上層遺構は中世以降の素掘り耕作溝群である。最も古い段階の耕作溝からは12世紀後半の瓦器が出土している。少なくともこの時期以降、現代に至るまで、調査地点は基本的に耕作地としての利用が継続している。この間に近隣河川の氾濫を幾度も受けており、その都度再耕地化を行うというサイクルを繰り返している。これは耕作溝に流入している微砂層、各段階の耕作層間に堆積する砂～シルト層、全体に砂質が強い耕作層といった現象として確認される。中世の耕作溝群の中には整然と並んだ比較的大型の一群が存在する。これは近隣の有力者の指導下で行われた大規模な耕作活動である可能性が指摘できる遺構群である。出土遺物は全体に少ないが、相対的に調査区南側に多い傾向があり、調査地の周辺部を含めた土地利用の在り方が反映されていると考えられる。

【2区】

2区は1区の北東に位置し、両調査区端の間には約50mの距離がある。古墳時代の遺構からは多量の特徴的な遺物が出土しており、これが今回の調査成果の中心である。

2区では縄文時代中期以降の遺物が出土している。調査地は下層の広範囲にわたって縄文時代の河川堆積層が広がっている。これは複数時期の異なる河道の重なりであり、一部は中層遺構面上で河道肩部を認識できる（調査区南西部）。下層河道からは縄文時代中期～晩期の土器・石器が各所に散在する形で出土している。出土量は少なく、量的には後述する古墳時代河道に混ざる形で出土した縄文時代遺物のほうが多い。調査区内の一部には縄文時代河道の上面に堆積する比較的安定した地盤が存在する。これを下層遺構面として下層トレンチ調査を実施している（図20）。下層遺構はごく少数の土坑・ピットであり出土遺物も限られることから、今回の調査では下層の調査を部分的な範囲に留め、中層遺構（古墳時代）の調査に注力している。

中層遺構は古墳時代中期を主とする時期の遺構群（図34）で、特に中期前半の遺構・遺物が多い。調査区北半に位置する大型の河道（20989SD。以下、河道とする）が中心的存在である。井戸、土坑、溝、ピットといった遺構が、河道の両岸、特に北岸側に多く展開する。

河道は幅約12～30m、深さ最大約2.5mを測る大型である。調査区の中央付近で屈曲し、東から北西方向へと流れる。周辺地形との関係から人工的に作られた流れである可能性も考えられる。河道北半東側には、しがらみ遺構（杭列）が構築されている。下層のしがらみ遺構（杭列④～⑥）は構築・利用時の状態から概ね位置を保ちつつ、倒壊した状態で出土している。機能としては制水の役割を果たしていたと推測される。しがらみ遺構の構成材には建築部材や農具・祭祀具などの木製品も含まれている。しがらみ遺構が遺存する範囲は比較的早い段階に埋没しており、本来はさらに周囲にも広がっていた可能性がある。

河道からは古墳時代中期を中心とする多量の遺物が出土している（時期の詳細は後述）。これが今回の調査で出土した遺物の大半を占める。出土遺物には土師器、須恵器（初期須恵器を多く含む）、韓式系土器、瓦質土器、製塩土器、土製品、埴輪、石製品、骨製品、鉄滓、鞆羽口、木製品、木材、動物骨などがある。古墳時代中期の遺物は基本的に流水による影響が非常に少ない良好な状態で出土しており、出土地近辺で使用されたものであることが窺える。土師器は一部に古墳時代前期の資料を含む。また、遺構ベース層や河道上流に由来すると考えられる縄文時代～弥生時代の土器、石器なども一定量含まれる。

河道最下層の堆積層（河道V層）からは古墳時代中期初頭の土器が出土しており、この時期の堆積層であると判断できる。多量の土師器と共に多くの初期須恵器が出土しており、その時期的位置付けはTG232型式～TK73型式に相当すると考えられる。これらとより数は限られるが韓式系土器、瓦質土器も存在する。しがらみ遺構の構成材も河道V層に含まれる。さらに、馬歯を中心とする動物骨の一部も河道V層からの出土である。これら河道V層およびしがらみ遺構内出土の土器、木材・木製品、動物骨などの遺物群は、一連の資料として非常に貴重である。

河道は最終的に古墳時代中期末頃にほぼ埋没している。河道が機能した時期は概ね古墳時代中期初頭から末頃にかけての時期である。その期間全体にわたる遺物が出土しているが、中でも中期初頭～前半の遺物が数的に多数を占めており、河道上層（河道Ⅰ～Ⅲ層）にも下層に由来すると考えられる当該期の遺物が多く含まれる。河道全体から出土した初期須恵器は個体数にして約200点を数える。この数量は現時点で奈良県内最多である。また、生産地（窯跡およびその関連遺跡）以外における出土数としては全国的に見ても有数の量であり、遺跡の性格を考える上で重要な要素となる。

河道北岸には古墳時代前期～中期の遺構が存在する。河道の屈曲部に近接する地点には大小の土坑、

井戸、ピットが集まる。これらは河道と比較して出土遺物が限られるため詳細時期不明の遺構が多いが、時期の分かるものは中期、特に前半が多い点は河道の遺物出土傾向と同じである。20202SKは中期前半の一辺3.5m前後の不整形土坑である。土坑の周囲に8基のピットが方形(2×2間)に並び、これらが一連の遺構であった可能性がある。20154SKや20156SKと共に作業場のような施設であった可能性も考えられる。この他のピット群は、明確に大型の建物と判断できるものは無いが、一部には柱痕の残る柱穴もあり、簡素な構造物が存在していたと考えられる。河道に隣接する位置ながら、中期前半に属す井戸が3基掘られている。うち20234SEは、この時期には珍しい板材・丸材を組み合わせた方形の井戸枠が存在している。土坑・ピット群より東側(調査区北東隅付近)には南東-北西方向を基本とする溝が複数存在する。調査区内ではこれらの溝より東には土坑・ピットが存在せず、土地利用の差異が見て取られる。20127SDは古墳時代前期の遺構であると考えられ、20225SDもその可能性がある。

一方、河道の南岸側一帯は北岸よりも遺構の数が少ない。遺構は溝が中心で、他に少数のピットと土坑がある。小規模な遺構が多く、出土遺物も限られる。これらは遺構埋土の共通性などから、中期の遺構である可能性が考えられる。調査区東部に位置し、南東-北西方向に直線的に伸びる20419SDのみは古墳時代前期の溝であることが確かである。北岸の20127SDや河道出土の前期遺物などと共に中期の集落の前史を考える上での手掛かりとなる。

このように古墳時代遺構の様相は河道の両岸で異なる。遺構と遺物は基本的に北岸側に多い一方、河道内における遺物の出土地点はほぼ全域に広がっており、南岸沿いからも多数の遺物が出土している。河道の両岸で異なる形の土地利用を行っていたと考えられる。

古墳時代後期以降に活動痕跡が明確となる時期は中世である。中世以降は1区と同様、耕作地としての利用が継続している。上層遺構として中世以降の耕作溝群、土坑、ピットがある。この時期の出土遺物は非常に少ないが、13世紀代の土器片が存在する。耕作溝群以外では調査地全体に広く散らばる形で、粘土取り目的と考えられる不整形土坑がある。中近世の耕作層は1区ほどではないがやや砂質が強く、一部には河川氾濫によると考えられる薄い微砂層の堆積も存在する。1区より頻度は下がるが2区においても河川の氾濫を受けた後の再耕地化という活動が行われている。

【両調査区を通して】

調査地一帯では、縄文時代後期～晩期に遺物が散見されるようになる。新堂遺跡や曲川遺跡の周辺ではこの時期以降、遺構・遺物が明確に現われ始める。その活動領域の一部であると考えられる。弥生時代は2区の河道から土器が少量出土している。続いて弥生時代後期後半～古墳時代初頭には1区に遺構・遺物が現れる。遺物こそ少ないがやや大掛かりな溝が構築されており、本格的な土地利用が進み始めている。古墳時代前期には2区にも溝が掘られる。古墳時代中期には2区に河道を中心とする遺構群が展開し、遺物も大量に出土している。これまで新堂遺跡では中期でも後半の遺構・遺物の存在が多く知られていたが、新たに中期前半に遡る資料が大幅に増加することとなった。特に中期初頭の初期須恵器を始めとする特徴的な遺物が多数出土したことは、地域史研究の枠組みを超える貴重な成果となる。なお、この時期には1区と2区の間は別の河道(1区・10154NR)で分かたれており、1区には顕著な遺構・遺物は見られない。

第2節 出土遺物と遺跡の評価

ここでは第Ⅲ章で述べた基礎的な報告をもとに、主として各出土遺物の全体像と詳細をもとに、それら遺物ひいては遺跡の評価について述べる。対象とするのは2区の古墳時代の資料である。

【初期須恵器】

2区の調査ではTG232型式～TK73型式に相当すると考えられる初期須恵器が多数出土している。多くは河道からの出土であり、その周辺の遺構からも少量が出土している。2区の出土遺物全体の傾向として、この時期の遺物量が最も多い。

初期須恵器は個体数にして約200点以上を数える。これは河道全体での数量であり、初期須恵器の時期より後の堆積層（～古墳時代中期後半）に巻き込まれる形で出土したものも含む。河道という遺構の性質上、ある程度の時期幅を想定する必要があるが、土層の堆積状況および遺物の出土状況から、河道V層および下層杭列からの出土遺物（図99～121）がこれら初期須恵器に対応する時期の遺物群であると考えられる。また、河道IV層出土遺物（図88～98）も、これに近い時期の遺物であると判断できる。

状態が良好な初期須恵器が多く、全体像が復元できる完形品に近い資料も一定量含まれている。出土地点を見るときがらみ遺構が存在する河道北半にやや多いが、他の地点からも一定量が出土しており、河道全体に散らばる形で出土している。

器種としては高環、埴（カップ形）、甕、壺、甕、器台がある。蓋環は明確なものが無く、高環としている個体の中に含まれている可能性があるが、いずれにしても数は限定的である。高環は数量が多く、無蓋と有蓋の両方がある。全体の形状や文様において種類が豊富である。埴も多様なものが存在し、いわゆるカップ形土器（環と表現されることもある）も見られる。大小の把手が付く埴が多い。甕は少数が存在する。個体差が大きい、いずれも細頸で口縁より体部の径が大きい。樽形甕も存在する。壺は大小様々な種類が存在し、文様や形状面で装飾的な個体も多い。脚や把手が付く壺もある。甕も一定量が出土している。ただし他の器種の数を明確に超えるほどの量があるわけではなく、一般に指摘される初期段階の須恵器における比率としては少ないと言える。波状文を施す装飾的な口縁に、丁寧なナデ調整で仕上げる体部をもつ個体が多い。器台は全体像が分かる資料は無いが、数量は比較的多く存在する。コンパス文や組紐文などの特徴的文様やスカシを丁寧に施す装飾性の高い器台が多い。筒型器台も存在する。

今回出土した須恵器の特徴の一つとして挙げられるのが、個々の遺物報告でも再三触れている蓋（高環）に見られる共通的な文様である。幅約0.5～0.8cmのハケ状工具によって描かれる描輪文様（器面には5～7条の線として表われる）で、頂部のつまみを中心とした内・外二重の同心円帯の間に四方向（概ね十字形）に線を配置する形を基本とする。図99～713・714がその典型例である。多少のバリエーションも含めて同様の文様を施した蓋が30個体近く出土している。蓋に描輪や刺突によって文様を同心円状・放射状に施す例は初期須恵器や陶質土器にしばしば見られるが、今回出土している文様と完全に一致するものは知られていない。この時期に通有の文様ではなく、特定の生産元（窯元）に結び付く意匠であると理解できる。ただし同一の文様を指向しつつも工人の差異が認識できるよう

な仕上がりの斑も見られ、特定の工人ひとりではなく集団で共有されるものであったと考えられる。また、これらの蓋の中でも器形（全体の法量や細部の形状において）には差異があり、加えて文様自体も細かなバリエーションが存在する。文様幅が狭く十字ではなく三方向であるもの（図76-178）や同様の配置の文様を波状文で描くもの（図99-715）などがこれにあたる。なお、兵庫県姫路市・前田遺跡における近年の発掘調査で、この文様（および器形）に類似する初期須恵器が出土しており、関係性が注目される。初期須恵器段階における生産や流通、供給について研究する良好な材量と言える。

須恵器生産の初期段階の要素として一般に指摘されるバリエーションの豊富さは今回の出土資料においても、同一器種における形状や文様構成などの多様性に見て取られる。明瞭な規格性が確立される前の段階であり、新たに流通させる製品としての模索が積極的に行われていた時期として理解される。後の段階には見られなくなる器種の存在もこれに繋がる。個々の土器を見た場合、後の時期の須恵器と比べて、仕上げや施文など制作の各工程により多くの労力を費やしているものが多い。焼成においても蓋を重ね焼きせず単体で焼き台を用いていることが窺える。量産体制が確立される以前の在り方が様々な形で確認できる。

なお、これらの土器群をここでは初期須恵器として取り扱っているが、中には陶質土器である可能性が指摘される土器も存在している。図88-446や図77-20はその例である。これらの土器が須恵器であるのか陶質土器であるのか、またそれらの具体的な生産地の問題については調査時から議論的的となり、今後も調査研究の課題となる要素である。今回出土した初期須恵器の生産地としては陶邑窯が重要な候補地として挙げられるが、時期的背景を踏まえると他の場所である可能性（未発見の窯が近隣に存在していた可能性など）も検討していく必要がある。先に特定の窯元と結び付く可能性のある蓋の一群に触れたが、須恵器の入手先をその一ヶ所に絞って考える必要は無い点には注意が必要である。

特徴的な要素として火焰形スカシを有する須恵器（図71-94高坏、図99-729高坏、図100-739器台、図123-1144器台・1146器台か高坏）が複数出土している点が挙げられる。火焰形スカシは大韓民国慶尚南道咸安郡周辺の土器の特徴とされる。新堂遺跡でも過去の発掘調査で火焰形スカシのある陶質土器高坏が2点出土している（『新堂遺跡Ⅱ』）が、日本列島ではまだ十数点の出土が知られているのみである。その中で新たに5点もの例が増えたことは貴重な成果である。今回出土した資料はいずれも、焼成具合や形状から陶質土器ではなく須恵器と理解されるものである点は注目される（729は陶質土器の可能性も残るとの指摘もある）。初期須恵器の段階で火焰スカシをもつ陶質土器の模倣が試みられたことが想定される。図71-94の高坏は火焰スカシを志向していると考えられるが仕上げは良いとは言えない。また、器台2点もスカシ上半部が潰れ気味である。これらは生産地の実態の一端を示す資料として興味深い。

図77-224・225の小形平底壺2点も咸安地方に類例が存在する土器である。さらに、須恵器を構成するその他の要素においても咸安系土器の影響が見られることが指摘されている。海を越えた地域同士の影響関係や陶質土器と須恵器の関係を研究する重要な手掛かりと言える。

【韓式系土器・瓦質土器】

渡来系の土器として韓式系（軟質）土器と瓦質土器が出土している。

韓式系土器は中期初頭にあたる河道V層から一定量が出土しており、河道上層にもこの時期に対応すると考えられる資料が含まれている。この点は初期須恵器の出土状況と同様である。ただし、韓式系土器の性質上、須恵器よりも本来の詳細時期比定が難しい一面もある。また、河道全体の時期はまさに渡来系土器の影響を受けて土師器に変化が進む時期にあたり、両者の境界が不明瞭な部分が多く、土師器としている資料の中に韓式系土器と理解しうるものを含む可能性が高い。

出土した韓式系土器の器種としては甗、鍋、平底鉢、甕、壺がある。甗は量が最も多く、河道V層としがらみ遺構内からの出土も多い。この河道下層出土の甗に限っても全体の形状や調整技法、底面形状や蒸気孔配置などの諸要素において多様な甗の存在が認められる。鍋は甗よりも少ないが、把手を始めとして甗か鍋か判別が付かない破片も多いため、実数は現状よりも増える可能性が高い。今回出土した甗・鍋は全て軟質であるが、図102-767のように明確に須恵器(甕)の技法を用いた軟質系土器も存在する点は興味深い。平底鉢は可能性のある破片資料を含めて河道全体で十点前後であり、土器全体で占める割合は低い。うち半数は河道V層・しがらみ遺構内からの出土である(図105-860、図113-967~969、図114-1000)。その他に大型の鉢となる可能性がある小片も存在するが全体像は不明である。体部にタタキを施す甕が河道IV~V層・しがらみ遺構内を中心に出土している。全体像が不明な小片が多い。図113-966と図118-1083はしがらみ遺構から出土した軟質土器であるが、須恵器の甕・壺と同様の形状であり、制作技法も須恵器のものを使用している。初期須恵器段階でこのような土器が存在する点も興味深い。図122-1115は鳥足文タタキを施す甕である。しがらみ遺構が構築される以前の遺物であり、他よりやや古い可能性が高い。これらの他、河道全体を通して長胴の甕も見られるが甗の数と比してかなり少ない。

瓦質土器であると考えられる土器も量は限られるが出土している。確実に瓦質土器と判断できるものはいずれも甕である。図101-766は河道V層、図118-1076はしがらみ遺構内からの出土であり、初期須恵器と同時期あるいはそれ以前に遡る資料である。また、図79-243・244は河道II・III層出土、図124-1147は河道一括での出土であるため詳細時期は確定できないが、韓式系土器と同様に初期須恵器と同時期である可能性もある。図89-486は鳥足文タタキを施す甕の小片である。

これら韓式系土器・瓦質土器は全体として多様な様相を見せる。これらの土器の広義での故地は特定の一地域に絞られるものではなく複数地域に及ぶ可能性が高い。また、要素単位でそれらの複合体と言えようと考えられる。

【土師器：土器の全体像】

ここまでは特徴的な資料である初期須恵器・韓式系土器を中心に述べてきたが、河道の土器全体としては、これらを大きく上回る量の土師器が存在している。いわゆる在地の土師器である。少なくとも初期須恵器の段階においては、土器全体における須恵器の割合は多く見ても1割程度であり、数的主体はあくまで土師器にある。須恵器や韓式系土器と比して、土師器は報告外資料が非常に多いこととなる。

土師器の中には東海系、山陰・北陸系、関東系などの外来系土器も含まれるが量は限られる。その中で最も多いのは東海系土器で、河道各段階の台付甕が出土している。

中期の土師器も多くは須恵器と同様に良好な状態で出土しており、全体像が把握できる資料も多い。一部、前期に遡る土師器も存在しているが、これらは流水の影響を受けているものが多い。初期須恵

器を含む河道V層堆積以前の状況を考える上で注意すべき要素である。

出土した土師器には高環が非常に多く含まれる点特徴的である。河道全体では約四千点の脚部を数えることができ、それ以上の数量があったと判断できる。その他に集落遺跡での出土は珍しい祭祀土器（図108-897、図116-1051～1053）も出土している。ミニチュア土器も各時期を通じて存在する。

先にもいくつか述べているが土師器と渡来系土器の折衷状態の土器が存在している。全体・部分を問わず須恵器の形状や技法を取り入れた土師器（図80-251・252・254、図90-499・504・508、図125-1185など）、逆に土師器の形状や技法を取り入れた須恵器（図100-751、図112-950・951など）がある。

【しがらみ遺構と構成木材】

河道北半にはしがらみ遺構（杭列④～⑨から成る）が構築されている。倒壊した状況で出土しているしがらみ遺構の本体部分は河道V層中に含まれており、ここから出土する初期須恵器を始めとする遺物群との関係性においても注目される。しがらみ遺構本体以外にも河道中からは多くの木材が出土している。これらは上流からの流木や他の投棄木なども含むと考えられるが、多くは元々しがらみ遺構の構成材であった可能性が高いと考えられる。以下はその前提をもとに述べる。河道V層の堆積状況や周辺における遺物の出土状況などから、しがらみ遺構は構築されてからそれほど時間を経たないうちに倒壊・埋没したと考えられる。

しがらみ遺構は各種の加工木、自然木、樹皮などの多様な木材を組み合わせて構築されている。加工木は、大小様々な先端を尖らせた杭状材と棒状の丸材・角材とが多い。これらに混ぜる形で農具や工具、武器、祭祀具、建築部材などの木器・木製品が出土している（図138～152、表10）。農具、工具、建築部材については古墳時代に通有の資料が多く、紡績具（図141-1309～1311）のような優品も見られる。これらは全体像が推測できる資料もあるが破損品が基本であり、道具としての利用を終えた後に、しがらみ遺構に組み込まれたと考えられる。刀形木製品（図144-1318）や鳥形木製品（図145-1321・1322）、コウヤマキ製の腰掛（図149-1330）は祭祀具であると考えられ、遺存状態も比較的良好である。出土状況はしがらみの内部ではなく、やや浮いた状態で出土している。これらを用いた祭祀が河道内において行われたのか、それとも他の場所で祭祀を行った後に他の木材同様にしがらみ遺構に組み込まれた（あるいは河道内に投棄された）かは、いずれの可能性もあると言える。

この河道は人工的に構築された流れである可能性があり、出土遺物の量・質から見ても調査地一帯が当時の集落において重要な地点であったことは確実である。その環境を整える目的の一環として、しがらみ遺構を構築したと考えられる。その際にかき集められた木器・木製品を含む木材群は、新堂遺跡周辺における生活の実態や自然環境を知る貴重な資料である。

【馬の存在】

河道からは歯を中心とする馬骨が複数出土している（詳細は第Ⅲ章第8節）。馬骨は河道に広く散らばる形で出土している点特徴的である。土坑墓などに丁寧に埋葬されるような例とは異なる背景が窺える。河道V層・しがらみ遺構内から出土した馬歯も含まれており、初期須恵器の段階において既にこの地に馬が存在していたことを示している。日本列島において馬の利用が本格的に開始される時

期の資料として非常に貴重である。馬骨の分析から、複数個体の馬が存在すること、幼齡馬・若齡馬が主であること、一部の骨に解体痕が認められることなどが判明している。これらも新堂遺跡周辺における馬の利用の実態に迫る情報である。調査地一帯が、馬を生産・飼育する場としての広義の「牧」である可能性も含めて調査を実施しているが、直接的にそれを示す遺構の存在は確認されていない。ただし用途不明の各遺構や河道南（西）側に広がる遺構密度の低い空閑地の存在などは「牧」に繋がる可能性のある要素であり、周辺の状況も含めて今後も注意を要する。

【その他の遺物】

新堂遺跡の既往の調査における特徴的な出土遺物として、製塩土器や鍛冶関連遺物の存在が挙げられる。新堂遺跡南東部の調査では古墳時代中期後半の製塩土器が大量に出土している（『新堂遺跡Ⅱ』）。大量生産が進んだ小型・薄型の製塩土器）。今回の調査でも河道上半から同時期の製塩土器が出土しているが量は少ない。河道下層、初期須恵器に対応する時期の状況については土師器として括っている中に製塩土器を含んでいる可能性があるが不明瞭である。

同じく過去の調査では工房や炉跡といった生産活動に直接結び付く遺構は発見されていないが、古墳時代中期後半の鍛冶関連遺物（鞆羽口、鉄滓）が一定量出土しており注目される。今回の調査では河道に散らばる形で鉄滓と少量の鞆羽口が出土している。河道各層からの出土であり、初期須恵器の段階にあたる河道Ⅴ層にも鉄滓が少量含まれる。鞆羽口は時期が分かるものは中期中頃以降である。これまでの調査と同様に遺物の出土のみであるが、古墳時代中期の間に掛けて新堂遺跡の広範囲に鍛冶関連遺物が見られる点は注目される。これらと関連する可能性のある遺物としては、砥石が複数出土している。鉄器生産に限定される性質のものではないが、調査地一帯の性格を考える上での手掛かりと言える。

河道からは土製・石製・木製の各種祭祀遺物が出土している。大型の河道という性質上、また出土遺物も非常に多いことから、個々の状況を復元することは難しいが祭祀行為が幾度にもわたって行われた可能性は高い。河道底面に据え置かれたと考えられる土器群（杭列⑦下。図60・122）も、しがらみ遺構の構築前に行われた祭祀活動痕跡である可能性がある。

第3節 新堂遺跡周辺の歴史

最後に、曲川遺跡を始めとした周辺に所在する遺跡の状況と合わせて、今回の調査成果を古墳時代前後における地域史に位置付ける。また、それにより遺跡の性格をより明確にすることとする。

新堂遺跡および曲川遺跡の周辺では弥生時代終末期から古墳時代初頭に一定量の遺構・遺物が見られるようになる。主として遺跡の南部～東部において、河道に近接する位置に水田や竪穴建物、土坑、溝などが構築される。竪穴建物は散発的に発見されており現在のところ集住地点は確認されていないが、この時期に周辺の土地開発が進んだことは確かである。やや離れた曲川遺跡の北部（後述する曲川古墳群の北側にあたる一帯）には、この時期の周溝墓群が営まれている。同地点には弥生時代中期の周溝墓群も存在する。後の曲川古墳群とともに墓域としての利用が中心であった地域と言える。ただし、これらが時期的に連続性のあるものであるのかどうか（現時点ではそれぞれ空白がある）や、

墓域と他の生活域の関係が時期的にどう変化するかなど、課題はなお多い。

古墳時代前期後半になると曲川古墳群の形成が始まり、中期末頃にかけて古墳が造られ続ける。曲川古墳群は今回の調査地2区から北東に約500mの位置にあたり、新堂遺跡南部における調査地点よりもむしろ近い距離にある。今回の調査地では、河道および周辺の遺構から初期須恵器を始めとした多量の中期初頭の遺物が出土し、一部は前期後半に遡る遺物も存在する。これらは曲川古墳群を造営した集団によるものであることがほぼ確実である。初期須恵器の中には曲川古墳群出土品と同様の特徴的な器台(図77-221など)も含まれる。新堂遺跡では、これまで中期後半の遺構・遺物が多いことが知られていたが、新たに曲川古墳群の前半期に対応する時期の遺構・遺物も多く確認できるようになったことは貴重な成果である。現状、新堂遺跡では中期中頃(TK216~208型式期)の遺構・遺物はやや少ない傾向にあるものの中期を通じて存在が見られる。遺構・遺物が集中する地点は、この間に遺跡内の北から南へと移り変わるが、北部においても中期後半の遺構・遺物は残る。後期に入る頃には曲川古墳群の造営が終わり、周辺での遺構・遺物の存在もまた希薄になり、わずかに遺物が散見される程度になる。

新堂遺跡・曲川遺跡では中期の遺物が多量に出土している一方で、明確に住居や倉庫と判断できる本格的な建物遺構は見発されておらず、居住域と考えられる空間は特定できていない。調査がほぼ行われていない遺跡西部に存在する可能性や後世の河道によって削平された範囲に存在していた可能性に加え、掘立柱建物・平地式建物から成る、遺構としてより遺存・認識しづらい集落形態であった可能性も考えられる。各地点で検出されている遺構は当時の河道沿いに位置するものが多くを占める。刻々と姿を変える河道との関係の中で生活が営まれる在り様は、各時代を通じて近現代まで続くこの地域の特徴である。

古墳時代中期を中心とする新堂遺跡集落からは多様な特徴的遺物が出土しており、ここからその集落および集団の性格を窺い知ることができる。まず多量の初期須恵器を始めとする、いわゆる渡来系土器の存在である。韓式系土器、瓦質土器、陶質土器などが中期を通じて多く出土している。これらはさらに多数の土師器といった在地の遺物と共に出土している点も注意が必要である。基本的に在地の人々が多くを占める集団であったと考えられるが、そこに渡来系の人物も多く関わった可能性も高い。初期須恵器の段階から(おそらくは複数の)馬が存在していた点も注目される。初期須恵器も日本列島への本格的導入期にあたり、新堂遺跡集落の先進性が見て取られる。第2節で触れた通り初期須恵器・馬とも生産地が今後の重要な研究課題となる(ごく近隣の生産の可能性も含まれる)。また、これらを含む多くの文物の流通拠点のような役割を果たす場所であった可能性も考えられる。中期後半における製塩土器の出土量の多さ(複数の生産地を含むと考えられる)も関連する要素と言える。中期を通じて鍛冶関連遺物や砥石が出土する点も特徴的である。さらに、このような先進的集団が新たな墓制に基づく曲川古墳群を造営したと考えられることは興味深い。

さらに周辺に目を向けると東に約2km(間に曾我川・高取川を挟む)、畝傍山の北麓に広がる四条遺跡・四条古墳群の存在が注目される。同じく古墳時代中期を中心とする時期の集落遺跡・古墳群である。渡来系遺物や祭祀遺物の存在に共通性がある一方、古墳群の在り方などに差異が見られ、両地域の関係性は今後さらに注目される。

報告書抄録

ふりがな	しんどういせき4 ーおのがたしょうぎょうしせつけんせきともなうはっくつちょうさほうこくしょー							
書名	新堂遺跡Ⅳー大型商業施設建設に伴う発掘調査報告書ー							
シリーズ名	橿原市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第16冊							
編者名	橿原市教育委員会 石坂泰士(編集・執筆)、東海大学 丸山直史(第三章第8節)、奈良県立橿原考古学研究所 奥山誠義・河崎衣美(第三章第9節)							
編集機関	橿原市教育委員会事務局 文化財課							
所在地	〒643-0826 奈良県橿原市川西町 858-1 TEL 0744-22-4001 FAX 0744-26-1114							
発行年月日	西暦 2020年(令和2年)3月27日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新堂遺跡 <small>しんどういせき</small>	奈良県 かほりし 橿原市 しんどういせき 新堂町	29205	14C545A	34° 30' 00"	135° 45' 40"	2015/12/4 ～ 2016/6/30 2016/5/25 ～ 2017/2/27	(1区) 3,812 ㎡ (2区) 6,971 ㎡	商業 施設 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
新堂遺跡	集落	弥生時代後期 ～古墳時代		溝、井戸、土坑、 ピット、河道		弥生土器、土師器、 須恵器、石器		(1区) 橿原委 2015-4 2016-1 次調査
		中世以降		耕作溝群、井戸		土師器、瓦器		
		縄文時代中期～晩期		土坑、ピット、河道		縄文土器、石器		(2区) 橿原委 2016-2 次調査
		古墳時代前期～中期		河道(しがらみ遺構)、 井戸、土坑、溝、ピット		土師器、須恵器、韓式系 土器、瓦質土器、埴輪、 製塩土器、土製品、鉄滓、 木製品、石製品、動物骨		奈良県立 橿原考古 学研究所 との 合同調査
		中世以降		耕作溝群、土坑		土師器、瓦器		
要約	<p>大型商業施設の建設に伴い2地点(1区・2区)で発掘調査を実施した。調査地は橿原市域の西部、新堂遺跡の北端部付近に位置する。1区の調査では弥生時代後期から古墳時代の遺構が確認されている。遺物が少なく詳細時期が分かる遺構は限られるが、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の溝や古墳時代中期に埋没する河道などがある。中世以降は耕作地としての利用が継続している。この間に1区周辺は幾度も河川の氾濫に遭い、その度に再耕地化を行うサイクルを繰り返している。2区は古墳時代中期を中心とする時期の遺構・遺物の存在が特徴である。調査区内を東から北西へと横断する大型の河道内にはしがらみ遺構が構築されており、河道全体から古墳時代中期の遺物が多量に出土している。特に多量の初期須恵器を始めとする中期初頭の遺物群が目目される。初期須恵器は河道全体で約200個体を数える。これは奈良県内最多の出土量である。初期須恵器の時期に対応する堆積層である河道V層からはさらに多量の土師器に加え、韓式系土器、瓦質土器、動物骨(主に馬歯)、鉄滓なども出土している。また、しがらみ遺構の構成木材やそこに含まれる木製品も多くがこの時期の資料である。河道は古墳時代中期後半に埋没する。河道の周辺には古墳時代中期の井戸や土坑、溝、ピット群などが存在する。遺構は河道の北岸側に多く、両岸で土地利用の在り方に差異があったことが窺える。これらの遺構・遺物は調査地からすぐ北東に位置する曲川古墳群が造営される時期と重なり、両者合わせての理解が必要となる。</p>							